

全く兵を撤した。又播磨姫路城主酒井雅樂頭は徳川氏の譜代であるので其の藩論も佐幕に傾いたが茂政は其の老臣池田圖書をして兵を督して播州に入り其の去就を問ふたが、既にして征討の勅命下るに及び、乃ち砲を城樓に發してこれを促したから國老島出で、軍門に降り誓書を納れ兵器を獻した、備前の兵は城中に留りてこれを鎮撫したが總督府の命に依り城を薩藩に附して軍を施した。

美作に於ける鶴田藩は先に將軍に従つて大阪にあつたが、伏見鳥羽の變起るに及んで前年の屈辱を雪がんとして會桑の諸藩と共に薩長二藩主に就いて寛典に處せらるることを請ふて、國老尾關隼人罪を引いて自殺したからこれを赦し、舊領の外更に久米郡の地三萬八千石を藩主武聰に賜つた。又津山藩主松平齊民は親藩であつたが、藩士井汲唯一尊王の志深く、同藩の士藤本真弓、矢吹弓治、榊原平次郎、鞍掛吉寅等と謀つて密に京師に行き老臣黒田成復と共に青蓮院宮及び鷹司關白に詣り尊王の志を述べ、ついで勅書を藩主に下賜せらるゝに及び、一藩翁然として既に尊王の風に向つたから、伏見鳥羽の變ありしも其の嚮背に惑ふことなく姫路松山二藩の轍を踏まなかつたのは全く藩主齊民の處置その宜しきを得たるによる。

第十二章 廢藩置縣

將軍徳川慶喜政權を奉還し王政は復古し、新政府の組織がなると、岡山藩主池田章政は勳功により明治二年九月二十六日三千石を賜つて議定職に任せられ、家臣土倉正彦土肥典膳は參與に任せられ、前藩主池田茂政は彈正大弼に任せられて、維新創業の新政に與つた。美作の津山藩主松平氏、備中松山城主板倉氏は徳川氏の親藩譜代の關係があつたからして、新政の要職に任せられたものはなかつた。明治二年正月薩長土肥四藩主は版籍封土を朝廷に奉還するに至つたので備作の諸藩もそれ〴〵領土を奉還し、其の城主は知藩事と稱して尙其の舊領地の知事に任せられて地方の政治を掌るに到つた。今當時の藩政の形勢を表示すると次のやうである。

藩知事	藩名	領地草高	領地現高	士卒人員	士卒祿
池田章政	岡山	三三〇〇	一七九八五	六五四五	六〇三二
池田保政	鳴方	二五〇〇	九三〇	三九三	三四六六
池田禮政	生坂	一五〇〇	五六八〇	二四七	一八四二
池田恭政	足守	二五〇〇	一〇五〇	四〇三	三六五一
木下利弼	高梁	二〇〇〇	八五七〇	六〇八	四六一
板倉弘弼	庭瀬	二〇〇〇	一四七〇	二四八	二五五九
板倉勝弘	新見	一八〇〇	六五二〇	三五二	二九二
關崎克祇	成羽	二七四六	四二〇	一七九	一三九九
山崎長祇	岡田	一〇三〇	七五〇	三〇一	一四八
伊東長倫	津山	一〇〇〇	四三二〇	一六四三	二四〇六
松平慶倫	鶴田	六〇〇〇	二〇六〇	九六二	二二四二
松平武聰	真島	二二〇〇	一九三	三五九	三三五一

明治四年七月十四日列藩を廢して悉く縣として全國を三府七十二縣として知藩事を廢し舊大參事以下をして假に事務を管理させた、ついで同年十一月十五日美作には津山、鶴田、真島の藩を廢して、北條縣を置き美作全國を管し、元陸軍少佐淵邊高照縣令となり、小野立誠參事となる、六年七月高照本職に復するに及びて立誠權令となり、九年四月北條縣は岡山縣に合せられ立誠も亦罷む。備中には倉敷、鳴方、岡田、足守、庭瀬、新見、高梁、成羽、淺尾、生阪の十藩を廢して深津縣を置き、矢野光儀を權令となす、五年六月二日小田郡と改め、備中全國及び備後の沼隈、深津、安那、品治、蘆田、神石の六郡を管したが後岡山縣に併せられた。備前には岡山縣を置き、備前全國を管せしめて、八年十二月十日小田縣を合せ、九年四月十八日北條縣を合せ美作全國を管し、備後の六郡は廣島縣に屬するに至つた。

しかして岡山縣は、四年十一月新庄厚信參事に六年一月權令となり、石部誠中これに代りて

參事となり八年七月權令全年十月高崎五六縣令となり十七年十二月千阪高雅これに代つた。十九年七月には知事に任せられ爾後河野忠三、高崎親章、吉原三郎、檜垣直右、寺田祐之、谷口留五郎等以後數氏を経て現任知事篠原英太郎(昭和七年一月)に及んでゐる。

松平慶倫	津山	10000	4110	1640	2406
松平武聰	鶴田	61000	2060	931	2242
三浦顯次	(勝山)真島	23000	1193	359	351

明治四年七月十四日列藩を廢して悉く縣として全國を三府七十二縣として知藩事を廢し舊大參事以下をして假に事務を管理させた、ついで同年十一月十五日美作には津山、鶴田、真島の藩を廢して、北條縣を置き美作全國を管し、元陸軍少佐淵邊高照縣令となり、小野立誠參事となる、六年七月高照本職に復するに及びて立誠權令となり、九年四月北條縣は岡山縣に合せられ立誠も亦罷む。備中には倉敷、鴨方、岡田、足守、庭瀬、新見、高梁、成羽、淺尾、生阪の十藩を廢して深津縣を置き、矢野光儀を權令となす、五年六月二日小田郡と改め、備中全國及び備後の沼隈、深津、安那、品治、蘆田、神石の六郡を管したが後岡山縣に併せられた。備前には岡山縣を置き、備前全國を管せしめて、八年十二月十日小田縣を合せ、九年四月十八日北條縣を合せ美作全國を管し、備後の六郡は廣島縣に屬するに至つた。

しかして岡山縣は、四年十一月新庄厚信參事に六年一月權令となり、石部誠中これに代りて

參事となり八年七月權令全年十月高崎五六縣令となり十七年十二月千坂高雅これに代つた。十九年七月には知事に任せられ爾後河野忠三、高崎親章、吉原三郎、楢垣直石、寺田祐之、谷口留五郎等以後數氏を経て現任知事篠原英太郎(昭和七年一月)に及んでゐる。

第十三章 宗教

佛教に於いて日蓮宗は松田宇喜多諸氏の信仰により謂はゆる備前法華と稱せられる隆盛を極め一時根帯を備作の地に占めたが、文祿年間僧日應が不受不施を唱へてからこれを信するもの其の説を固執して他派と相容れざるによつて耶蘇教と同視せられて頗る爲政者の壓迫を受けこれを信するものは時として極刑を科せらるゝに至つた。

寛文八年磐梨郡寺山村(○今赤磐郡佐伯本村)本久寺の住僧日閑は其の禁を犯したる故を以て捕へられ斬に處せられた。時に其從徒河本仁兵衛といふもの其徒五人と共に日閑に従ひ共に岡山に至りてこれに殉じたことを佐伯の六人衆といふ。其の墓今佐伯村大字矢部にあつて信徒の崇敬厚し、此頃備前國主池田光政は銳意民政に心を用ひ、僧徒を還俗せしめ寺院を破却した。そは日蓮宗に屬せる寺院だけではない天台真言其の他の寺院に於いても少なくなかつたから佛教の勢は是より漸く振はないやうになつた。

かく高僧碩徳の稀なる時に當つて備前に於いては日蓮宗の日紹がある、御津郡金川村の人、字は星場といふ、下總飯塚の檀林に學び中年國に歸りて蓮昌寺に居る。慶長中法華宗號の訴を解決し、又徳川家康の命を受けて不受不施派の日應と大阪城中に對論したが如きは宗教史上著名なる事蹟である。

備中には日蓮宗に日樹、真言宗に寂嚴、禪宗に孜元を出した。日樹は淺口郡黑崎村の人である。元和中本門寺の住持となり日應の説を賛し不受不施を唱へ久遠寺の日乾と論争したが寛永七年幕府に徴され對論の結果信濃伊那に流され後遂に其地に歿した。寂嚴は吉備郡足守の人字は諦乘、初め同郡宮内なる普賢寺の超禪律師に學びて後四方を周遊すること二十年、元文五年曼寂上人に就いて秘軌を受け同六年和泉家原寺に於いて受具し、後寶島寺に入りて其住持となつた。幾もなく職を弟子文徹に譲り倉敷なる王泉寺に退隱して、此寺に歿した。年八十七寂嚴博覽多識最も梵學に長じた、著書頗る多い。淨嚴慈雲と拜稱して我國梵學者の翹楚とする、又頗る筆札佳絶多く唐詩選を書した。孜元字は大元無學と號した、別に五斗室の號がある、吉備郡池田村実粟の人父を平田近房といふ。年十三曹源寺に入り得度受戒し、後春徳隱山の二師に就いて道學兼備し、三十四才のとき曹源寺に住す。國主池田治政は深くこれに歸依した、後席を儀山に譲り妙心寺に入り幾もなくして歿した、年六十九。其後寛政の頃足守の大乗寺の住職に環中がある、白隱の法嗣遂翁に參禪し儒佛諸史を綜覽し該博を以つて知られた。

美作に於いては天台宗に生順及び慈山、真言宗に道契がある。生順は眞庭郡河内村(○上河内)の人天海に學びて遂に台門の奥旨を得た。寛永中目黒の龍泉寺に居し將軍の知遇を得た。慈山字は妙立唯忍子と號す、歳十七華山寺の雷峯に従つて得度し四方に周遊して山水に放浪したが後天台宗に歸し、道學最も深く著書又多い。其後弘化の頃苦田郡香々美南村の圓通寺に道契がある真言天台禪の諸法を究め又經史を仁井田南陽に、文章を森田節齋に受け又勤王の志篤く四方の志士と往來した。著書も頗る多く續高僧傳今尙行はれてゐる。

神道は備前に黒住教が起り、備中に金光教出で、四方に弘通せらるゝに至つた。黒住教とは黒住宗忠の開教によつて名づける。宗忠は御野郡中野村(○今御津郡今村)の人世々同村今村宮の祠官であつた。遂稱は左京天資正直父母に事へて至孝である、嘗て難症に罹りて久しく癒えず。宗忠以爲らく夫れ神は生を好み死を忌む。この身は神の賜なり、この心は神の心である。神に忤ふて心身を破るはこれ父母に孝なる所以でないとは是より日光に浴し、陽氣を吸ひ自ら心を養ひ氣を練つた。心身靈治病全く癒えた。宗忠曰はく天地は同體で神人は二ない。もし至誠を以つてこれを貫けば天地の化育に參し、神人の至徳を全うする事が出来る。七個條の訓戒を定め躬行實踐その範を示し、爾來三十六年の久しき間道を説き教を施した。是に於てその門に入るもの頗る多く鬱然として一大宗教たるに至つた。門人中名を得たものに星島良平、川上忠晶、赤木忠春がある。嘉永三年二月二十五日歿した。安政三年宗忠大明神の號を賜はり、文

久二年二月二十五日洛東神樂岡に祀られ。慶應二年從四位下の神階を授けらるゝに至つた。金光教の開祖は金光大陣といふ、淺口郡古見村の人幼名は源七通稱は文治郎といふ。年十二にして同郡大谷なる川手家を繼ぎ國太郎といふ、人となり濃厚誠實で敬虔の念が厚く、二十八歳の時屢々災厄に罹つてから金神に向ひて災厄消滅を祈つたが遂には修行の力によつてこの金神に親み近づかんと發信修行十二年遂に顯幽感通の妙域に達し宇宙の眞理を體得し天地の眞神を體認して、始めて金光教を開いた。爾來信徒日に増して遂に今日の隆盛を見るに至つた。

第十四章 文 學

(其一 儒學)

戰國の時代は文教全く地に墜ちて記す可きものなし。岡山城主宇喜多秀家が藤原惺窩を播磨より迎へ大いに宋學を講じたが如きは實に曉天に晨星を望むが如きもので、秀家が詩を誦し書を能くせしことより考ふるも惺窩に親しみたることが窺はれる。太閤記の著者として有名なる美作の人小瀬甫巷が惺窩に從學したこともこの頃である。

寛文の頃備前國主池田光政が頗る心を教育に用ゐる學校を岡山及び閑谷に起し文武の學を獎勵してから上下共に文學を事とするに至つて、王學宋學等の學派相ついで行はれた。王學は池田光政が、中江藤樹の學を信じ門人熊澤伯繼の招致、藤樹の三子なる中江宜伯、同仲樹及び江西文内の三子相繼いで迎へられて仕へた。

伯繼通稱は次郎八、又助右衛門息遊軒と號す、京都の人後領邑蕃山(○和氣郡伊里村)に退隱し蕃山了介といふ。慶安中光政に仕へて國政に參與し祿三千石を食む。最も心を水利に用ひ、殖林を勸め、又方を教育に用ひた。後備前を去り播磨の明石に至つたが光政の學校を經營するに當り再び來りて學制を定めた。後大和の郡山に居り幕府の忌諱に觸れて下總の古河に幽せられ元祿四年八月十七日歿した、年七十三。

又伯繼と同門たる中川謙叔、伯繼の弟泉仲愛其他中村又之丞、加世八兵衛谷川儀左衛門等相率ゐて備前に來り光政に仕へた。其後伯繼は備前を去り、藤樹の二子も亦祿を辭したから久しく王學を説くものはなかつたが寛政の頃に至り川勝世順がこれを奉じた。

世順通稱は半兵衛池田勘解由の臣である、寛政元年五月封事を其主に上り、二首の詩を壁上に題して逐電した。人其理由を知るものがない。

世順と殆ど同時に石黒貞度、川上忠品、齊藤一興が居る。忠品は通稱を市之丞と云ひ春川と號す。母艶子令名があつて忠品を勸めて學に勵ましめた、忠品幼にして四方の志があつたが當時藩制藩士の恣に境を越ゆるを許さない、自ら請ふて奥方附となつて天保の初年より隔年に江戸に上り、伊藤一齊に就て良知の説を質し、又大鹽中齊を浪華に訪ひ専ら王學の研究をした。牧野權六郎、伊東有涯の如きも亦忠品の門に出た。中年に至り黒住宗忠に歸依して其の信徒となり其の研鑽せる學を利用して宗教を開拓し、遂に等身の著書をなした。黒住教が今日の發達をしたのも忠品の功である。

石黒貞度は南門と號す、夙に了介の風を慕ひ王學を講じた。時に藩學洛閩を宗とし異學を斥けた、貞度獨り河上忠品、齊藤一興と志を同うし、私邸の南方に別門を開きてこれを講じた、由つて南門の號がある。

宋學の小原正義、白田畏齋、市浦毅齋、窪田道和、松井河樂等いづれも光政父子に仕へて儒名があつた。小原正義は大文軒と號する、肥前唐津の人幼にして穎悟好んで書史を讀んだ。壯年京師に上り、米川操軒、中村暢齋、市浦毅齋等諸名流に従ひ宋學を講じた。備前に聘せられ光政の講筵に侍し、常に侃々として直言し貢獻するところ多し。畏齋名は可久、國老日置氏の臣である、講武の餘暇朱學を講す後祿を辭して京師に上り諸名流と遊んだ。由つてその編京師に知らる。

寛政文化の頃には姫井桃源、武元正質、同君立、齋藤九腕、萬波醒廬、仁科琴浦、近藤西涯等がある。

桃源名は元詰字は仲明、桃源又靜修と號す、池田治政、齋政の二代に歴任し、曆數音律の學より劍槍軍陣の術に至るまで精通せぬものがない。嗣子元淳、粟谷又は琢堂と號し亦學殖があつた。武元正質字は景文通稱は周平、登登菴と號す。和氣郡北方村(○今英保村)の人本姓は

明石大阪陣の名將明石全登の後である。肥前の長尾蘭州に學び詩を能くし又書に巧みである。其の著に古詩韻範、行菴詩草がある。弟君立名は正恒通稱は立平、高林と號す農政に通じ諸文を能くし、又國史に明らかである、其の著に史鑑勸農策等がある。

天保安政の際には小原梅坡、中村巖洲、鳴井能山等がある。小原梅坡は大文軒の後、詩文

宋學の小原正義、白田畏齋、市浦毅齋、窪田道和、松井河樂等いづれも光政父子に仕へて儒名があつた。小原正義は大文軒と號する、肥前唐津の人幼にして穎悟好んで書史を讀んだ。壯年京師に上り、米川操軒、中村暢齋、市浦毅齋等諸名流に従ひ宋學を講じた。備前に聘せられ光政の講筵に侍し、常に侃々として直言し貢獻するところ多し。畏齋名は可久、國老日置氏の臣である、講武の餘暇朱學を講ず後祿を辭して京師に上り諸名流と遊んだ。由つてその編京師に知らる。

寛政文化の頃には姫井桃源、武元正質、同君立、齋藤九腕、萬波醒廬、仁科琴浦、近藤西涯等がある。

桃源名は元詰字は仲明、桃源又靜修と號す、池田治政、齋政の二代に歴任し、曆數音律の學より劍槍軍陣の術に至るまで精通せぬものがない。嗣子元淳、粟谷又は琢堂と號し亦學殖があつた。武元正質字は景文通稱は周平、登登菴と號す。和氣郡北方村（○今英保村）の人本姓は

明石大政陣の名將明石全登の後である。肥前の長尾蘭州に學び詩を能くし又書に巧みである。其の著に古詩韻鏡、行菴詩草がある。弟君立名は正恒通稱は立平、高林と號す農政に通じ諸文を能くし、又國史に明らかである、其の著に史鑑勸農策等がある。

天保安政の際には小原梅坡、中村巖洲、鴨井能山等がある。小原梅坡は大文軒の後、詩文書畫を善くし最も牡丹を畫くに長ずる。巖洲字は耕圃亦文を能くす、共に頼山陽浦上春琴と交り詩酒相徵逐する。由來備前の學風は經學に重きを置き、詩文の如きは却つて排斥せられ自ら文豪を出すことは甚だ稀である。

次に古學には太宰春臺の門に出でたる石田器之、服部南郭の門に出た湯淺常山がある。中にも常山最も名高し。常山名は元禎字は之祥、博覽強記にして著書最も多い、常山紀談は今尙行はれてゐる、天明年中歿した。常山の門に佐野琴嶽あり、備中岡田に住し敬學館の教授であつた、其の孫琴嶽亦名を知らる。文政の頃に高原東郊あり、古學に通曉し其の著に春秋書例がある。

備中に於て宋學に室鳩巢を出したことは郷土の誇である。鳩巢名は直清、字は師禮、阿賀郡下中津井村（○今上房郡中津井村）の人木下順菴の門に入り學成り加賀侯に仕へ後幕府に聘されて侍講となり屢々政事の諮詢に應じ翼賛する所が頗る多い。著書亦多く駿臺雜話、赤穂義人錄今尙世に行はれる。

明和寛政の際淺口郡鴨方村に西山拙齋がある、名は正字は士雅初め復古學を治め後岡白駒郡波魯堂に従ひ宋學を學び和歌を瀧口美領僧澄月に學び名聲四隣に噴々としてゐた。老中松平定信聘して用ゐんとせしも辭して就かず。拙齋の門に横溝菴里あり、淺口郡阿知村（○今玉島町）の人昌平覺に入り古賀精里に従學する事數年造詣最も深し。

寛政天保の頃同郡西阿知村（○今河内村）に丸川松陰がある、中井竹山に學び學徳共に高い。寛政六年新見藩主關侯に聘せられて政務に參與し教化の見るべきものがあつた。松陰に少し後れて松陰と郷を同する鶴鷄春齋がある。近藤西涯、姫井桃源に學び後菅茶山の門に入り郷に歸り帷を垂れて教授す。

松陰の門に山田方谷がある、名は珠字は琳郷通稱を安五郎といふ、阿賀郡西方村（○上房郡中津井村西方の人）にして宋學に通じ又詩文を善くす、後板倉侯に辟され京師に遊び寺島俊平の門に訪れ後又贅を佐藤一齊に執つた。後政務に參畫し文武の業を刷新した。維新の際松山藩が順逆の道を誤らなかつたは方谷の力與かつて多きに居る。

其の門に三島中州、川田甕江がある、中洲は淺口郡中島村（○中洲村中島）の人、甕江は同郡玉島町の人、維新以後の漢文學は二氏によつて重きをなした、岡田藩主東侯に仕へて政務に參與し、該藩の子弟をして翕然道に嚮はしめた。

美作に於いては儒學に就いて久しく聞く所がなかつた。明和安永の頃藩主松平康哉が文武の政を刷新するに當りて、儒學には大村庄助、山下官彌がある。大村庄助は肥後熊本藩士である。康哉に辟されて津山に來り始めて宋學を唱へた、津山儒教の起つたのは、これが祖である。庄助の子成夫家學を紹繼して亦名がある。山下官彌は西涯と號す、播洲赤穂の人赤松滄洲の門に出て兄を世茶といふ、兄弟共に詩文に長じ其の著に西涯集がある、義子敬助棗溪と號す。因幡の人古賀精里に學び又易を土居閑雅に學ぶ。箕作元甫、宮後隆助等其の門に學んだ。

此頃吉野郡田殿村（○今英田郡粟廣村）の人に稻垣隆秀といふものが有つた、字は子華通稱は淺之丞瀧下散文と號す、中井穗徳に學び後郷に歸り德行を以つて著はれた、其後文政天保に赤松寸雲大村桐陽がある、精溪は龜井南溟の門に出づ、精溪の門に阪谷朗廬、馬場不知校齋がある。

朗廬は備中川上郡九名村（○今日里村九名）の人、名は素字は子絢通稱素三郎後に希八郎と改む。業成りて後郷に歸る、郷は一橋家の有に係る。邑吏角田某學舎を起し朗廬をして徒に授けしめた、今の鴻護館即ち是である。

第十五章 文 學 其二 國 學

國學は備前に於て、寛文の頃松井河樂が居る。儒學に通ずるの外國典に明かな人、其の著神

武論は彼が國體に關する説を窺ふに足るのである。元祿年中岡西惟中、寶曆の代野村尙房が
る。共に俳歌國文に長じてゐる。此外岡山に萩原廣道平賀元義がある。

廣道は通稱を小平太腹沼出石居鹿鳴草舎蘇園等の號がある。後大阪に住み國學を以て惟を垂
れた。其書最も多い。元義は初名直義通稱は新吉、又左衛門太郎といひ猫彦と稱してゐた。學
に師承がないけれど研鑽最深い和歌は萬葉の古調を學び典雅雄麗、人磨赤人の壘を摩した。著
書も亦多かつたが散逸して傳はるものは少い。文久に入り、上田及淵がある。名は忠矣肥後の
人で醫を業として岡山に居る。博覽強記で最も國典に通じてゐる。其の門に池原香禪小原重哉
長瀬時衡小山敬容岡直廬等がある。

備中に於ては安永年代笠岡に小寺清先がある。小田郡神島の人通稱は常陸介檜園と号する。
時に代官早川正純敬業館を笠岡に起し延いて經史を講せしめた。其子清之、清廉も亦家學に通
ずる。時に賀陽郡宮内(今吉備郡宮真金村)の人に藤井高尙があつた松屋と號して小寺清先に
學んだ。清先深く其の才を愛し勸めて本居宣長に従つて學ばしめた。刻苦研鑽遂に大成した。
著書類多し、四方の學徒從學するもの多し。安永明和の頃淺口郡玉島に歌僧澄月を出してゐ
る。澄月は幼にして叡山に入り後志を變じて武者小路實岳の門に入つて和歌を學び、遂にそ
の妙諦を得た。蘆菴、蒿蹊慈延と共に名を齊うして平安歌壇の四傑といはれた。澄月の門に木
下幸文(淺口郡長尾村)があつて菅沼斐雄(小田郡吉濱村)高橋正澄(小田郡笠岡)と共に備中三傑
と云はれる。その門下に小野務(淺口郡長尾村)があつて和歌を善くする。

猶特記すべきは地理學者として有名なる古川古松軒のことである。名を平次兵衛といつて下
道郡新本村(今吉備郡)の生、學に師承はないが最も地理に精通して、觀測を善くす。常に周遊
を好んで山川、港灣、神社、佛寺都邑城郭から物産、交通、風俗人情に到るまで悉く研む。寛
政中松平定信其の名を聞いて江戸に召して地理を踏査せしめた。當時の探險家近藤重藏の如き
も、其人と爲りを慕つて互に音問を交したといはれる。著書に西遊雜記十卷、東遊記十卷、武
藏五郡圖四神地名録一卷、備中巡禮記、地勢論、軍勢人數論、奥羽名所誌、八丈島記事、東亞
地圖、吉備志多道等がある。文化四年十一月十日病んで卒した。年八十二明治四十三年十一月
十六日特旨を以て正五位を贈られた。

美作に於ては天保弘化の際徳守宮の祠官に小原千坐があつた。

第十六章 洋學

洋學の早く開けたのは美作でこれを創めたのは宇田川玄隨である。玄隨名は晋字は明卿槐園
と号し杉田玄白、桂川甫周、前野良澤と共に蘭學を攻究して、西説内科選要十八巻を出した、
これ我國に於ける内科譯書の初である。寛政九年十二月十八日歿した。著書類多く其門に宇
多川玄真があつた。榛齋と号す、伊勢の人初め玄隨に學びて後大槻玄澤の門に入つて大に力を
西洋醫術に用ゐて盛名があつた。當時蘭學者のバルマ和解及び對譯辭書の如きは玄真の力預つ
て大なるものがある。其他著書類多く後玄隨の養子となり天保五年十二月四日六十六歳で歿
した。養子榕菴家を嗣ぐ、榕菴は初玄真に従つて醫學を講じた。最も本草學に通じ弘化三年六
月二十二日年四十九で歿した。養子興齋嗣ぐ。伊藤圭介、戸塚靜海、宇田巖興等は其の門の出
中にも圭介は日本植物學に貢献する所が多い。理學博士を授けられた。

宇田川玄真の門に箕作阮甫があつた。玄真について洋學を講じた。嘉永六年露西亞の使節が
長崎に來たとき阮甫は命を奉じて之に會し又翌年下田に來つて條約を定めた時其の議に與り、
安政三年蕃書調所の教授となり幕府の士籍に列せられた。文久三年六月十七日没す。門弟佐々
木省吾を養つて子となす、麟祥といふ。後法學博士を授けられ男爵に陞されて從二位に叙せら
れた。

阮甫の門人に箕作秋坪があつたが阿賀郡皆部村(今阿哲郡)の産である。後大阪の緒方洪菴に
學び幕府に徵されて洋學所の教授となり、外國奉行を置くに及んで、その文書を掌つた。この
時使を歐洲諸國に遣はすに際し隨行して翼賛の功があつた。明治十九年歿す、年六十二。長子
奎吾早世、次子大麓は菊池氏を襲ぐ。男爵を授けられ京都大學總長文部大臣の官職についた。
三子佳吉、四子元八共に博士となる。

宇田川玄真の門に緒方洪菴がある。備中足守の藩主より出でて大阪の藩邸に居た。初め坪井
信道に從學し、中頃宇田川玄真に從ひ、又長崎に學び蘭人に就く。天保九年業を大阪に開いて
傍ら私塾を起した生徒雲集門に遊ぶもの三千人後幕府の侍醫となつて文久三年六月歿した年五
十四。其門人に緒方研堂があつた。備中梁瀬村今章の人である。別に門戸を開いてゐたので南
北緒方の稱があつた。明治四年七月九日歿す年五十六。

斯くの如く作州に洋學派の人材を輩出して泰西文明の輸入に貢献したことは是れ獨り岡山縣
の歴史として誇りとする所たるのみでなく、實に國史上特筆大書すべきことである。備前に於
ける洋學も其の系統を導ねば、いづれも宇田川、緒方二氏の流を汲まないものはない。寛政享

宇田川玄眞の門に箕作阮甫があつた。玄眞について洋學を講じた。嘉永六年露西亞の使節が長崎に来たとき阮甫は命を奉じて之に會し又翌年下田に來つて條約を定めた時其の議に與り、安政三年番書調所の教授となり幕府の士籍に列せられた。文久三年六月十七日没す。門弟佐々木省吾を養つて子となす、麟祥といふ。後法學博士を授けられ男爵に陞されて從二位に叙せられた。

阮甫の門人に箕作秋坪があつたが阿賀郡皆部村(今阿賀郡)の産である。後大阪の緒方洪菴に學び幕府に徴されて洋學所の教授となり、外國奉行を置くに及んで、その文書を掌つた。この時使を歐洲諸國に遣はすに際り隨行して翼贊の功があつた。明治十九年没す、年六十二。長子奎吾早世、次子大麓は菊池氏を襲ぐ。男爵を授けられ京都大學總長文部大臣の官職についた。三子佳吉、四子元八共に博士となる。

宇田川玄眞の門に緒方洪菴がある。備前足守の藩主より出でて大阪の藩邸に居た。初め洋學信道に從學し、中頃宇田川玄眞に從ひ、又長崎に學び蘭人に就く。天保九年業を大阪に開いて傍ら私塾を起した生徒雲集門に遊ぶもの三千人後幕府の侍醫となつて文久三年六月没した年五十四。其門人に緒方研堂があつた。備前梁瀬村今韋の人である。別に門戸を開いてゐたので南北緒方の稱があつた。明治四年七月九日没す年五十六。

斯くの如く作州に洋學派の人材を輩出して泰西文明の輸入に貢献したことは是れ獨り岡山縣の歴史として誇りとする所たるのみでなく、實に國史上特筆大書すべきことである。備前に於ける洋學も其の系統を尋ねればいづれも宇田川、緒方二氏の流を汲まないものはない。寛政享和の頃、武元正質といふものがあつて中井原澤に就て蘭學を研究し其の普及を謀つたが結果を詳にしない。又人化の頃國老伊木氏の侍醫に兒玉順藏あり、在中と號した。年十四。長崎に至つて蘭醫シーボルトの門に入つて、其の學を修め、文政の未業を備中の矢田に開いた。後伊木氏の侍醫となつた。晩年大阪に赴いて洪菴と往來す。其の著頗る多し、文久元年九月二日没す、年五十六。其門に島村鼎甫石井信義岡野松三郎明石退藏長瀬時衡前川準松岡隣松本練平花房義質黒田綱彦等を出す。

第十七章 美術 工藝

雪舟等春以後備作の地は久しく繪畫に就いて聴く所がなかつたが、元和假武以後文運の進むに從つて繪畫も亦漸く行はれて名手も輩出した。

備前に正徳安永の頃池田嗣政がある。新太郎光政の孫空山と號す。土佐派を能くし人物に巧であつた。明和安永の頃國老日置氏の臣で太田準川齋あり、寛政享和より文化文政天保を経て畫人類々として輩出す其の名の世に著れたるものに浦上玉堂其子春琴山川滄洲柴田義堂淵上旭江小橋陶復等がある。

工藝に於ては、まづ刀劍鍛冶と陶工である。備前長船はその業既に衰へてたが横山氏が世々祐定の名を繼承してゐてもその作は前代に及ばない。貞享の頃岡山に東多門兵衛正成といふ鍛冶池田氏に仕へた。其の作栗田口忠綱に似る。備中には大月國重が上房郡水田村に出てゐる。これ水田鍛冶の始祖なり、所謂新刀中第一の逸物である。國重の弟別家して皆部村に居る。美作では唯獨り兼光あり、もと美濃の關の刀匠である。來つて津山に居る、其作銳利を以て聞こゆ。

刀劍關屬品は岡山に於て寛政の頃井上宗次あり金光堂の祖である。壯年の頃諸國を遊歴して彫鑿の業を修め其の作は奈良風であつた。文化八年二月没す、其子宗行、初名は廣行、竹林軒又善哉齋といつてゐる。其門に守定、守利、吉川千代吉、矢延豊八がある。宗行の子を守親といつて通稱金光堂勇といつてゐる。高徳春慶、虎簫子、一樂菴、東燕舎等の號がある。又この井上に並んで正阿彌氏がある。其祖道喜の時始めて池田氏に仕へ世々彫鑿の業を傳へた。

陶器にありては備前の忌部焼は太古より其の製法を傳へ、久しく名器を出した。天正年中に三日月六兵衛といふものがあつた。其作缺月の極印を特徴とする。天正十年、秀吉中國征伐の折この村に宿し當時の陶工木村、大饗、森、寺見、金重、頼宮の六人を徴し其作品を賞したといはれる。池田氏入郡以後製陶の業を獎勵して、大窯開口の時は吏員を派してこれを檢閲したといふ。元祿の頃に判りて閑谷焼が起つた。閑谷焼は初新太郎光政が閑谷齋を創建せらるる時、伊部の陶工を徴して屋風を作らしめた。業竣るに及んで、更に窯趾に就いて陶器を作らしめた。結構製作頗る仁清の作に酷似してゐて世人これを珍重する。繼政の頃更に窯を後樂園内に設けて陶工を徴し、主として香合人物等を作らしめた。其の釉藥は全く樂釉を用ふ。繼政より宗政を経て時々製出したが世にこれを御庭焼といつた。又此頃渡邊剛右衛門尉勝政があるも大阪の輿力であつたが、中年備前に來つて、製陶に従事する。その製作優美で最も精緻を極めた。人争つてこれを珍藏した。

(附錄其一)

史蹟名勝指定地

史蹟

(名稱)	(指定)	(所在地)
造山古墳(第一、二、三、四、五、六古墳)	大正十年三月三日內務省告示第三八号	都窪郡加茂村
作山古墳(第一古墳)	全	全 郡三須村
開谷學校	大正十一年三月八日內務省告示第四九号	和氣郡伊里村
(附椿山、石門、津田永忠宅址及黃葉亭)	全	岡山市西中山下
舊岡山藩藩學	全	苦田郡院ノ庄村
院ノ庄館址(兒島高德傳説地)	全	都窪郡三須村
備中國分尼寺址	大正十一年十月十二日內務省告示第二七〇号	小田郡三谷村
下道氏ノ墓	大正十二年三月七日內務省告示第七号	上道郡可知村
大多羅寄宮址	昭和二年四月八日內務省告示第三一五号	赤磐郡高月村
兩宮山古墳	全	全 郡太田村
萬富東大寺瓦窯址	全	都窪郡加茂村
惣瓜塔址	昭和三年二月七日內務省告示第七〇号	吉備郡眞金町
眞金一里塚	昭和三年三月二十四日內務省告示第七〇号	全 郡箭田村
箭田大塚古墳	昭和四年十二月十七日內務省告示第三七〇号	眞庭郡八束村
四ツ塚古墳(附第一、二、三、四古墳)	全	吉備郡高松町生石村
備中高松城址(附水攻堤防地)	全	赤磐郡高月村
牟佐大塚古墳	昭和五年二月二十八日內務省告示第四〇号	

(附錄其二)

贈位者一覽

(薨去又ハ戰歿年月順)

追贈位階	氏名	身分	歿年月	享年	贈位年月
贈正一位	和氣清麿	勤王家	延曆一八	六七	明治三一
全四位	有元佐光	全	元弘三年		大正四
全五位	有元佐吉	全	全		大正一三
全五位	有元佐長	全	全		大正一八
全五位	福元佐重	全	全		大正一三
全五位	植月佐秀	全	全		大正一三
全五位	原田種佐	全	全		大正一八
全四位	鷹取種長	全	全		大正一八
全四位	和島高徳	全	延元元年		明治一六
正四位從三位	池田輝政	全	不詳	五〇	全 四三
全三位	板倉勝重	全	慶長一八	八三	全 四三
全三位	石川善右衛門	全	寬永元	六三	全 四三
全三位	池田善右衛門	全	寬文九	七四	全 四三
全三位	河原善右衛門	全	天和二	七四	全 四三
全四位	熊澤助右衛門	全	元祿四	七三	昭和四三
全四位	池田光仲	全	元祿四	七三	明治四三
全五位	長尾勝明	全	寬永三	六四	大正八

全四位	津田永忠	學者	寶永四	六八	明治四三
全四位	井戸正明	新見藩主	享保一八	六二	全
全三位	關平康哉	津山藩主	寶曆一〇	四三	大正八
全三位	宇田川玄隨	蘭學者	寬政六	四三	明治四三
全四位	西山拙齊	儒學者	全 一〇	四八	全
全五位	古川平次兵衛	地理學者	文化四	六四	大正八
全五位	早川八郎左衛門	民政學者	全 五	七〇	昭和三

.....

.....

.....

.....

.....

現
勢
編

現勢記

第一章 管區沿革

岡山縣の行政區域は備前、備中、美作の三國で、明治維新以後今日に至るまでには管轄區域に相當の變遷があつた。

明治元年に本縣地區内を管轄したるものは備前、鴨方、岡田、足守、庭瀬、新見、松山、成羽、淺尾、津山、勝山の各藩と、寺院の朱印地証文地があり、個人の采地も少くなく、幕府直轄の倉敷支配所々屬地もあり、濱田藩の飛地である鶴田の如き龍野、明石、土浦その他の藩の支配地域もあつたのである。それを翌二年と三年に亘つて整理し、四年七月十四日に藩を廢して岡山、鴨方、岡田、足守、庭瀬、新見、高梁、成羽、淺尾、生阪、津山、眞島の十二縣とし、その本廳はその土地にあつたものである。その他に麻田、龜山、龜岡、福山、古河、鶴田、龍野、明石、土浦、沼田、舉母等は部分的にそれらその管轄に屬してゐた。これを同年十一月十五日に合併整理した結果岡山、深津、北條の三縣とし岡山縣は備前一圓を、深津縣は備中及び備後を、北條縣は美作と播磨の西北部の一部とを管轄した。五年六月に深津縣を小田縣と改め、更に八年に至つて小田縣を廢して岡山縣に合併し、九年四月に北條縣を廢して岡山縣に合併し、同時に曩に小田縣より編入せる深安、沼隅、蘆品、神石郡を分離して廣島縣に編入した。こゝに於て殆んど現在の地域が出来た、その後二十九年四月に美作の一部を兵庫縣佐用郡に分離編入した。

その以前本縣に屬したものに北條縣の管轄であつた讃岐の小豆島、岡田縣の管轄攝津豊島郡一部及び河内高安郡一部、美濃池田郡一部等がある。淺尾縣管區としては河内の大縣郡一部、攝津八部郡一部、倉敷縣管轄讃岐の塩飽諸島等があつたのである。

而して版籍の奉還によりて舊藩主を以て新藩の知事とした、即ち池田章政、松平慶倫、木下利恭、三浦顯次、板倉勝弘、關長克、山崎治祇、山崎治敏、伊東長實、蔭田慶孝、松平武聰、池田政保、坂倉勝弼、池田政礼、倉敷縣には内海多次郎、小倉與市、伊勢新左衛門等である。明治四年七月廢藩の上縣を置かれ之等の知事は自然廢官となり、大參事以下を任命した。これ等もやがて併合による三縣となつて殆んど廢官した。三縣當時長官たりしものは深津縣に矢野光儀、北條縣に淵邊高照、小野六藏、岡山縣に新庄厚信、石部誠中があつた。次で高崎五六が縣令に任せられ在任中の岡山縣となり、千坂高雅が縣令在任中の明治十九年に縣知事と改稱爾後縣知事として任命されたは明治二十七年河野忠三の任せられしより高崎親章、吉原三郎、檜垣直右、寺田祐之、谷口留五郎、大山綱昌、湯淺倉平、笠井信一、香川輝、長延連、横山助成、大海原重義、佐上信一、岸本正雄、三邊長治、香坂昌康等で二十七年間に十七人の知事交代を見て居る。因に大濱習後に於て中野邦一、安井英二現在篠原英太郎知事に至る。

第二章 境域戸口

本縣は東は兵庫縣、西は廣島縣、南は瀬戸内海を隔て、香川、愛媛に、北は中國山脈を境に鳥取縣に接して居る、東端は英田郡の東栗倉村後山、西は阿哲郡の神代村油野、南は小田郡眞鍋島村の南端、北は苦田郡上齊原村の北端で東西二十七里一町、南北二十六里四町、殆んど方形で四百五十六方里八六七、周圍は百六十四里ある。これを岡山、倉敷、津山の三市と御津、赤磐、和氣、邑久、上道、兒島、都窪、淺口、小田、後月、吉備、川上、上房、阿哲、眞庭、苦田、英田、勝田、久米の十九郡に分つて、眞庭郡の五十三方里半を最大とし、上道郡の七方里七、を最小とする。

これ等の郡は明治二十七年四月、明治三十三年四月の二回に整理統合したもので、大正十三年に郡制を廢止され地理的名稱となつた。

市制は明治二十二年に岡山市を、昭和二年四月に都窪郡倉敷町を中心に隣接の大高、萬壽の兩村を合して倉敷市を置き、昭和四年の二月に苦田郡津山町を中心に隣接の二宮、院庄、津山東町、西苦田、福岡を合併して津山市を置いた、管内町数は五十八、兒島郡の八、を最多とし各郡に一以上の町を有する。村は三百八十七箇吉備郡の二十六ヶ村を最多として淺口郡の六ヶ

本縣は東は兵庫縣、西は廣島縣、南は瀬戸内海を隔て、香川、愛媛に、北は中國山脈を境に鳥取縣に接して居る、東端は英田郡の東粟倉村後山、西は阿哲郡の神代村油野、南は小田郡眞鍋島村の南端、北は苦田郡上齊原村の北端で東西二十七里一町、南北二十六里四町、殆んど方形で四百五十六方里八六七、周圍は百六十四里ある。これを岡山、倉敷、津山の三市と御津、赤磐、和氣、邑久、上道、兒島、都窪、淺口、小田、後月、吉備、川上、上房、阿哲、眞庭、苦田、英田、勝田、久米の十九郡に分つて、眞庭郡の五十三方里半を最大とし、上道郡の七方里七、を最小とする。

これ等の郡は明治二十七年四月、明治三十三年四月の二回に整理統合したもので、大正十三年に郡制を廢止され地理的名稱となつた。

市制は明治二十二年に岡山市を、昭和二年四月に都窪郡倉敷町を中心隣接の大高、萬壽の兩村を合して倉敷市を置き、昭和四年の二月に苦田郡津山町を中心隣接の二宮、院庄、津山東町、西苦田、福岡を合併して津山市を置いた、管内町数は五十八、兒島郡の八、を最多とし各郡に以上の町を有する。村は三百八十七箇吉備郡の二十六ヶ村を最多として淺口郡の六ヶ村を最少とする。

世帯數二十七萬四千九百、人口は百二十八萬三千九百概して南部は細密北部は粗である。

郡市名	世帯數	人口	郡市名	世帯數	人口
岡山市	三一、〇二一	一三九、二二二	倉敷市	六、五九二	三〇、一一二
津山市	七、三七九	三四、一五九	御津郡	一、三九八	五三、三二九
赤磐郡	九、七一四	四五、一一〇	和氣	一〇、一七七	四六、三五八
邑久	一〇、四四六	四八、三六五	上道	一〇、五八九	四八、一三八
兒島	二五、七四六	一一三、二九四	都窪	一三、三五二	六一、八四八
淺口	二一、二二八	九八、三三三	小田	一七、九八七	八五、二〇三
後月	七、八〇八	三八、九一四	吉備	一四、六三九	六七、一〇三
上房	八、五四六	四一、三二〇	川上	八、三一四	四三、〇〇八
阿哲	一〇、〇四六	五〇、七二五	眞庭	一二、五三〇	五九、三九一
苦田	九、四四二	四六、三六六	勝田	一〇、五一〇	五一、七九八
英田	七、九七六	三七、九七五	久米	九、四八〇	四三、九一一

大字數千五百八十七、これ等は殆んど徳川時代に於ける村名を示すものである。

土地は官有地五萬五千町歩、民有々租地四十萬町歩、其他を合して五十二萬三千四百四十七町歩、これには赤山原野の八百十町歩、日本原野の百十三町歩、奥日本原野の百十三町歩その他茅部野、小日本等の原野を含み又内海の鹿久居、神島、北木島等十八の島嶼も合算す。

第三章 地勢氣候

本縣は北部に高くして漸次南方に低く、北部には四千尺以上の山岳鳥取縣境に屏立す。即ち後山、花知山、那岐山、毛無山等である、南部にこれ等の支脈あるも高山といふものなし。この山岳重疊せる山間に源を發する旭、吉井、高梁の三川何れも南方に流れ小河川を合し、灌漑の用に飲料に水力に水運の便に供しつ、瀬戸内海に注入して居る。支流として名あるものは旭川の新庄、備中、宇甘、吉井川の加茂、吉野、高梁川の成羽川等である。

地質は南部は花崗岩、石英粗面岩を主としその間に石英班岩、閃綠岩を交へ、秩父古生層所々に露出し、中部は秩父古生層大部分を占め、北部は花崗岩、閃綠岩等で稍々複雑である。殊に備中の北部は最も複雑す。

氣候は北に山陰山陽の分水嶺たる中國山脈を背負ひ南は瀬戸内海に面するを以て自ら一様ならずと雖南部沿海の地方は溫和である。北方縣境は降雪量多く交通の杜絶する場合も少くないが、概して降雨雪も適量で生活に産業に適當である。

第四章 議會公署

一、議會

貴族院議員は二名で互選資格者二百名、(別表の通り)。

衆議院は二區に分ち一區は美作及び備前の兒島を除きたる五郡と岡山津山の二市被選舉者五名、有權者約十四萬五千人、二區は備中全部に兒島郡及び倉敷市で被選舉者五名、有權者約十四萬四千。(現在議員別表、前議員賜饌の部参照)。

縣會議員は總數三十九人、この選舉有權者總數二十八萬三千人、議員一人につき有權者七千二百餘人、人口千人につき有權者二百二十一人の割合である。(議員につきては同前表)

二、公署

縣内に於ける官衙公署は岡山縣廳、阿哲支廳、七年三月廢止)岡山、倉敷、津山の三市役所、警察署には岡山東西兩署、金川、味野、宇野、西大寺、牛窓、瀬戸、和氣、玉島、笠岡、矢掛、井原、總社、新見、高梁、成羽、倉敷、津山、勝山、加美、勝間田、林野、水上警察署は宇野、笠岡、牛窓の三署合計二十六署、

岡山縣農事試験場、岡山縣水産試験場、岡山縣工業試験場、岡山縣種畜場、岡山縣測候所、岡山縣商品陳列所、岡山縣蠶業試験場、岡山縣圖書館、岡山縣蠶業取締所、岡山縣穀物検査所、稅務所は岡山、瀬戸、西大寺、味野、倉敷、玉島、笠岡、高梁、新見、久世、津山、英田の十二署、津山、岡山、新見の三營林署、歩兵第三十三旅團司令部、岡山聯隊司令部、岡山憲兵分隊、岡山地方裁判所、岡山、玉島、笠岡、高梁、新見、津山、勝山の七區裁判所、岡山、津山の兩郵便局、下津井無線電信局、鐵道省岡山建設事務所、岡山運輸保線の兩事務所、岡山驛、岡山地方專賣局、岡山刑務所等である。(區裁判所の出張所は岡山區管は圓城、金川、小野田、輕部、仁堀、本莊、片上、邑久、牛窓、西大寺、味野、甲浦、足守、撫川の十四ヶ所)(玉島區管は鴨方、倉敷、箭田の三ヶ所)(笠岡區管は神島外、矢掛、西江原、共和の四ヶ所)(高梁區管は豊野、中津井、成羽、手莊、吹屋の四ヶ所)(新見區管は刑部、上市、矢神の三ヶ所)(津山區管は芳野、久田、加茂、勝間田、廣戸、勝田、林野、大原、弓削、倭文東、西川の十一ヶ所)(勝山區管は美甘、落合、久世、湯原、八束の五ヶ所)

縣職員は知事以下總數千九百九十七人、この俸給年額百三十七萬千六百三十三圓で一人當り六百八十六圓、月割宛として五十六圓に當る。市町村に於て市は三市長以下總數四百十八人、俸給年額二十六萬三千六百圓、町村は名譽町村長三百五十人、有給町村長二十四人、助役三百九十九人、收入役三百八十三人其他を合して一萬二百八十人この俸給年額七十一萬八千餘圓、報酬年額三十五萬三千圓合計百七萬圓に達して即ち縣職員費と市町村職員費と殆んど同じく合計二百七十萬圓である。これを縣の世帯數二十七萬に割當れば一世帯にて約十圓を負担する(但し國庫支給金を含む)。

第五章 産業大觀

由來本縣の地たる海あり、山あり、平野ありて其の地域と交通の便否等によつて産業の状態に自然特異のものがある。しかしこれが爲に多角的産物を有し天與の形態資源を占むとも言ひ得るのである、南部は交通至便土地拓け丘陵起伏するも沃野連り隴圃よく稔り、工業も亦盛んである、北部は山岳重疊して林業に適し且蠶業製糸に適す。

沿海は長汀曲浦大小の港灣あり貨物の集散に便水産物も美味豊富である。又近時副業愈盛ならんとするあり、本縣産業の前途洋々有望である。

而して最近の生産總額は二億八千八百萬圓で工業は一億六千五百萬圓、即ち全産額の殆んど五分七分に達し、農産物は二割六七分蠶業、林産、水産、鑛業の順位で、何れも諸般の施設、社會の進展によつて年々増加の傾向にある、殊に工業物に於て特に然り。

一、農業及農産

本縣の耕地は十二萬五千八百餘町歩、田地は八萬九千五百町歩、畑地は三萬六千二百餘町歩で農業戸數十六萬一千を算す、而して近時勞銀暴騰の爲に之れが經營方法は大いに改善せられつゝある、殊にその機械化の進歩著しく尙農用發動機の使用實に七千五百臺を算す、肥料の使用總高も一千百餘萬圓に達し内所謂金肥なるものが七百五十萬圓に達し農業生産總額は七千三百五十萬圓を示して居る。

元來南北の地勢氣候雨量に於て差異少からず生産も地方により相當の差異を見しも近時は耕種肥培等の方法に改善を加へ、諸般の施設と奨励よろしきを得て山地寒冷地にも相當の收穫を

見るに至つた。加之蠶業の發達と特用作物の増加と、園藝果樹の進展著しきものありてますます生産増加の現象を呈して居る。

耕地利用別

一 毛作
二 毛作
三 毛作
四 毛作
永年作
木
也

田
三九四七六町
四九三九七
四五九四

畑
二九一六町
一四二三八
三七二五
一八一八
一三八八
一七

而して最近の生産總額は二億八千八百萬圓で工業は一億六千五百萬圓、即ち全産額の殆んど五割七分に達し、農産物は二割六七分蠶業、林産、水産、鑛業の順位で、何れも諸般の施設、社會の進展によつて年々増加の傾向にある、殊に工業物に於て特に然り。

一、農業及農産

本縣の耕地は十二萬五千八百餘町歩、田地は八萬九千五百町歩、畑地は三萬六千二百餘町歩で農業戸數十六萬一千を算す、而して近時勞銀暴騰の爲に之れが經營方法は大いに改善せられつゝある、殊にその機械化の進歩著しく尙農用發動機の使用實に七千五百臺を算す、肥料の使用總高も一千百餘萬圓に達し内所謂金肥なるものが七百五十萬圓に達し農業生産總額は七千三百五十萬圓を示して居る。

元來南北の地勢氣候雨量に於て差異少からず生産も地方により相當の差異を見しも近時は耕種肥培等の方法に改善を加へ、諸般の施設と奨励よろしきを得て山地寒冷地にも相當の收穫を

見るに至つた。加之蠶業の發達と特用作物の増加と、園藝果樹の進展著しきものありてますます生産増加の現象を呈して居る。

耕地利用別	田		畑	
	一毛作	二毛作	一毛作	二毛作
三毛作以上	三九四七六町	四九三九七	二九一六町	一四二三八
四毛作以上	四五九四	九四	三七二五	一八七
永年作	一一九四	九	一三八八	一二七
休閑地	一九二			

以上の耕地に對する耕作は田に於ては自作農と小作農相半し、畑に於ては自作農遙かに多し。

自作四萬六千戸 小作三萬三千戸 自作兼小作八萬二千戸

專業のもの十二萬戸 兼業のもの 四萬二千戸

五反未満	八萬七千戸	五反以上	四萬五千戸
一町以上	二萬五千戸	三町以上	二萬七千戸
五町以上	千一百戸	十町以上	四百戸
五十町以上	四十戸		

尙自作又は自作兼小作のもの漸次増加の傾向にあるは農村振興上喜ぶべき現象であり、又農業兼業の漸減を示せるも斯業發展の趨勢にありといひ得る。耕作反別によりて分類すれば

農産物は物價指數の如何により或は豊凶の如何により數字上差異あれど五千五百萬圓乃至七千五百萬圓を算する、而して主要なるものは米の八萬八千町歩の植付に對して二百萬石の收穫を第一位とする、明治二十年頃は植付反別七萬五千町歩收穫にありてはその時代の百二十萬石に比し殆んど倍額を示して居る。反當收量は米に於て一段歩二石乃至二石三斗、麥に於て五萬一千町歩の植付八十五萬石の收穫で反當一石七斗前後である。近年小麥の作付反別も漸次増加し、大正元年の二十六萬石に對し昭和五年には四十萬石以上に達して居る。

この他食用農産物として薩摩薯の七十三萬圓、ジャガ芋の三十七萬圓、大豆の三十四萬圓、果實に日本梨、生柿の約五十萬圓、桃の四十八萬圓、葡萄の四十五萬圓、蔬菜類では大根の五十七萬圓、青芋の三十四萬圓、西瓜の三十七萬圓、蠶豆の二十一萬圓、殊に大根の産額は年々増加し近時漬物用として縣外へ出すもの多く、南瓜、蓮根、清菜、牛蒡等の産額も殆んど二十萬圓に達する有様である、工藝農産物は蘭草の二百五十萬圓を第一位とし葉煙草の百五十萬圓、蒟蒻芋三十七萬、薄荷四十三萬、除虫菊二十六萬等で何れも本縣の特産品にして漸増するものその産額は全國で首位を占めて居る。

前記の梨、柿、桃、葡萄の四果は本縣の果實中又全國的にも特色を有するものにて明治末年頃より漸次進展し來り、縣外に移出する額頗る多く將來倍々發展すべきものたるを疑はず。北部の蠶業と茶は南部地方の園藝に比すべく養蠶は明治初年より漸次發展、飼育戸數五萬五千戸、掃立數三十餘万枚、收繭量二百餘万貫を示し、從つて地方の製糸家二百餘、工場の主なるものとしては津山市二宮と眞庭郡久世町の郡是工場、勝間田町の中國製糸、小田郡笠岡町の山陽製糸、井原町及び笠岡町の中備製糸其他で釜數五千餘、十五万貫の生絲を紡製して居る。

畜産は牛に於て全國屈指である。年々の産額一萬五千頭、阿哲、眞庭、苦田、川上等の縣北部には古來千屋牛、高山牛、新庄牛、奥津牛、加茂牛として有名である、殊に千屋、高山系に屬するものは種牛として又役肉兩用として年々縣外に移出する數が少くない、乳牛としては縣南部に飼養されその數千餘頭、年々犢牛を産する五千百頭に及び、これ等は酪農事業と共に年々發展す。

馬は六千頭を標準に飼養してゐる。阿哲、眞庭、苦田、上房、勝田郡地方を主産地とし年々の生産も相當の數に上る、豚も需給の關係上飼養數増加して五千餘頭年出生三千餘頭に及んで居る。

牛乳、肉類の需用亦年々増加し業者漸増、營業改良の進歩も著しく、副業として農家に乳牛を飼養するもの多し、搾乳場三百餘、一万二千石の搾乳を見煉乳、バターの乳製品も増加し、屠殺牛六千餘頭三千万貫に近し。
 鶏は農家の副業或は専業として年々その数を増加し、飼養戸數八万二千餘戸、百五万余羽、卵數も七千万個に達して居る。近年共同販賣或は品種改良、販路擴張等に努め最も有利に展開し將來大いに發展すべきものと思はる。御津南部淺口、小田、兒島郡等が盛である。

二、林業及林産品

本縣の民有林野の推定面積は四十六萬町歩、國有林野二万八千町歩、全面積の約六割七分は林野である。而して南部の林野は多く瘠悪なるも中部は肥沃、北部は地味劣ると雖も南部よりは良好である。この林野の七割六分は樹林地帯で二割四分は無立木原野である。
 林況は松樹林最も廣く十七万八千町歩、潤葉樹林十七万町歩、杉は一萬八千町歩、扁柏は僅かに八千町歩に過ぎない、竹林は二千二百町歩に及ぶ。
 林産品としては加工用材の四百八十萬圓、その内角材を主なるものとし三百七十萬圓、次は板材にして四十萬圓、鐵道の枕木、包装箱用材、垂木、貫等の挽物。木炭産額百二十萬圓、昭和六年より縣營検査をなし品質改良販賣、統整の實を擧ぐ。この他松茸、柴草、筍栗實等の産額多く、又石材も六十餘萬圓、粘土の三十二萬圓等がある、この他造林用苗木の産出も相當の數を示して居る。これ等林産の總額は實に六百萬圓を突破するのである。
 鑛業として特記すべきは柵原鑛山(硫化鐵鑛)である産額三百萬圓以上に達する盛況である。その他の鑛山にはいふべきもなく帶江銅山、吉岡銅山の如きは既に廢坑に屬す。

三、水産及水産品

本縣は南瀬戸内海に面し本土及び屬島を併せて海岸線の延長百二十里に達し、有用魚貝及び海産物の種類多く、その上これ等魚介の發生成育に適恰なる灣港瀉洲に富むると雖一帯帶水を隔て、四國と相對し領海狹隘漁場不足に苦しむ。従業者は二萬人漁船は大小併せて七千餘艘漁獲高五十萬圓、その他養殖及び製造物を合して六百餘萬圓に達するも一人當收益は比較的僅少である。淡水産も近時増殖を獎勵せる爲收穫も相當の數字を示し漸増の傾向顯著である。
 水産業者を見るに漁撈を本業とするもの四千人にして漸減、被傭者は漸次増加の傾向にて五千四百を示し、副業とする業主は増加して六千人、副業としての被傭者も増加して二千七百人を示し水産業者の逐次増加せるを見る。製造業者九百人、養殖業者千百人である。
 漁獲物は魚類百七十萬圓、貝類七萬八千圓、藻類は僅かに七八千圓、其他のもの六十萬圓で主なるものは鱈の三十餘萬圓を主位に鰻、鯛、鮎、黒鯛、鯽、鱒等である、この他蛸三十萬圓、鰻の十五萬圓、藻貝の三萬餘圓等である。
 水産製造としては食鹽の一億餘萬斤價格三百萬圓、釜數二百十、鹽田三百七十町歩兒島郡二百八十町歩を占め邑久淺口兩郡にある。その他蒲鉾、竹輪、煮干鱈、乾鰯、漬鰯、若芽、干鰯等がある。
 遠海出漁及び遠洋漁業は一時獎勵の結果相當の數に上りたるも近年新次減少の傾向を示し昭和五年度にては遠海出漁者船數九十二、乗組員三百五十人、漁獲高三十六萬圓出漁者は殆んど和氣郡日生町の人々、下津井、日比等より僅かに加る。

四、工業及工産物

本縣の工業は軌近著しく發展し私設工場にして職工五人以上を使用せるもの千二百。この職工四萬餘人、これ等の工場は岡山市を中心に倉敷、津山、及び南部各地に多し。昭和五年の工業産品中主要なるものは左の如し。

織物	二七、八四一、三六一圓	紡績綿糸	一六、九一四、六七四圓
清酒	一一、一四九、六一五	撚糸	四、二六三、五四七
肥料	四、一八四、六三四	花蕊莖産	四、〇四三、九六三

足袋	三、六一〇、八一五	醫藥油	三、六二九、一〇九
造船	二、九三一、五五六	菓子類	二、〇七六、八五一
煉瓦	二、〇五八、一六六	麥粉	二、四一二、九一一

その他に疊表、麥稈眞田、薄荷、和紙等がある。織物は多く綿織物で關西に於ける機業地を以て稱せられ、製造戸數三百餘岡山倉敷兩市より兒島、小田、後月地方古來その主産地で綿小倉、金巾、粗布、綾木綿等とする。
 絹綿紡績は岡山市に於て鐘淵紡績の工場ありしも近時不況操作を短縮し、倉敷紡績も亦多少

遠海漁及遠洋漁業は一時獎勵の結果相當の數に上りたるも近年漸次減少の傾向を示し昭和五年度には遠海出漁者船數九十二、乘組員三百五十人、漁獲高三十六萬圓出漁者は殆んど和氣郡日生町の人々、下津井、日比等より僅かに加る。

四、工業及工産物

本縣の工業は晩近著しく發展し私設工場にして職工五人以上を使用せるもの千二百。この職工四萬餘人、これ等の工場は岡山市を中心に倉敷、津山、及び南部各地に多し。昭和五年の工業産品中主要なるものは左の如し。

織物	二七、八四一、三六一圓	紡績綿糸	一六、九一四、六七四圓
清酒	一一、一四九、六一五	撚糸	四、二六三、五四七
肥料	四、一八四、六三四	花莖莫塵	四、〇四三、九六三

足袋	三、六一〇、八一五	醬油	三、六二九、一〇九
造船	二、九三一、五五六	菓子類	二、〇七六、八五一
煉瓦	二、〇五八、一六六	麥粉	二、四一一、九一一

その他に疊表、麥稈眞田、薄荷、和紙等がある。織物は多く綿織物で關西に於ける機業地を以て稱せられ、製造戸數三百餘岡山倉敷兩市より兒島、小田、後月地方古來その主産地で綿小倉、金巾、粗布、綾木綿等とする。

絹綿紡績は岡山市に於て鐘淵紡績の工場ありしも近時不況操作を短縮し、倉敷紡績も亦多少能力を減じ他も亦減知線作しつゝある有様である、倉敷人絹は近時非常なる發展を遂げ内外に聲名が高い。

清酒は改善發達を示し淺口郡を主産地として兒島、赤磐、岡山、苫田の地方これに次ぎ、縣外に移出するもの多し。これ全く産米と水質との好適なるに當業者の研鑽努力と價格の割安なるによる。因に赤磐郡産雄町大粒種は全國的の酒造米として知らる。

花莖は海外輸出を主とするもの故に一進一退を免れずと雖も全國第一位で、主産地は都窪、吉備、御津、兒島、淺口の各郡である。

疊表は本縣の蘭草の柔靱、耐久力の強力價格の低廉等によつて備中表の名聲汎く、販路も廣く産額全國の上位にある。御津、都窪、吉備、兒島、淺口の諸郡はその主産地である。

足袋は品質堅牢、價格低廉なるにより一般の歡迎する處となり、近時非常の發展を見、殊に地下足袋護謄靴の需要多く産出年々増加す。

醬油は備前醬油として遠近に知られしも税の廢止により自家醸造増加業者の醸造漸減す。この他本縣の特殊工産品としては取卸薄荷、蒟蒻粉、麥稈眞田、耐火煉瓦、伊部焼がある、伊部焼も近時改善への努力により需要は追次増加す。本縣は古來優佳陶土の産出により陶業稍々發達し現今にても笠岡、津山、酒津、占見等に少數なれども産出がある。

辨柄、石筆、線香、石粉、セメント、蠟燭、安全燐寸、製氷、炭團煉炭、石細工、帽子等も相當の製品を有する、印刷製本の二百萬圓に達するは文化程度を知るに足り、藁製品は五十五萬圓は副業として著しきもの、竹細工も近年發展して多額の製品を出しつゝあるも主として手工業品である。

五、副業及副業品

副業はその指導獎勵のよろしきを得て漸次發達し、これが爲に農山村の更正に資するもの少くない、しかし副業と稱しても中には主業とし多數の職工を有せるものもある。副業品の主なものを列挙すれば

綿織物、花莖、疊表、蘭草、野草莖、素麵、麥稈眞田、果物、蒟蒻粉、薄荷取卸油、繩、除虫菊、木炭、鶏卵、三椏、野菜類、松茸、牛乳、竹細工、木工細工、足袋、苗木、養蠶、椎茸、茶、藁細工品等であるが、この中にも純粹なる副業と稱し得られないものがある、これ等は何れも工業、農業の部に述べたれば茲に省く。

向これ等副業品の生産販賣に關しては同業組合を設けて改良統整、業者の利益を考へ且又その發達に努力しつゝあり、即ちその主なる組合は蘭草、疊表、花莖、眞田、野草莖、薄荷、除虫菊、養蠶、果物、三椏、蒟蒻粉、木炭、製絲、素麵、藁工品、木工、竹工、足袋、貝細工、養兔、桑苗、麻製、蠶具、羊齒細工、桐材加工、椎茸、茶等である。

第六章 教育大觀

岡山縣の教育は由來先進を以て自任したるものである、即ち寛文年中に池田光政が領内に學舎を設け教育振興を圖つた事が遠因である、光政は治政の要諦は庶民教育にありこの信念に基き、先づ城下に花園學舎を設け、尋で藩學校と改め、領内各所に手習所を設け子弟を集めて讀書等を教授し後にこれを閑谷塾に集め、以て藩内に二大學舎を對立せしめ學者を拔擢し或は招聘して學を講せしめた、この頃全國に學舎の存在せしものは僅々二三に過ぎず殊に藩治の一方

針として教育を行ふ如きは稀であつた。爲に備前の教育は一時に勃興し明治維新まで繼續した、因て備前より輩出せる學者多く全國にその名を馳せたのである。津山はそれより後れたるも松平藩主が非常の熱心を以て教育に力を盡しこれ亦多大の振興を見せた。

備中には松山藩に有終館を設け藩士の子弟は勿論庶民の子弟教育の機關となし當時福山の武、松山の文と謳歌せらるゝの盛況であつた。これ亦明治維新後に及ぶまで學者を輩出せしめた。其の他の各藩も勸學に意を用ひ文化は鬱然として興隆した。その他私學の設立あり西江原の興讓館を第一とす。

又國學に於ても加茂真淵、本居宣長等の系統を受けたる國學者、歌學者多く、殊に備中にはこの方面の學者多く備中の國學は一時天下を風靡した。又洋學は美作にその學者を輩出し維新後洋學に志すもの必ずその系統を承けたるものといふも過言にあらず、或は女紅場を設けて女子教育を行ひ、或は毎月一日庶民を神社に集めて心得べき事柄を訓み聞せたるは今日の所謂社會教育といふべく、岡山藩費の如きは學校醫を設け隔日出校せしめ、學校園を設けて藥草を栽培したるが如き、たゞ時代によりて形式と内容との區別あるもその趣旨に於ては今日と何等大差なきの企圖を有して實施し來りたる事は全國に冠たるの施設なりしを證するに足り、今日の學校教育、社會教育等の隆昌故なきにあらずである。

一、 初等教育
一、 小學教育

昭和五年度に於ける岡山縣の學齡兒童は二十二萬四千二百三十九人でその内就學の始期に達したるもの十九萬五千六百七十二人就學十六萬七千七百八十人、その就學歩合は九十九人六歩九厘の好成績を示して居る。市町村立、師範附屬、私立等を合して尋常科に於て十六萬七千七百八十人、高等科に於て三萬一千五百七十八人を算し出席歩合は九十六人五分前後である。

この學童を收容せる小學校は尋常科市町村立百二校、私立一、分教場二、尋常高等併置師範附屬二校、市町村立四百七校、分教場七十九、單設の高等小學校二校、合計五百十二校に分教場八十一、學校數は一町村一校主義をとる爲に漸次減少し殊に尋常小學校の減少を見つゝあり、分教場は交通不便なる山間地苦田、眞庭兩郡に殊に多い。これが教育に従事する教員は正教員三千九百八十八人、専科教員五百二十七人、准代用教員五百五十九人合計五千七十四人で、一學級に對する正教員は八八%、高等科は一〇〇%を示し、正教員男の五人九に對して女は二十二人八、専科教員は女子の就職率多く女子の六人四に對し男子は四人である。

小學校教員の俸給は最低五圓より最高百七十圓である。五十圓乃至七十圓のもの最多數を占め、女子は四十圓乃至五十圓のもの最も多く、一人平均正教員にて六十圓、専科教員にて四十圓、准代用教員にて三十五圓程度、總平均約五十五圓、全教員に支給する總額は三十萬圓であるが兒童増加による學級増設と待遇向上の爲年々増額の傾向を示して居る。即ち昭和五年度に於ける小學校費の概要を表示すれば

郡市	市町村費	小學校費	同上百分比	學校費一戸平均
岡山市	一七四九三圓	四二〇七五	二三、四七	二二、四三
倉敷市	三三五五九	八五八八二	二五、五九	二二、六六
津山市	三二〇三六	二八七五〇	四一、四八	一七、六八
御津市	五四二〇八	一五九三六	二九、三七	一五、二七
赤磐市	四九〇六五	一五七九四	三三、二〇	一六、八四
和氣市	五五六二〇	一五九六三	二八、五九	一七、一四
邑久市	五〇三九二	一五四八九	三〇、八四	一五、八八
上道市	五〇三六七	一七二六六	三四、一七	二〇、二〇
兒島市	九三七五七	三七六一五	四〇、五四	一五、八八
都窪市	七八三二二	一九七八三	二五、二七	一五、七〇
淺口市	八四四〇九	二九三四五	三四、七七	一四、六七
小田市	七二一九九	二七三〇七	三八、四六	一五、八二

後月	三五九三六	二七九二	三九、一八	一六、六九
吉備	六八九一三	三三四七三	三三、七二	一五、八二
上房	三七六三六	二七二二六	三六、四四	一六、四四
川上	四五六七九	二六五七五	三六、二五	二〇、一八
阿哲	五〇七三九	一九二九四	三八、〇三	二〇、三七
眞庭	六〇八八三	二二三四三	三六、八八	一七、六八
苦田	四七〇四五	一七八八五	三八、〇四	一九、八三

倉敷	三三五六九	八五八八二	二五、五九	二、六六
津山	三〇三三六	二二七五〇	四一、四八	一七、六八
御津	五四〇八六	一五九二六	二九、三七	一五、二七
赤磐	四九〇六〇五	一五七九四	三三、二〇	一六、八四
和氣	五五六〇二	一五八九三	二八、五九	一七、四四
邑久	五〇三九二	一五四八九二	三〇、八四	一五、八八
上道	五〇三六七	一七二六六	三四、二七	二〇、二〇
兒島	九三七五七	三七八一五	四〇、五四	一五、八八
都窪	七八三二二	一九七八三	二五、二七	一五、七〇
浅口	八四四〇九六	二九三四九五	三四、七七	一四、六七
小田	七二一九九	二七三三〇七	三六、四六	一五、八二

後月	三三五九三六	二二七九二	三九、一八	一六、六九
吉備	六八九一三	二五四七三	三三、七二	一五、八二
上房	三七六三六	一三七二六	三六、四四	一六、四五
川上	四五七九三	一六五七五	三六、二五	二〇、一八
阿哲	五〇七三九八	一九二九四	三六、〇三	二〇、三七
眞庭	六〇八八三	二二三三三	三四、六八	一七、六五
苦田	四七〇二四五	一七八八五	三六、〇四	一九、八三
勝田	四四二九九	一六九三二	三六、三〇	一六、八五
英田	三七〇三三	一四八八七	三九、三六	一八、六六
久米	四四九六五〇	一五四三三	三四、五七	一七、四〇

經費に於ては岡山、兒島、浅口等も多額を要し倉敷、後月、上房等少額を示し、率より見れば津山、兒島、後月多く、一戸平均を見れば阿哲、川上を初め北部山間地方負担加重にして岡山、倉敷の兩市の如き軽い。

授業料徴收の小學校は尋常小學校に於ては岡山市の十二校あるのみにして他はこれを徴收せず、高等小學校は二百七十八校にて月額収入は尋常科千七百圓、高等科千七百圓である。

二 保 育

本縣の保育事業は一時激進の道程を示したが近時はその進展を見ず。

幼稚園總數七十の内、公立にかゝるもの四十九、私立のもの二十一、その園兒數五千九百餘、男女相半して居る、保姆は有資格百名、無資格者六十名、この外に女子師範學校附屬の幼稚園がある。

二 中 等 教 育

一 中 學 校

本縣の男子中等學校の設置は他府縣に比して完備し、收容生徒數も従つて多く、所謂教育縣として誇るに足るものがある、即ち公立として八校、私立として五校計十三校である。

校名	所在地	開校	校名	所在地	開校
第一岡山中學校	岡山市内山下	明治七年	第二岡山中學校	全上網濱	大正十年
津山	津山市椿高下	明治六年	上房郡高梁町	全上	全上
矢掛	小田郡矢掛町	明治五年	兒島郡藤戸町	全四十二年	全四十二年
閑谷	和氣郡伊里村	全三六年	眞庭郡勝山町	全三十七年	全三十七年
關西	岡山市巖井	明治七年	御津郡金川町	全三十七年	全三十七年
中學岡山巖	岡山市濱	大正二年	淺口郡金光町	明治二十七年	明治二十七年
興讓館中學校	後月郡西江原町	嘉永六年			

因に中學岡山巖は昭和七年岡北中學校と改稱、昭和八年廢校となつた。

生徒數は公立學校に於て五千二百餘人、私立に於て二千四百六十人、合計七千六百七十五人、卒業者は公立に於て年々約九百人、私立に於て約六百餘人年々の入學志願者入學者概數は公立にて一千四百、私立にて六百これ等の内入學し得るもの公立にて千、私立にて五百五十人。岡山中中の入學志願者は特に多數なるも他の中學校の入學志願者は比較的緩和適當である。

教員は公立學校にて二百二十餘人、私立學校にて百三人計三百二十餘人、これが經費の主要を見るに

雜給	俸給	四四六、二四七圓	旅費	八、〇五四
諸費	費	二〇、二八九	校費其他	七一、三八七
修繕費	費	七、四九三	計	五六三、四七〇

二 女 學 校

本縣の中等女子教育は他府縣に比して遙かに優位を占めて居る。數に於ても生徒數に生徒の向學心に男子中等學校以上の熱を有して居る。

岡山高等女學校	岡山市大供	明治三年	津山高等女學校	津山市山下	明治三十六年
順正全	上房郡高梁町	全四十年	西大寺全	上道郡西大寺町	全三十九年
笠岡全	小田郡笠岡町	全三十五年	總社全	吉備郡總社町	大正六年
倉敷全	倉敷市旭町	明治三年	玉島全	淺口郡玉島町	全四十四年
味野全	兒島郡味野町	大正八年	林野全	勝田郡豐國村	全九年
和氣全	和氣郡和氣町	全十一年	落合全	眞庭郡落合町	全十三年
福渡全	久米郡福渡町	全十四年	井原全	後月郡井原町	明治四十五年
邑久全	邑久郡邑久村	大正十年	矢掛全	小田郡矢掛町	全九年
觀生全	淺口郡鴨方町	明治四年	勝山全	眞庭郡勝山町	全八年
新見全	阿哲郡新見町	大正七年	牛窓全	邑久郡牛窓町	全十一年
瀬戸全	赤磐郡瀬戸町	全十一年	成羽全	川上郡成羽町	全十五年
山陽高等女學校	岡山市門田	明治元年	就實全	弓之町	全四十一年
清心全	全 上伊福	全十九年	眞備全	津島	大正十四年
生石全	淺口郡六條院村	全十三年			
津山實科高等女學校	津山市山北	大正十年			
寄島全	淺口郡寄島町	全十二年			
淳和全	小田郡笠岡町	全十四年			
横田全	御津郡一宮村	全全			

の四校あり、以上三十一校にて生徒数は公立の本科の九千五百人、私立の二千百餘、實科にては公立百三十人、私立六百八十人にて生徒數總計一萬二千五百人、殆んど男子中等學校生徒の倍數に達せんとするの状況にある、外に岡山高等女學校に昭和元年より修業年限三ヶ年の高等科を設置し百三人の生徒を收容して居る。

中にも岡山に在る岡山高女、就實、山陽の三校は常に入學者殺到して志願者の半數は入學の希望を達せられざる有様である。教員數は本科に於て約四百八十人、實科に於て五十人、兼務者あるためその實數に於ては五百人前後なるか。

三 實業教育

實業教育は明治年間には遅々として振はざりしも大正に入りて長足の進歩をなし、昭和に入りて更に一大躍進をなした感がある、即ち現在の中等程度の實業學校を見ると

商業學校	第一商業學校	岡山市門田	明治三年	第二全	全上	昭和三年
笠岡全	小田郡笠岡町	明治三年	津山全	津山市山北	大正十年	
倉敷全	倉敷市白樂市	全七年	吉備全	岡山市北方	明治四年	
玉島全	淺口郡玉島町	大正五年	高梁全	上房郡高梁町	昭和五年	
市立岡山全	岡山市内山下	明治五年	新見全	阿哲郡新見町	昭和二年	
農業學校	高松農學校	吉備郡高松町	明治三年	興除全	兒島郡興除村	大正六年
勝間田農林學校	勝田郡勝間田町	全三年	生石農商學校	淺口郡六條院村	全上	
倉敷實業學校	倉敷市倉敷	昭和六年	岡山工藝學校	全東古松	大正三年	
工業學校	岡山縣工業學校	岡山市南方	明治五年			
育機關として	この他商船學校が	一校あつて殆んど實業教育の機關は完備せるものがある。尙女子の實業教育機關として				
岡山高等女子職業學校	岡山市二番町	大正十三年				
片山女子高等技藝學校	全 天瀬	全十五年				
生石女子職業學校	淺口郡六條院村	全全				
高梁高等技藝學校	上房郡高梁町	全全				
淳和女子職業學校	小田郡笠岡町	昭和三年				

津山山市北 大正十年
 淺口郡寄島町 全十二年
 小田郡笠岡町 全十四年
 御津郡一宮村 全全

雜給旅費 一二、四六二
 校費其他 七五、〇八九
 計 八〇四、三六七

成羽家政女學校

この他岡山市立商業學校に女子部がある。これ等の在學生徒七千餘人、教員三百六十人にしてこれに要せる經費の主要は

川上郡成羽町	全	五年
修繕費	五、九六二	
其他	四八、四一一	
給	五三九、七九九	
俸	八、六五六	
其	八九、三八〇	
計	五九二、二〇八	

四 補習教育

農業學校	市立岡山全	岡山市内山下	明治三年	新見全	阿哲郡新見町	昭和二年
	高松農學校	吉備郡高松町	明治三年	興除全	兒島郡興除村	大正六年
	勝間田農林學校	勝田郡勝間田町	全五年	生石農商學校	淺口郡六條院村全上	大正三年
	倉敷實業學校	倉敷市倉敷	昭和六年	岡山工農學校	全東古松	大正三年
工業學校	岡山縣工業學校	岡山市南方	明治五年	岡山女子職業學校	全	大正十三年
	この他商船學校が	一校あつて	殆んど	實業教育の	機關は	完備せるものがある。
育機關としては	岡山高等女子職業學校	全	天瀬	淺口郡六條院村	全	十五年
片山女子高等技藝學校	生石女子職業學校	高梁高等技藝學校	淳和女子職業學校	小田郡笠岡町	全	昭和三年

成羽家政女學校
 この他岡山市立商業學校に女子部がある。
 これ等の在學生徒七千餘人、教員三百六十人にしてこれに要せる經費の概要は

俸給	五三九、七九九	雜給旅費	八、六五六
其他	四八、四一一	校費其他	八九、三八〇
修繕費	五、九六二	計	五九二、二〇八

四 補習教育
 地方の職業に従事する青年に公民的訓練と實業陶冶をなすことは地方開發の第一義として實業補習教育の振興につとめた爲に現今にては全縣下僅かに三村を除き全部設置を見その校數は農業に於て三百七十、農業商業二十一、農業水産九校、商業七校、工校二校、合計四百九校、尙その設置者は私立三校他は町村又はその組合立である、尙青年訓練所充當五十一校、男女の生徒を收容せるもの二百九十四校、男子のみもの三十八校、女子のみもの七十七校である。これが生徒數は男子一萬五千七百餘、女子一萬四千就學出席共にその率は良好である、これに従事する教員は専任教長十九人、その他八百四十八人、兼任せるもの校長三百六十九人、その他七百二十人、合計千九百五十を算して居る。これが經費概要は

兼任教員給	六四、九六八
其他	九四、七二七
合計	六三一、七四二

五 師範教育
 本縣は男女兩師範學校を有し、兩校ともに一部二部制にして共に專攻科を設置し、昭和五年度在籍本科生男子五百五十四女子四百三專攻科生男子四十三女子五教員は兩校にて五十六人、毎年卒業生約男子百五十人、女子百人を出しつゝある。尙兩校とも附屬小學校を設置し、女師範には幼稚をも附設す。兩校に要する經費の概要

俸給	八三三、三九九	雜費旅費	二六三、九
雜費其他	七七、九五	生徒費	六三四、九六
其他	一四〇、六九	修繕費	一三、九一
附屬小學校費	三二、二四九	合計	二〇四、四六八

尙時々小學校教員講習會を開催して補充教育を行ひ、女子師範學校内には女子實業補習教員養成所を設く。高松農學校内に男子の實業補習學校教員養成所の設けがある。

六 社會教育
 明治の中葉より通俗教育と稱して一般教育、大人教育といふ施設を行つたが大正の末よりこれ等の施設及び青年指導を目的とした青年團の發展を見、圖書館の設置、婦人會の組織或は少年團の生れるあり、成人教育の施設をなし、体育の奨励を行ひ、又青年訓練所令の發布によりてこの方面に一段の進展を見るに至つた、而して縣に於てはこれ等社會の教化事業に關係ある各種團體を統合してこゝに岡山縣教化團體の聯合加盟團を作り社會教育分區を定め各方面の連繫を圖つてゐる。

青年團 男子青年團の組織は古くより存在したものである、それを時代に適應發展せしめたものが今日のものである。女子青年團は大正年代の終りより昭和に入つて組織發展したものであるが、今全縣下各町村に亘つてその組織を見るに至り學藝方面に體育方面に或は社會奉仕に産業方面に各自の修養と共に勤勞奉仕に努力しつゝある。

男子青年團數は四百三十五、正團員數六萬八千八百八十八多くは十五歳以上二十五歳までを團員として殆んど強制的加盟である。經費は八萬八千圓その四分の一は團員の離出その他は寄附及補助金で相當の資産を有するものもありその總額は六萬八千圓を越ゆ。

女子青年團數は四百一十一、正團員數は四萬二千八、男子と同様に十五歳以上二十五歳までを入團せしめ經費は總額二萬八千圓、九千圓は團員の離出金その他は寄附金及び補助金である、男子と同様資産を有す總額一萬三千圓に及んでゐる。

而して町村各自の團體は互に連係して一の郡連合團體となり、郡は新に岡山縣聯合團體を組織して統一あるものとなし何れも統制ある發展をなしつゝある。

婦人會 名稱組織のみを以て満足したる婦人會も漸く活動の舞臺に入つて居る、明治時代の如く有産階級の少數婦人の團體でなく一般にこれを認め必要と効果を感じ、従つて會財政に於ても注意を拂ふに至つた、即ち現在に於ては各町村に或は各部落に各學區にその設立を見て多數の會員を抱擁して居る、最近の調査によれば會員數十二萬人、歳出三萬二千圓、事業費として支出したる額二萬六千數百圓、資産を有する會も多くその總額六萬八千圓に及び基礎益鞏固なるものがある。

圖書館 本縣の圖書館事業は他の教化事業の進展より一步遅れたる感がある、明治時代には縣立圖書館外十二三に過ぎず尙藏書數少くして僅かに圖書館といふ名のみであつたが、現今には縣立一、市立二、町立一〇、村立六一、組合立三、私立九五合計百七十二を有しその豫算額四萬四千五百圓、藏書冊數三十五萬五千、閱覽人員百四十五萬を算するに至つた、しかし縣立圖書館、岡山市圖書館關西中學校圖書館、津山基蘇教圖書館を除く外は藏書數一萬に足らず多くは學校附設の兒童圖書館である。

少年團 少年の團体的訓練として設立されたるものにして漸次發展しつゝあるも、その内容に於ては未だ殆んど見る可きものがない。

體育 明治時代は全く學校體育のみに放任されたが大正の中頃より岡山縣教育會が率先してこの方面に努力を拂ひ青年間に振興の氣運を見るに至り、従つて學校に於ても盛んに競技を行ひ一般に野球庭球熱を昂め、大正十五年に皇太子殿下行啓記念として岡山縣體育協會の設立を見た、しかしこの會の活動は今後にあるべく目下各種團體の運動體育部が互に連絡して活動せるに過ぎないが最も囑目すべきは一般青年の體育に覺醒せる事である。

成人教育 大正十四年本縣の事業として公民大學講座を開き講演を開始してより既に五十餘回、或は家庭講座を開催すること既に二十餘ヶ所に及びその効果見るべきものもあるも、多くは一定の人々の限られた全般に普及せざるの憾がある。一面には修養機關の乏しき郡部にこれが普及を企圖して昭和二年社會教育分區を設け中等教員をして社會的に活動せしむべき方案を定めて徹底を期せんと欲したるも經費に乏しく十分なる活動を見るに至らざるものゝ如くである。

青年訓練 青年訓練所令に基き青年の心身を鍛練し質實剛健の氣風を作興し善良にして健全なる公民を養成せんと實業補習學校並青年團と聯合して着々その成果を收めつゝある。

昭和二年開設以來その訓練所數に於ても入所者に於ても既に年齢に限定ある故に多くの増減を見ず、今日の概要を見るに小學校内併置百五十七、實業補習學校充當併置せるもの百三十九、その他四十四合計三百四十四所、主事二百九十七人、指導員千六百六十八人、入所生徒數一萬六千六百六十人を算し終了者は年々約二千人に及んで居る。

教化團體聯合會 昭和三年秋御舉行の大典を記念すべき事業として本縣下に於ける各種の教化團體並に教化事業關係者相互の連絡を圖る目的を以て岡山縣教育團體聯合會を組織し、昭和四年一月十五日に岡山市公會堂にて發會式を擧げた、現在加盟せる團體は百七十四で縣郡市等の教育會、神職會、男女青年團、赤十字支部、婦人會各種の宗教團體、濟世會、司法保護團體等殆んど縣下の各團體を網羅したものである。

七 特殊教育

盲啞學校 明治四十一年十一月岡山縣教育會の事業として經營したるものを昭和二年縣立に移管したもので盲部を初等部、中等部、別科の三とし初等部に二十一人、中等部に十六人、別科に八人合計四十五人、教員八人、聾啞部は本科に豫科、初等部、中等部の三部とし豫科二十九人、初等部五十一人、中等部七人合計八十七人で教員十一人、この經常費二萬一千餘圓育英會 學資乏しき英才を教育する爲に學費貸與を行つて居る、基金の大部分は寄附金によるもので漸次貸費生も増加し學校も大學專門學校より實業學校師範學校等六十八人、貸與費月額二千圓既に返還せるものも返還中のものもありて將來ますます適切に利用せらるゝこと明である。

八 醫大と六高

醫科大學は大正十一年に岡山醫學專門學校を昇格したるもので學生二百五十九人、學長以下教授に當るもの約五十人、その他九十人の職員あり。

第六高等學校は明治三十三年の開校にて生徒八百九人、校長以下教授に當るもの四十六人、その他の職員九人毎年二百四五十人の卒業生を出して居る。

第七章 交通運輸

本縣の交通運輸は近時著しく完備した。備作の山間に至るまで道路は布設修築せられ、國道は第二、第十九、第二十二號の三線にて二百三十八軒餘、縣道百五路線二千三百五十三軒、市

盲啞學校 明治四十一年十一月岡山縣教育會の事業として經營したるものを昭和二年縣立に移管したもので盲部を初等部、中等部、別科の三とし初等部に二十一人、中等部に十六人、別科に八人合計四十五人、教員八人、豐啞部は本科に豫科、初等部、中等部の三部とし豫科二十人、初等部五十一人、中等部七人合計八十七人で教員十一人、この經常費二萬一千餘圓育英會 學資乏しき英才を教育する爲に學費貸與を行つて居る、基金の大部分は寄附金によるもので漸次貸費生も増加し學校も大學專門學校より實業學校師範學校等六十八人、貸與費用額二千圓既に返還せるものも返還中のものもありて將來ますます適切に利用せらるゝこと明である。

八 醫 大 と 六 高

醫科大學は大正十一年に岡山醫學專門學校を昇格したるもので學生二百五十九人、學長以下教授に當るもの約五十人、その他九十人の職員あり。

第六高等學校は明治三十三年の開校にて生徒八百九人、校長以下教授に當るもの四十六人、その他の職員九人毎年二百四五十人の卒業生を出して居る。

第七章 交通運輸

本縣の交通運輸は近時著しく完備した。備作の山間に至るまで道路は布設修築せられ、國道は第二、第十九、第二十二號の三線にて二百三十八軒餘、縣道百五路線二千三百五十三軒、市道千四十二軒、町村道三萬三千三百八十八軒合計三萬七千餘軒を有し、橋梁は五十米以上のもの百四十、高梁川に架せる霞橋の約六百七十七米を最長とし同川の常盤橋の四百五十九米四川邊橋の四百五十七米四等これに次ぐのである。

鐵道としては山陽線南部を東西に九十二軒四、宇野線は岡山より三十二軒九、作備線の津山より新見に至る七十三軒六、伯備線の倉敷より鳥取縣界に至る八十七軒五、三神線の神代より廣島縣界に至る十三軒六、因美南線の津山より北して河井驛に至る二十四軒九で總長三百一十軒一、西大寺鐵道の十一軒五、下津井鐵道の二十一軒一、井笠鐵道及びその支線の二十九軒三、片上鐵道の三十三軒八、合計百七十五軒七、總計殆んど四百軒に達して居る。

道路交通としては近年自動車増加し全縣下至る處に乘合定期自動車の便、貨物用自動車運輸の便ありて乗用九百臺、荷積用五百餘を算し尙將來益々其の發展を見るべく、自轉車も逐年増加して十五萬臺を算する有様である。

船舶は海岸線三十餘里に亘り、宇野、日生、片上、牛窓、玉島、小串、三幡、笠岡、下津井其の他の小港に富み、宇野高松間の鐵道連絡船を初め阪神讚豫間の交通頻繁である上に小港を連絡する定期船あり。最近一年間に各港に出入したる船舶總數十六萬艘、四百餘萬噸に達して居る、この外に宇野港の開港と共に外國船路六十餘艘、十八萬噸を示して居る。

尙遞送郵便に關しては局數二百四十六、郵便箱數千九百餘、切手賣捌所千八百三十、通常郵便の配達九千三百五十四萬餘通で一人につき六十七通平均となつて居る、小包郵便は十一萬の配達で百人の引受數六十四、電信は取扱局百七十七、發信百萬、着信百十萬、十人につき發着信共に八通乃至十通、電話は取扱局百六十一、加入者一萬餘相互通話四千六百餘萬、加入區域外三百萬回に及んで居る。

全縣下の交通量として自動車によるもの近時増加したるものこの數知るべくもなし、蓋し岡山、津山、倉敷、笠岡等を中心とするもの、量は鐵道輸送量と伯仲するものと思像さる、今鐵道及び船舶によるものを示せば、山陽線によるもの各驛にて乗降六百萬人岡山驛は二百五十六萬人にて全體の三分一に相當する、宇野線百二十幾萬、伯備線百萬、作備線八十幾萬、因美線二十數萬、三神線の六萬、この他中國線二百萬人、片上、下津井、西大寺、井笠等のもの五十萬、即ち乗客總數に於て一千二百萬人降客も同數として二千四百五十萬人を數へ収入は貨物運賃よりも乗車賃金の方多額にして總額七百五十萬圓中乗客賃金五百萬圓である。尙主なる船舶の乗降客各は百萬人と號せられてゐる。

第八章 財政經濟

縣財政は			
國稅	五、八四四、四三二圓	縣稅	六、三五六、二八〇
市稅	一、三七六、九〇七	町村稅	七、四七一、三〇七
合計	二一、〇四四、三六四		
而してこれを一戸平均に見れば七十八圓十二錢、一人當り十六圓九十九錢となり、比較的負擔は輕しとはいひ得られない。内國稅を分別すると			
地租	一、九四〇、二四三	所得稅	二、四六三、四五五
營業收益稅	九三九、五七〇	酒稅	六、二六一、三五七

現勢記

財政經濟

を主なるものとして相續税、資本利子税、清涼飲料税其他である。この納税は岡山市の二百十
一萬圓を最高とし淺口、兒島兩郡これに次ぎ英田郡の二十一萬圓を最少額とする、地租は上道
の十五萬圓、都窪の十四萬圓、吉備の十三萬餘圓を主として英田郡の五萬圓を最少額とする、
所得税では兒島郡の二十萬圓を最高として勝田郡の三萬圓を最低とする、即ち所得税を以て富
の程度を知るものとせば兒島一郡の富は美作五郡とか備北の川上、上房、阿哲三郡合計二十萬
圓と伯仲する有様である。

次に縣稅の狀態を見るに國稅附加税に於て六百四十二萬餘圓、岡山市の六十五萬圓を筆頭に
兒島の二十四萬圓これに次ぎ川上郡の六萬圓を最下位とする、縣稅の二百九十三萬圓中岡山市
の四十三萬圓を上位に兒島、淺口これに次ぎ川上、阿哲の七萬圓を下位とする、その主要なる
税目を見れば自轉稅の六十五萬圓を最高に自動車稅、電柱稅、不動産取得稅、遊興稅、興業稅
、藝妓稅等の如きである。

昭和五年に於ける縣歲入出を簡單に表記すれば左の如くである。

歲入の部	五、九七五、八七〇圓	財產收入	四〇、〇七九
縣稅	二〇九、二七七	雜收入	一、〇七四、四一七
國庫下渡金	七、二九九、六四二	總計	八、四五四、四五六
合計	一、一五四、八一三	總計	八、四五四、四五六
歲出の部	一、二六四、三七九	教育費	一、七一六、六一二
警察費	二七九、三〇六	縣吏員費	八九九、二一〇
勸業費	六二、八三一	土木費	七九一、四七四
衛生費	三六八、〇五六	合計	五、三七八、八六五
其他	三、〇七五、五九一	總計	八、四五四、四五六
臨時部	三、〇七五、五九一	總計	八、四五四、四五六
公園費、救濟金、恩給基金、教育資金等の如きもの二百七十六萬餘圓は特別會計としてある。			
町村中に於て十萬圓以上の歲入出を有するを列舉すれば			
西大寺	一四五、六六二圓	琴浦	一三六、六六二
茶屋町	二二五、二五五	早島	二五八、五四二
玉島	二八五、四五一	連島	一〇〇、五五四
西阿知	一〇四、三六七	金光	一一二、七〇一
笠岡	一六九、七二一	總社	一〇六、〇八九
久世	一〇三、三六七		
高梁成羽等これに次ぎ少額豫算を有するは赤磐郡吉岡村の一萬八百圓、久米郡龍川村の一萬五 百圓等である。			

本縣の生産品總額は概略三億に達するが、これを縣内に費消して餘剰を移出する。縣外より
の移入と比較相殺する時移出超過の狀態にありて、本縣が年々富の程度を増加する勢にある事
は慶賀すべきである。總額は二億二千萬圓、移入は一億七千萬圓である、故に少くとも五百萬
圓は移出超過となつて居る。

移入の主なるものは小麦、裸麥、柑橘類、甘藷、生魚、鹽十魚、食鹽、洋酒、罐詰、砂糖、絹綿布
及その製品及原料鐵及び鐵工品、コークス、木炭、肥料、紙類、煙草、材木、セメント、鑛石
等は何れも百萬圓以上のものである。移出品の主なるものは米、小麦、生魚、食鹽、清酒、洋
酒、醬油、綿布及その製品、其他綿布製品、金屬製器具機械、花蔴、墨表、蔘、眞田紐、木
炭、人造肥料、牛類、陶磁器、洋紙、藥種、煉瓦、煙草、足袋、材木、磁石等でこれ亦百萬圓
以上のものである。

而してこれ等の移出の主なる土地は岡山、玉島兩地を主として岡山河岸、宇野、倉敷、笠
岡等鐵道及び港灣を有する地方である。

金融狀態を一瞥すれば中國銀行、日生銀行、中備銀行、後月銀行、農工銀行、岡山合同貯蓄
銀行中國信託等の地元金融機關の外に縣外より住友、鴻池(三和)鴻池、山口、三十四川崎
第百其他の銀行會社の支店がある、然し今日一般農山漁村に於ける日常金融は信用組合中心で
ある。

縣下の銀行預金は約七億六千萬圓貸付金は三億六千萬圓、即ち約二億圓の遊資金、郵便貯金は
預入が二千萬圓、拂戻が千六百萬圓、こゝにも遊資がある譯である。
産業組合は由來其共榮産業の興隆に資するに一面には其の根源をなす金融事業に伸
張するもの少からず、八十五の信用組合は専らその方面に働いて居る、その他購買、販賣等を
兼ねたる信用組合三百七、合計三百九十二にしてこれが取扱へる預金三千三百萬圓、貸付金二
千八百萬圓に達して居る。これ等産業金融情勢等によつて推斷するに縣民全般より見たる經濟
狀態は相當に發展向上の途ありといひ得るのである。

移入の主なるものは小麦、裸麥、柑橘類、甘藷、生魚、鹽十魚、食鹽、洋酒、罐詰、砂糖、絹綿布
及其の製品及原料鐵及び鐵工品、コークス、木炭、肥料、紙類、煙草、材木、セメント、鑛石
等は何れも百萬圓以上のものである。移出品の主なるものは米、小麦、生魚、食鹽、清酒、洋
酒、醬油、綿布及其の製品、其他綿布製品、金屬製器具機械、花菱、墨表、莫産、真田紐、木
炭、人造肥料、牛類、陶磁器、洋紙、藥種、煉瓦、煙草、足袋、材木、磁石等でこれ亦百萬圓
以上のものである。

而してこれ等の移出入の主なる土地は岡山、玉島兩地を主として岡山河岸、宇野、倉敷、笠
岡等鐵道及び港灣を有する地方である。
金融状態を一瞥すれば中國銀行、日生銀行、中備銀行、後月銀行、農工銀行、岡山合同貯蓄
銀行中國信託等の地元金融機關の外に縣外より住友、鴻池(三和)……鴻池、山口、三十四(川崎)
第百其他の銀行會社の支店がある、然し今日一般農山漁村に於ける日常金融は信用組合中心で
ある。

縣下の銀行預金は約七億六千萬圓、貸付金は三億六千萬圓、即ち約二億圓の遊資を、郵便貯金は
預入が二千萬圓、拂戻が千六百萬圓、こゝにも遊資がある譯である。
産業組合は由來共存共榮産業の興隆に資するに在るが一面には其の根源をなす金融事業に伸
張するもの少からず、八十五の信用組合は専らその方面に働いて居る、その他購買、販賣等を
兼ねたる信用組合三百七、合計三百九十二にしてこれが取扱へる預金三千三百萬圓、貸付金二
千八百萬圓に達して居る。これ等産業金融情勢等によつて推斷するに縣民全般より見たる經濟
状態は相當に發展向上の餘地ありといひ得るのである。

第九章 神社 寺院

本縣は由來思想文化の進展、人事風物の複雑に伴ひ宗教的に進歩向上し古くより高僧哲人續
出して全國を風靡したもので黒住教、金光教の如き亦その人物に乏しくない、神社も式内神と
して知られたるもの他に比して多い。

神社は三國の各一の宮と安仁神社が官國幣社に列せられ、縣社は岡山津山各五社を初め各郡
に二三社ありて三十餘社、郷社は眞庭の十四社を最多として久米の十二社これに次ぎ各郡市に
各數社ありて合計百餘社、村社は二千社に近く、赤磐郡の百四十社を最多とし倉敷の七社が最
少である。無格社は三千六百七十六社で小田郡の五百二十五社を最多とし倉敷の十社が最少で
ある。即ち合計五千十二社で備中の二千四百五十八社に比して備前、美作を合してその半數で
ある、備前は池田光政の神社合併によつて甚だしく少く、美作は人口稀少なるによりて少い。
これ等に奉仕する神職は四百八十八人。

寺院は天台、眞言、淨土、臨濟、曹洞、黃檗、眞宗、日蓮の各宗でその合計千五百ヶ寺、眞
言宗最も多く六百二十一寺、天台宗二百五十五寺、日蓮宗百八十九寺で黃檗宗は僅かに四ヶ寺
に過ぎない、これに住職するものは千四百四十三人、眞言宗の四百八十二人を最多とし黃檗宗の
三人を最少とする。寺院分布の状態は備中に八百寺、備前に三百六十二寺、美作に三百三十四
寺で神社と同様備中に多し。

教會は黒住教、大社教、扶桑教、實行教、神習教、御嶽教、神理教、禊教、金光教、天理教、
眞言宗、眞宗、日蓮宗、法相宗、基督教等四百七十四を有する、天理教の百六十、黒住教の七
十九、金光教の八十一等優勢なるものにして僅かに一ヶ處のものも少くない。

第十章 匡濟擁護

時運の進展につれて世相亦複雑し匡濟擁護の必要を生じ、この方面の事業施設は日一日と擴
充向上しつゝある、本縣の特色ある救濟事業としては大正六年に開設したる濟世顧問制度でこ
れは我が國方面委員制度の濫觴をなしたものである、次で濟世委員制度を設けた、しかしこの
活動は未だ以て十分なりとはいひ難く將來に待つもの頗る多大である。

今日實施せる事業としては現役兵の家族救護、傷病兵遺族の救護等軍事に關するもの四千三
百三十七人、これに支給せる額十萬八千圓、一般救恤として癆疾、老衰、疾病、幼弱其他の救
恤をなせる國費、公費によるもの八百二十五人その額二萬二千三百九十四圓、感化事業に關す
るもの收容人員男子のみ七十三人で改悛其他により退院せしめたものも少くない、養老事業は
今日では報恩積善會と岡山市の設置にかゝる共衆園がある、育兒事業に岡山孤兒院ありしも今
日では吉備撫育院、釋尊修養院に孤兒貧兒棄兒等を收容しつゝある、この經費一萬三千八百圓
、施藥救療事業も岡山博愛會の施療院最も歴史を有しその後これに着手するものあり今や九箇
所を存して居る、入院外來の患者多くその數一萬一千餘人を數ふ。特殊なる人々即ち貧兒女中
等の如き教育を受け難きものに對する機關として岡山博愛會の設置せる小學校裁縫所を始め近
年愛國婦人會の實習女學校其他の裁縫所の設置ありて何れも相當の効果を收めつゝあり。

近時盛んに行はれつゝある社會事業としては職業紹介所がある、これは不況時代の所産で岡
山、津山、倉敷、里庄村等にあつて求人數、求職數の半數六千餘の就職を見る、この他隨時必

要に應じて紹介に努め相當の成績を挙げつゝある。幼児保育に常置の託児所もありて幼稚園と同様な經營をなしつゝあるもの岡山託児所、昭和館託児部、あさひ託児所、若竹の園保育所、愛兒園、嫩葉園、高梁保育所、津山託児所、二葉學園等ありて託児延人員十三萬六千人に達して居る、又臨時に農繁期各地に於て保育擁護をなす託児所數も相當な數に上つて居る。

釋放者の保護事業は相當古くより行はれたるも近年縣下全般を統一しその土地の宗教家有力家の助力により好成績を納めつゝあるもの、如く直接間接に保護を與へたるもの延人員四十萬人に及んで居る。又宿泊救護、公益浴場公設市場等の設置も近時の社會事象より生れ出たものである、公益質屋は最も最近に設置を見たものであるが既に二十ヶ所に及んで尙尙到る處に設置せらるべき傾向にある、昭和五年に於ける狀況は入質に於て一萬四千七百九十八件、金額十萬一千餘圓、出質一萬二千四百四十六件、この金額七萬八千六百六十圓、流質は比較的少く四百四十七件三千九十五圓である。

その他に住宅供給事業、濟生會の救濟事業、行路病人の救助、罹災救助等の事業は着々と時運に順應しつゝあるもの、如くである。尙赤十字社、愛國婦人會の狀況を見るに赤十字社員は總數六萬五千人に近く佩有功章者三十八、特別社員八百六、終身四萬五千六百餘、正社員一萬六千九百餘、贊助員九十五で、佩有功章者、特別社員、終身正社員は年々増加するも正社員は漸減の傾向にある。

愛國婦人會は總員三萬三千で特別維持會員七十八、特別會員千五百五十四、通常會員三萬一千餘、贊助會員百二十九、殆んど順調に進捗してゐる。日本海員救濟會も會員十萬餘人を有し大なる増減を見ぬのである。

第十一章 岡山市現政

一 沿革

古來中國文化の中心地として將た又輓近交通の要路商工業都市として躍進してゐる岡山市は、往古は吉備の穴海に基布してゐた一孤島であつたが、時代の推移は、地積構成の理に依つて何時とはなしに大島原となり柴津岡山(岡山縣第一岡山中學校附近)天神山(岡山縣廳、岡山神社附近)石山(内山下尋常高等小學校附近)の三つの邱陵となつた。今日の岡山の地名はこの柴津岡山より出でたと傳へられてゐる。其後旭川口の沖積に依つて寒煙寂寥な一村落を形造つたが、正平の頃名和氏の一族南朝に仕へたる上神太郎高直なるものが初めて此地(天神山)に城を築き、次いで金光宗高の居城となるにつれて住民も増加しこゝに城下としての岡山の端緒を創くやうになつた。

永祿年間宇喜多直家が備前美作を攻略し、漸く中國に其覇業を行はんとする時、其居城を何れの地点に覓むるやに就て頗る苦心を重ねたものである。而して西大寺と岡山と圓山城(市内西端たる三門)の三ヶ所が選び出される事になつた。其の三ヶ所に就いて種々検討考究をなした結果西國に覇を唱へむには交通の利便よき土地廣濶の岡山の地を選ぶ可きなりとなして金光宗高を滅ぼし、從來天神山の地に構へてあつた城壘を毀ち、地を内山下一帯に相し池濠を鑿ち大いに規模を擴張した岡山城(一に鳥城と呼ぶ)を設計し、天正元年その竣工と共に上道郡沼城からこゝに移り、更に城下に士卒の邸宅を設け、或は西國街道の改定を行ふなど、驛路轉じ又領内の豪商を移轉せしめて問屋を置き、城下の繁榮を策し、岡山の名聲を高からしめたものである。天正十年直家の卒後、其の子秀家も岡山の都市計畫に就ては大なる功勞を立てた。城の増築を行ひ旭川の附替をなし京橋を造つて繁榮地帯を伸長する等、今日の岡山の型體は殆んどこの秀家に由つて完備されたものと謂つて好いのである。

慶長五年所謂天下分目の關ヶ原の一戦に武運拙く八丈島に謫居される事になり、その後に来たのが吾中納言小早川秀秋であつた。これより曩徳川家康は宇喜多一族一黨の潜伏蠢動せむ事を杞憂して城下に火を放つて洞窟した爲め、小早川秀秋の入城した時は岡山一面は焼野ヶ原だつたのである。秀秋は其の復興工事と諸施設とに頗る意を注ぎ力を致したものであつたが、惜しい哉酒亂惡癖の爲。在城僅か二年にして身を滅ぼし家を亡して了つたのである。その後封せられた人は播磨宰相輝政の次男池田忠繼であつたが、病弱で元和元年に薨去した。め弟(輝

政の四弟)忠雄が淡路より轉封される事になつた。この忠雄は大衆小説で名高い「伊賀越仇討」の渦中に自ら身を投じて劇的最後に餘儀なく遂げねばならなくなつたのである。

其の子光仲は幼齡なるを以つて、因伯二州に移封される事になり因伯より備前一圓及備中數郡を合した三十一萬五千二百石の主として岡山城に乗り込んで來られたのが有名な新太郎少將池田光政公なのである。かゝる事を世に「お國替へ」と稱して當時岡山としても大事件だつたのである。時に寛永九年五月なり。光政入城して其の善政を布いたのは今更暇々する迄もないが續く綱政、宗政、治政、齊政、齊敏、慶政、茂政、章政の諸城主いづれも衣鉢を繼いで克く勤を守り治を勵んで世の昌平と俱に城下の面目を一新しその發達を助成したものであつた。明治四

宗高を滅ぼし、従来天神山の地に構へてあつた城壘を毀ち、地を内山下一帯に相し池邊を繋ぎ大いに規模を擴張した岡山城(一に鳥城と呼ぶ)を設計し、天正元年その竣工と共に上道郡沼城からこゝに移り、更に城下に士卒の邸宅を設け、或は西國街道の改定を行ふなど、驛路轉じ又領内の豪商を移轉せしめて間屋を置き、城下の繁榮を策し、岡山の名聲を高からしめたものである。天正十年直家の卒後、其の子秀家も岡山の都市計畫に就ては大なる功勞を立てた。城の増築を行ひ旭川の附替をなし京橋を造つて繁榮地帯を伸長する等、今日の岡山の型體は殆んどこの秀家に由つて完備されたものと謂つて好いのである。

慶長五年所謂天下分目の關ヶ原の一戦に武運拙く八丈島に謫居される事になり、その後に来たのが吾中納言小早川秀秋であつた。これより巖徳川家康は宇喜多一族一黨の潜伏蠢動せむ事を杞憂して城下に火を放つて洞瀾した爲め、小早川秀秋の入城した時は岡山一面は焼野ヶ原だつたのである。秀秋は其の復興工事と諸施設とに頗る意を注ぎ力を致したものであつたが、惜しい哉酒亂惡癖の爲。在城僅か二年にして身を滅ぼし家を亡して了つたのである。その後封せられた人は播磨宰相輝政の次男池田忠繼であつたが、病弱で元和元年に薨去した、め弟(輝

政の四弟)忠雄が淡路より轉封される事になつた。この忠雄は大衆小説で名高い「伊賀越仇討」の渦中に自ら身を投じて劇的最後を餘儀なく遂げねばならなかつたのである。

其の子光仲は幼齡なるを以つて、因伯二州に移封される事になり因伯より備前一圓及備中數郡を合した三十一萬五千二百石の主として岡山城に乗り込んで來られたのが有名な新太郎少將池田光政公なのである。かゝる事を世に「お國替へ」と稱して當時岡山としても大事件だつたのである。時に寛永九年五月なり。光政入城して其の善政を布いたのは今更暇々する迄もないが續く綱政、宗政、治政、齊政、齊敏、慶政、茂政、章政の諸城主いづれも衣鉢を繼いで克く勤を守り治を勵んで世の昌平と俱に城下の面目を一新しその發達を助成したものであつた。明治四年七月廢藩置縣と共に岡山を五大區に分ち、その各區を更に五小區に分ち各大區に戸長一名副戸長四名を置き舊藩以來の市政を司つて居つた。總年寄役を市井長と改め依然其職に就かしめたものである。河本又七郎、入江小八郎、眞殿次郎三郎が之に任じた。明治六年には市井長を廢し五大區を統轄する戸長を置き、安藤直道その戸長となつた。また十一年には郡區町村制施行せられて岡山區役所の管轄區域を岡山區八十一ヶ町となし、その區長に大田卓之が就任した。爾來廿二年六月の市政實施迄は其區制が續けられて、岡山市となつての最初の市長が花房端連氏、最初の市會議長には小田安正氏が選ばれたのであつた。

廢藩置縣當時より區制の草分時代に掛けては岡山の總ての設置は岡山縣廳の手に依てなされたものであつた。殊に殖産興業に至つては全く縣の産業課の手に於て其の發達が奨められたのである。明治八年に岡山縣令として赴任して來た高崎五六氏は實に新岡山建設には忘れることの出来ない存在であつた。岡山紡績所の開設、二十二國立銀行の創立、その他岡山の産業發達の上に縦横の敏腕を揮つた。反面多少の非難もあつたが、何にしても氏は岡山に成可り功績を胎して行つたものと言はねばなるまい。市政實施前後よりは岡山も自發的發達を漸次遂げ來り、市民の自覺向上と相俟つて急速に近代的都市としての面目を革むるに至つた。しかも山陽鐵道の貫通は一躍金融産業の活氣を速進し、備前紡績其の他諸種の事業興隆し中國一の工業都市を形成するに至つた。上下水道の完成、電燈、瓦斯の普及、電氣軌道の新設等に依り愈々大都市の體裁を整へ來り、しかも第十七師團の設置(大正十四年軍制改革の爲め廢止現在旅團司令部、工兵隊)と第六高等學校の設置、醫科大學の昇格とは實質的に市の膨脹を齎し、更に數次に隣接村を編入して現在の大岡山市を現はすに至つた。

二 位置境界及地勢

都市の發展は地の利に據り、時の推移に俟ち市民と當局との和衷奉公に倚らなければならぬ。中國文化、産業の中心都市として躍進してゐる我岡山市は岡山縣の南部、東經百三十三度五十分北緯三十四度四十分の交叉点に位し、中國の大河旭川の下流に跨り、東は操山の林巒を以て上道郡に境し、西北の二面は御津郡に南は海を隔て、兒島郡に接し、西方遙かに備前備中の平野を望み、南方には平靜砥の如き兒島灣を控へ、北方には半田龍之口の諸峰が蜿蜒として連互してゐる。

我岡山市は昭和六年四月一日を以て上道郡平井、宇野及び御津郡福濱の三ヶ村を編入して現在直徑東西六千八百八十米、南北一萬二千二百二十二米、面積四千七百四十九萬平方メートルにして之れを市制當初のものに較べると實に夥しい増加を來してゐる。

その地域が旭川の口沖積層である關係上地勢概して平坦強いて言へば門田の東部と萬成、津島、三門附近の地に丘陵が起伏してゐる外、東北部から南西、海に達する間は極めて緩慢な傾斜をなしてゐる。即ち岡山市の今日ある所以は地の利に負ふところが多いと云ふことが立證されてゐる。

三 氣 候

岡山市は其位置が北温帶中にある爲に氣候概ね中和である。最近五ヶ年間の降雨量平均千五百一十耗で其の少いこと本土中の一、二位を占め平均氣温は十四度四從つて積雪寸餘に及ぶこと稀れ、震害亦た稀れ、四季愉快に生活することが出来る天恵の地である。

四 市 街 地

市の地域は旭川の沖積層にある爲地勢概ね平衍なるも、東に操山山系がある。そして山系の中に幣立山、瑜珈山、妙善寺山、瓶井山等があつて、其山麓や中腹には東山公園(一に偕樂園とも

いふ奥市公園、三勳神社、招魂社、玉井宮、松琴寺、小林寺、五百羅漢堂、安住院の堂塔伽藍が点在し風致の雅なること京都東山一帯に彷彿としてゐる。

操山の西北、鳥城の東北、旭川を隔て、瞰下すところに日本三公園の一たる後樂園がある。園は藩主池田綱政の創設、其の臣津田左源太永忠の經營に係るもので、総面積一千四百六十六アール、亭樹泉石の布置整正、一木一石互に相躍動して統一した調和を保つてゐる。園内の延養亭は畏くも明治、大正、今上、三天皇の行在所に充てられたもので、名園に一段の聖彩を添えてゐる。又旭川の清流が市の中央を北より南に貫き自ら市域を東西に區劃し川の東を旭東、西を旭西と稱へ、更に旭西を郭内郭外の二ツに區分し、北は番町口から繞つて柳川筋に出で紺屋町に終る、一帯の外濠以内を郭内、其外を郭外とし濠の内外共に武家屋敷町家があつた、郭内の内山下に屬する部分即北は石關町に起つて上之町、中之町、下之町、榮町、紙屋町裏を経て川崎町に終り、内濠以内の地は町人の住居と旅客の出入を禁止したものであるが廢藩置縣となり年次殷盛となつて今は丸の内の俗稱を有す。今や數次の市區擴張により旭東二十三ヶ町、旭西百三ヶ町となつた。

五 戸數 人口

廢藩置縣の時藩より縣に譲り渡された書類を見るに(明治四年)
士族 男 五千四百七十二人 女 四千四百四十八人
平民 男 一萬一千一百六十一人 女 一萬一千五百七十一人
華族 一人 戸數 九千三百六十二戸
と記されてゐる。

六 財政

明治二十二年市制施行當初の戸數は僅かに九千五百八十一戸、人口四萬七千五百六十四人に過ぎなかつたが、昭和七年末には戸數三萬三千九百七十四戸、人口十四萬一千六百三十二人となつた。

七 金融機關

各種事業の振否は金融機關の整否と、金融機關の發達とに多大の關係を有するものである。從來岡山市の富力が圓滑な發達を遂げてゐる所以は各種事業の進展と金融機關の完備とを物語つてゐるのである。
岡山市の銀行は明治十年に設けられた二十二年國立銀行を最初とし、明治二十二年十月岡山貯蓄銀行同二十八年六月二十二貯蓄銀行、同三十年十二月岡山農工銀行、同三十三年八月山陽商業銀行、大正八年九月第一合同銀行、大正十年十月吉備貯蓄銀行、相次いで創設を見るに至つたが其の後合併の下に益々基礎を鞏固にし、而も大正十一年四月日本銀行岡山支店の設置を見るに至り圓滑なる資金の需給を圖り産業の開發助長に強大なる恩恵を受けてゐる。尙其の設置を動機に岡山手形交換所開始其の總高は手形枚數二十二萬八千六百五十四金額壹億參千壹百參拾壹萬五千六百五拾餘圓に及ぶ。又昭和二年三月より内山下で營業を開始してゐる中國信託式會社は、財産の管理とその利殖に對する最新機關である。更に岡山郵便局の取扱狀況其の他のものを示せば左の如くである。

名	稱	所在地	設立年月	資本金總額
日本銀行	岡山支店	内山下	明治十五年十月	六〇,〇〇〇,〇〇〇円
株式會社	岡山農工銀行	上之町	明治三十年十二月	三,〇〇〇,〇〇〇
全	中山國銀	内山下	大正八年九月	一五,〇〇〇,〇〇〇
全	岡合同貯蓄銀行	西中山下	明治二十八年六月	一,六〇〇,〇〇〇
全	安田銀行	東中山下	明治十年十月	一五〇,〇〇〇,〇〇〇
全	川崎第百銀行	西大寺町	昭和三年四月	三三,〇〇〇,〇〇〇

全	十五銀行	岡山支店	上之町	大正十年五月	二〇,〇〇〇,〇〇〇
全	住友銀行	岡山支店	西中山下	大正十四年十一月	七〇,〇〇〇,〇〇〇
全	不動貯金銀行	岡山支店	上之町	明治四十二年一月	八,〇〇〇,〇〇〇
全	鴻池銀行	岡山支店	西中山下	明治四十三年五月	一〇,〇〇〇,〇〇〇
全	山口銀行	岡山支店	上之町	大正十年五月	二〇,〇〇〇,〇〇〇
全	藤本ビルブローカー銀行	岡山支店	西中山下	大正十三年八月	三,〇〇〇,〇〇〇

銀行預金及貸付金 (每年末現在) 預金 貸付金

を興機に岡山手形交換所開始其の積高は手形枚数三十二萬八千六百五十四金額壹萬五千六百五拾餘圓に及ぶ。又昭和二年三月より内山下で營業を開始してゐる中國信託式會社は、財産の管理とその利殖に對する最新機關である。更に岡山郵便局の取扱狀況其の他のものを示せば左の如くである。

名	稱	所在地	設立年月	資本金總額
日本銀行	岡山支店	内山下	明治十五年十月	六〇,〇〇〇,〇〇〇
株式會社	岡山農工銀行	内山下	明治三十年十二月	三〇,〇〇〇,〇〇〇
全	中國銀行	内山下	大正八年九月	一五,〇〇〇,〇〇〇
全	岡山合同貯蓄銀行	西中山下	明治二十八年六月	一六〇,〇〇〇
全	安田銀行岡山支店	東中山下	明治十年十月	一五〇,〇〇〇,〇〇〇
全	川崎第一百銀行岡山支店	西大寺町	昭和三年四月	三〇,九八,〇〇〇

年次	銀行出入金	出金總額	合計
昭和七年	七三,九五七,七二一	二,三三九,三七,六三四	四,六七八,三〇一,六三三
昭和六年	六五,六二二,九三六	一,九九九,四五三,一九三	三,九九七,六七三,六三五
昭和五年	六二,五九三,五三三	二,五五四,一九八,六八六	五,〇五一,四三二,五四八
昭和四年	六四,九八,八二七	二,四一九,二六一,四四四	四,八五六,四〇八,八八三
昭和三年	六五,九六三,六五四	二,八三四,〇一八,二四四	五,六六八,七九六,九九〇

種別	口數	金額	口數	金額
振替貯金	受入 一六,三〇二枚	九三,三〇九	拂渡 六,二二一	一,四六六,七四〇
内國爲替	受入 三三,四六六	八六二,七九六	拂渡 五四,二四二	二,三九五,七六一
外國爲替	受入 一〇一	九,五二五	拂渡 二七六	一七,五五六
郵便貯金	受入 四七,七七五	八三,三二九	拂渡 一六,四四九	一,三五一,二三三

名	稱	所在地	創立年月	資本金總額
合資會社	岡山金融無盡商會	西田町	大正十五年四月	一〇〇,〇〇〇
興國無盡株式會社		東中山下	全	一〇〇,〇〇〇
東備無盡株式會社		内山下	全	五〇,〇〇〇
合資會社	別所無盡商會	東田町	昭和二年八月	一〇〇,〇〇〇

名	稱	所在地	創立年月	出資拂込總額
有限責任	岡山購買信用組合	弓之町	明治四十年十一月	一七,一八六
全	信用組合岡山相互金庫	内山下	大正二年四月	九六,九二〇
全	信用組合岡山市民金庫	下市町	全	四二,八九九
全	信用購買組合共保會	二日市町	全	一四〇〇
全	信用組合天神山同業金庫	石關町	全	二,五四四
全	上伊福信用販賣購買組合	上伊福	昭和二年一月	一,八九〇
全	岡山市信用組合	西中山下	昭和四年八月	六四,五六九
全	岡山濟世信用組合	石關町	大正十五年九月	二七,一九三
全	岡山建築信用購買組合	全	昭和三年二月	一,二四八
全	福濱信用組合	福富	大正十年四月	五六,七八六
全	岡山縣信用組合聯合會	弓之町	全	三三〇,二〇五
全	岡山市農家信用販賣購買利用組合	東中山下	昭和八年六月	二,二九五

岡山市は由來商業を以て起つたもので、工業の沿革については甚だ微々たるものである。

藩政時代に「石關の鏝」「萬町の籠」「桶屋町の桶」「磨屋町の傘」等があつたが、熟れも家内工業で今日の所謂工業地としての濫觴は明治四年大口精義が備前藩の事業として紡績工場創設を劃策したことに胚胎してゐる。

其の後時代の進運と市民の自覺とは具體化して、明治十二年花畑に紡績工場の設立となり、以來交通運輸の發達と工場用地の潤澤、金融機關の普及と豊富なる電力の供給と搗て加へて歐洲大戰の餘波は著しく工業界に生氣を漲らしめ從來の家内工業は機械工化に小規模のものは大規模に、小資本のものは大資本の下に經營せらるゝ様になり、各種工産品の種類と其の數量との上に増加を來したるも比較的生産額を増さざるは時尙一般不景氣の結果である。

その工産品は多種多様であるが、其の原料の産地又は仕入先も各方面に亘つてゐる。即ち縣下各地方より供給を受くるもの、或は縣外各地より移入に依るもの或は紡績原料の如く其の供給を外國に仰ぐものもある。

これ等各方面の原料に依つて加工された生産品の販路も亦一律でない。岡山市内若しくは縣下各地に於て需要消費されるものもあれば、或は關西、九州、四國地方に及ぶもの更らに京阪地方から關東地方に及ぶもの、花苳、板紙、經木、眞田、麥稈眞田の如く其の販路を海外に有するものも尠くない。尙市内の工場状態は、昭和七年末現在に於て瓦斯並電力其の他の動力に依る總數は二百三十七工場使用職工總數は男二千七百四十六名女五千四百七十六名に達してゐる。

九 商 業

土地平坦、旭川に跨り兒島灣に接し、水陸交通の要衝を占め而かも藩政時代より殷盛な城下であつた岡山市が商業地として今日あるを致したのは當然の歸趨である。特に廢藩置縣の動搖に一般が其堵に安んじなかつた當時、備前藩士中夙に意を實業に注ぎ、其興起を鼓吹したゝめ、明治の初年に於て私立商會社の創設を見次いで米價調節のために社倉、士族授産のために徴力社、或は爲替取組事業等の組織を見るやうになつたのは岡山實業界發展上看通すことの出來ない事柄である。

明治十年西南戰爭に依る經濟界の好況は、商業界の進歩を促すに力強いものがあつた。其後に金融の逼迫につれ購買力の減退を來したこともあつたが、市制實施を一新紀元として交通機關の普及、金融機關の完備、當業者の自覺等に依り目覺しい發展を見るに至り、現今は中國、四國地方の中樞に位し商況愈々盛ならむとしてゐる。昭和七年度商家戸數一萬一千二百餘戸、從業者男女合計五萬一千六百人に及び、市場も生魚、青物、家畜、日用品の四種がある。

生魚市場は京橋の北、川崎町と南二日市町との河岸にあつて、毎朝市場に群集する通船數十艘、賣買數百人、その價を争ふ状態は魚に一奇觀たるを失はない。こゝで集散する魚貝の年額は約參百萬圓に達してゐる。青物市場は内山下にあつて一ヶ年の取扱高は五百萬圓を突破する。家畜市場は巖井にあつて其の創立は明治四十二年で一ヶ年の賣買數は約六千頭で去る昭和六年四月岡山市畜産組合經營に移管し爾來設備其他に改善を加へ毎月二、五、八を定期市場とし漸次盛大を誇るに至りつゝある。

日用品市場として市營にかゝるものは、大正八年八月に設けられた野田屋町市場と、大正十四年十月に設けられた門田屋敷の旭東市場との二つがある。一ヶ年の賣上金額約五拾萬圓に上り年々利用の範圍が擴張されて居る。私設として個人又は團體經營にかゝるものは東田町、野田町、内田、上石井、下石井、瓦町、網濱、上伊福、弓之町等にあつて何れも殷盛を極めてゐる。

又米穀の取引所を開始したのは明治四年九月創設の岡山商會所であつて、之が明治三十六年十二月上石井に設置された株式會社岡山米取引所の前身でこの機關は岡山縣下唯一のものである。

明治元年五月、明治政府が商法大意を布達して座間屋株の解放を斷行し、賣買の自由を認むると同時に、會社組織經營の創立を德憑したる結果は、日本國內の商取引に異常なるセンセーションを捲き起して、茲に變轉的新時代を劃するに至り、この革命的新機運は、遂に岡山にも「商社」なるものが明治三年八月に生まれ出で、來た。

- 下市町 株式會社林漆器 紙屋町 全 林源十郎商店
- 上伊福 全 中國鐵道 上西川町 全 中國合同電氣

- 南方 全 中國土地建物
- 上西川町 全 中國肥料
- 川崎町 全 岡山生魚
- 上之町 全 岡山縣農工銀行
- 内山下 全 岡山書籍
- 上石井 全 岡山合同運送
- 内山下 全 岡山青果
- 内山下 全 中國銀行
- 新西大寺町 全 土屋鐵商店
- 内山下 全 中國信託
- 内山下 全 岡山電燈
- 天瀬 全 岡山瓦斯
- 船着町 全 岡山鹽元賣捌
- 門田 全 岡山電氣軌道
- 西中山下 全 岡山合同貯蓄銀行
- 七日市 全 大日本織物
- 上石井 全 河田運輸
- 常盤町 全 中檢番

り年々利用の範圍が擴張されて居る。私設として個人又は團體經營にかゝるものは東田町、野田町、内田、上石井、下石井、瓦町、網濱、上伊福、弓之町等にあつて何れも殷盛を極めてゐる。

又米穀の取引所を開始したのは明治四年九月創設の岡山商會所であつて、之が明治三十六年十二月上石井に設置された株式會社岡山米取引所の前身でこの機關は岡山縣下唯一のものである。

明治元年五月、明治政府が商法大意を布達して座間屋株の解放を斷行し、賣買の自由を認むると同時に、會社組織經營の創立を慫慂したる結果は、日本國內の商取引に異常なるセンセーションを捲き起して、茲に變轉的新時代を劃するに至り、この革命的新機運は、遂に岡山にも「商社」なるものが明治三年八月に生まれ出で、來た。

下市町 株式會社林漆器 紙屋町 全 林源十郎商店
 上伊福 全 中國鐵道 上西川町 全 中國合同電氣

南方	全	中國土地建物	内山下	全	中國信託
上西川町	全	中國肥料	内山下	全	岡山電燈
川崎町	全	岡山生魚	天瀬	全	岡山瓦斯
上之町	全	岡山縣農工銀行	船着町	全	岡山鹽元賣捌
内山下	全	岡山書籍	門田	全	岡山電氣軌道
上石井	全	岡山合同運送	西中山下	全	岡山合同貯蓄銀行
内山下	全	岡山青果	七中市	全	大日本織物
新西大寺町	全	中國銀行	上石井	全	河田運輸
上之町	全	土屋鐵商店	常盤町	全	中檢番
下之町	全	日下商店	東中山下	全	興國無盡
上伊福	全	天滿屋	七中市	全	旭工業
榮町	全	備前織物	西中山下	全	岡山活版製造所
桶屋町	全	角丸堂本店	内山下	全	岡山トモエ自動車
上石井	全	岡山電業	兒島町	全	岡山酒造
東田町	全	岡山米取引所	内山下	全	岡山乘合自動車
内山下	全	岡山米穀	濱野	全	岡山製紙
大供	全	太陽足袋	門田屋敷	全	關西貿易
桶屋町	全	富士自動車	上之町	全	高原吳服店
花畑	全	備前小倉織	五番町	全	山陽工業
内山下	全	宗像商會岡山支店	上之町	全	山口銀行岡山支店
上石井	全	大日本製氷岡山營業所	國富	全	不動貯金銀行岡山支店
弓之町	全	鐘淵紡績岡山工場	東中山下	全	山一證券岡山支店
七日市	全	日清製粉岡山工場	西中山下	全	西大寺鐵道
船着町	全	住友生命保險岡山出張所	下之町	全	安田銀行岡山支店
内山下	全	住友生命保險岡山支店	野田屋町	全	鴻池銀行岡山支店
東中山下	全	共保生命保險岡山支部	富田町	全	明治生命保險岡山支店
内山下	全	山陽中央水電七日市發電所	上石井	全	東陽岡山出張所
西中山下	全	日本簡易保險岡山出張所	船着町	全	日本生命保險岡山出張所
上之町	全	第一徵兵保險岡山支店	内山下	全	三井物産岡山出張員
内山下	全	藤本ビルアローカ、銀行岡山支店	西大寺町	全	山尾商事岡山出張所
西中山下	全	十五銀行岡山支店	久山町	全	日華生命保險岡山支店
内山下	全	野村證券岡山支店	上石井	全	川崎第百銀行岡山支店
津島	全	日興證券岡山出張所	桶屋町	全	淺野セメント岡山出張所
下石井	全	日本動産火災保險岡山出張所	二日市	全	丸神運送店岡山支店
下市町	全	合資會社原吉商店	七軒町	全	福助足袋岡山販賣所
古京	全	服部	東田町	全	明治商店
全	全	岡山精米	西田町	全	日本水産
上石井	全	吉田商店	新西大寺町	全	服部有春社
上石井	全	谷淵商店	中之町	全	別所無盡商會
大雲寺町	全	野崎津島	久山町	全	岡山金融無盡商會
天瀬	全	久保商店	下之町	全	高原ゴム
		小松原	下之町	全	津田時計店
		赤澤商店	下之町	全	野上
		三好野本店	下石井	全	藤原商店
		平田石油店	二日市	全	るり豊商店
		今枝		全	細謹舎
				全	信裕
				全	森万商店
				全	平又商店

現勢記 岡山市

内山下	全	石原書店	岡	西村商店
川崎町	全	岡商店	片瀬町	小畑商店
岩田町	全	片山商店	天瀬	吉田本店
石關町	全	横田紙器	紺屋町	槌屋
天瀬	全	小林山陽堂	磨屋町	三宅備交堂
西中山下	全	塩見社團	富田町	人見商店
中之町	全	伊藤糸店	上石井	友金
大雲寺町	全	大森商店	内山下	大藤商店
新西大寺町	全	岡山保一軒	大雲寺町	川西新太郎商店
上之町	全	小寺洋家具店	櫻町	淺野商店
榮町	全	安價堂	中之町	赤菱
橋本町	全	京橋餅	中之町	ミカド洋服店
紙屋町	全	三田屋商店	小橋町	島商店
北方	全	木村洗染工業所	磨屋町	合名會社入野
西中島町	全	合名會社岡山村	橋本町	大野
中之町	全	岡村商店	内山下	中川商會
西中山下	全	郷司文昌堂	上伊福	山陽商會
磨屋町	全	菱川	紺屋町	杉田鐵工所
上西川町	全	万仁岡山出張所	内山下	岡山スズラン堂
濱田町	全	稻岡商店岡山出張所	片瀬町	關西蠶取紙製造
中之町	全	淺野洋紙店	天瀬	入江三商店
中之町	全	タツミヤ洋服店	山崎町	安井洋紙店
門田	全	コドモヤ	巖井	三友商會
上之町	全	株式會社岩田平商店	下石井	合資會社服部材木店
柿屋町	全	豊崎商事	上石井	株式會社兩備倉庫
東中山下	全	岡山商事	上石井	岡山縣穀物
東中山下	全	生水商店	新道	岡山製織
川崎町	全	岡山礦材	上西川町	岡山モーターズ
内山下	全	邑久農事	平井	吉川セメント
下田町	全	合資會社前田社團	中之町	株式會社眞島屋商店
旭町	全	萬歳酒造	新西大寺町	木原商店
島田	全	島田製織所	下之町	山陽度量衡
下石井	全	中外燐寸社	大供	釣鐘護謨
全	全	岡山製氷所	門田	岡山タクシー自動車
古京	全	合資會社志保屋	藤野町	林原製飴所
西中山下	全	株式會社仁壽生命保險岡山支部	上伊福	備作製絲
内山下	全	旭自動車岡山營業所	平井湊	中田製作所
上石井	全	柴田自動車	東中山下	中國民報社
上石井	全	合資會社千葉商會岡山支店	船着町	株式會社岡山商船
新西大寺町	全	小野善商店	上伊福	萩原商店
大供	全	合名會社丸善礦油岡山出張所	北方	株式會社倉敷紡績北方工場
内山下	全	貝島炭礦岡山出張所		

従來の三十二種の問屋株の商人を網羅して今までの獨占權を確保すると共に、金融の圓滿を計らうとする營利會社が設立されたのである。これが岡山に於ける會社の濫觴と云つて好からう。その後「士族授産」の目的の爲め官の保護の下に諸種の會社結社の簇生を見た。回漕業の瀛衛會社とか、燐寸の製造販賣を目的とする有恒社とか、織物の製造販賣の篤好社とか、開墾事業の有終社とか、馬車株式會社の行運社など凡そ二十五六種に近い會社が亂立された。しかししづれも「士族の商賣」としてその終末を完了する事を得なかつた。菅岡山紡績所(資本金六萬五千圓)のみは其圈内を突破して、産業都市としてのスタートを切つて岡山市の爲めにその礎石となり中心となつた。その岡山紡績所が現在の鐘淵紡績岡山工場なのである。その後財界の變動につれて興亡變轉は幾度となく繰り返されはしたが、年と共に事業經營は

旭自動車岡山営業所
 上石井 全 柴田自動車
 上石井 全 合資會社千葉商會岡山支店
 新西大寺町 全 小野善商店
 大供 全 合名會社丸善礦油岡山出張所
 内山下 全 貝島炭礦岡山出張所
 平井湊 全 中田製作所
 東中山下 全 中國民報社
 船着町 株式會社岡山商船
 上伊福 全 萩原商店
 北方 株式會社倉敷紡績北方工場

從來の三十二種の間屋株の商人を網羅して今までの獨占權を確保すると共に、金融の圓滿を計らうとする營利會社が設立されたのである。これが岡山に於ける會社の濫觴と云つて好からう。その後「士族授産」の目的の爲め官の保護の下に諸種の會社結社の簇生を見た。回漕業の瀆衛會社とか、燐寸の製造販賣を目的とする有恒社とか、織物の製造販賣の篤好社とか、開墾事業の有終社とか、馬車株式會社の行運社など凡そ二十五六種に近い會社が亂立された。しかしいづれも「士族の商賣」としてその終末を完了する事を得なかつた。菅岡山紡績所(資本金六萬五千圓)のみは其圈内を突破して、産業都市としてのスタートを切

つて岡山市の爲めにその礎石となり中心となつた。その岡山紡績所が現在の鐘淵紡績岡山工場なのである。その後財界の變動につれて興亡變轉は幾度となく繰り返されはしたが、年と共に事業經營は大資本組織に膨脹を續けて現今では三百四十の會社を算するの盛況を呈するに至つた。更に商工業の發展を促し、一面に於ては販路の擴張及び取引の改善を圖るために各種産業機關が設けられてゐるが、これに呼應して各種重要物産同業者に於ても同業組合、準則組合等を組織して絶えず斯業の弊害を除去し共同利益の増進と産業の發展とを圖つてゐる。

○ 産 業 組 合

組 合 名	所在地	組 合 名	所在地
保護責任 岡山信用組合聯合會	弓之町	保護責任 岡山市農家信用販賣購買利用組合	東中山下
全 岡山縣購買販賣組合聯合會	上西川町	信用組合 岡山相互金庫	内山下
有限責任 岡山購買信用組合	弓之町	信用組合 岡山相相互金庫	丸龜町
全 信用組合 岡山市民金庫	下市町	岡山活版印刷業信用購買組合	二日市町
全 信用組合 天神山同榮金庫	石關町	販賣組合 岡山縣乾繭農業倉庫	南方
全 岡山市信用組合	西中山下	岡山縣師範學校購買組合	門田
全 岡山醫師購買組合	内山下	濱野 購買組合	濱野
全 岡山濟世信用組合	石關町	福濱 信用組合	福島
全 岡山建築信用購買組合	石關町		

○ 重要物産同業組合

組 合 名	所在地	組 合 名	所在地
岡山縣花莖同業組合	上石井	岡山縣穀物同業組合	上石井
岡山縣壘表同業組合	下田町	岡山縣果物同業組合	内山下
岡山縣藪草同業組合	下石井	岡山縣藥工品同業組合	難波町
岡山縣石炭同業組合	天瀬	岡山縣清涼飲料水同業組合	南方
岡山縣燐寸同業組合	下石井	兩備肥料同業組合	内田
岡山縣足袋同業組合	西田町	岡山縣醬油同業組合	南方
岡山縣蠶種同業組合	南方	岡山縣製糸同業組合	縣廳内

組 合 名

組 合 名	所在地	組 合 名	所在地
岡山建具指物業組合	濱田町	岡山白米商組合	南方
岡山洋服商組合	商工會議所	岡山酒商組合	商工會議所
岡山織物雜貨卸商組合	全	岡山鐵工業組合	東田町
岡山小間物化粧品商組合	山崎町	岡山綿布業組合	商工會議所
岡山青乾果實商組合	西中山下	岡山左官材料商組合	紺屋町
岡山菓子商組合	商工會議所	岡山縣土木建築請負業組合	桶屋町
岡山藥業組合	全	岡山縣造酢組合	南方
岡山油類商組合	全	岡山總土木商組合	石關町

交通運輸の便否は其の地産業經濟の動脈であり特に都市の發展消長を支配することは明かである。舊藩時代に於ける岡山市の交通運輸は陸路よりも旭川の水路に依つて瀬戸内海は勿論北海にまで聯絡してゐた。現在道路は上道郡から岡山市を横斷して御津郡に通ずる山陽國道、國道から分岐して兒島郡に通ずる四國往來の三條の外御津、邑久、上道の各郡に通ずる縣道と數十條の市道とがあつて改修擴張は繼續され、自動車は岡山市を起終点として物資の運搬集散と旅客の交通とに資してゐる。

因に昭和六年に於ける道路延長は国道十一号、縣道二十三号、市道六百五十八号である。鐵道としては明治二十四年に開通した山陽線の外に美作に通ずる中國鐵道、備中方面に聯絡する吉備線、宇野港に達する宇野線、備前東部に通ずる西大寺鐵道、昭和三年島根聯絡の伯備線及昭和七年七月中國鐵道津山經由陰陽最距離たる因美線が開通し、此等各種の線路に對し近く實現された四國縱貫鐵道、旭川の改修、開港場としての宇野港とは岡山市をして中國地方は素より四國、九州地方の物資集散の中繼市場、西部日本交通都市として、一層の殷盛を呈するのは疑を容れないところである。

市内の主要交通機關としては蜘蛛の巣のやうに張られてゐる自動車網と明治四十五年五月に運輸を開始した岡山電氣軌道とがある。現在岡山驛を起点に東山に至る線と城下から番町に至る線と柳川から瓦町に至る線との延長三哩一一鎖餘更に岡山全市に電車網を張り交通經濟の上に萬全を期すべく擴張計畫を進めてゐる。

電車線路 (昭和七年十二月末日現在)

區 間	特許線路		營業線路		停留場數
	單線	復線	單線	復線	
内山下線(自石井至西大寺町)	—	—	—	—	—
内山下支線(自内山下至弓之町)	—	—	—	—	—
番町線(自後樂園至番町)	—	—	—	—	—
旭東線(自西大寺町至東山終点)	—	—	—	—	—
柳川線(自番町至大雲寺町)	—	—	—	—	—
病院線(自大雲寺町至岡)	—	—	—	—	—
大供線(自岡至大供)	—	—	—	—	—
合 計	三三鎖	二六鎖	二六鎖	二六鎖	二七

水運としての旭川は昔から利用せられ江戸回漕を初めとし、大阪その他諸國に旅客及び日用生活必需品の移出入船が歳次増加したので川口番所を設けて取締を嚴重にしたが廢藩後市の發展につれて、瀬戸内海の各港から物資を塔載した船舶の出入頻繁を極め運輸交通上の利便を與へる事が倍々鮮少でない。

然し京橋下に千石船の出入した事は今は昔語り年々埋没して水運船舶の運行に少からざる支障を來したが幸ひ内務省は昭和五年八百萬圓(國庫全額の三分の一、地方費全額の三分の一)、地方費中縣の負擔はその三分の二、残り三分の一沿岸受益市町村負擔)の巨費を經上し十三ヶ年計畫即ち昭和十八年完成計畫の下に着々其の工を進めてゐる。

旭川改修は單なる治水工事だけではない。特色ある市港兼施工事である、即ち岡山市街地に於て明かに其特性は發揮されて港灣かと思ふ荷揚場は實に京橋下手より遙に刑務所前まで達し東岸は鐘紡岡山工場附近に一ヶ所、平井に二ヶ所、福島沿岸は全部、濱野に二、三箇所、三幡に四箇所既設計畫を有し重要市港地域の完成に工を進めてゐる。

因に各年度豫算は昭和五年度の總工費は二十六萬二千圓、昭和六年度に於て三十八萬七千圓、昭和七年度に於て五十萬圓、昭和八年度に於て五十三萬圓支出となつてゐる。これ等が完成は都市計畫道路網の施設と相俟つて水陸兩方面の交通運輸に貢獻する産業都市大岡山の完成に寄與する市の生命線である。

第十二章 倉敷市の現勢

一、總 說

倉敷は富の市である。市街の中央鶴形山頭に鎮座せる阿智神社の社頭に、

富商豪族幾家樓
 偶上山頭似騎鶴
 多是素封十萬侯
 下看吉備小楊洲
 中洲三島穀

の額が掲げられてあるが、これは最もよく倉敷の特色を表はしたものである。倉敷の土地が倉敷人の所有であるばかりでなく、市民は市外になほ廣大な土地を持つて居り、古來その富力は關西の地方に冠たるもので家々富み、富豪も世々その跡を絶たない。随つて倉敷人の事業には

於て明かに其特性は發揮されて港灣かと思紛ふ荷揚場は實に京橋下手より遙に刑務所前まで達し東岸は鐘紡岡山工場附近に一ヶ所、平井に二ヶ所、福島沿岸は全部、濱野に二、三箇所、三幡に四箇所の既定計畫を有し重要市港地域の完成に工を進めてゐる。因に各年度豫算は昭和五年度の總工費は二十六萬二千圓、昭和六年度に於て三十八萬七千圓、昭和七年度に於て五十萬圓、昭和八年度に於て五十三萬圓支出となつてゐる。これ等が完成は都市計畫道路網の施設と相俟つて水陸兩方面の交通運輸に貢獻する産業都市大岡山の完成に寄與する市の生命線である。

第十二章 倉敷市の現勢

一、總 說

倉敷は富の市である。市街の中央鶴形山頭に鎮座せる阿智神社の社頭に、

富商家族幾家樓 多是素封十萬侯
偶上山頭似騎鶴 下看吉備小楊洲
倉鋪鶴形山 中洲三島穀

の額が掲げられてあるが、これは最もよく倉敷の特色を表はしたものである。倉敷の土地が倉敷人の所有であるばかりでなく、市民は市外になほ廣大な土地を持つて居り、古來その富力は關西の地方に冠たるもので家々富み、富豪も世々その跡を絶たない。随つて倉敷人の事業には他に見られぬ堅實さと底力があり他の都市の商工業が多く資本を他に仰いでゐるのとは全くその趣を異にして居る。

二、沿 革

この富の倉敷も三四百年の昔には一面の海で阿知潟と稱し、現時市街の中核をなせる鶴形山や南部田園の中に峙てる足高山も當時は海中の孤島で、足高山は沖津島又笹島とも云ひ、古くよりこゝに祀れる延喜式式内社足高神社は一名帆下の宮と稱し、宮の下を走る舟は必ず帆を下げて禮拜をしたものださうである。また鶴形山(舊稱妙見山)は淺口郡の外亀島(今の連島町大字亀島新田沖島)に對して内亀島と呼び、或は單に亀島または亀居島といつた。島の北浦には鯛の浦と云ふ浮鯛の名所があつて

大江 匡 房

春來れば阿知潟の海一かたに

浮くてふ魚の名こそ惜しけれ

宗 惠

春と云へば波にも花の櫻魚の

風に寄りくる阿知潟の海

などの歌をとめてゐる。鯛の浦は開墾せられて『鯛原』となり道路が通じて『鯛原筋』となり今は繁華な『戎町』となつた。阿知町は本町と共に古くから市の目抜の場所で、新興市街の鯛原町大黒町もこれにちなんだ稱呼であることは云ふまでもない。

鐵道の開けない昔の交通運輸は専ら河と海とに依つたものであることは今更云ふまでもない。さて備中一圓をその流域に包含してゐる高梁川は今市の上水道水源地の在る酒津から二派に分れ、一つは水江に走り一つは倉敷に流れてゐたので、倉敷は備中南部の要津となり、關東御藏入の米はこの地で積出しをするやうになり、倉庫をこゝに設けられ、藏の敷地であるところから倉敷と呼ぶに至つたものである。倉敷川は元和年中新田開發と共に改修せられて運河となつた。

倉敷の文字古くは倉鋪とも書き倉子城と云ふ雅字をも用ひた。

古來地方に重きをなしてゐたことに就いて忘れてならないのは此の地が古くから徳川將軍の直轄地であり代官の所在地であつたことである。

由來倉敷は金穀に富んで未だ曾て飢饉を知らず。上は大名旗本から下は町人百姓迄、四隣皆資を倉敷に仰いだ譯で、倉敷人はまた天領の御威光に依つて貸付の回收が極めて容易であつたがために、ます／＼その大をなしたことは争はれない事實である。

此の間二百二十七年間に培はれた富力と、理財の能力と、堅實なる氣風とは克く維新の激變に堪へ時勢に順應して更に新なる大發展をなさしめたのである。

なほ特記すべきは民衆學たる心學の隆盛である。心學の祖石田梅巖の來講するや靡然として其の盛を極め明倫館の傍に塾舎を設け之を自省舎と稱した。其感化大にして地方教化に多大の影響を及ぼした。

かくて代官廢止後も倉敷は郡役所、警察署、稅務署等を置かれて依然地方政治の中樞地であつた。

明治二十年七月倉敷紡績株式會社の創設は倉敷の發展に一大時期を劃したもので、當時はまだ一小邑であつたものが他日全國に其の名を知らし商工都市となる基礎は實にこゝに築かれたのである。同會社は初め倉敷紡績所と稱し、僅かに資本金拾萬圓錘數五千の小規模であつたが、漸次盛大に赴き明治四十一年には玉島紡績會社を買収し、大正三年には萬壽第一工場を新設し、大正七年には坂出、松山の二工場を併合し、大正七年に萬壽第二工場、大正九年に高松

工場を新設し、大正十年に早島紡績會社を併合し、大正十一年に岡山染色整理會社を併合して岡山工場とし、大正十三年に日本メリヤス會社枚方工場を買収し、資本金壹千七百貳拾萬圓、工場數十、全國屈指の大會社となつた。市も亦これが爲めに漸次發展を來し、舊倉敷町の區域に於て、

明治三年 一、六一〇戸
大正元年 二、三七九戸
昭和元年 三、三一七戸

特に萬壽工場新設以後は隣接地域萬壽大高兩村に向つて街衢頓に擴張し、三箇町村を合すれば、

大正元年 三、九二三戸
昭和元年 六、〇一二戸

昭和二年三箇町村合併、新に倉敷町となり、戸數六千百三十二、人口三萬四百七十六を算し、翌三年四月遂に市制を施行するに至つた。

三、現在の倉敷

市は岡山縣の南部、備中國の東南隅、北緯三十四度三十五分、東經百三十三度四十六分基點は市の中央地点に位し、本町三つ角の元標は岡山より約十九軒四里二十九町十三間七分玉島より約十四軒三里十九町三間一分の所に在つて、東北西の三方は都窪郡に連り、南は兒島郡に接し、倉敷川(沙入川)を以つ水路兒島灣に通じ、東京より鹿兒島に達する國道及び鐵道山陽本線は市の北部を貫き、伯備線は倉敷驛より分岐して米子に通じ、東西交通、陰陽連絡の要衝に當つて居る。

東西四軒(約一里)南北五軒餘(約一里十六町)面積一八、七六平方軒(約一、二二方里段別千八百四十二町四反九畝二十三歩)を占めてゐる。

高梁川の沖積層であるため地勢は概ね平坦な低地で、千分の一乃至千五百分の一緩徐な勾配を以て南方に傾き、東端に標高百米の向山を控へ、中央に鶴形山、南方に足高山の小丘がある許りである。南端の浦田は標高一一二、三米の高地を主峯とせる丘陵を以て兒島の山地に接してゐる。

市は瀬戸内海の中部に接してゐるので氣候は溫和である。室内溫度は大暑に於て攝氏三十度極寒零度に至るを普通とし、室外に於て最高四十四度五、最低零下九度を示してゐる。午前十時の觀測に於て一月平均の四度一を最低とし、八月平均の二十八度一を最高とし、二十五箇年間年中平均は一五度七である。随つて降雪少く一寸以上積るやうなことは極めて稀であり、風雨烈しからず、快晴の日多く夏の夕風は瀬戸内の特色である。

隣接地合併以前よりの戸口増加の趨勢を示せば次の通りである。

(各十月一日國勢調査による)

種別
大正九年 大正十四年 昭和五年
現住戸數 五、二四一 五、九六六 六、五九二
現住人口 二四、〇六七 二七、七九四 三〇、一一四

上水道は大正十一年九月を以て竣工し、下水道は計劃案既に成り、汚物掃除法は大正九年より適用せられ、最近一ヶ年間の使役延人夫數五千五百人、同塵芥搬出量七十二萬貫に及んでゐる。その他醫師會附屬診療所、火葬場等の施設完備し、傳染病患者の發生は漸次減少の傾向にある。

特に規模宏大にして最新式設備と各科専門の博士大家を有する倉敷中央病院の存在は獨り市民のみならず一般の大いに意を強うする所である。

鐵道山陽本線は市の北部を貫通し、岡山より來れる伯備線は倉敷驛より分岐して米子に通じ宇野線、下津井線、茶屋町との間には省營定期自動車の往復がある。東京より鹿兒島に達する國道第二號線は市の北部を貫き、市を起点とせる縣道十線は總社、足守、西阿知、連島、足高、藤戸、宇野、妹尾等に達し、いづれも自動車の便がある。都市計畫實現の曉には市の内外交通は益々便利となる譯である。

倉敷川(沙入川)に依る水運も亦重要な地位を占め、發動機船、大型和船の出入絶えず、瀬戸内海を経て各地に交通の便あり、本市貨物移出入の一半は之によるのである。市は現に水運調査機關を設けてこの方面に一生面を開かんことを企て、居る。

四、倉敷の大觀

1、大原農業研究所

上水道は大正十一年九月を以て竣工し、下水道は計案既に成り、汚物掃除法は大正九年より適用せられ、最近一ケ年間の使役延人夫數五千五百人、同塵芥搬出量七十二萬貫に及んでゐる。その他醫師會附屬診療所、火葬場等の施設完備し、傳染病患者の發生は漸次減少の傾向にある。

特に規模宏大にして最新式設備と各科専門の博士大家を有する倉敷中央病院の存在は獨り市民のみならず一般の大いに意を強うする所である。

鐵道山陽本線は市の北部を貫通し、岡山より來れる伯備線は倉敷驛より分岐して米子に通じ宇野線、下津井線、茶屋町との間には省營定期自動車の往復がある。東京より鹿兒島に達する國道第二號線は市の北部を貫き、市を起点とせる縣道十線は總社、足守、西阿知、連島、足高、藤戸、宇野、妹尾等に達し、いづれも自動車の便がある。都市計畫實現の曉には市の内外交通は益々便利となる譯である。

倉敷川（沙入川）に依る水運も亦重要な地位を占め、發動機船、大型和船の出入絶えず、瀬戸内海を経て各地に交通の便あり、本市貨物移出入の一半は之によるのである。市は現に水運調査機關を設けてこの方面に一生涯を開かんことを企て、居る。

四、倉敷の大觀

1、大原農業研究所

（農業研究所設立の動機及び目的）本市の素封家であり、大地主である大原孫三郎氏は夙に本邦食糧問題、農村問題に着眼し、大正三年七月、祖先傳來の土地中より百町歩を寄附し、後更にまた百町歩を加へ父祖努力の記念として、父祖に對する報恩の記念として、財團法人を組織し、深遠なる農業の學理を研究し、及び其の應用に依る農事の改善を圖る目的を以て、組織的な大計畫の下に農業研究所を創立したのである。

（農業研究所の資産と經費）農業研究所の資産及び經費は總べて大原氏の寄附に依るもので、土地二百二町歩餘、建物三十棟九百二十二坪餘を有し、年々の經費は約拾萬圓を要してゐる。現在農業研究所にて使用せる宅地及び試験地は合計一萬三千二百九十七坪約四町四反三畝で、殘餘の土地は何れも小作又は住宅借地に附し、その小作料及び借地料は經費に充てゝゐる。建物には事務室及標本室、種藝研究室、化學研究室、病蟲害研究室、蓄電池冷蔵及農具室、煉瓦造三階建書庫、圖書閱覽室温室及硝子室、網室、農夫舎、收納舎、堆肥舎、農夫休憩室、住宅、寄宿舎、集合所、俱樂部等がある。

（農業研究所の國家的國際的地位）大原農業研究所は我が國唯一のものたるのみならず、斯くの如く整備せる組織と機關とを有し、農業全般に涉つて深遠なる學理の研究をなせるものは、世界に於て本所を除いてはたゞ英國のローサムステッド農事試験場があるのみである。随つて大原農事研究所は世界に重視され、その研究報告は廣く歐米の學界に引用せられてゐる。また丁抹に本部を有する萬國種子協會は種子に關する國際的研究機關で歐米諸國の代表的官立種子検査所が之に加盟して居り、本邦では私立ながら大原農業研究所が唯一の加盟研究所である。

なほ最近國際土壤學會の支部を日本に置かるゝと同時に之を本研究所内に設置されまた昆蟲學、博物病理學に關しても國際的に研究の聯絡を保つてゐる。大原農業試験所はその研究の結果を印刷に附し、廣く之を内外の大學試験場、研究所、學會等に頒布してゐる。印刷物には次の三種がある。

- 一、大原農業研究所報告 (歐文) 年約二回
- 二、同 特別報告 (邦文) 隨時刊行
- 三、農 學 研 究 (邦文) 年約二回

右の外本研究所の研究報告は内外専門雜誌に登載せられ、廣く學界を裨益して居る。

農商務省は本研究所の病蟲害の研究に對し、年々獎勵金を交付し、文部省は日本農業種子の研究に對し獎勵金を交付した。研究所は目下農林省の委託を受けて、主要食糧農産物の減損防除に關し基礎的試験研究を行ひ完全なる防除方法確立に資するため、稻熱病螟蟲の防除に關する研究を行つてゐる。

本研究所に於て研究し、學位を得た人々には、現京都帝國大學教授農學博士大杉繁、東北帝國大學教授理學博士山口彌輔、現研究所員農學博士春川忠吉、同農學博士西門義一の諸氏があり、また台北帝國大學教授農學博士山本亮、盛岡高等農林學校教授農學博士小野寺伊勢之助、理學博士八木誠政、農學士笠井幹夫氏等も多年本研究所に在つて研究に従事された。

2、倉敷勞働科學研究所

（研究）世界大戰の熄む頃から一般社會問題の擡頭と同時に、勞働者の問題は殆んど其の主要問題となつた。大原孫三郎氏は大正八年其の當時の狀勢に鑑み、大原社會問題研究所を大阪に設立して社會問題の研究調査を行ひ、以て其の解決に資せんとした。其の當時該社會問題

研究所の組織中に醫學的研究の一分科が設けられ、この方面を擔當したのが現在の倉敷勞働科學研究所長醫學博士暉峻義等氏である。大正九年に至つて大原氏は、氏が社長たる倉敷紡織株式會社の福利施設並びに生産能率及びその従業者の保健状態の改善に資せんが爲の當時なほ社會問題研究所員たりし暉峻氏に、同會社萬壽工場に來つて、工場及び従業勞働者を研究對象として研究を行はんことを提議し、茲に現在の倉敷勞働科學研究所の創立を促すべき研究が始めて着手せらるゝに至つたのである。

即ち大原氏は大正九年既に研究所の建設を意圖し、その組織及び設備に關する一切を暉峻氏に委任したこゝに於て暉峻氏は現に研究所の幹部として研究に従事しつゝある、石川、桐原の二氏を、次いで八木氏を最初の研究員として研究の陣容を整へ大正九年七月暉峻、石川、桐原の三氏は萬壽工場に於て、我が國始めての勞働者の夜業に關する科學的研究に着手したのである。この記念すべき研究は、更に後に補足又は再試せられて、我が機關雜誌「勞働科學研究」の第一巻に公表されたのである。越へて大正十年早々研究所の建築が着手せられ、同年七月畧落成を見、こゝにいよいよ倉敷勞働科學研究所が創立されたのである。

大正十年八月、暉峻所長は大原氏の命を帯びて研究に要する諸器械及び圖書購入のため歐米に旅し、併せて海外の研究機關の調査を行ひ、大正十二年十一月、多くの研究に必要な器械と圖書文献とを携へて歸朝した。爾來歲月を重ねると共に研究所の組織と機能とは着々として整ひ其の社會的的使命は益々重きを加ふるに至つたのである。

大正十五年五月には皇太子殿下本研究所に行啓あらせられ、親しくその研究状態を御視察遊ばされた。次いで昭和五年六月廿四日、大原社長は目下の我が産業社會の状態と最近に於ける産業合理化の提唱とに鑑み、勞働科學研究所を倉敷紡績株式會社なる營利團體の經營より切り離し、之を大原氏個人の經營に移すことに依つて、研究所の使命と職能とを一層充實せしめんことを發意し、之を暉峻所長に傳ふところがあつた。越えて七月四日大原氏は倉敷紡績株式會社社長の名に於てこれを公表し、こゝに倉敷勞働科學研究所は大原孫三郎氏個人の名に於て經營せらるゝこととなつたのである。

昭和五年十一月閑院宮殿下には本所に成らせられて親しく實驗を御覽遊ばされた。
(研究部門)上述の目的及び研究方針を充足する爲に目下倉敷勞働科學研究所には左の如き研究部門が設けられてある。

- 一、産業生理學に關する研究部門
- 二、産業心理學に關する研究部門
- 三、體格及び體質に關する研究部門
- 四、産業衛生並に職業的疾患に關する研究部門
- 五、集團榮養に關する研究部門
- 六、社會衛生に關する研究部門

而して是等六つの研究部門はそれ々々獨立した研究方面を開拓すると共に、互に協力補佐して共同的研究を行つて居る。

- イ 職工撰擇に關する研究、即ち如何なる心性と如何なる體格及び體力が現在の産業的活動に要求されつゝあるか、又現在の各産業的部門の要求する勞働者の心的並に身體的資質は如何なるものであるかに關する研究
- ロ 産業疲勞に關する研究、即ち單位生産的活動に對する最少のエネルギー消費と最少の疲勞とを以て最善の生産効果を擧げ得る條件の研究
- ハ 環境條件殊に工場内温度湿度空氣の流動が其處に働く勞働者の心身に及ぼす影響及び其等と生産力、疾病率、災害發生との關係に就いての研究
- ニ 特殊なる職業群に關する研究大要

勞働者衛生博物館研究所内には附屬施設として勞働者の衛生、勞働の合理化、並に産業の各方面に涉る諸種の調査研究資料が數多く蒐集せられつゝある。今所内別館の一部に陳列されてゐるのはその一小部分に過ぎないがやがてはこれを中心として立派な勞働者衛生博物館が設立せられることになつてゐる。

(研究所職員) 本研究所昭和六年三月現在職員は左の通りである。

所長	醫學博士	暉峻
研究員	醫學博士	八木
	醫學博士	石川
	醫學博士	桐原
	醫學博士	松島
	醫學博士	奥山
	醫學博士	上野
	醫學博士	江田
	醫學博士	勝木
	醫學博士	新田
	醫學博士	義高
	醫學博士	次福
	醫學博士	佐藏
	醫學博士	雄雄
	醫學博士	義雄
	醫學博士	三雄
	醫學博士	次三

イ 職工撰擇に關する研究、即ち如何なる心性と如何なる體格及び體力が現在の産業的活動に要求されつゝあるか、又現在の各産業的部門の要求する労働者の心的並に身體的資質は如何なるものであるかに關する研究

ロ 産業疲勞に關する研究、即ち單位生産的活動に對する最少のエネルギー消費と最少の疲勞を以て最善の生産効果を擧げ得る條件の研究

ハ 環境條件殊に工場内温度湿度空氣の流動が其處に働く労働者の心身に及ぼす影響及び其等と生産力、疾病率、災害發生との關係に就いての研究

ニ 特殊なる職業群に關する研究大要

労働者衛生博物館研究所内には附屬施設として労働者の衛生、労働の合理化、並に産業の各方面に涉る諸種の調査研究資料が數多く蒐集せられつゝある。今所内別館の一部に陳列されてゐるのはその一小部分に過ぎないがやがてはこれを中心として立派な労働者衛生博物館が設立せられることになつてゐる。

(研究所職員) 本研究所昭和六年三月現在職員は左の通りである。

所長	醫學博士	八木 義
研究員	全	石川 高次
	醫學博士	桐原 福藏
	醫學博士	松島 周藏
	醫學博士	奧山 美佐雄
	醫學博士	上野 義雄
	醫學博士	江田 周三
	醫學博士	勝木 新次
	醫學博士	岩崎 茂
	醫學博士	森 夫

3、倉敷中央病院

(中央病院の創立) 倉敷中央病院は倉敷紡績株式會社の經營にかゝり、はじめ倉紡中央病院と稱したが、後今の名に改めたのである。

倉敷紡績會社は多數の従業員並にその家族の健康を保持する必要上從來各工場に醫局を設けて保健及び診療に當らしめたりしも、なほその不充分なるを遺憾とし、新に大規模の中央病院を創立し、同時に之を公開して、一般社會の利用に供せんとし、大正十年工を起し同十二年五月竣工、六月二日開院式をあげ、七月一日より診療に従事するに至つた。現在の組織は左の通りである。

昭和六年三月現在

院長兼婦人科醫長	醫學博士	本 多 操
内科醫長	全	松 原 良一
外科醫長	全	久 島 直
眼科醫長	全	山 崎 雄造
小兒科醫長	全	和 田 三郎
耳鼻咽喉科醫長	全	中 出 俊次郎
整形外科X線科醫長	全	宇 野 俊治
齒科醫長	全	吉 澤 八郎
藥局長	藥學士	桑 田 智親
事務長	全	笹 邊

なほ右の外に醫員約二〇名、技術員藥局約一五名、看護婦約四〇名等を有する。		
因に開院七ヶ年間の診療人員は次の如くである。		
外 來 新 患	一三五、〇七九人	一ヶ年平均
同 院 新 患	六一八、八五二人	
同 院 延 患	一四、九九三人	
同 院 入 院 新 患	三七一、二〇一人	

4、大原美術館

(美術館の建築) 大原美術館は新溪園の一角老樹鬱蒼の間に在る。鐵筋混凝土二階建、希臘式の典雅壯麗な建築で大原孫三郎氏の創立に係り、昭和五年十一月五日の開館である。正面石階段兩翼ロブロンズはロダンの作品にして、向つて左は豫言者ヨハネ、右は群像「カレイの市民」中の僧正である。

(設立の趣意) 館は昭和四年春市外酒津で逝いた我が洋畫壇の巨匠兒島虎次郎畫伯を記念する爲に、年來の友人たる大原氏が畫伯の生涯の努力を語る作品及畫伯が生前渡歐の上斯界に寄與せんどの希望の下に心血を濺いで組織的に蒐集せる美術品を陳列公開し、畫伯の遺業として永く世に貢獻する所あらしめんとの美はしき友情から成つたものである。

(美術館の内容) 本館現在所蔵の美術品は、秦西繪畫約百三十点、兒島畫伯全作品無慮七百点の内約百七十点、埃及古美術品、埃及波斯土耳其等の古陶器、支那の古陶古泥象等約百五十点である。

埃及波斯土耳其等の古陶器に至つてはこれこそ世界にも類例の少ない國際的特蒐にして出陳点數六〇に及び、外に支那古陶三十八点古泥家十三点いづれも希有のものである。

5、倉紡圖書館

(倉紡圖書館の沿革) 倉紡圖書館は大正九年十月倉敷紡績株式會社社長大原孫三郎氏が全従業員等智識の向上の爲めに科學、社會、産業、文化等の各方面の圖書を蒐集し、併せて之を廣く一般社會に公開し以て地方一段の文化に貢献せんことを企圖したに初まる。その後この最初計畫は變更せられ、現在に於ては主として倉敷労働科學研究所及び倉敷中央病院の學術的研究事項に對して必要な書籍雜誌並びに産業及び社會關係の書籍文獻を蒐集することになつてゐる。(圖書の特別蒐集) 大原社長は大正十年歐米に派遣した労働科學研究所長陣峻義等氏其他に依頼するに、歐米に於ける文獻を蒐集すべきことを以てした。依つて陣峻氏は大正十年、十一年十二年の三ヶ年に亘つて、獨逸、伊太利、佛蘭西、英吉利、亞米利加の諸國を巡つて、この文獻蒐集の仕事に従事したのである。辻録氏波多腰正雄氏等も、主として內科學、外科學方面の文獻蒐集を擔當したのであるが、藏書の大部分は陣峻氏の歐米各地に於て蒐集せるところである。

6、倉敷天文台

(本邦唯一の民衆天文台) 倉敷天文台は本市の素封家原澄治氏が獨力で大正十五年に創立された本邦唯一の民衆天文台で、天文同好會の經營にかゝりドームはスライディング式、望遠鏡は英國製ニュートン反射型、口径十二吋半四〇倍乃至六〇〇倍のカルヅア大望遠鏡で、地下より練上げられた鐵筋コンクリートの基礎の上に据附けられ、その堂々たる偉觀は學界の一大驚異たるを失はない。我が國では京都帝國大學の十三時に次ぐ大型のものである。

(實地觀測と天文講演) 天文台は大正十五年十一月二十一日開所以來毎月第一第三の土曜日は天文講演會や觀測會が催され主事が親しく指導の任に當つて居る。昭和二年ウインネケ慧星接近の際の如きは每晚無慮一千人からの人が押寄せて來て非常な大混雜を來した。現在職員は

- | | |
|------|---------|
| 名譽臺長 | 原 澄 治 |
| 臺長 | 山 本 一 清 |
| 同 理 | 宮 原 節 |
| 主 事 | 中 野 千 里 |
| 主 事 | 水 野 千 里 |

7、若竹の園

(若竹の園の生ひ立ち) 若竹の園は大正九年倉敷紡績株式會社關係の夫人を中心とした有志婦人に依つて組織された倉敷さつき會の經營にかゝる保育所である。本市が近年産業都市として著しき發展を來すや、倉敷さつき會は大正十一年五月の總會に於て現下の社會的不幸を減じその缺陷を充たさんが爲中産階級以下の乳兒並に幼兒の保育保護の社會的事業を起すの議を決し、爾後會の幹部は會員の熱心なる協力の下に事業資金調達のために、バザーに、實業に其他種々の社會的活動をいとなんだ。此の間倉敷紡績株式會社當路者の熱心なる後援もまたこの企畫遂行に對して重要なものであつた。

かくて保育所は大正十三年五月起工、翌十四年二月竣工、故法學博士小河滋次郎氏によつて若竹の園と命名せられ、同年三月保育事業を開始するに至つた。

8、新 溪 園

(新溪園の由來) 新溪園はもと大原孫三郎氏の別邸であつたが、大正十年十二月庭園々地建物

諸調度一切に保繕準備金壹萬圓を添へて市に寄附されたもので、市は之を公園とし、建設者なる先代孝四郎氏の雅號新溪を取つて園に名づけたものである。近時倉敷市の發展に伴ひ、園の位置は恰も中樞の要地を占むるに至り、加ふるに市に於ける社會的設備は未だ不充分なるを免れざるものあり。平素社會的設備を主張せる大原氏はかゝる廣大なる邸宅園地をこゝに占有するは自己平素の主張に反すとなし、社會的の使用に供する目的を以て解放に一步を進め維持金を附し、全然市に提供されなほ引渡に先だち、園地及び附近の住宅地域を整理し、新に道路を築造し、使用上遺憾なきを期せられたのである。

(新溪園の利用) 新溪園は面積約六十七アール(二千七十七坪)園地木石雅趣に富み、たゞに遊息

(若竹の園の生ひ立ち) 若竹の園は大正九年倉敷紡績株式會社關係の夫人を中心とした有志婦人に依つて組織された倉敷さつき會の經營にかゝる保育所である。本市が近年産業都市として著しき發展を來すや、倉敷さつき會は大正十一年五月の總會に於て現下の社會的不幸を減じその缺陷を充たさんが爲中産階級以下の乳兒並に幼兒の保育保護の社會的事業を起すの議を決し、爾後會の幹部は會員の熱心なる協力の下に事業資金調達のために、バザーに、實業に其他種々の社會的活動をいとなんだ。此の間倉敷紡績株式會社當路者の熱心なる後援もまたこの企畫遂行に對して重要なものであつた。

かくて保育所は大正十三年五月起工、翌十四年二月竣工、故法學博士小河滋次郎氏によつて若竹の園と命名せられ、同年三月保育事業を開始するに至つた。

8、新 溪 園

(新溪園の由來) 新溪園はもと大原孫三郎氏の別邸であつたが、大正十年十二月庭園々地建物

諸調度一切に保繕準備金壹萬圓を添へて市に寄附されたもので、市は之を公園とし、建設者なる先代孝四郎氏の雅號新溪を取つて園に名づけたものである。近時倉敷市の發展に伴ひ、園の位置は恰も中樞の要地を占むるに至り、加ふるに市に於ける社會的設備は未だ不充分なるを免れざるものあり。平素社會的設備を主張せる大原氏はかゝる廣大なる邸宅園地を、に占有するは自己平素の主張に反すとなし、社會的の使用に供する目的を以て解放に一步を進め維持金を附し、全然市に提供されなほ引渡に先だち、園地及び附近の住宅地域を整理し、新に道路を築造し、使用上遺憾なきを期せられたのである。

(新溪園の利用) 新溪園は面積約六十七アール(二千七百坪)園地木石雅趣に富み、たゞに遊息に適するのみならず、廣き芝生は園遊會を催すに足り、亭榭數字、建物中最も大なるものを敬儉堂とし之に次ぐものに游心樓及び茶の間あり、これ等は年中公會堂として一般の使用を許し敬儉堂は目下市會議事堂にも充てられてゐる。別に管理人の居室もある。大原氏の提供せられたる諸調度中には多數の書畫をはじめ、火鉢、煙草盆、座布團等に至るまであらゆる用具をも含み、諸般の會合、市賓の接待等にも極めて便利で盛んに利用されて居る。

五、公 園

鶴形山公園 市街の中央、鶴形山頭、阿智神社の外園は即ち鶴形山公園である。東は兒島灣に望み、西北は吉備の諸名山を指点すべく、南は近く向山の翠嶽と相對し足高山また呼ば應へんとし、遠くは瀬戸内海を隔て讃豫の遠山縹渺のうちに在り、勿論全市を一眸のうちに收め風光佳絶古より文人墨客の來り遊ぶもの頗る多し。

公園施設の初めて成つたのは明治二十七年、時の町長植田年翁の盡力に依るもので、最近には主として鴨井銀三氏の篤志によつて大いに舊觀を改めた。

向山公園 市街の東南、向山の嶺、老松枝を交へ奇岩怪石其の間に点在し、閑雅幽邃、風景絶佳、北は鶴形山公園と相對し、南は樂山園に連り、西南眺望殊に開け足高山は近く田疇の間に峙ちて盆景の如く、兒島の連峯其の南をめぐり淺口郡吉備の諸山其の西に起伏し、瀬戸内海を隔て、遠く四國の峯巒を霞煙の間に望む。

本公園は曾て斯界の權威田村剛博士が本市公園豫定地踏査の際、天然の理想的山林公園として激賞措かざりしところ、面積約四百八十四アール(一萬四千六百二十七坪)大小二區に分れて瓢形をなし、中間南面の茶畑は大グラウンド建設の好適地である。

六、市 政 附 記

沿革 舊幕時代の倉敷は代官陣屋の所在地で村政は庄屋、年寄(六名を例とす)及び百姓代(三名を例とす)の三役之に當り、庄屋は官選で世襲的であり、年寄、百姓代は古くから村役人の推薦によつて官が任命したものであつたが、庄屋の專横を制するため、幕府へ上訴の結果、文政十年以後は庄屋も亦村役人の推薦となり、こゝに早くも純然たる自治制を實現した。而して普通の事務は月當番の年寄が之に當り、百姓代は相談役といつた形で役場を會所または會議所といつてゐた。維新の際代官所は一時備前藩鎮撫となり、それから倉敷縣、深津郡小田郡を経て今の岡山縣となり、庄屋は戸長となり、村は村界の錯雜地飛地を整理して有城村の一部を併せ、明治二十二年六月町村施行の際從來の區域を以て倉敷村となり明治二十四年六月町制施行、昭和二年四月倉敷町萬壽村大高村を廢しその區域を以て新に倉敷町を置き昭和三年四月市制施行全國百三都市の班に入り、昭和五年八月一日兒島郡福田大字浦田の一部をも編入した。

第十三章 津山市現勢

一、概 説

今から約三百三十年を遡る慶長八年に森忠政が美作の國主に封せられて鶴山城の殘趾に眼を着けてこれを基礎に十三ヶ年の歳月を費して一大新城を築き上げると同時に、荒涼の地を拓いて士邸や市坊を設けて城下を創建したのが乃ち今の津山市の起源で、もとの津山町、津山東町

西苦田村、二宮村、院庄村、福岡村等大體當時の城下であつたのである、和銅六年に備前の六郡を割いて美作の國を置かれて以來、司廳を苦田郷に設けて苦田の國府と稱されて居た。源賴朝が覇府を鎌倉に開いて州府を今の院庄の地に置いてからは歴代の守護職がここに居て國政を綜べたのでその繁榮は期せずして國府から此の方に移つたが森忠政が津山城を築いて城下を設くるに及んで更にまたその繁榮は津山に移つて今日に至つて居るのである。

二、沿革

森忠政は十八萬六千五百石を領し長繼、長武、長成と四代相繼いで嗣なく國除された。次いで松平宣富は准國主として十萬石を領し淺五郎、長繼、長孝、康哉、康又、齊孝、齊民、慶倫と九代相承け森松平二家共に津山城に居つて藩政を統べ廢藩置縣の後は津山縣を置き次いで北條縣と改められたるも明治九年四月に至つて岡山縣に併合され元の城下及び城下はづれば戸長役場制度を経て町村制を施行する、に及んで津山町、津山東町、林田村、東苦田村、西苦田村、二宮村、院庄村、佐良山村、福岡村の各町村に分轄され明治三十三年四月に至つて津山東町を廢して津山町に編入してもの津山町と爲り、大正十二年四月に至つて林田村に町制を施行されてもの津山東町と爲る。時たま、御即位の大典を行はせらるゝ千載一遇の秋に際したのてこれを永遠に記念せんため是等町村の合併を遂げて市制の施行を期せんとの議が熟し關係町村長、委員、各種團體、有志者等の熱誠なる努力に依つて津山町、津山東町、西苦田村、二宮村、院庄村、福岡村の六箇町村は昭和四年一月二十二日附内務省告示第十八號を以て發布され同年二月十一日を以て乃ち津山市制が實施され、之が議決機關である津山市會の第一次選舉は全年三月一日を以て執行され定員三十名を選出す。

三、位置地勢

市の中心は北緯三十五度東經百三十四度十八秒に位置し縣廳所在地である岡山市への里程は十五里姫路市へ二十里餘鳥取市へ十九里半、もとの津山町は〇、一二九方里、總面積は二、四九五方里の廣きに及んで居る。

津山川の北に沿ふて元の院庄、二宮、津山、津山東が順次西から東に延びて連接し院庄の錦橋から東町の兼田橋に至る東西の直徑は二里八町で二宮と津山の北にもとの西苦田が接し津山と津山東の南に津山川を隔て、元と福岡が連り苦田の龍ノ口から福岡の押淵に至る北南の直徑は二里二十九町三十間であるが、概して南に低く南北の兩境は山を以て劃されて居る。

四、戶口

總戶數は六千九百戸、人口三萬三千弱である。

五、交通

鐵道 津山驛より中國勝山驛を経て新見に連る省線作備鐵道が西に延び、津山驛から東津山驛を経て美作加茂驛を経て山陰に入る省線因美南線が北に通じ重要な交通運輸の機關を爲し津山から姫路に至る省線姫津鐵道また東に向けて近く敷設されんとし岡山に至る社線中國鐵道もあり、眞に四通八達京阪その他の重要都市と直接の交渉を生むに至るも遠からぬ將來である。主要道路も逐次改良せられ、又水運も昔ながらの高瀬船等により至便である。

六、名所舊蹟

鶴山公園 山下に在り津山驛より五町、森、松平二家の據つた舊城址でその高さ百五十三尺周回十六町四十八間で南から登つて櫻の馬場、松の段、梅の段ありその頂上は乃ちもこの本丸跡でその東北隅の粟積櫓址、その東南隅の鼓櫓址は大正の御代畏くも攝政宮殿下の登臨を忝うした最景勝の地で舊藩主の居間であつた備中櫓址には「鶴山城址碑」があり天主閣跡には時報の鐘樓、宮川の斷崖に臨んだ間道には安田翁の建設した「忠肝義膽碑」、鼓櫓址下には美作殉難志士の「招魂碑」、それに面した梅の段には「日蓮の銅像」、その下、松の段の東端には門弟の建てた胸井砲軒の「頌德碑」、蕉翁の句碑などがあり全山樓を以て講され花時の盛觀弘く世に喧

傳されて居る、津山川の長流に沿ふた全市を脚下に臨んで南は神南備、佐良、石山、杉山の翠巒に面し東は遠く那岐の連峯、北は近く虚空藏の靈峰に對し西は神樂尾の綠岳や西松原の翠色を望んで山景頗る良し。
津山城址 森忠政が豊前小倉の城を模して築いた城で森松平の二家十三世相繼いでこれに據り藩政を統べた所で櫓七十七、門數四十一を有し五重の天主閣があつたが明治七年に至つて悉くこれを裏ち舊蹟、櫓跡、御殿跡などには皆それらの榜柱を建て、標示されて居る、明

鐵道 津山驛より中國勝山驛を経て新見に連る省線作備鐵道が西に延び、津山驛から東津山驛を経て美作加茂驛を経て山陰に入る省線因美南線が北に通じ重要な交通運輸の機關を爲し津山から姫路に至る省線姫津鐵道また東に向けて近く敷設されんとし岡山に至る社線中國鐵道もあり、眞に四通八達京阪その他の重要都市と直接の交渉を生むに至るも遠からぬ將來である。主要道路も逐次改良せられ、又水運も昔ながらの高瀬船等により至便である。

六、名所 舊蹟

鶴山公園 山下に在り津山驛より五町、森、松平二家の據つた舊城址でその高さ百五十三尺周回十六町四十八間、南から登つて櫻の馬場、松の段、梅の段ありその頂上は乃ちもこの本丸跡でその東北隅の粟積櫓址、その東南隅の鼓櫓址は大正の御代畏くも攝政宮殿下の登臨を忝うした最景勝の地で舊藩主の居間であつた備中櫓址には「鶴山城址碑」があり天主閣跡には時報の鐘樓、宮川の斷崖に臨んだ間道には安田翁の建設した「忠肝義膽碑」、鼓櫓址下には美作殉難志士の「招魂碑」、それに面した梅の段には「日蓮の銅像」、その下、松の段の東端には門弟の建てた胸井宛軒の「頌德碑」、蕉翁の句碑などがあり全山櫻を以て滿され花時の盛觀弘く世に喧傳されて居る、津山川の長流に沿ふた全市を脚下に臨んで南は神南備、佐良、石山、杉山の翠巒に面し東は遠く那岐の連峯、北は近く虚空藏の靈峰に對し西は神樂尾の綠岳や西松原の翠色を望んで山景頗る良し。

津山城址 森忠政が豊前小倉の城を模して築いた城で森松平の二家十三世相繼いでこれに據り藩政を統べた所で樓櫓七十七、門數四十一を有し五重の天主閣があつたが明治七年に至つて悉くこれを壊ち舊門跡、櫓跡、御殿跡などには皆それらの榜柱を建て、標示されて居る、明治三十二年から津山町の管理に屬し公園設備を加へられて今日に及んで居る鶴山公園がそれである。その外衆樂園、十六夜山、愛山、國府遺跡、宮川、大橋、西松原等の名勝舊蹟が少くない。

七、市 況

かくて輓近交通機關の完備、水道、瓦斯等の供給豊富、教育機關の充實に伴ひ銀行、諸會社續々新設せられ各種産業興隆の緒につき、作州盆地の中心陰陽物資の中繼集散を總ぶる大津山の出現も夢想たらざるのである。特に習俗敦厚、勤儉力行に富む全市民の市政に對する協力向上心は燃へ、徒らに政論我説に流れず、出身先輩に名士多く其の所説卓論に基き、順を追ひ序に従ひ着々企劃と遂行とに最善を期すること都市自治上寔に稀に見るところである。

1. 關於本會之宗旨及目的
2. 關於本會之組織及職權
3. 關於本會之經費及財產
4. 關於本會之會員及名譽
5. 關於本會之附屬機構

第一章 總則
第一條 本會定名為「中華民國教育學會」。
第二條 本會之宗旨在研究教育學術，改進教育行政，促進教育事業之發展。
第三條 本會之組織及職權，依本會章程之規定。
第四條 本會之經費及財產，依本會章程之規定。
第五條 本會之會員及名譽，依本會章程之規定。

第二章 組織及職權
第六條 本會設理事會，為本會之最高權力機關。
第七條 理事會由理事若干人組成，由會員大會選舉之。
第八條 理事會設主席一人，副主席若干人，由理事會互選之。
第九條 理事會設秘書長一人，秘書若干人，由理事會聘任之。
第十條 理事會得設各級各類教育委員會，以研究教育學術，改進教育行政。

第三章 經費及財產
第十一條 本會之經費來源如下：
一、會員會費
二、社會捐助
三、政府補助
四、其他收入
第十二條 本會之財產，由理事會管理，並受會員大會之監督。
第十三條 本會之財產，除用於本會之宗旨外，不得挪作他用。

第四章 會員及名譽
第十四條 凡具有中華民國國籍，且對教育事業有貢獻者，均可申請加入本會。
第十五條 本會會員分為正式會員、名譽會員、贊助會員三種。
第十六條 正式會員之權利如下：
一、選舉權
二、罷免權
三、複選權
四、創制權
五、複決權
第十七條 名譽會員之權利如下：
一、出席會員大會
二、發言權
第十八條 贊助會員之權利如下：
一、出席會員大會
二、發言權

第五章 附屬機構
第十九條 本會得設各級各類教育委員會，以研究教育學術，改進教育行政。
第二十條 本會得設各級各類教育研究中心，以研究教育學術，改進教育行政。
第二十一條 本會得設各級各類教育實驗學校，以研究教育學術，改進教育行政。

第六章 附則
第二十二條 本會章程之修改，由理事會提出，經會員大會通過。
第二十三條 本會章程之解釋，由理事會負責。
第二十四條 本會章程之施行日期，由理事會決定。

人物編(縣人名鑑)

人海壽(壽人名鑑)

縣人名鑑

廣島縣商業學校長

赤

木

雅

二

廣島縣皆實町五ノ割

(順序目次参照)

紙會社製品關西一手販賣を引受け、益々業務の發展を圖る、此の間商業會議所議員、岡山紙卸賣商組合長等の要職に就任し、斯業の發展に貢獻する所甚大。家庭圓滿にして三夫婦揃ひ世の羨望の的たり。

縣人名鑑

(順序目次参照)

廣島縣商業學校長
赤木雅二

廣島縣皆實町五ノ割



君は明治廿一年十月を以て岡山市岩田町に生る、明治三十七年三月岡山縣立商業學校を卒業し、岡山市立商業學校に職を奉じ此の間に簿記科、商業科の中等教員檢定試験に合格し、明治四十一年母校の縣立商業學校教諭に任ぜらる、同年一年志願として野砲廿三聯隊に入隊、少尉に任官、更に大正七年中尉に陞む、大正九年奏任教諭となり、越へて大正十五年三月商縣立岡商業學校長に任ぜられ、勤績六箇年の後昭和六年三月廣島縣廣島商業學校長として轉任し今日に至る。
其著に「經財界觀察要義」「商店經營及廣告術」—東京、大阪實文館—あり、皆世に行はる。浩堂と號し漢詩を能くす。

淺野 關次郎 岡山市中之町



君は慶應二年小田郡神島村に生れ、六才にして玉島在住の叔父淺野家を相續して現姓を冒かす。
君早くより岡山市に到りて紙商に入る爾來斯業の見習をなす事四箇年、十九才の時獨立して中之町に紙店を開き、拮据勵精漸次規模の擴張を圖り、今や同市一流の卸小賣商として販路縣下は勿論兵庫、廣島、島根、香川の各縣に亘る、殊に明治四十二年頃より岡山製

紙會社製品關西一手販賣を引受け、益々業務の發展を圖る、此の間商業會議所議員、岡山市紙卸賣商組合長等の要職に就任し、斯業の發展に貢獻する所甚大。家庭圓滿にして三夫婦揃ひ世の羨望の的たり。

岡山博愛會々長
アリス・ペター・アダムス

岡山市門田屋敷九五

女史は一八六六年北米合衆國ニューハンブシヤ洲ジャフレに生れ、ブレッツジウオーターハイヤー、ノーマル、スクールを卒業し、明治廿四年芳紀二十四にして單身來朝岡山に在住す。當時陋巷に饑色ある窮民を見女史は憫隱の情を禁ずる能はず、其年十二月官許を得て小規模の日曜學校を設立せり。爾後女史が博愛の熱血は余念なく注がれ既にして卅九年



には尋常小學校を設立し越へて三十五年裁縫學校を設立して

女兒の爲に連針の術を授く同三十八年第三計畫たる博愛病院を設立し第四計畫たる基督教講義所を設立し教義を講述して普く基督教化に依り人類救濟事業に進出し稱して博愛會と謂ふ。

其業績を檢するに小學校にて入學兒童總數一千人を越へ卒業生中已に幾多官界、實業界等に活動せる人材尠からず現在日曜學校生徒百五十人教師十人を以て之に當り、裁縫學校は生徒四十九人、教師一人其出身中に淑女又多し。

博愛病院に收容されて施療されしもの亦多數に上り、現在患者數男女百三十名ありて所屬醫師四人、藥劑師一人看護婦二人を以て之に充つ、女史は博愛會長たる現職の外岡山縣聯合婦人會、基督教婦人矯風會等其他多數の要職にあり。

女史の功勞天聽に達し藍綬褒章を下賜され又御紋章入銀盃及金品を下賜され、御紋章入置時計を賜り併せて社會事業功勞者として終身年金を賜る等の光榮と恩遇に浴せらる。

有本立



君は明治六年津山市元魚町に生れ夙に關西藥學校に學び、廿二年藥劑師試験に及第し實務に従事す。三十三年選ばれて苦田郡會議員となり、郡政に干與して効あり、任期満了の後四十五年美作製紙株式會社常務取締役となり、次で大正五年備作電氣株式會社取締役就任、在任七年、是より先大正八年推されて津山商工會議所會頭となる。時恰も財會は異常の活氣を見せ企業熱勃興の機に際せり。君此間に處して大いに飛躍貢獻する所あり。大正十二年水取締役に就任同十五年同社の備作電氣との合併にて中國合同電氣となるに及び再び取締役となる、現に美作製紙は就職の當時より二十二年間現職を兼任し、中國電監査役、中國信託株式會社取締役津山市産業計畫實行會副會長、津山商工會議所副會頭等の重職にあり地方實業界の重鎮たり。一面大正十五年岡山縣藥劑師會々長に擧げられ現在に至る。

安東佐七 勝田郡勝田村真加郡

安東家は地方屈指の素封家君は津中卒業後東都に遊學し、學成り歸郷して家を繼ぐ時偶々村長の缺員あるや推されて承諾今日に及ぶ。新進氣鋭、大なる抱負を以て熱誠事に當り着々として其の業績顯はる。前途益々囑望せらる。地方に父祖以來の勢力あり、君亦政治に手腕を有し必ずや縣下政界に乗出すの時機あるべし。

赤松麟作

現住所 大阪市天王寺區勝山通二丁目 君は明治十一年津山市に生れ、五才にして郷里を出で十六才の時初めて在阪洋畫家山内愚仙の門に學べり。其後畫囊を携へて上京、明治三十二年東京美術學校西洋畫專科を出で

三重縣第一中學校教諭に奉職在任三年にして、和歌山縣新宮中學に轉じ、三十八年退職して大阪朝日新聞社に入社、繪畫部記者として彩管を振ふ事十三年なりき。大朝を退くや君は師弟教育の爲北梅田町に經營中なりし赤松洋畫研究所を更に擴張し昭和五年三月より之を大阪市心齋橋通丹平ハウス商會内に移轉し多くの門弟と斯道研究者を指導する傍ら大阪市立工藝學校囑託教授たり。人物畫は他の追隨を許さず、君の作甚だ多く、就中明治三十四年白馬會に出品せる(汽車)(おきな)(迷子)文展第二回出品の(夕飯)等は有名なり。更に近くは帝展に出品の(尾崎行雄氏肖像)(裸婦)等は何れも君の得意とせるもの殊に裸婦は當時萬都の人氣と好評を博し傑作の名高し。君更に子女にも恵まれ次男進君を輔けて畫道に精進せり。

有岡幹三郎

君は明治十二年苦田郡西加茂村に生れ、居村小學校を卒業後進んで中等教育を経て群馬縣に至り、警察界に身を投じ警部となる。然るに君の向學心勃勃として止み難く之を辭職し、明治大學に入り法學を修め優良なる成績を以て卒業。明治四十四年辯護士試験に合格同四十五年岡山市西中山下に辯護士を開業現在に至る。大正十四年市會議員總選舉に際し押されて當選參事會員となる。見識抱負力量共に拔群市政に盡して功尠からず。劍道に達しかたわら小學校に斯道を教授し武德會助教授をも兼ねたり。

明石照夫

現住所 東京市小石川區茗荷谷町六六 君は明治十四年岡山縣和氣郡英保村に生れ明治三十九年東大法科政治科を卒業し直に三菱合資會社に入り第一銀行支店支店支配人、同京都支店支配人となり又伏見支店支配人を兼ね、後本店副支配人に進み現に同行常務取締役兼支配人たり。傍ら澁澤同族、澁澤倉庫株式會社等の重役なり。尙愛子夫人は明治二十三年澁澤榮一子の長女として生れ高京女高師附屬女學校出身なり。夫人との間に七男二女あり。

阿部克太郎

大阪府下箕面公園内 君は現在大阪市港區安治川一ノ五なる攝陽

を應用して成り東洋一の稱あり。名優を有し直設常設館も多く名映畫續出の状態なり。尙君は黒住教に歸依し社會奉仕の念に強し。

辯護士 黒二芳

汽船株式會社社長にして大大阪商船系人物中の大久保彦左衛門と稱され、只に大阪商船會社の大功勞者たるのみならず、本邦海運界の耆宿浪華財界一方の重鎮として今尙元氣櫻鑠たり。君は安政五年岡山縣兒島郡郷内村の出身。明治十年岡山師範を卒へ教鞭に親しむこと三年の後青雲をのぞんで教育界を去り最初

腹を有し必ずや陛下政界に飛出すの時機あるべし。

赤松麟作

現住所 大阪市天王寺區勝山通二丁目
君は明治十一年津山市に生れ、五才にして郷里を出で十六才の時初めて在阪洋畫家山内愚仙の門に學べり。其後畫囊を携へて上京、明治三十二年東京美術學校西洋畫專科を出で

役兼支配人たり。傍ら畫局を設け、式會社等の重役なり。尙愛子夫人は明治二十三年瀧澤榮一子の長女として生れ高京女高師附屬女學校出身なり。夫人との間に七男二女あり。

阿部克太郎

大阪府下箕面公園内
君は現在大阪市港區安治川一ノ五なる攝陽

汽船株式會社社長にして大阪商船系人物中の大久保彦左衛門と稱され、只に大阪商船會社の大功勞者たるのみならず、本邦海運界の耆宿浪華財界一方の重鎮として今尙元氣櫻鑠たり。君は安政五年岡山縣兒島郡郷内村の出身。明治十年岡山師範を卒へ教鞭に親しむこと三年の後青雲をのぞんで教育界を去り最初は所有の小蒸氣船を以て海運業に入る。

明治十七年大阪商船の成立に際し之に參與して大いに畫策遂に成立と共に株主たると同時に全社社員として勤務し岡山、多度津、下關各支店次席に歴任後本社に歸つて運輸、貨物の兩課長となり、明治卅一年臺灣安平支店長兼淡水支店長に重用さる、次いで明治卅七年八年戰役には軍事に盡して功あり三十九年大阪支店長に榮轉重役に推され、大正三年同社の創業三十年記念式に至る迄勤続三十余年に及ぶ。しかも創業以來一貫その經營に當り刻苦勉勵不撓不屈遂に同社の今日あるを得たる直接最大の功勞者たり。君記念式を機として引退一旦閑地につくや中橋徳五郎氏の懇請により同社の姉妹會社たりし攝陽商船の社長として與へられ現在に至る。園基を唯一の趣味とせり。

青山保太郎

現住所 兵庫縣武庫郡精道村芦屋古新田



岡山縣勝田郡飯岡村飯岡種三郎氏長男として元治元年生れ、明治三十五年大阪大坂市役所に奉職在勤二年大阪巡航株式會社に入社、大正九年我國映畫事業勃興に伴ひ帝國キネマ演藝株式會社の創立に會し取締役として入社、直ちに常務取締役に昇任して今日に及ぶ。同社は大正九年資本金五百萬圓白井松次郎氏を社長に山川吉太郎氏を専務として創立されたる本邦に於ける松竹、日活と相並稱さる、三大映畫會社の一にして元の山川演藝商行の營業權を繼承し本社を大阪市南區塩町におき永瀬撮影所を大阪府下中河内郡布施町に設け就中全スタヂオは昭和三年歐米各國施設の粹

を應用して成り東洋一の稱あり。名優を有し直設常設館も多く名映畫輸出の狀なり。尙君は黒住教に歸依し社會奉仕の念に強し。

辯護士 黒三芳

現住所 大阪市東區小橋西之町一



君は明治三十六年久米郡龍川村大字全間に生る、故陸軍輜重兵特務曹長在黒三節右工門氏は實に君が岳父にして日露戰爭に參加して功あり後その早世に會す。當時君は僅か八才にして加之四才、二才の弟妹あり。母堂また二十八才なりき。母堂毅然として世俗の醜を排し亡夫の遺兒を抱きて家計を守り君等を養育す。君つとに將來辯護士たらんと志し其の方法として先づ大正十年岡山縣笠岡商業學校に入り第二學年修了と共に退學逸早く上阪、大阪南區役所に奉職僅少の給料と僅少の余暇を以て關西大學專門部法律科に入學、日夜螢雪の功を積み大正十二年に學中辯護士試験に及第。時齡僅かに二十才。

氏は更に大阪市役所監査課に奉職して關西大學を大正十三年卒業。大正十四年偶々一松定吉氏の辯護士開業に際し招かれて全事務所に入り一松氏を輔けて懐刀として今日に及べり。蚊龍永く池中にあらず君の將來や大いに注目すべきものあり。夫人は上房郡高梁町山岡家の愛嬢にして尙辯護士高木益郎氏は夫人の姉婿に當れり。

阿部良平



氏は明治七年岡山縣勝田郡湯郷村に生れ、

刻苦精勵の人。學校教育としては郷里小學校を終へたるのみ獨學以て小學校本科正教員免許状を得、尙引續き博物學研究に没頭し遂に明治三十五年中等教員免許状を獲得し鳥取縣米子中學、島根縣大社中學教諭を経て大正三年四月現在の姫路中學校に轉じ現在教頭たり。氏は一中學校博物學教師のみならず博物に對しては造詣深く斯界の權威者なり。現に兵庫博物學界の會長たり。尙氏は從六位勳六等にして夫人は岡山縣勝田郡湯郷村阿部家に生る。長男は廣島高師理化學卒業二十六才にして天折次男は東大卒業、新興藝術派に屬する文士にして日本大學の講師を勤む。

逢澤 一次 岡山市内山下一八

君は岡山縣赤磐郡西山村に明治廿四年孤々の聲をあげ幼にして洋服裁縫の將來あるを洞察し、之れが修業を神戸に積み専心技術の修練に力む。明治四十四年歩兵第十七師團に入營、氏の卓越せる技術は直ちに其筋の認むる處となり縫工長に任命され、抜群にて大正二年滿期除隊となる。

現在の位置に逢澤洋服店なる大店舗を構へ夫人を兒島郡甲浦村大井家より迎へて平和なる家庭を作り、協力斯業に勵み今や岡山市中に於て屈指の洋服商となる。

君は現に岡山縣洋服商組合聯合會長、岡山市洋服組合長の重職にあり、岡山商工會議所議員常議員として財部に屬す。氏の營業の將來氏の前途益々大なりといふべきなり。

阿部 三郎 岡山市下西川町

舊岡山藩の右源次氏の三男として明治十七年岡山市二番町に生れ、岡山中學卒業後直ちに熊本醫專に入學明治三十四年卒業せり。

たまく、日露の役に遇ふや一年志願兵として入營中の君は出征三等軍醫として正八位に叙せらる。大正元年熊本病院に勤務大正三年歸郷宇野に開業せり。全六年にいたつて岡山市の現所に引移し小兒専門醫として大いに名聲あり。その他關係事業とし深抵小學校他八校の學校醫たりしことあり。

大正十年岡山縣學校衛生主事兼縣立學校醫となる。青年團顧問獎學會監事等々。人格高潔、親切熟練のまれに見る醫師なり。

明治二十七年生
安 藤 眞 一
本籍 岡山縣赤磐郡佐伯本村
現住所 神戸市楠三丁目

大正二年關西中學を首席にて卒業大正九年日本大學研究科に入學、業成りて大正十一年辯護士試験に合格。刻苦勉勵、功なつて現位置に開業するや依頼者殺到す。昭和四年選ばれて神戸市市會議員となり大神戶市の樞機に關與するに至れり。

君は多年民政黨に屬し黨の爲盡瘁し、兵庫支部に於て今や第一線の闘士として自他共に許す處なり。夫人は淺口郡の人二兒あり。

岡山市醫師會々長

赤澤 乾 一

君は明治六年岡山市東中山下に生る。明治二十八年三高醫學部を優秀なる成績を以て卒業、直ちに岡山縣病院内科に勤務し専念精勵し大いに手腕を發揮せしも明治三十五年十一月之を辭し翌月自ら開業し今日に至る。今や市内に於ける刀圭界の權威者として重きをなす。

君性は淡白快活人に交りて深情、市民は常に君を崇敬し岡山市醫師會長、岡山市醫師會産婆看護婦養成所長、岡山縣濟世顧問等に重用せられ人格手腕共に認めらるゝ處である。尙君は神道を深く信仰せり。嗣子琢三君は京大出身醫學博士滿洲醫大小兒科助教授にして目下獨逸にあり。

赤堀 龜 雄

本籍 勝田郡勝間田町
現住所 岡山市二番町

明治十二年苦田郡大野村池上家に生れ閑谷中業卒業明治三十七年中央大學英法科卒業後直ちに判檢事登用試験に合格、大阪地方裁判所司法官主補となる。三十九年第二回判檢事試験に合格、大阪地方裁判所判事として就任、後廣島地方裁判所を経て名古屋地方裁判所並に同控訴院判事となり、再び廣島地方裁判所判事となり、鳥取地方裁判所判事部長となり大正二年岡山に赴任岡山區裁判所監督判事、同地方裁判所判事並に大正十三年の小作調停法實施に當り我岡山の小作調停主任を命ぜらる、昭和五年より辯護士開業今日に至る。



製菓店主 安藤 榮 衛 岡山市上之町

明治二十八年久米郡大井西村に生れ、神戸市榮太樓本店に於て七ヶ年間製菓見習に勉め其の技術に於て自信を得、大正三年榮太樓支店として上之町に開業す。きんつば羊羹等は

て入營中の君は出征三等軍醫として正八位に叙せらる。大正元年熊本病院に勤務大正三年歸郷宇野に開業せり。全六年にいたつて岡山市の現所に引移し小兒専門醫として大いに名聲あり。その他關係事業とし深抵小學校他八校の學校醫たりしことあり。
大正十年岡山縣學校衛生主事兼縣立學校醫となる。青年團顧問獎學會監事等々。人格高潔、親切熟練のまれに見る醫師なり。

秋 守 涉



君は明治十年上道郡浮田村北方長汐辨二氏次男に生れ金岡村秋守家を繼ぐ。

明治三十二年岡山師範學校卒業、各小學校訓導校長を経て郡視學に昇進大正十一年片上高等女學校長に補せられ昭和三年退職數月にして片上町長に當選現在に至る。頭腦明敏、果斷、多年公益事業に盡瘁せる故を以て從六位勳六等に敍せらる。家庭に夫人、二男三女ありて圓滿なり。

赤 堀 淳 太 郎 津山市山下

津山城址の麓、綠なす松を背影として宏壯なる建物を見るこれ即ち君が經營にかゝる赤堀病院なり。婦人科を専門として開業す。君人となり濃厚にして信義厚く清廉潔白、加ふるに至誠懇篤なる情は人をして胎蕩春風に浴せしむの感あり。深遠なる學識と多年の經驗とは相俟つて刀圭界に名聲隆々として衆望厚し。本病院の建築は最も衛生に重きを置き設計せられたるものにして津山市私立病院中匹儔するもの少なし。

秋 山 武 平 兒島郡藤戸町



君は明治二十九年兒島郡藤戸町に生る。岡山縣天城中學に學び、大正九年早大入學大學部政治經濟科卒業、後第一

合同銀行に勤務し同十五年より天城板紙合資會社に轉じ今日に至る。君は現在藤戸町會議員として全町の向上發展に努力し公職の外に疊表花筵業に關與して明敏なる頭腦と豊富なる常識を以て實業界に活躍す。尙黒住教信者にして音樂を愛好す。

ち判事登用試験に合格、大阪地方裁判所司法官主補となる。三十九年第二回判事試験に合格、大阪地方裁判所判事として就任、後廣島地方裁判所を経て名古屋地方裁判所並に同控訴院判事となり、再び廣島地方裁判所判事となり、鳥取地方裁判所判事部長となり大正二年岡山に赴任岡山區裁判所監督判事、同地方裁判所判事並に大正十三年の小作調停法實施に當り我岡山の小作調停主任を命ぜらる、昭和五年より辯護士開業今日に至る。

製菓店主

安 藤 榮 衛 岡山市上之町

明治二十八年久米郡大井西村に生れ、神戸市榮太樓本店に於て七ヶ年間製菓見習に勉め其の技術に於て自信を得、大正三年榮太樓支店として上之町に開業す。きんつば羊羹等は其の代表的製菓なり、各博覽會共進會に於て常に賞牌を得顧客亦多し。今回の行幸に際し御紋菓調製の榮を受け又天覽献上の光榮をも併有す。

荒 木 要 津山市椿高下

周匝の豪農荒木家の現主なり、性淡泊にして頭腦明晰、思慮又緻密をして事を處する熱誠大を望まず多きを期せず、只孜孜其の局に當りて之れを遂ぐるを以て足る。されば君の經營する事業何れも皆堅實なる發達を遂げ其業績見るべきもの多し。
今や大株主の故を以て山陽中央水電株式會社津山營業所主任の傍ら二三自動車會社を興し社長としてこれが經營の衝に當る。君の頭腦と財力とは必ず作州の天地に一大事業家として嶄然頭角を顯はすこと近きにあるべく、津山市に於ける新進實業家として衆人の嚮望するところなり。

味野尋常高等小學校長 淺野辰之進 兒島郡味野町



君は吉備郡二万村の人明治十八年生。明治三十九年岡師卒業後吉備郡黃薇小學校、岡山女師、淺口郡玉島小學校の訓導に歴任、又勝田郡、和氣郡の視學として大いに奮勵しその手腕を認められ、兒島郡味野小學校長、味野公民學校訓導兼校長、味野幼稚園長味野青、年訓練所主事に就任現在に及ぶ。此の外兒島郡教育會長、兒島郡學校長會理事等の重任に有り。昭和六年青年教育功勞として者文部大臣より表彰され、勳八等に敍せられ瑞寶章を

賜へり。眞言宗を信じ詩書、畫、謠曲等に趣味あり。

淺沼彦一郎 廣島縣幡町官舎



君は明治八年淺口郡玉島町大字柏原に生れ明治二十九年東京法學院を卒業され明治三十一年判檢事登用試験に合格全三十三年大阪地方裁判所判事に次で福岡區裁判所監督判事に長崎控訴院部長、大審院判事を經て仙臺地方裁判所長に任せられ現に廣島地方裁判所々長正四位勳三等高等官一等なり。讀書園基に興味を持つ、家には母堂、夫人、三井銀行員なる三男信夫氏同夫人と二女あり。

辯護士 法學士

足立進三郎 大阪市北區眞砂町

君は本邦刑事専門辯護士界の最高權威者にして浪華法曹界に於て四方田保氏と共に双壁を以て稱せらるゝ人。明治七年岡山縣高粱藩足立克讓氏の三男として生誕東大法科を明治卅五年卒、直ちに大阪に辯護士を開業今日に及ぶ。一意職務に忠實なるを以て本分となし刑事被告の辨護に當り文字通りの罪を憎むも人を憎まず、常に高所より其の人と罪とを觀測判斷未だ嘗て秋毫も誤らず、死刑囚にして尙且つ君を慕ふ事親の如きものあり以て其の人となりを窺ふに足る。而も心境酒々磊々人生即ち努力なりといふ人生哲學の信念を有し風格亦哲人たり。不幸家庭に令嗣なきも自己一生の存在又不可思議なりとして意に介せずと稱せらる。

有元郷治郎

明治十三年生 英田郡大原町古町

有元家は作東の名門家にして嘗て小松宮、伏見宮各宮殿下の御宿所の光榮に浴せり。

當主は十七代目代々酒造業なり。高松農學校第一回卒業生、資性剛毅實兄の後を繼いで郵便局長に就任、先代の創立にかゝる古町銀行をして山陽銀行との合併を完成せしめ、吉野川水力電氣株式會社を創立し後中國水力電氣株式會社との合併に成功したり。此の外大原報徳社長、縣協和會評議員、中央森林會議員、縣山林會支部長縣農會代議員其の他多數の要職に在り、名實共に地方に於ける人材として囑望の的となれり。

秋山 陟

明治四年生 邑久郡豊村

前半生を初等教育事業に捧げ、退いて尙は公務に盡瘁し社會に貢獻する處大なり。明治廿六年拔群の成績を以て岡山師範學校を卒へ、將來縣下教育界の重鎮たるべく自他共に許す程の人材なり。大正五年郡民の期待を負ひて縣會議員に當選、同年豊村々長に推され教育的手腕は轉じて行政上に移り尙光彩を益し、教育政策、道路改修に絶大の功績を残せり。尙村長の外農會長、岡山練乳株式會社專務取締役、備前燒株式會社々長の職に在り、園基を好み、書畫の風流の道にも通ず。

青木 勘

香川縣高松中學校長 香川縣高松市三番町二七



君は明治十二年津山市に生れ、津中、六高を經て、明治三十九年東大文學部哲學科卒業、次いで大阪府岸和田中學校、岡山縣津山中學校、矢掛中學校教諭、佐賀縣立佐賀中學校長を經て昭和三年香川縣高松中學校長に就任し現在に及ぶ。

君性來作州健兒の名に背かず不撓不屈の精神をもち加ふるに思索的頭腦をもつて、海港高松の青年訓育に當らる。適材適所たりとはこの事なり。遮莫、野球校として有名なる高

松中學校を今日あらしめ其の名を誦はしむるに至れるは君の苦心大いにあるものゝ如し、尙香川縣教育會理事香川縣教育振興會理事として活躍され、本縣人の爲大いに氣を吐かる、家庭には夫人三女あり。趣味は庭球、園基等なり。

安黒 一枝

明治十二年生 津山市田町八六

想的劍士たり、門人多く家庭には夫人戀女史との間に二男一女あり、實に圓滿なり。

人生即ち努力なりといふ人生哲學の信念を有し風格亦哲人たり。不幸家庭に令嗣なきも自己一生の存在又不可思議なりとして意に介せずと稱せらる。

有元郷治郎

明治十三年生
英田郡大原町古町

有元家は作東の名門家にして嘗て小松宮、伏見宮各宮殿下の御宿所の光榮に浴せり。

君は明治十二年津山市に生れ、津中、六高を経て、明治三十九年東大文學部哲學科卒業、次いで大阪府岸和田中學校、岡山縣津山中學校、矢掛中學校教諭、佐賀縣立佐賀中學校長を経て昭和三年香川縣高松中學校長に就任し現在に及ぶ。
君性來作州健兒の名に背かず不撓不屈の精神をもち加ふるに思索的頭腦をもつて、海港高松の青年訓育に當らる。適材適所たりとはこの事なり。遮莫、野球校として有名なる高

松中學校を今日あらしめ其の名を誦はしむるに至れるは君の苦心大いにあるもの、如し、尙香川縣教育會理事香川縣教育振興會理事として活躍され、本縣人の爲大いに氣を吐かる、家庭には夫人三女あり。趣味は庭球、圍碁等なり。

安黒一枝

明治十二年生
津山市田町八六

君は作州地方の財力家として名望高く早くより銀行界に入り妹尾銀行にて妹尾順平氏を助け津山中央銀行を創立し重役として活躍を續け、作備銀行に合併し山陽銀行創立に際し之と合併し愈々作州財界の重鎮となる、更に中國銀行との合併には時代の趨向に鑑み頭取土居通博氏に進言し、合併成立と共に引退し今は一般民衆のためモリスプランに依る日榮會を興し會長の職にあり、君は人格圓滿、尙クリスチャンなり、津山市における財界の重鎮たりしが時利あらず今は一切の事業關係を絶ち世俗を外に時機到來を待ちつゝあるも崇高なる人格は世人の同情を集め、敬仰のまことなる。同君の捲土重來の日は決して遠からずと信す。

小間物商 秋田房次郎

津山市伏見町二六
明治九年生



君は津山市最古の老舗よとながやの主人にして最も時代の尖端を歩む袋物、化粧品、小間物の卸小賣を業とせり。君の家は代々堅實なる營業を以て聞え人氣を博しをれり。君は君独自の人生觀に立脚し虚名を追はず屢々名譽職に推されんとしたるも固辭して受けず、爲に益々その人徳を稱へらる。

阿部良 太

京都市西ノ京中合町

君は牛乳搾取販賣業を營み廣大なる牧場に數百の牛を飼育し、精製工場の設備完全なること京都市中其類を見ず、多數同業者中の第一人者たり。
牛乳搾取販賣業者の有名なるものに大阪市に岡崎趙七氏京都には君あるなり。西日本に於ける斯業界の二大人物は共に我が岡山縣出身とは偶然とは謂はるゝもの、縣民として大いに誇りとする處なり。

大日本武徳會教士 阿部實成

岡山市廣瀬町一四八

君は明治五年岡山市二番町に生れ、幼少の頃より家傳池田侯爵家指南眞心影流劍道を修め、長ずるや岡山縣立尋常中學校に學ぶ、明治廿六年宮内省に奉職し、二十七年子爵渡部昇氏の門人となり神道無念流劍術を兼修して奥儀を極め徽神重幹事となれり、後岡山に歸り關西中學教師を経て明治三十六年より岡山師範學校武術教師、同四十四年岡山縣武徳會支部教授となり、共に現在に至るまで勤績しつゝあり、昭和六年には大日本武徳會教士號を授與せられた、氏は豪膽にして大敵と見て恐れず、小敵と見て侮らず大膽且細心誠に理

岡山取引所理事 青山次郎

岡山市上西川町

君は兒島郡宇野町青井龜一郎氏の次男明治廿八年生る。同家は地方屈指の資産家にして村政を司れる舊家なり。代々製鹽業を營み遠く北海道に所有せる船舶を航せしめ、或は大坂市に支店を設け、當時は味野町の野崎家と並び稱せらる、君は二十才の頃一大打撃を受け、明治卅一年岡山取引所に仲買人として入り、爾來奮闘し、通敏の才は能く商機を捉み遠觀の眼力常に人の意表に出で隆然巨利を博し、一方の雄將として謳はるゝに至る。
大正七年斯業を廢し、岡山取引所理事として

更に活躍を續け信任厚し。宇野港土地株式會社取締役を始め關係事業亦多し。

芦田熊太郎

津山市新魚町

津山市の山間都市にありて生魚の供給に恵まれざるを遺憾とし、中國鐵道の開通を機會とし從來の無秩序なる生魚の販賣を統一して津山生魚株式會社の創立に盡力し入江氏に代りて現に取締役社長たり、美作一圓の供給は素より遠く山を越へて山陰方面に及ぶ。津山商工會議所議員として見識あり、議員中に重きを成す。温厚にして寡言實行力に富む紳士なり。

秋山寛造

都窪郡妹尾町

君は明治四十五年岡山縣師範學校本科第二部の卒業天資温厚誠實、人の接して極めて親切に且つ謙遜兒童に對して愛情深く、其徳自ら幼者に父母たるの資格あり、爲めに父兄の尊信厚く兒童の敬慕深し。現に妹尾尋常高等小學校長として孜々として勤めて倦まず着々として其の業績を擧げつゝあり。

秋田喜八郎

岡山市濱田町

君は元岡山市會議員秋田岩吉氏の長男岡山縣立工業學校土木科出身にして岡山市役所土木課に奉職數年の後辭して實業界に入り、父の營業土木建築請負業に従事父を助けたることあるも再び勤めて現に都市計畫課技師たり。快活にして豪腹、決して細事に拘泥せず悠暢たるどころ俸給生活者として殊に技術家として稀に見る人物なり。

青木雪峰

津山市戸川町

君は津山女子尋常高等小學校訓導として育英の任にある傍ら多年研究實驗、君獨特の靈氣療法を体験案出す。之れを幾多の病人に施して功あり。日々來りて其の施療を乞ふもの門前に市をなし、座に溢る、今日に於ては傳へて遠く縣外より態々來るもの尠からずと云ふ、其の權威の程知るべきなり。

青山長

津山市小田中

家は代々弓術を以て津山藩に仕へたる名門なり。夫人は其の嫡女にして曩に一度良人を迎へたるも其の夭折に遇ひ爾來未亡人として家を繼ぐ。幼より弓道を究め技長じ其の奧義皆傳を繼承し、門前の道場に在りて幾多の門弟を教導す。其の思想、言行實に現代稀に見る女丈夫たり。

有木麟次郎

津山市南新座

頭腦明晰遠謀深慮の人にして永らく町會議員、市會議員たり。津山市町の自治に關與し、其の貢獻せる處甚大なり。即ち近くは水道布設に關し此を主唱し又市長を助けて之が促進に勉めたり。現に市會副議長として重きを成す。

青木鐵太郎

東京貯藏銀行監査役

東都金融界に於ての雄飛を期待せらるゝ人に青木鐵太郎氏あり、資本主義經濟時代を過ぎた今日如何に金融界の動向が進展するかを闡明するは學者たる者又難しとする處然るに氏の今日の出處一動は斯界の注目する處となつた、そは氏が多年金融の研鑽が深遠に涉つてゐた爲めである。東京帝國大學法科を卒へて東京貯藏株式會社監査役外二三會社の重役として前途洋々たるものがある。

衆議院議員

青木雷三郎

幼にして聰明神童の譽れ高く尾藤饒作氏の弟と生れたる氏は遂に青木氏の掬育する處となりて青木姓を冒す。中央大學出身にして司法官試験に合格し辯護士となる。大正四年家督を相續し實業界に身を投じ山陽鐵道株式會社監査役を初め日本製菓、岡崎穀物、仲組神惠炭礦の各取締役となり若冠にして昭和二年兵庫縣第三區に於て優位にて代議士に當選す、回を重ねる事已に二回政界の淨化立憲政治の確立に重要な使命を有する人と云ふべきである。

就將小學校長

秋山一治

氏は明治三十二年兒島郡藤戸町天城に生れ、大正八年三月岡山師範學校第一部を卒業し、全年四月より兒島郡味野校に奉職し、全年四月より三月まで岡山縣師範學校



青木雪峰

津山市戸川町
君は津山女子尋常高等小學校訓導として青英の任にある傍ら多年研究實驗、君獨特の靈氣療法を體驗案出す。之れを幾多の病人に施して功あり。日々來りて其の施療を乞ふもの門前に市をなし、座に溢る、今日に於ては傳へて遠く縣外より態々來るもの渺からずと云ふ、其の權威の程知るべきなり。

幼にして聰明神童の譽れ高く尾藤饒作氏の弟と生れたる氏は遂に青木氏の樹育する處となりて青木姓を冒す。中央大學出身にして司法官試験に合格し辯護士となる。大正四年家督を相續し實業界に身を投じ山陽鐵道株式會社監査役を初め日本製菓、岡崎製粉、仲組神惠炭礦の各取締役となり若冠にして昭和二年兵庫縣第三區に於て後位にて代議士に當選す、回を重ねる事已に二回政界の淨化立憲政治の確立に重要な使命を有する人と云ふべきである。

就將小學校長

秋山一治

氏は明治三十二年兒島郡藤戸町天城に生れ、大正八年三月岡山師範學校第一部を卒業し、同年四月より兒島郡味野校に奉職し、全三年四月より十四年三月まで岡山縣師範學校研究科に業を卒へ、再び味野校に歸任し、一回の轉任もなくして、九年三月邑久郡就將小學校長に轉勤さる。



御津郡伊吹校長

秋山靖

氏は邑久郡豊村の人明治三十二年の生れにして大正八年三月岡山縣師範學校を卒業し、同年四月より有隣高等小學校に勤務、大正十一年八月より昭和九年三月まで十三ヶ年間全校に勤務し、熱心教壇にその職を全ふし關係者より崇敬されつゝありしが、九年三月御津郡伊吹小學校長に轉勤せらる。

青山達天

明治十年十月十五日生
本籍 岡山縣赤磐郡
現住 岡山市東中島町

幼にして東部に遊學、北海道廳に奉職せることありしも後歸來岡山縣巡查を拜命續いて巡查部長に昇進し縣警察部勝山英田の各署に勤務名望あり、明治三十八年驪然としてさる所ありて職を辭し、倉敷紡績株式會社に入社人事科通勤部主任として勤績ヒケ年倉紡を退くや現任所に八重垣樓を経営し今日にいたる、その間君の献身的努力は從來の弊風を矯正して余す所なし、東西にわたりて各地遊廓の視察研究をなし得る所甚大なり、大正十年市會議員選舉に出でて當選土木委員市區改正委員に擧らる、君仁侠にのみ直條徑行至誠人を貫いて熱烈の辯となる、得がたき人材なり。

淺尾儀一郎

明治七年十二月三日生
岡山縣小田郡小田村

安藤直一

赤磐郡五城村

明治四十三年岡山縣師範學校第一部卒業、性温篤實厚寡言實行の人にして典型的教育者と謂ふべく、今の世稀に見る君子なり、されば本縣々會議員戸川專治氏の懇望すところとなり入りて女婿となる。
淺口郡寄島西尋常高等小學校長より現在與除尋常高等小學校長に轉じ、多年の經驗と研究とは益々村民の認むるところとなり、衆望益々厚きを加ふ。

秋葉佐登藏

上房郡高梁町

君は明治二十九年上房郡有漢村に生る。大正四年三月日本獸醫學校を卒業後、同五年十月姫路輜重兵第十大隊に入營し、六年十一月滿期退營し同八年三月三等獸醫に任せられ、昭和五年二等獸醫に昇進し、同年七月從七位に叙せらる。大正九年四月より高梁警察署衛生技手として勤務し、帝國在郷軍人會上房郡聯合分會長とそしての統制の任に當る、尺八に興味を有す。父母共に健在忍子夫人同郡上

水田村小田家生れの中に一男一女あり。

秋本秀太郎

現住所 兒島郡藤戸町



君は明治十七年八月兒島郡藤戸町に生る。三十七年十師團野戰砲兵第十聯隊入隊、三十七八年戰役に從軍し戰功に依り勳八等瑞寶章を授けられ、大正三年十月陸軍砲兵伍長に任ぜらる。大正三年帝國在郷軍人會藤戸分會監事となり、大正七年天城中學校評議員、全十年藤戸消防組頭、全十三年岡山縣消防協會設立委員其外藤戸分會名譽會員となり、昭和三年岡山市奥市地方饗饌に參列の光榮に浴し十一月大禮記念章を授賜せらる。又在郷軍人會長より表彰され、大正十三年縣知事より功勞徽章を贈られ表彰を受く。

青賢治

現住所 阿哲郡新見町



明治十四年二月十六日香川縣九龜藩士の家に生る。早稻田大學文學科の卒業にして、現に新見高等女學校長たり。教育の根本は愛と熱とにありとして終始一貫其の熱烈なること到底筆舌に及ぶ所に非ず。讀書、和歌を趣味とし威あつて猛からぬ名校長として仰慕せらる。

秋山文治郎

君の家は万延元年足袋製造業開始の歴史を有す。父は作平氏、元治元年三月兒島郡藤戸

町天城に生る。家業繼承の外、明治四十四年下津井鐵道株式會社設立以來その取締役、大正七年五月九五足袋株式會社を設立しその取締役、全八年天城紡績會社を創立しその取締役會長、全十四年設立の天城板紙合資會社代表社員等の地方實業の振興に寄與する事甚大なり。

逢澤寬

岡山市内山下

君は明治廿一年岡山縣御津郡芳田村に生れ、同四十五年土木建築事業を開始し現今に至る。君資性頭腦明晰、思想健實、豪膽小事に拘泥せず、大事に驚かず常に不撓不屈の精神を以て事を處し開業以來二十餘年間巨額の請負工事は枚舉に遑あらず。大正十年工費貳拾四萬六千圓の京都府帝國電化株式會社の電氣水路取入工事、同十一年工費拾六萬五千圓の姫神電鐵社線敷設工事、同十二年拾貳萬五千圓の玉島、金光間省線復線工事、同十五年高知市潮江橋架設、山陽線田布施岩田間復線工事、昭和二年高德線敷設、高梁川廢川地海岸堤防其の他、翌三年の省線三重縣名松線第二區土工並關係工事、同茨城縣鹿島神宮架橋、同五年工費參拾六萬五千圓の高知縣吾川郡八田郡内堰堤改良其の他縣下二大長橋たる西大寺永安橋下請の如き内外著名の工事を請負ひ最も確實に竣工せざるなし。今や岡山縣土木建築請負業組合組長に擧げられ、岡山砂利株式會社社長にして其の信望益々厚く前途洋々縣下業界の柱石たり。

赤木章生

京都市中京區東洞院三條下ル



君は明治廿五年七月岡山縣久米郡龍山村に生れ、大正四年京都立命館大學を卒へ、京都地方裁判所に勤務中辯護士試験に合格し、大正六年十二月同市に開業、昭和三年選ばれて京都地方裁判所辯護士會副會長となる、性格



温威兼備はり京都法曹界の一異彩たり、業務の傍京都市囑託となり、市社會課に開設の職業紹介所無料法律鑑定員を委囑され、一般無産者の法律相談役となり、上京、下京兩區の職業紹介所を擔任し毎日曜日鑑定會を開く、一日取扱件數平均八十件を下らず、但し件名を記すのみにて、依頼者の氏名を表はさず所謂奉仕なり、君此間に處して熱心懇切専ら蘊蓄を傾けて指導今日に至る。

明治十四年二月十六日香川縣九龍藩士の家
に生る。早稲田大學文學科の卒業にして、現
に新見高等女學校長たり。教育の根本は愛と
熱とにありとして終始一貫其の熱烈なること
到底筆舌に及ぶ所に非ず。讀書、和歌を趣味
とし威あつて猛からぬ名校長として仰慕せら
る。

秋山文治郎

君の家は万延元年足袋製造業開始の歴史を
有す。父は作平氏、元治元年三月兒島郡藤戸



君は明治廿五年七月岡山縣久米郡龍山村に
生れ、大正四年京都立命館大學を卒へ、京都
地方裁判所に勤務中辯護士試験に合格し、大
正六年十二月同市に開業、昭和三年選ばれて
京都地方裁判所辯護士會副會長となる、性格

温威兼備はり京都法曹界の一異彩たり、業務
の傍京都市囑託となり、市社會課に開設の職
業紹介所無料法律鑑定員を委囑され、一般無
産者の法律相談役となり、上京、下京兩區の
職業紹介所を擔任し毎日曜日鑑定會を開く、
一日取扱件數平均八十件を下らず、但し件名
を記すのみにて、依頼者の氏名を表はさず所
謂奉仕なり、君此間に處して熱心懇切専ら蘊
蓄を傾けて指導今日に至る。

赤城三千

現住 岡山縣兒島郡宇野町



君は明治十九年六月十二日和歌山縣和歌山
市雜賀屋東の丁に生る。同四十三年東京高等
商船學校航海科全科卒業たゞちに甲種二等運
轉士の免狀を得、四十五年まで同校練習船運
轉士囑託され直後岡山縣兒島商船學校に招か
る。

大正二年大阪商船に海技員として入社翌年
は甲種一等運轉士免狀登録、七年には甲種船
長免狀登録大正九年印度南米及紐育歐洲航路
船長として豪膽細心の操縦は船客及び從
業船員の稱讚の的なりき。君は又海軍豫備大
尉なり、昭和三年二月一日正七位に叙せらる。
同年九月願に依つて大阪商船株式會社を去り
岡山縣兒島商船學校長兼教諭に補せらる。

赤柏勳夫

小學校長

君は岡山縣御津郡牧石村大字原に生れ、小
學校卒業後師範學校に入學一意研鑽怠りなく
大正二年全校の業を終へ、岡山市御野小學校
訓導として奉職し轉じて赤磐郡小野田尋常高
等小學校長たり。

青井荒一

小學校長

青井荒一

—(11)(アの部)—



君は明治二十二年八月、苫田郡香々美南村
に生る、同四十四年三月岡山縣師範學校を卒
業し、直ちに苫田郡大野尋常高等小學校訓導
に任せられ、大正二年三月同郡一宮尋常高等
小學校訓導兼校長に轉任し、同四年一月更に
拔擢せられて岡山縣師範學校訓導に任せらる
、同七年四月津山女子尋常高等に轉じ、同男
子小學校、久田尋常高等小學校訓導兼校長を
經て、同十四年三月津山市林田尋常高等小學
校訓導兼校長となり今日に至る、其教育界に
貢献せし功績著大なるものありて、苫田郡長
、岡山縣教育會長等より彰賞數回、昭和六年
二月十二日紀元節の佳辰に當り岡山縣知事よ
り多年初等教育に従事し成績優良の故を以て
表彰を受けたり。

廣島縣會議員 天野彦三

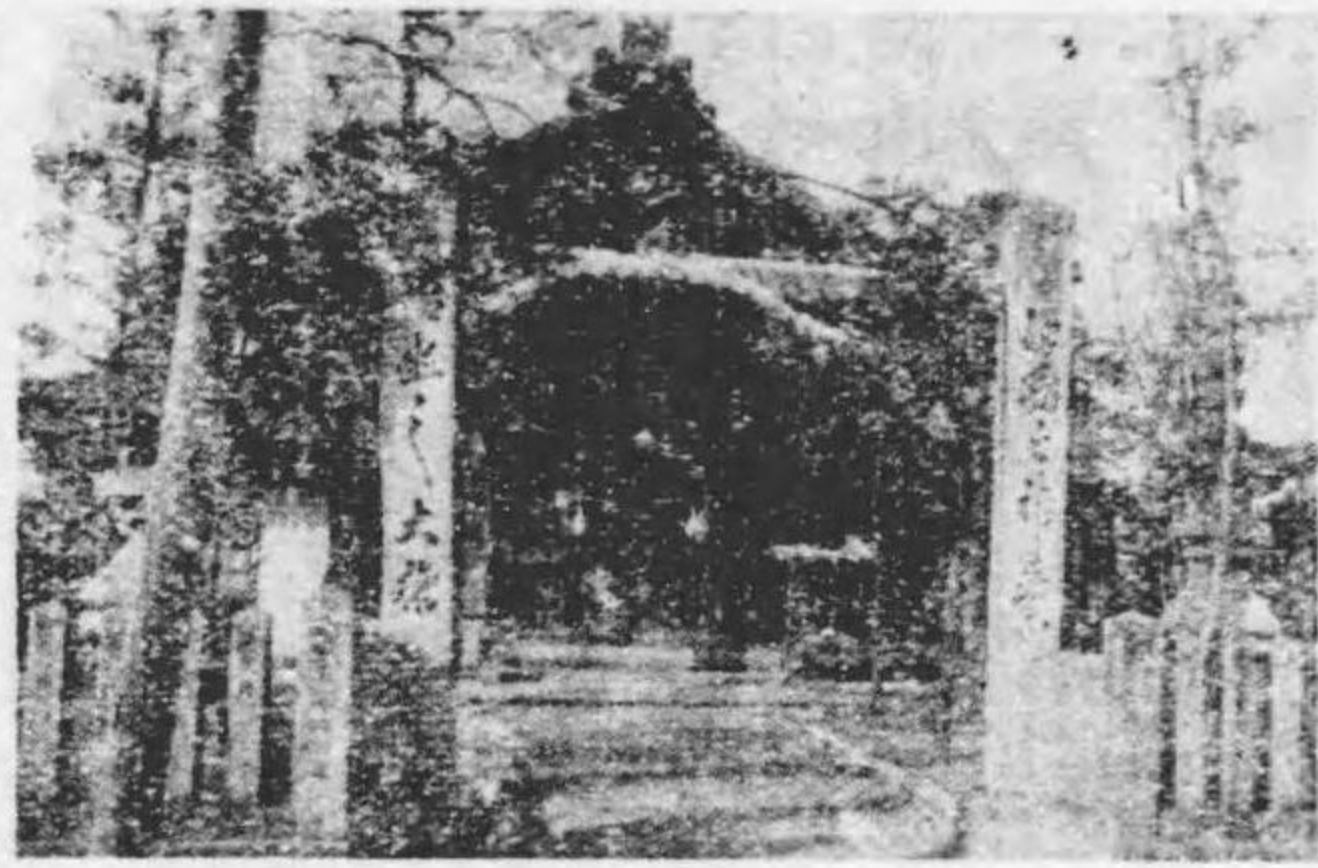


君は明治十七年三月廣島縣御調郡栗原村に
生る、縣下の中等學校、専門學校を経て、明
治四十四年東京帝國大學法科に入り、業を卒
へて歸山し、累世基礎成れる父祖の業酒造の
經營に従事す、此の間廣島縣清酒釀造組合其
他地方において各種團體の要職に就き又實業
方面には土居酒造株式會社取締役其他二三あ
り、常に中正穩健の説を持して公共の爲めに
斡旋努力を惜まず、衆望の歸する所、昭和二
年廣島縣會議員に選ばれ、縣政のために縦横
建策して今日に至る、家庭はよし子夫人二男
二女あり、佛道に歸依し、讀書を好む。

秋山 曉夫



君は明治七年十二月津山市小田中に生る。宇陀藩主秋山右近大夫光匡の後にして、先代鎮磨氏敬神崇祖の念厚く、千家尊福男に従ひ遂ひに美作大社分院を設置す。三十三年其の歿後を承けて君分院長を命ぜらる。近時時運につれ神前結婚を取扱ひ、最も壯重簡便且つ經濟的に世人の好尚に適し益々其の依頼數を増し愈々設備の整齊を圖る。



福山南尋常高等小學校長
相原 道登

廣島縣沼隈郡佐波村



君は明治十三年一月廣島縣沼隈郡佐波村に於て生る。明治三十七年九月廣島縣師範學校を卒業、豊田郡入野尋常高等小學校訓導、豊田郡本郷尋常高等小學校訓導兼校長、福山南尋常小學校訓導、全野上尋常小學校訓導兼校長、福山南尋常高等小學校訓導兼校長に歴任し、兒童教育に終始し今や福山市商工實業學校助教諭兼學校長、同市青年訓練所主事を兼務し奏任官を以て待遇され、從七位に叙せらる。君は多年教育に従事し功績大なるを以

て皇太子殿下同縣行啓の際拜謁を賜ひ又秩父宮殿下全妃殿下の令旨奉戴十周年記念式典に參列し陸軍特別大演習の御拜謁仰付けられ賜饌の光榮に浴せり。佛教を信じ園基を好む。シヅヨ夫人との中に四男三女ありて圓滿なる家庭を有す。

秋山 欽哉

君は明治二十九年十月二日岡山縣吉備郡田村に生る。大正五年三月岡山縣師範學校本科第一部卒業吳妹小學校訓導、郡内各小學校を歴任、大正十二年二万實業補習學校教諭を拜命し、全小學校訓導を兼ねたり、昭和三年一月上房郡水田小學校長に榮轉し越えて五年四月、吉備郡岡田村時習小學校長となりて現在におよぶ、なほ君が乃父も多年吉備郡に校長として勤務今やその教へ子は縣の内外に活躍雄飛せり。

君は温厚親切にして岡田村婦人會ならびに青年團顧問として校外の指導にも盡力す、家に三男一女あり。

安達 ソモ

女史は明治九年十月を以て廣島縣廣島市内尾ノ道町須々木家の男清三氏の令姉として生れ、長じて市内千田町一丁目安達家の嗣子太郎氏に嫁す、婚家は佛道を信じ家庭圓滿にして君また玲瓏玉の如き天資を以て舅姑に事へ、夫を助けて貞婦の節を盡せり剩へ慈善事業には最も意を寄せ常に弱者の味方となりて惠撫慈養のことを怠らず、三十八年選ばれて愛國婦人會廣島縣支部幹事となり、越えて四十年同じく赤十字社幹事に擧げらる、即ち衆望の歸する所にして女史又自重克く其任に膺り支部長を輔けて成績顯著なるものあり、今や在職二十六年、會務いよ／＼發展す。特別有功章を授けられ、明治五年賜饌の光榮に浴せり。

秋山 博



君は明治二十二年六月津山市小田中の士族に生る、四十年三月縣立津山中學校を卒業し、同四十三年三月東京農業大學専門部を卒業、實務に就き同年靜岡縣立農事試験場に奉職、次で大正元年より五ヶ年東京農大に勤め講師補となる、退職の後廣島縣立農事試験場技



君は明治十三年一月廣島縣沼隈郡佐波村に於て生る。明治三十七年九月廣島縣師範學校を卒業、豊田郡入野尋常高等小學校訓導、豊田郡本郷尋常高等小學校訓導兼校長、福山南尋常小學校訓導、全野上尋常小學校訓導兼校長、福山南尋常高等小學校訓導兼校長に歴任し、兒童教育に終始し今や福山市商工實業學校助教諭兼學校長、同市青年訓練所主事を兼務し奏任官を以て待遇され、從七位に叙せらる。君は多年教育に従事し功績大なるを以



秋山博

君は明治二十二年六月津山市小田中の士族に生る、四十年三月縣立津山中學校を卒業し、同四十三年三月東京農業大學專門部を卒業し、實務に就き同年靜岡縣立農事試驗場に奉職、次で大正元年より五ヶ年東京農大に勤め講師補となる、退職の後廣島縣立農事試驗場技師、埼玉縣比企郡農會技師、熊本縣農務課勤務等を歴任し、専ら米穀の品種改良事務を擔任す、昭和三年鹿兒島縣農林技師に轉じ大島支應勸業課長となり、大島郡産業振興計畫の樹立實施に當りて其の蓋蓄を傾け、農、林、水産、蠶業、畜産の各組合の發達に功績著大なりものあり、地方當事者何れも之を多とす、昭和五年職を辞して津山市農會技師を奉職し農會の發達に力めて今日に及ぶ、一面弓術教師として郷黨青壯年の指南を樂しむ。

秋山繁太

明治廿三年十月十五日生
岡山縣兒島郡藤戸町大字天城

藤戸町の素富家秋山文治郎氏長男從七位陸軍歩兵中尉たり。明治四十二年岡山縣立岡山中學校を卒業後、足袋製造業に従事し幾もなぐして之を廢業し、大正十四年天城板紙合資會社の設立にあたり無限責任社員となり銳意全社の發展に専念して亦他事なく大正十年以來藤戸町會議員をつとめ大正三年五月帝國在郷軍人會藤戸町分會副會長に擧げられ今尙其の任にあり。

秋山幸平

君は明治二十八年六月十二日岡山縣兒島郡藤戸大字天城に生る。大正三年私立天城中學校を最優等で卒業す九年同町の産業基本調査員囑託となる、同年國勢調査、調査員に擧げられ、第一回國勢調査記念章を受く、更に同年岡山履物株式會社取締役。十年には天城紡績株式會社監査役。藤戸町會議員、學務委員等の要職にあつて終始公共の爲に盡瘁す。昭和三年八月九日選ばれて同町名譽助役に就職せるはまことにその人を得たりと謂ふべし。君はよく風流を解し、松籟を樂しむ、父は利三郎氏。母彌須女史共に健在、夫人道子、子女五人ありて和氣に充つ。

荒田一郎

岡山市川崎町

君は明治三十三年廣島縣佐伯郡木野村醫師德太郎氏の長男に生る。廣陵中學より岡山醫專に入り、岡山醫大附屬專門部を大正十三年卒業、同大學皮膚科泌尿器科に研究を續け、傍ら岡山縣衛生技手拜命中島病院醫員勤務數年に亘る。昭和六年四月職を辭して現住所にて皮梅毒醫院を開業す。獨文タイブライターを樂しむ反面柔道二段といふ趣味の人、鹿子夫人との間に長男詳治君あり。



秋守常太郎

大阪市住吉區天王寺苗代町
明治五年上道郡金岡村出生

家代々薪炭商を營む。君は先代常太郎氏の長男、幼名は平八郎家督を繼ぎて襲名現在を名乗る。京都同志社を卒業、大塚維明氏の社長たりし讚岐鐵道會社に入社せるも、父君の没後歸郷して家業を繼承せり。

日露戰役の頃新に店舗を岡山市西大寺町に設け營業を擴張し、更に薪炭の大量都市移入、生産者より消費者への直接供給の切要と有望とを如實に確認するや、本店を神戸市川崎町に、店舗を大阪道頓堀に設け、愈々其の理想示現に最善の努力活躍を續け、刻苦精勵遂に微を積み細を重ねて巨萬の富を作りて今日に及ぶ事素より君の天稟頭腦明晰商機を見るの俊敏に因ると雖も、其の一代一業主義、學究的熱慮、斷行堅實自ら中に韜晦して之を積む事久しく、仍ち自ら其の才行大をなし外に露れたるものと謂ふ可きなり。しかも世を益し人を利する商品需給統整の實現、帳簿整理方法の改善等に關しては書を著して後輩に類つなど、普通市井の商人とは甚しく其の趣を異にせるなり。

今や營業一切は左右に之れを託し、閑かに明窓淨几に倚り東西の群書を涉獵し文筆に親しむ。

君曩年郷里吉井河堤に櫻千本を植樹す、純真なる其の地の春秋華葉年と共に倍々麗はし蓋し芳千歳に傳はらん。

宮城縣知事 從四位勳三等

赤木朝治

仙臺市長 刀町官舎
自宅 住原區中延町一〇七

君は明治十六年都窪庄村頼太郎氏の長男に生る、明治四十五年東京帝國大學法政政治科を卒業、同年高等文官試験に合格、山梨縣警視拜命、山梨縣理事官、岐阜縣視學官、警保局事務官、内務書記官、警保局圖書課長、同保安課長兼圖書課長、内務大臣官房文書課長兼内務監察官、神社局長兼造神宮副使兼明治神宮造營局長、復興局經理部長兼整地部長、内務省衛生局長、福島縣知事等に歴任し昭和八年現職に就かる。

大正十一年歐米に出張、更に昭和三年著作權條約國際會議日本代表として伊太利羅馬に出張す。其の著に『社會問題概論』あり。

夫人ミツ(明治二十一年生れ、京都市川利吉氏長女、京都高等女學校卒業)長女淑子嬢(大正三年生れ、佛英和高等女學校卒業)二女弘子嬢(大正五年生れ、同前在學)三女千枝嬢(大正七年生れ、同前在學)あり。

淺沼龍吉

東京市澁谷區青葉町六

丸ノ内丸ノ内ビルディング營業所

電話丸ノ内三九五三 明治十二年十二月生

眞庭郡二川村

君は永井瀧三氏の二男に生る、夙に志を立て、帝都に上る時に明治三十一年。淺沼藤吉商店に入り其の材腕を認められ、三十四年養子となる。同四十五年寫眞業視察の爲歐米に赴き具にその實情を知悉して翌年歸朝し、爾來營業主任を経て支配人となる。かくて大正十四年獨立して淺沼寫眞機店を設立し現在其の營業に精勵せらる。

君又曩に支那各地を歴遊して其の販路を開拓する等斯業界に貢献するところ甚大なり。丸ノ内俱樂部會員たり、野外運動登山はその趣味たり。夫人キン(明治十七年生れ、養父藤吉氏の長女、東京女學館卒業)長女茂登子嬢(明治四十年生れ)日本橋高等女學校卒業なり。

阿部太良一

營業所 岡山市濱田町一〇三番地

營業科目
ペイント、農具用ワニス、エナメル、

久世工場の設置より其の開業に至る迄盡瘁席の温る間もなかりしが、今や又總社に工場設置せられんとするに當り、本社を命を受け奔走すること多し。郡は製絲株式會社の柱石たると同時に又作州製絲界の一大恩人なり

今井蜜雄

苦田郡神庭村

明治四十二年岡山師範を卒業し現に清泉小

ゴム用藥品、鍍金材料

代理店

日本ペイント株式會社中國特約店

上村長兵衛商店中國代理店

大阪塗料製造所中國特約店

日本纖維化學研究所中國代理店

木材防腐クロームヒン會社中國特約店

ライト化學工業所磨粉發賣元

ペンキ部、ゴム部、鍍金部に分ち各部に主任を置き擔當を区分し各都下に店員數名を配置し町嚙親切をモットウとし迅速に事を運ぶ事を以て店員を督勵し業績頗る盛なり。

井上硬

現住所 京都市岡崎西天王町



君は明治二十八年兒鳥郡宇野町に生れ、高梁中學、第六高等學校を経て京大醫學部卒業、更に同大學松尾内科に於て研究し、續いて同校に助手、講師を経て助教となる、其の間常に松尾博士指導の下に、膽石病に就而大いに研究、遂に醫學博士となり、今や斯界の權威者として、世界的に命名あり、昭和五年文部省在外研究員として、獨、佛、米に留學二ヶ年、昭和七年歸朝、京大醫學部内科に助教となり今日に至る。資性温良恭謙、頭腦明晰にして、其の學殖豊富、然も徳風洋々、新進の學者として敬仰措く能はざるものあり。趣味は乗馬、弓術。三菱商事株式會社神戸支店支店長井上毅氏は君の令弟なり。

石田一郎

苦田郡羽出村

君夙に生絲製糸業の將來あるを見、郡は製絲株式會社綾部工場に入り、初めは自ら職工と交りて、實地其の技を練り、孜々として研究怠らず、優秀なる製品の製造に考案寄與すること決して尠しとせず。遂に社長の認むるところとなり重用され後津山市二宮に分工場を設置するに及んで、一躍擧げて工場長として委すに簽數の三百箇を以てす、今や擴張に擴張を以てし簽數も五四九、本工場に次ぐ一大工場たり。工場の管理經營實に其の宜しきを以て其の業績大いに擧り信望社の内外に厚し

し難く助役に就任、昭和二年遂に村長に推され、在職今日に及べり、其間小學校増築、道路の改修、公園の設置等功績顯著なるものあり、村長就任後日向淺きに拘らず、村勢頓に活氣を呈し、農村振興を叫ばるゝの秋、早くも發展の氣運全村に充滿しつゝあり、村民の信望、尊敬翕然として集り、一村の指導者として名實共に重きをなせり。園藝、和歌、俳句に趣味を有し、激務の傍ら床しき餘裕を

丸ノ内俱樂部會員たり、野外運動登山はその趣味たり。夫人キン（明治十七年生れ、養父藤吉氏の長女、東京女學館卒業）長女茂登子嬢（明治四十年生れ）日本橋高等女學校卒業なり。

阿部太良一

營業所 岡山市濱田町一〇三番地
營業科目
ペイント、農具用ワニス、エナメル、

君夙に生絲製糸業の將來あるを見、郡是製絲株式會社綾部工場に入り、初めは自ら職工と交りて、實地其の技を練り、孜孜として研究怠らず、優秀なる製品の製造に考究寄與すること決して尠しとせず。遂に社長の認むるところとなり重用され後津山市二宮に分工場を設置するに及んで、一躍擧げて工場長とし委すに釜數の三百箇を以てす、今や擴張に擴張を以てし釜數も五四九、本工場に次く一大工場たり。工場の管理經營實に其の宜しきを得て其の業績大いに擧り信望社の内外に厚し

久世工場の設置より其の開業に至る迄盡瘁席の温る間もなかりしが、今や又總社に工場設置せられんとするに當り、本社命を受け奔走すること多し。郡是製絲株式會社の柱石たると同時に又作州製絲界の一大恩人なり

今井蜜雄

苦田郡神庭村

明治四十二年岡山師範を卒業し現に清泉小學校長として、勤むること二十年、才氣潑潑、性淡泊にして、上に訶らず下に驕らず、自己の所信を斷行して、人の誹謗を意に介せず、又其の功を誇らず、されば村民父兄の尊信厚く教育の事は一切を擧げて一任す業績著々として見るべきもの多し。村内に於ける青年團、婦人會、青年訓練所の指導誘掖は因より、郡教育會の役員として活動見るべきもの多く美作に於ける校長として、群を抜き重きを成す。

井上直枝

兒島郡宇野村

君は淺口郡船穂村の人、明治四十三年岡山師範を卒業し、縣下數校に奉職の後現に第一宇野小學校長たり、温厚篤實の士にして、功を急がず孜孜として力むるところ常に人に迎ゐられ父兄子弟の尊信厚く、學校の經營又其の宜しきを得て、上の信認深く縣下校長中重きを成す。殊に教育倫理の研究深く獨特の思想家として知らる。

今田佐吉

君は慶應元年和氣郡本莊村大中山に生る。普通學校を卒へ、明治二十六年和氣郡役所に奉職、大正八年に至り、片上鐵道建設に従事し監査役として活躍す。大正九年村長に就任、同十一年迄奉職大正十一年都窪郡長となり後川上郡長に轉任し同十三年十二月退職、同年現職和氣購買販賣利用組合長に就任、性温和着實、地方人の夙に愛敬する處なり。趣味は圍碁、生花、茶道に有し、一家眞言宗を信仰し、夫人との間に一男四女あり。

池上登志雄

君は明治八年苦田郡大野村に生れ、土地の名門の出にして、土居通博氏に拔擢され秘書役としてその帷幄に參與し、大いに其の手腕を振ひ遂に山陽銀行支店長に就任、地方金融界の一權威者とされ大正十三年村民の懇願辭

し難く助役に就任、昭和二年遂に村長に推され、在職今日に及べり、其間小學校増築、道路の改修、公園の設置等功績顯著なるものあり、村長就任後日尙淺きに拘らず、村勢頓に活氣を呈し、農村振興を叫ぶるの秋、早くも發展の氣運全村に充滿しつゝあり、村民の信望、尊敬翕然として集り、一村の指導者として名實共に重きをなせり。圍碁、和歌、俳句に興味を有し、激務の傍ら床しき餘裕を見せつゝあり。

家守善平

君は文久三年兒島町兒島郡兒島町に先代家守和太平氏の三男として生る、天資俊敏夙に實業家たらんとして、原田義平氏に就て足袋販賣事業に従ひ、幾多の經驗を重ね商機に通ず。後家に歸りて獨立以て染色業並に織物業を起す。漸次基礎を固めて、發展の氣運に向ふや、同志と相謀り兒島織物會社を組織し専務取締役となる。



爾來幾多の障礙に遭遇するも、敏腕以つて能く之れを排除し毫も屈する事なく、

今日の盛況を致し地方實業界に重きをなす。

石井眞一

君は明治十六年久米郡大井村に生れ君は早大英文科出身楚江と號して詩壇に出で、早稻田派詩人中の花形としてその詩才を江湖に轟はれたり。後新聞界に身を轉ずるや静岡民友、山陽新報、京城日報等の編輯局長としてその敏腕を表し紙上に華麗なる筆端を躍らせて、新聞界の鬼才として讀者は勿論同業者間に於いて畏怖の情を起さしむる事屢々なりといふ。大正十二年故山に歸るや津山商業に教鞭をとり傍ら益々詩作に精進し、大正十五年攝政宮殿下岡山縣行幸の砌、募集奉迎歌、大阪商工會議所募集の日本産業歌、大日本聯合青年團募集の入營兵を送るの歌に夫々當選し、津山民謡の一作を物し最近に於ては郷土史研究、殊に久米の佐良山の研究に没頭し世人君に期待するところ大なり。



出射一郎 岡山山岡町二丁目

君は明治十四年邑久郡長濱に生れ。明治三十五年岡山醫専卒業、同年軍籍に入り、明治三十七八年戦役には第十二師團野戦病院附として従軍し、勳六等旭日章功五級金鷄勳章を授けらる。明治三十九年より大正七年迄陸軍省に在勤し、此間大正三年戦役に干與し勳四等旭日章を授けられ、後金澤衛戍病院長、第十師團軍醫部長を経て、昭和二年軍醫監に進み、第二十師團軍醫部長に轉じ、昭和五年職を退きたり、爾來岡山醫大にありて學術の研究に没頭しつゝあり、趣味は俳句と釣魚にしてその道の名手たり、家庭は夫人との間に三男三女の子福者なり。

今井三郎

津山市坪井町

君は勝田郡勝間田町山下家に生る。明治四十三年岡山師範卒業後郷里に歸り、郡内小學校長として奉職す。其在職中生徒の薰陶よろしきを得たるを以て退職し、今井家に入らんとするや世人大いに別れを惜しみたり、今井家に入るや呉服店を經營し、刻苦勉勵の後遂に津山市有数の呉服店として重きを成し、家運益々隆昌たり、君は家業の傍ら常に公共の事を忘れず、青年團長として大いに青年を指導し大正十五年攝政宮殿下行啓に際し、津山市聯合青年團長として美作青年團親閲者指揮の光榮に浴したり、性來議論家にして一人一黨の人たり現に津山市會議員、津山市商工會議所議員たり。

飯田惠喜太

津山市中之町三九



慶應二年の生れ、先代より金物商たり、家業の傍ら津山電話開設に際し運動奏効し今日の便宜を見るに至る、大正の初め美術

鑄物株式會社創立に努力し、其の他濟世顧問、美作招魂社理事として公共の爲盡せり、今や家督を長男寛三氏に譲り、悠々自適の地位にありて、書畫骨董の鑑賞に身をゆだねらる。

石坂徳一

津山市城代町

氏は明治十九年の出生明治四十年津山中學出身、豫備歩兵少尉なり、中學卒業後、家督を繼いで悠々迫らず、地方に於ける人望家として尊信篤し、現に津山商工會議所議長にして、津山信用組合理事、津山商事株式會社取締役として津山實業界に於て活躍せる温厚篤實の紳士なり。

石田久

香川縣高松市幸町七八

君は明治二十九年勝田郡公文村に生れ大正五年に岡山男子師範を優等の成績にて卒業し、大正十三年香川縣高松高女教諭として赴任現在に至る。君の趣味は庭球、麻雀等にして眞言宗を信仰、性格極めて明にして研究心に富み前途ある教育者として興望高し。

井上保

香川縣高松市楠上町



英田郡林野町の人、大正二年岡山縣笠岡商業卒業直ちに日本大學に學ぶ、大正五年片倉製糸株式會社に入り格勤精勵、重役の認むるところとなり、重用せられて遂に昭和五年高松出張所主任に擧げられて今日に及ぶ。香川縣繭絲同業組合長として大いに活動斯界の重鎮たり。

石原俊士

香川縣高松市宮脇町

君は明治二十四年赤磐郡瀧瀬町江尻に生れ明治四十三年津山中學卒業、大正七年京大婦人科專科入學二ヶ年研究、更に大正九年京都府立醫科大學微生物學教室にて三ヶ年研究、大正十二年倉敷中央病院に赴任、大正十五年學位を受け、昭和二年高松市倉紡高松病院に

轉任、昭和五年癌腫に對する新療法發見一躍



世界醫學界に名を轟かすに至る、現に高松

に於ける最も古き藥種商なり、家庭の事情に依り中途醫師より轉じて之れを繼ぐ、眞面目にして親切なる營業振は期せずして家業の殷盛を見て財寶集まり、衆望歸するも何等名利に馳すことなく孜孜として營業に専念し一人一業主義にして現代稀なる人物なり、趣味としては書畫、骨董、最近は長唄の研究を始む夫人嘉代は現縣會議員土井和清氏の姉にして長男長女あり、二男一女あり眞に平和なる家庭

飯田 惠喜太 津山市中之町三九



慶應二年の生れ、先代より金物商たり、家業の傍ら津山電話開設に際り運動奏効し今日の便宜を見るに至る、大正の初め美術

このころより、重用せられて遂に昭和五年高松出張所主任に擧げられて今日に及ぶ。香川縣繭絲同業組合長として大いに活動斯界の重鎮たり。

石原 俊士 香川縣高松市宮脇町

君は明治二十四年赤磐郡湯瀬町江尻に生れ明治四十三年津山中學卒業、大正七年京大婦人科專科入學二ヶ年研究、更に大正九年京都府立醫科大學微生物學教室にて三ヶ年研究、大正十二年倉敷中央病院に赴任、大正十五年學位を受け、昭和二年高松市倉紡高松病院に

轉任、昭和五年癌腫に對する新療法發見一躍



世界醫學界に令名を謳はるゝに至る、現に高松病院婦人科醫長たり。溫良恭謙、學究的頭腦の人にして庭球、將棋をよくし彫刻も又上手なり。

長たり。溫良恭謙、學究的頭腦の人にして庭球、將棋をよくし彫刻も又上手なり。

生末 近夫 津山市椿高下一一六

君は明治十七年勝田郡新野村の生れ夙に警察界に入り令名あり累進、岡山市西警察署長より警視として津山警察署長に轉ず、今回の行幸に際し特に御警衛の重任に當り、其任務を完了したことは君一門の名譽と謂ふべきなり。昭和六年辭して津山市より縣會議員として出馬當選、今や縣會議員として縣政に參與大いに盡瘁功勞多し。

井上 毅 神戸市須磨區寺町二丁目

君は明治二十九年の出生岡山中學卒業後、東京高等商業學校に學び大正六年卒業、直ちに三菱商事會社に入り、支那漢口支店、東京本社、シヤトル支店等を経て、昭和七年、神戸支店次長として現在に至る。信仰は眞言宗にして、趣味はゴルフを愛す

猪木 修治 香川縣高松市天神前

君は明治十八年淺口郡玉島町乙島に生れる明治三十六年岡山中學卒業、全四十年一高卒業、全四十四年京都醫科大學卒業、直ちに京都大學病院中西内科勤務、大正三年高松赤十字病院長となり現在に及ぶ、同十四年歐洲へ留學、同十五年一月博士の學位を受く、信仰キリスト教趣味謠曲、俳句家庭に夫人五男一女あり。

磯崎 高三郎 岡山市天瀬町

本縣花菫業の開祖として、最も尊敬すべき功勞者磯崎眠亀氏の長男にして、家業を繼ぎ花菫業に従事す、時代の要求につれて、從來の花菫に一層改良を加へ、殊に各國向製品の製造に腐心し、幾多の專賣特許、新案特許を得て、花菫をして遠く海外に輸出、歐米人に歡迎せらるゝに至りしは、君の功勞にして、先代の始業を完成せりと謂ふも決して過言にあらざるなり、人格崇高、利慾に迷ふことなく、専心斯業の改良發達に苦心するの外何等望なし、眞に得難き紳士にして、業界の權威者なり

岩藤 貴壽次

君は明治十九年赤磐郡輕部村西輕部に生れる明治四十年岡山師範卒業、和氣郡和氣、赤磐郡高月小學校訓導を経て、大正三年同郡榮佐可真小學校長となり、現に同郡千種小學校長たり、君常に其摯事を處し、教授訓練徹底して、父兄の信望厚く、兒童の敬仰亦深し。

池松 三郎

君は明治九年津山市備後町一八に生れ、金物商は先代の創業にして古くより知られ、製造及卸小賣をもつて業とす、その富數十萬圓を超ゆと云ふ、別に美作鑄物社長として活躍津山町會議員としてかつて公共のためにも盡せり、君かくの如き幸福の環境にありて何不足なきも、滿つれば欠ぐるの做ひにも最近夫人を失ふ、しかれども屈せず、勇往仕事を趣



岩田 喜三郎

君は明治十八年岡山市西大寺町一〇七番地に生れる明治四十一年岡山醫學專門學校卒業岡山縣立病院に奉職せしことあり、家は岡山市

味として、營業にいそしみつゝあり、されば君が家萬々の後までも繁榮を重ねること必定なり。

池田 幸平

津山市紺屋町



君は苦田郡大野村の人、家代々農家なりしが君は田舎には稀に見る機敏

の人にして商業を志し、明治三十九年米穀肥料商となる。明治四十年美作肥料同業組合代議員に當選、大正十一年美作穀物同業組合代議員に當選、引續き評議員となる。全年美作米穀委託株式會社を創立支配人となり、續いて美作商事株式會社支配人となる。後明治初年よりの老舖清美館を買収し之を經營す。自ら遠く旅行して満足すべき旅館なき事に氣付き旅行者の便宜に資せんとの理想より出づ。現に津山市商工會議所、美作立憲政友會幹事兼會計、津山青年政友俱樂部副會長としても活躍大なるものあり。

石田 敏太

君は小田郡吉田村の人、岡山中學をへて岡山醫專を明治三十六年卒業。先づ岡山縣病院助手として學理の探究と實地の研修を積むこと五ヶ年、業大に進み、出で、明治四十一年



兒島郡宇野町に開業す、醫學家の好典型なり、君激務の傍ら閑あらば佛典を播き

又藝術趣味深く繪畫及び和歌は其好む所、家族は母堂、夫人との間に三男一女と養女あり。

池 宗博

君は明治三十年兒島郡興除村西時に生る。大正三年天城中學卒業、大正四年岡山師範第二部卒業後藤田小學校、曾根小學校、天城小學校訓導を経て昭和六年山村小學校長となり

現在に及ぶ。銳意精勵、克く初等教育に盡瘁衆望厚く一面全町青年團支部長、女子青年團顧問、全町婦人會參事として誘掖指導、社會教育の事に盡すところ多し。

井上良一郎

淺口郡鴨方町

備中物産信用購買販賣利用組合専務理事
町の特産物たる筈製造業の發展を企圖し、備中筈製造會社が創立されたのは明治四十三年、後時勢の進運に伴ひ全會社を解散し其の目的及事業を繼續して大正九年創立され全十四年深田信用組合を合併し、今日の大をなすに至つたのが即ち本組合である。創立當時より富田義夫と君其の専務理事に就任大に盡瘁する所あり。君が地方産業組合界の權威であり、指導的人物と目されてゐるのも勿論である。傍ら大正七年町内小阪西信用組合を起してその組合長として今日に及ぶと共に、町會議員に當選、町治に卓見を垂れ、町輿論の指導者として民心を收斂しつゝあること既に七ヶ年、高潔な人格と相俟つて壓倒的町民の信望を蒐めてゐる資性温雅、俳句に趣味を有し、號を鴨村と稱す。明治十八年の出生、一男二女がある。

池上仙二郎

上房郡高梁町

君は岡山市瓦町の人明治二十年生れ、大正四年二月池上長右衛門氏の養嗣子となる。幼にして慧敏學を好み縣立岡山商業學校を同三十九年卒業し、東都に上り早稻田大學に入り商科に學ぶ、四十四年同校を卒業し、直に大日本製銅硫酸肥料株式會社に入社し、大正三年十一月まで勤続す。其後當地に在りて醬油釀造業を經營し、傍ら公共事業に盡瘁す、大正十一年三月岡山縣濟世顧問となり今日に及び、同年高梁商工會副會長となり尋いで同十三年九月會長となり、商工業の發展に勞功した。更に同年農會副會長、助役にあげられ、昭和三年町長に推され、尙ほ郡町村長會副會長、所得調査委員等を兼任し、最近は事業界に進出、岡山縣農工銀行取締役、中國銀行取締役、中國信託等の重役として名望何れにも高し。因に令室は長右衛門氏の長女貞淑温良賢夫人と稱せらる。

池上眞通

久米郡加美村

君多年忠實誠意を以て自己を後にして村民の爲めに計り、遂に理想的に村治の發達を遂

げしめたる嘗に君の名譽のみにあらずして、實に加美村々民のため、延いては久米郡、岡山縣のために大いに慶賀すべきなり。即ち村長に推さるゝや公平無私、不偏不黨の信條により村治を行ひ、一意加美村の進歩發達をは

合同銀行跡に移して大正十四年にデパートメントストアを興し、更に南隣地元岡山郵便局敷地の拂下を受けて之れに擴張す。宏壯實用主義の設備完全、内部の商品亦充實せること地方都市に稀に見る所にして大いに岡山市の爲めに萬丈の氣を上ぐ。尙ほ石小學校善堂

又藝術趣味深く繪畫及び和歌は其好む所、家族は母堂、夫人との間に三男一女と養女あり。

池宗博

君は明治三十年兒島郡興除村西崎に生る。大正三年天城中學卒業、大正四年岡山師範第二部卒業後藤田小學校、曾根小學校、天城小學校訓導を経て昭和六年山村小學校長となり

和三年町長に推され、尙ほ郡町村長會副會長、所得調査委員等を兼任し、最近は事業界に進出、岡山縣農工銀行取締役、中國銀行取締役、中國信託等の重役として名望何れにも高し。因に令室は長右衛門氏の長女貞淑温良賢夫人と稱せらる。

村上池上眞通 久米郡加美村

君多年忠實誠意を以て自己を後にして村民の爲めに計り、遂に理想的に村治の發達を遂

げしめたる當に君の名譽のみならずして、實に加美村々民のため、延いては久米郡、岡山縣のために大いに慶賀すべきなり。即ち村長に推される、や公平無私、不偏不黨の信條により村治を行ひ、一意加美村の進歩發達をはかる、されば村民その徳に服し名聲高し。尙ほ郡町村長會長に推されて現任し、地方自治界に貢献するところ頗る大なり。寔に君の如きは地方屈指の逸材と謂ふべし。

伊原徳三郎

君は明治廿三年兒島郡宇野町に生る。夙に意を地方振興諸事業に傾け、宇野港海水浴場創立委員、納税組合長、岡山縣有地借地組合副組合長、宇野上水道敷設委員等の要職に就き、宇野上水道の如きは、大正七、八年頃より委員として私費を抛ちて東西奔命し之を完成したるもの、君が斡旋の勞著大なるものあり、此外宇野港開港に對しては第二種重要港灣促進運動の委員となり、地方有力者と連繫し縣當局並びに本省を動かし遂に世界直通路たらしむる大事業を完成せり、年輪三十にして宇野港總代會副會長に擧げられ、又宇野商工會理事、昭和四年以後宇野町會議員に推され、業務としては伊原運送店主、株式會社宇野運送店専務、岡山鹽元賣捌株式會社取締役等に擧げられ、少壯實業家として聲望最も高し。

犬飼栢太郎 岡山市内山下二ノ丸

君は都窪郡庄村大字山地の人、幼にして群を抜き小學校時代より將來教育者として身を立てんと志し、岡山師範を明治卅八年優秀なる成績を以て卒業し、都窪郡早島小學校訓導を経て岡山高等小學校(現内山下校)に轉じ、勤績十二年後市内出石小學校に次席訓導として五ヶ年間、大正十三年選ばれて石井小學校長を拜命し昭和五年南方小學校長に轉じ校規の肅正は勿論のこと、萬般の設備に遺憾なきは君の努力の結晶として、眞に良校長との名聲を擅にするも宜なりと云ふべし。

伊原木藻平 岡山市西中山下

慶應二年生れ幼名久三郎、備前西大寺に古くより天満屋呉服店を經營す。第一合同銀行、岡山合同貯蓄銀行、西大寺織色株式會社、其の他幾多會社の重役を經現に株式會社天満屋の代表取締役社長たり。數年前、其の經營に係る天満屋呉服店を中之町より下之町第一

石田藤一

先代儀平氏は幼にして同地の勤王家津田馬之助氏の門に入り俳句を學び、後雜貨卸小賣商たり。君はその長男にして、小にして松浦熟に漢籍を修め、十八才上阪、山内宇之助商店に入る、父の病に會ひ歸國するや、眞田帽子の有る望なるに着眼し、製造を創め、中國、九州方面に得意を擴張し、優良品製作に腐心し、當時阪神品を凌駕する良品なりと多大の高評を博したり。明治二十七年上阪、店を江戸堀に設け、帽子卸商として一段の活躍をなし、漸次麥稈帽子より現在の冬帽子に轉じ、今日に至る。明治三十八年現在の瓦町三丁目に店舗を移し新築せり、今や帽子の外英國より雜貨を輸入し、有数の帽子店として成功せり。君は、斯くの如く實業家として、確固たる才腕を有する一面、社會報恩の念厚く、常に多額の金圓を社會事業のために投じ、あるひは後進子弟のために出資する等、隠れたる美行に富めるも、いささかたりとも、之を誇るの色なし、爲に世人君を敬愛するの度を加ふる。

井尻艶太 岡山市廣瀬町

明治八年上道郡浮田村北方に於て誕生、岡山中學をへて後明治三十一年教員檢定試験に應じて地文科免許狀をうけ大分縣師範學校教諭に任じられ更に地誌科免許狀を得て地理歴史科主任となり明治三十三年岡山縣高梁中學教諭兼舍監を拜命次で山口縣豊浦中學、岡山縣矢掛中學、私立岡山教員養成所教師後校長となりしが全四十四年岡山市廣瀬町に私立吉備商業學校を設立して爾來校長となり經營大に任じ大正十五年財團法人組織を以て一般の堅實味を加ふると共に校規を刷新して後現南方校舎に移れり、大正十三年上道郡より選ばれて岡山縣會議員となり政友會に重きをなしたることあるも、近年吉備商業學校並に附設喜多屋デパートの經營に専念しつゝあり。

池上博平

吉備郡總社町

明治二十二年十月生

君は池上藏六氏に養はれて現姓を冒かす、明治四十年金光中學卒業、暫く家事に従事せしが、大正五年岡山縣屬となり、在勤七箇年依願退職大正十一年總社郵便局長に就任、爾來通信事務に鞭掌し、著績多しとせず、現に協和會評議員、商工會顧問、總社組合幹事たり。

大阪盛農社製作工場主

池田彌城智

大阪市西淀川區御幣島町三七七ノ一〇

君は小田郡神島内浦の人、明治四十三年大阪に盛農社を創立し、此花區吉野町に工場を設け農具稻扱機の製作販賣を經營す、君が先見の中したるも經營上幾多の難關に會し、爾來刻苦奮闘、波瀾重疊の中に業大に進み大正八、九年器械農業勃興期において改良農具の需求激増し、一舉にして巨利を得昭和五年に至り資本金十數萬圓を投じて現在の地所二千坪を買収し、新工場を建設、内部は鑄造、鐵工、鍊鐵、木工の諸部を設け機械設計、製作、セーノ一式稻麥扱機、製繩機、側杵、鐵板等の各種目に亘り、多數職工を雇備して一ヶ年農器具販出高五萬臺を下らず其製品は全國一圓、内鮮、臺灣方面まで販路を開き各地博覽會に出品して屢々賞牌賞狀を受く、立志傳中の人たり。



井上蒸一 町岡安市山津

津山中學卒業後、家業を繼ぐ、年齢未若きも、財力に於て將又實力に於て、確かに津山市に於ける一權威なり。現に市會議員として、市政に關與、黨せず、偏せず、主張常に中庸を得、議員としての信望厚し。將來の津山市を負ふて立つべき一人物として世人の囑望深し。

石黒和吉

英田郡林野町

地方に於ける古き材木商にして、遠く阪神

四國方面に販路を有し殊に電柱用材は最も得意とするところにして傍ら印刷業を營む。性質極めて眞面目なれば一旦契約したることは必ず之れを履行す、されば材木にしても印刷物にしても、緊急を要する場合は、必ず註文して顧客迷惑を受くることなし、依つて信用愈厚く自ら今日の盛大を見る。現に町會議員として、町政に與る。意見穩健なれば、町會に一權威として重きをなす。

入江武一郎

岡山市上之町一四

君は赤磐郡高月村の生れ幼にして穎悟神童と呼ばる明治二十一年和治法律學校を首席を以て卒業辯護士を開業す。岡山市に於ける辯護士界の元老にして國民黨元代議士たりしことあり。舛に犬養木堂先生に私淑して其の傘下に屬す、其の性格風貌共に大阪市に於ける板野友造氏と型を一にして國士の風あり。性剛毅にして寡言、名利に淡く時世に阿らず、業務の餘暇友來れば烏鷲を戰はして夜を徹して厭はず、人無ければ漂然と撞球場に姿を現はし徹宵平然たるものあり。長男徹君は東京帝國大學法科出身目下住友銀行に勤務す。

井戸博史

君は大正二年岡山師範二部卒業、現に勝田郡勝間田小學校長たり。衆望を負ひ勝田郡教育會長、勝田郡小學校長會長の要職にあり。性剛腹にして膽力あり、苟も人に恐れず、言行共に、其所信の貫徹に當りては徒らに毀譽に關せず、教育上の識見卓越す、新進教育家として、作東に於ける重鎮なり。

石部修一

兒島郡興除村内尾

君は大正三年岡山縣師範學校本科第二部の出身、中學校時代より秀才の譽れ高く、進んで高等の學府に學ぶべく本人は因より家族の希望なりしも、家庭の事情突發、之れを思ひ止まりて、教育者たらんと決心し、師範教育を受けたるものにして、頭腦明晰、勤勉なる君は、直ちに卒業生中一頭地を抜いて、校長に拔擢せられ、現に銚立小學校長として令名あり。

出原龜之助

神戸市葦合區籠池二

君は明治十六年岡山縣川上郡富家村に生れ、大正十五年兵庫縣警察部に入り高等課長を

勤務、昭和二年同警察課長に任命され、地方警視に陞み翌三年兵庫縣警察署長に轉勤し六年依願退職し同時に同年九月神戸市須磨區主事を命ぜられて現在に至る、君氣宇宏大、地乘馬術に長じ大正八年大阪兵庫縣下における陸軍特別大演習の際には御警衛の大任を帯び乘馬

任す、君は常にいふ吾等の關與せる初等教育は、國民教育の本質に立脚し、時代の要求を察し、郷土の要求を顧み、個人の要求を察し以て個人の大成を期すべきなりと又教員としては常時社會に關する識見を高めることに努力し、社會教化に意を用ひ、純眞の愛を持つ

津山中學卒業後、家業を繼ぐ、年齢未若きも、財力に於て將又實力に於て、確かに津山市に於ける一權威なり。現に市會議員として、市政に關與、黨せず、偏せず、主張常に中庸を得、議員としての信望厚し。將來の津山市を負ふて立つべき一人物として世人の囑望深し。

石黒和吉 英田郡林野町

地方に於ける古き材木商にして、遠く阪神

で高等の學府に學ぶべく本人は因より家族の希望なりしも、家庭の事情突發、之れを思ひ止まりて、教育者たらんと決心し、師範教育を受けたるものにして、頭腦明晰、勤勉なる君は、直ちに卒業生中一頭地を抜いて、校長に拔擢せられ、現に録立小學校長として令名あり。

出原龜之助 神戸市葺合區籠池二

君は明治十六年岡山縣川上郡富家村に生れ、大正十五年兵庫縣警察部に入り高等課長を

勤務、昭和二年同警察課長に任命され、地方警視に陞み翌三年兵庫縣警察署長に轉勤し六年依願退職し同時に同年九月神戸市須磨區主事を命ぜられて現在に至る、君氣宇宏大、地乘馬術に長じ大正八年大阪兵庫縣下における陸軍特別大演習の際には御警衛の大任を帯び乘馬先驅を承り身一代の光榮として爾來報恩感謝の生活を續けつゝあり。

今井良平



君は明治十五年津山市上之町に生る、明治三十八年岡山師範を卒業し、眞庭郡月田

小學校訓導となり、次で旭陽小學校、苦田郡津山小學校訓導、高野小學校、双松小學校、二宮小學校訓導兼校長を経て、現津山市苦田小學校訓導兼校長に轉じ、今日に至る。

今田虎次郎

君は安政六年邑久郡本庄村今田幸次郎氏長男として生る。君の家は代々酒商をなしたるも蹉跎して家産を蕩盡せるを以て明治十八年兵庫縣警察界に力を投じ廿五年警部に進み明石、氷上、山崎各警察署長を経て高知縣に赴任し三十五年安藝警察署に奉職、全年十二月更に大阪九條警察署長となり警視に任せらる。更に難波、曾根崎兩署長に歴任四十二年外島保養院建設に際し自ら進んで院長となりよく患者の慰藉、救濟の事に従ひ名院長として内外の信頼をうけるに至れり、今や功なり名遂げて晩年を南海の別墅に樂む。



今村與平 明治廿三年島兒莊内村に生る。明治四十四年岡山縣

師範を卒業、目下天城小學校長たり。人格識見共、兒島郡中の異彩にして、稀に見る力量の人。藤戸町幼稚園長、青年訓練所主事を兼

任す、君は常にいふ吾等の關與せる初等教育は、國民教育の本質に立脚し、時代の要求を察し、郷土の要求を顧み、個人の要求を察し以て個人の大成を期すべきなりと又教員としては常時社會に關する識見を高めることに努力し、社會教化に意を用ひ、純眞の愛を持つべきなりと以て君の教育的識見を知るに足るべし。

稻葉章通

君は明治二十一年後月郡山野上村に生る。君は不幸にして中學を中途退學す、しかも雄志禁する能はず發憤して日本醫專に入り明治四十四年卒業、翌年開業免許を得るや、大阪回生病院に實地經驗をつみ、大正三年令兄教通氏の歿して後之を繼承して今橋稻葉病院を開業して今日に至り、濃厚と丁寧と熱心とは船場上方の病家に絶體的信頼をうけ、現在大大阪開業醫中盛大を極めたり。

猪木修治



高松市天神前四八 君は明治十八年淺口郡玉島町に於て誕生、岡山中學、第一高等學校をへて明治四

十四年帝國大學京大醫學部を卒業全時に母校附屬病院中西内科に勤務すること多年大正三年高松赤十字病院長となり全十四年歐洲に留學滯歐一ヶ年親しく彼地の醫學を研究して歸朝翌十五年醫學博士の稱號を授與さる。濃厚な紳士の典型にして現に高松市に於ける岡山縣人會長として後進の指導に盡瘁さる。

伊原木貞秀

岡山市東中山下 君は木畑竹三郎氏の二男明治三十六年生れ、上道郡西大寺町伊原木壽太郎氏の養子となり、昭和四年家督を相續す、夫人は稻子明治四十一年生れ、碧堂田邊爲三郎氏四女なり。現に天満屋デパートメントストアの重役あり。

伊丹潤

君は明治二十七年吉備郡大井村大字大井に生る。伊丹家は代々庄屋にして明治に至つて

は戸長をなし地方の名家なり。嚴父熊吉氏は同大井村長たること二十餘年、令兄は同地に醫業を開く。君は大正三年岡山縣師範學校卒業四月川上郡成羽小學校訓導大正十年吉備郡日近小學校訓導大正十五年同郡岩田小學校長昭和六年日近小學校長に奉職現在に至る。趣味に琵琶、謠曲、園藝等あり、教育者として異色ある人なり。家に夫人三男一女あり。



伊藤佐太郎
岡山市中山町

最も古く最も信用あり又高級品のみを取扱ふことを特色とする伊藤糸店なり、堂々たるモダン洋館に採光照明に意を用ひ陳列の法亦一段の異彩を放つ、内容形式共に表町に於ける權威にして偉觀なり。氏は其の店主なり。嘗つては政治に志し市會議員として花々しき活動をなし相當貢献するところありしが近來専ら實業界に活動し二三事業に關係の外専ら店にありて店員の督勵に力む岡山市に於てもデパートの出現に對抗して専門店の聯盟を見るに至る、即ちこれが成立を畫策し現に其の會長たり、今や表面に立ちての活動を見ざるも隠然一大勢力を有す。

伊藤好良

岡山市門田屋敷

君は明治二年今村岩吉の次男として御津郡今村に生る。御野小學校平松塾を経て岡山中學に學ぶ頭腦明晰なるをもつて特にあはる、後邑久高等小學校御野高等小學校に教鞭をとりその間伊藤家に招かれて養嗣子となる伊藤家は舊池田家の家老の家柄にして君二十四才にして教育界より退き、小壯氣銳をもつて實業界に轉じ、岡山縣特産の花菴の改善と發達に意をそそぎ明治三十五年同業組合長に推され三十七年市會議員、市參事會員、市會副議長後市助役に推さる、君の岡山市助役時代の實績の中より左に二三を列挙す。市外墓地移轉、家屋稅實施、電柱稅徵收等皆君の提案也。現に市會議員、市會議長たり。

家本爲一

岡山市内山下

君は明治十九年川上郡日里村に生る。君は

鐵をも透すてふ慨あり。家族は夫人との間に二男二女あり、園藝を好む。

板谷浩

君は明治四年岡山縣撫川町に生る。明治二十六年岡山師範學校卒業玉島、倉敷、日生、福濱、充

鴻志を抱いて日里村の小學校に教鞭をとりつゝ早大講義録をひもとき明治三十九年勉學の意勃々として上京早大法律科第三年に編入し卒業の後は獨逸協會語學部に入り明治四十年には優良の成績を以て辯護士試験に合格し爾來東京にとまりて研鑽をつゞけ羽田智証辯護士のもとにて實務を研究し後岡山市に歸り松田武一郎氏を助けてその事務所に入らず、この時より君の手腕を認められ松田氏の死没にあふや獨立して開業以來今日まで堅忍不拔氣骨稜々たる裡に涙を藏し良辯護士として聲望隆々たり。

入江三四郎

岡山市天瀬二番地

君は明治十三年御津郡芳田村に、岡山藩士入江熊吉氏の三男に生れ、幼にして商才あり。明治三十三年第十師團輜重隊に入隊し、明治三十五年十二月輜重兵伍長となり、翌年十一月除隊となる。滿洲の風雲急を告げ、日露間の國交こゝに斷絶となるや、十月動員召集に應じ、留守隊勤務となり、勳功により、勳七等に叙せらる。明治四十一年天瀬に於て、花菴商を開業し、岡山地方は勿論、京阪神、名古屋、東京、横濱遠くは奥羽地方へも、その販路は廣く、各地の博覽會、共進會、金銀牌賞を受し、十數回に



伊藤賢一

及び、大正五年岡山縣疊表同業組合代議員に當選、同七年同組合第一部長に當選、同十三年再び代議員に當選現在に至るまで、重任をなし、其他各種公職にあり、花菴販賣會副組長をも務めてゐる。日蓮宗を信じ、謠曲、生花の趣味あり。

板倉賢一

君は苦田郡香々美南村の人、明治十九年二月を以て其郷に生る、明治四十一年東京青山學院高等科を卒業し、初め神奈川縣橫濱第一中學校教諭に任せられ、後一年志願兵として鳥取第四十聯隊へ入營し、陸軍歩兵少尉に任官、後奈良縣郡山中學、長野縣諏訪中學、兵庫縣伊丹中學の各教諭を経て大正十年岡山縣一中教諭に任せられ現に教頭として其職にあり、教育家には稀に見る氣宇と膽力を備へ金

店となる、晩年推されて市會議員、商工會議所議員となり社會的に貢献する事亦多し、眞に立志傳中の人と謂ふべし、君はこの長男にして早大商科を卒業し父逝去の後母を援けて家業に従事す、君は父君と必ずしも其の型を一にせず元氣潑潑壯年の意氣に富み政治に興味を持つ、世間將來に囑望するところ多し。

藤家は舊池田家の家老の家柄にして君二十四才にして教育界より退き、小壯氣鋭をもつて實業界に轉じ、岡山縣特産の花菴の改善と發達に意をそそぎ明治三十五年同業組合長に推され三十七年市會議員、市參事會員、市會副議長後市助役に推される、君の岡山市助役時代の實績の中より左に二三を列挙す。市外墓地移轉、家屋稅實施、電柱稅徵收等皆君の提案也。現に市會議員、市會議長たり。

家本爲一 岡山市内山下

君は明治十九年川上郡日里村に生る。君は

鐵をも透すてふ概あり。家族は夫人との間に二男二女あり、園藝を好む。

板谷 浩

君は明治四年岡山縣撫川町に生る。明治二十六年岡山師範學校卒業玉島、倉敷、日生、福濱、充



知、純精等の小學校長及び津山、岡山の中學校教諭、川上、兒島、和氣

等の郡視學等滿三十八ヶ年間勤績す實に本縣教育界の功勞者たり讀書を好み、園藝を嗜む。

井上 清一 岡山市門田東山

君は明治十七年兒島郡庄内村に生る、明治四十年縣師範卒業直後成績拔群職を同校に奉ず、幾もなく動物、植物、生理等の中等教員檢定試験に合格し同校教諭となる。在職八ヶ年、愛媛縣師範、大分高等女學校教諭を経て大正十二年岡山高等女學校に歸任傍ら岡山縣史跡名勝天然記念物調査委員同報告編纂の任に當る。偶々大正十五年攝政殿下岡山縣行啓のこゝあ



り君官選に依り本縣産珍奇生物に關し親しく御説明の光榮を荷ふ、更に今次 陛下縣下へ行幸の際は再び御召を蒙り生物に關する御説明を言上するの榮譽を重ねらる。徳望高く近代の新智識として帝國教育界の一權威者たるに愧ぢず、君從六位高等官五等たり。

井口 謹一郎

君は明治廿七年岡山市上之町五三に生れ、上之町の吉田吳服店といへば表八ヶ町の中にも老舗と稱せらる、先代井口群治郎氏の創業なり、先代は一店員より身を起し、所謂拮据勉勵苦心慘憺、商人は信用第一義をモットトとして、遂に今日の盛況を見上之町一流商

長を以て其郷に生る、明治四十一年東京青山學院高等科を卒業し、初め神奈川縣橫濱第一中學校教諭に任せられ、後一年志願兵として鳥取第四十聯隊へ入營し、陸軍歩兵少尉に任官、後奈良縣郡山中學、長野縣諏訪中學、兵庫縣伊丹中學の各教諭を経て大正十年岡山縣一中教諭に任せられ現に教頭として其職にあり、教育家には稀に見る氣宇と膽力を備へ金

板倉賢一

店となる、晩年推されて市會議員、商工會議所議員となり社會的に貢獻する事亦多し、眞に立志傳中の人と謂ふべし、君はこの長男にして早大商科を卒業し父逝去の後母を援けて家業に従事す、君は父君と必ずしも其の型を一にせず元氣潑潑壯年の意氣に富み政治に興味を持つ、世間將來に嚆望するところ多し。

井上 憲 岡山市瓦町八十一ノ二

君は明治六年の出生にして、同二十九年三等看護長に任せられ退營の後通信事務に従事し郵便電信書記補となり其後職を轉じて明治三十四年營林主事補に任命せられ、同三十六年一月倉敷小林區署長就任す、同年五月營林技手に任せられ明治三十七年四月充員召集に應じ同年七月二等看護長に昇進し、又もや同三十八年一等看護長に榮進退職の後同三十九年岡山市書記に任命され誠心誠意職務に盡瘁し累進して明治四十三年勸業掛長兼衛生掛長を命ぜられ、大正元年衛生課長に就任し大正十三年岡山市主事に補せられ岡山市收入役に推され助役に進み手腕を振ひ優退せり。

池田 弘 神戸市松本通六丁目六

君は明治十九年小田郡金浦町吉濱に生る、明治四十三年岡山縣師範學校卒業後郷里金浦小學校を始めとして縣下小學校に對務の後兵庫縣に出向を命ぜられ神戸市小學校に轉勤數ヶ年間初等教育に従事す。氏は少年時代より書を好んで描き常に其の技を磨く最近洋畫に至りては妙技を得て大いに賞讃を博しつゝあり、殊に側ら骨董品を愛玩しその觀識をよくし、神戸市内に於ける數寄者の間に知られ一權威者たり、夫人は又音樂に堪能なり。

石津 昌 岡山市門田屋敷

君は慶應元年生れ、少壯より育英に志し縣師範を出づるや或は上道高等小學校に或は岡山高等に、一年の長岡村正義氏を校長に戴き



高潮して實踐窮行、稀に見る徳の教育家行の

教化者たり。宜なり名聲全國に噴々衆望を集む。長男純一氏東京醫專を卒業して自宅に開業せらるゝや、市民の惜別を後に高踏優退して趣味の後生を娛し、出で、は後輩の諮問に應答して適従を誤らしめず、自ら高所に立つて市政自治に家庭に社會に大局を指導する、眞に『終生を教化に捧げん』との言に背かざるの士なり。

池田信太郎 岡山市内山下七

明治九年眞庭郡八束村大字下長田に生る。早稲田大學法科を卒業後會計検査院屬を振り出しに、



東洋拓殖株式會社を經て株式會社岡山縣農工銀行に入り、現在支配人と

岩根善七 岡山市西大寺町

明治十四年游賀縣坂田郡に生る。十六才にして京都北岡吳服店に店員となり、大正五年の春より岡山に轉じ北岡支店長として務め、七年夏より北岡支店を津の國屋吳服店となし店を引き受け今日に至る。津の國屋吳服店は、元京都北岡家の經營なりしが明治十七八年頃より京都より出張販賣をなし今日の大をなしたるものにして、岡山市中に於ける信用ある商店として繁榮せり。親鸞上人を信仰し書畫骨董を愛玩す。

池本勇 岡山市國富五七〇

岡山縣農工銀行地方課長
明治二十九年赤磐郡高陽村正太郎氏の長男に生る。大正八年第六高等學校を卒へ、全十一年東大を卒業し直に日本勸業銀行に勤務し全十五年岡山縣農工銀行に轉じて現在に至る。君曾ては育英に志し岡山師範に在り勢ひ縣下各方面に舊知多く、又性來明敏懇切蓋し職責遂行に好評ある故なきにあらざるなり。ゴルフ、撞球を娛しむ。

井上武志



明治三十三年迄岡山醫大附屬病院產婦人科にとまりて研究し、向學の念強く大正十三年十二月より同十五年七月迄姫路市小國病院にて奉職勤務、大正十五年八月より阿哲郡新見町に於て開業し今日に及んでゐる。令夫人との間に一男二女あり。

稻泉量四郎 廣島縣御調郡三原町

君は明治七年廣島縣豊田郡南生口村に生る。小學校卒業後至誠館及日彰館に學び。明治三十年廣島縣御調郡三原小學校訓導に就任、同四十年廣島縣御調郡書記として學務係を命ぜらる。其後山梨縣屬に任せられ更に同縣南巨摩郡及南都留郡に課長とし就任、北都留郡長に任せられ高等官六等に叙せらる。郡役所廢止に依り三原町に歸り尾道銀行三原支店長となる、然して銀行合併に依り備前銀行と改稱せられ現に其職に有り。正七位勳七等たり



大正四年並に昭和三年の兩度御大典に際し賜饗を賜ひ重ねて昭和五年賜饗の光榮に浴したり。日本赤十字社、愛國婦人會、大日本蠶糸會等より表彰され海軍々事功勞者として海軍大臣より表彰せらる。

池田一二一 廣島縣會議員

君は明治十七年廣島縣安藝郡音戸町に孤々の聲をあげ、長ずるに従ひ政治に身を捧げんと志し、明敏なる頭腦を只管政治方面の研究に致し、大正十二年選ばれて縣會議員に當選地方自治開發のために盡瘁し、その功績僅少なからず、地方民の信頼益々篤きをなし、改選

に當つて再び當選し、縣會議員として地方發展の爲め努力を重ねつゝ今日に至る、一方自町の町長に就任してその手腕を發揮し大いに事蹟を擧げつゝあり、音戸町産業組合長、日



岡山縣農工銀行地方課長

池本 勇 岡山市國富五七〇

明治二十九年赤磐郡高陽村正太郎氏の長男に生る。大正八年第六高等學校を卒へ、全十一年東大を卒業し直に日本勸業銀行に勤務し全十五年岡山縣農工銀行に轉じて現在に至る。君曾ては育英に志し岡山師範に在り勢ひ縣下各方面に舊知多く、又性來明敏懇切蓋し職責遂行に好評ある故なきにあらざるなり。ゴルフ、撞球を娛しむ。

に浴したり。日本赤十字社、愛國婦人會、大日本蠶糸會等より表賞され海軍々事功勞者として海軍大臣より表彰せらる。

廣島縣會議員

池田 一 一一

君は明治十七年廣島縣安藝郡音戸町に孤々の聲をあげ、長ずるに従ひ政治に身を捧げんと志し、明敏なる頭腦を只管政治方面の研究に致し、大正十二年選ばれて縣會議員に當選地方自治開發のために盡瘁し、その功績僅少ならず、地方民の信頼益々篤きをなし、改選

に當つて再び當選し、縣會議員として地方發展の爲め努力を重ねつゝ今日に至る、一方自町の町長に就任してその手腕を發揮し大いに事蹟を擧げつゝあり、音戸町産業組合長、日本帝國在郷軍人會安藝郡聯合分會顧問等の榮職にあり。漁網商を業とし、乘馬に興味を持つ。



岩本 護

君は明治十四年岡山縣津山市南新座に生る、明治四十一年京大福岡醫科大學今日の九大醫學部卒業後明治四十四年佐賀縣東松浦郡相知病院長に奉職し同四十四年辭任し久米郡倭文中村に於いて開業す、大正六年より現住所津山市南新座に開業し今日に至り。君は本職の外津山市瓦斯株式會社及び津山牛乳株式會社取締役の重職にあり。同君は狩獵を唯一の趣味となし現に苦田獵友會々長なり。

石川 保 太郎

君は明治十二年廣島縣福山市三吉町に生れ明治三十年私立成章館を卒業後獨力勉學し、



明治三十二年廣島縣深安郡書記に任ぜられ大正五年八月其職を辭し、翌月福山市

書記を拜命し第一課及第二課長として就任して以來その手腕を認めらるゝに至り、大正十一年福山市主事に榮進し益々市政の爲寢食を忘れて活躍し一層その信望厚きをなし昭和三年福山市助役に當選し市長を助けて市政の改善開發に餘念なし。

本能會々長

岩田 美 妙

東京麴町區富士見町君は美作國津山の人、津山中學に於ける最初の習字教師平井無香翁の三男にして明治十



二年出生、津中を経て現大阪商大の前身大阪高商に學び業を卒へ、東京において實業に従事す、其後日露役に従ひて功あり、在京中明治の末偶々令嬢の難症に罹り、百方術を盡して醫療を施すも効全く空し、愛々の情禁せず靜かに一室に閉ぢて究通の理を索め、靈感を得て無藥療法を創見す、假名して本能法と謂ふ、之れ現代に行はるゝ生物自然の攝理に副ひたる玄妙不可思議の心術的療法にして學界を驚かし、得難き世界的發見として醫界の權威者齊しく口を揃へて嘆美激賞す、愛嬢の救命救はれて醜然意を決し財界を去つて爾來二十年本法を公布して普く社會の苦惱救済に渾心を傾注す、本能會の設立は君が尊き愛兒を賛仰し有志に依りて組織され國體精神の涵養と相結んで今や六千有余の會員を有す。

岡山市長

從六位 石原 市三郎

岡山市上西川一八六ノ十一昭和六年二月御津郡大字田益に生る。三十七年大藏省稅務監督局稅務屬神戸在勤を任命せられ、三十九年文官試驗に合格、四十二年大阪監督局在勤を拜命、大正三年副司稅官に任じ豊岡稅務署長に補せられ、四年甲府署長に轉じ、九年大藏省主稅局地價調査課に轉勤、十一年司稅官に任じ兩國署長全年帝都復興院事務官兼稅務監督局事務官、同院土地整理局施業課兼東京稅務監督局に勤務、十三年東京市主事に任じ區劃整理局庶務課長となり、監査課長、收納課長を經昭和四年職を退き、再び八年九月東京主事に任じ財務課局經理課長となる。今回選ばれて郷土に錦を裝り九年二月二十五日岡山市長に就任す。蓋し十五萬市民は勿論百三十萬縣民の待望甚大なり。

乾 利 一

岡山市宇野町濱

君は大正四年東大獨法科出身。岡山縣屬兼警視として來任後本縣和氣郡長となる。之れ君が岡山縣に縁故を持つ第一步にして、續い

て地方官として各府縣に轉任、理事官、警察部長、内務部長と順次累進、行政官として各地に非凡の材幹を示し令名を馳せ謳はる。大正十五年牛尾梅吉氏中國電氣株式會社社長たるに及び女婚の故を以て、君を招致し取締役總務部長とし會社經營の衝に當らしむ。之れ君が再び岡山縣に縁故を持つに至りし所以なり。官界に辛勞せる經驗あるを以て今日の會社經營の重任に堪ゆるに充分なり。今や卓越の材幹は着々として其の業績に顯はれ、岡山一流の實業家として聲望日々擡頭しつつあり、君の前途實に洋々春海に望むが如し、他日の大成や期して俟つべきものあるを信ず趣味は俳句、宗匠として其名全國に聞ゆ。

岩田竹三



君は明治六年岡山町六十二番地に生る。岡山農學校卒業の上藥劑師試験

に及第し藥劑師免狀を受く。現藥局主なり。岡山市會議員岡山稅務所管内營業稅調查委員、岡山市勸業常設委員西大寺町總代等たりしことあり。現に岡山京橋郵便局長、岡山稅務所管内所得調查委員岡山縣岡山市部濟世委員なり。家は眞言宗を信仰し趣味は謠曲にして、濃厚寡言の君子人望高く嗣子亮一郎氏又郵便事務にたづさわる。

石村金一

君は有名なる上道國民學校の管理者として地方青年の教育に多年盡瘁せる篤行者なり。同校顧問矢野恒太氏は本邦におけるデンマルク研究の權威者にして同校は博士の指導にもとづきて、彼の進歩せるデンマルク農業法をもつて他校の追從をゆるさず、その創立は昭和四年の九月にかゝり雄神



御休外に可知村より委託生あり。青訓生二百

人生徒二百五十餘人を集めて隆盛活氣に滿つ。現今農園四丁山林三丁餘の開墾をなし、外に試作田六反歩を附屬とす、すべて石村翁の所有地を提供せるものにして、果物其他の栽培をなして年々良成績を挙げつゝあり。君は金光教の信者にして農業を趣味とし、土の哲理を説いて深遠終始若人と共にありて熱心指導にあたるなり。



石 戸 石 君は明治二十年久米郡吉岡村大字山之

上に生れ、現在は全村久米に轉住し岡山縣矢掛中學を卒業後岡山師範學校第二部を卒業、久米郡弓削小學校に三ヶ年除大正五年久米郡山之上小學校訓導兼校長に轉任し、大正十五年久米郡第二吉岡小學校訓導兼校長、昭和五年吉岡小學校訓導兼校長に轉任し、吉岡公民學校長、吉岡青年訓練所主事を兼務す、君陸上競技テニスに趣味を有す。

石森銀次

君は明治十一年埼玉縣川越市川越に生る。明治三十二年和佛法律學校を卒業し、同三十八年文官高等試験に合格し、同四十年仙台稅務監督局事務官として就任し、大正七年熊本稅務監督局に、大正八年九龜監督局に、大正十二年名古屋監督局に轉任、大正十四年仙台地方專賣局長として就任す、その後岡山地方專賣局長として岡山に來任し當時は岡山市南方に居を構ふ、濃厚篤實なる君の人格はその赴任地に於て常に衆望を得、業績頗る揚り、夫人との中に二男二女あり。



石川保平 岡山市山下町一 作州の豪農石川蘇平氏の長男として明治廿三年生る。早く嚴父

の死に遇ひ家業を繼ぐべく餘儀なくせられ津山中學卒業後は専ら家事をなし側ら地方の開發に力む、謹嚴なる父君の型を受けて徳望一郷に高く景仰の的となる、大正八年地方電燈供給を思ひ立ち川上雄四郎、前原亮等と相謀り献身的犠牲を拂ひて遂に勝田電燈株式會社

生る、同家は世々醫を業とし其祖先は幕末の頃より明治初年學制發布に至るまで代々家業の傍家塾を開き地方子弟の教化に務めたり大正十三年地方有志者相謀り其遺徳を不朽に傳へんため居宅の側に地を下し墓賢碑を建設せり當代石田猛君は京都醫專卒業後京都醫科大學に研究中郷黨の懇請に依り大正五年歸郷開



同校顧問矢野恒太氏は本邦におけるデンマルク研究の權威者にして同校は博士の指導にもとづきて、彼の進歩せるデンマルク農業法をもつて他校の追従をゆるさず、その創立は昭和四年の九月にかゝり雄神芳野平島御休外に可知村より委託生あり。青訓生二百



赴任地に於て常に衆望を得、業績頗る揚り夫人との中に二男二女あり。平氏の長男として明治廿三年生る。早く嚴父作州の豪農石川蘇平保川石岡市山下町二

の死に遇ひ家業を繼ぐべく餘儀なくせられ津山中學卒業後は専ら家事をなし側ら地方の開発に力む、謹嚴なる父君の型を受けて徳望一郷に高く景仰の的となる、大正八年地方電燈供給を思ひ立ち川上雄四郎、前原亮等と相謀り献身的犠牲を拂ひて遂に勝田電燈株式會社を創立したるは事業界に名を成す第一歩なり後岡山市に居を移し以來電氣界に肥料界に活躍見るべきものありしが慧眼なる君は事業界の不振を早く洞察し一切の事業を一時打切りて時の至るを待ちつゝ、今やその雌伏時代なり乗馬を最もよくし其他多方面に興味を持つ。

岡本於義太 岡山市弓之町

岡山刀圭界の元老、石本病院長として、その名は廣く我國學界に知られ、外科の技術においてはその右に出する者なし。人格崇高にして聞え醫業を以つてその天職となす。書畫に興味あり。長男義憲君は醫學博士にして、京大醫學部卒業。次男雅男君京大法科大学院。三男禮三大學在籍外一男あり。長女加壽子嬢、三井物産大連支店長松本文彦氏へ嫁し、次女信子嬢、京城病院耳鼻咽喉科醫長醫學博士江馬正夫氏に嫁す。

池崎忠孝 大阪府北河内郡四條村野崎

君は明治二十四年阿哲郡萬歲村に生る。吹屋町は君搖籃の地たり。家は代々農を營みしが夙に登龍の志あり、高梁中學第六高等學校を経て東大法科を卒業、文才に富み在學中より既に雅號赤木桁平を以て盛に文藝及思想評論に執筆して名あり。大正二年夏目漱石の門に入り全六年萬朝報社論説部に入社したるも養家の業務毛莫大小の製造販賣支配の爲に歸阪し傍ら辯護士を開業して又常に文筆に親み著書甚だ多し。就中『米國恐るゝに足らず』の名著はよく當時讀書界の待望に添ひ一躍して洛陽の紙價を高からしめしもの、外に『藝術上の理想主義』『夏目漱石』『高山樗牛』『太子諸行讚』『近代心の諸象』近くは『日本屈すべからず』等の名著あり、蓋蓄無盡藏行文流暢。養家は大阪一流の莫大小業者にして所謂近江商人の典型的成功者君居常その家風、家憲に善處大成し之を後進並に郷黨子弟にもとき自ら遵奉して懈らず、君亦眞面目なる社會教化の偉勳者たり。

石田 猛

君は明治廿六年九月岡山縣苦田郡奥津村に

生る、同家は世々醫を業とし其祖先は幕末の頃より明治初年學制發布に至るまで代々家業の傍家塾を開き地方子弟の教化に務めたり大正十三年地方有志者相謀り其遺徳を不朽に傳へんため居宅の側に地を卜し墓賢碑を建設せり當代石田猛君は京都醫專卒業後京都醫科大學に研究中郷黨の懇請に依り大正五年歸郷開業して祖父の業を繼ぎたり、現在郡醫師會理事を勤め又岡山縣濟世顧問、村會議員、學務委員及び商議員等の職を奉じ地方の信望最も高し。(墓賢碑寫眞追録にあり)

石井謹一郎

君は明治二十七年岡山縣吉備郡吳妹に生れ大正二年岡山師範學校本科第一部卒業、倉敷小學校、撫川小學校及び吉備郡大和、總社校を経て昭和三年同郡水内村維新小學校長に進む。續いて昭和五年穂井田小學校に榮轉現在に及ぶ。君の嚴父も又吉備郡教育會にあつてつとに先覺者として知られ教育事業の開拓にあたつて多年の功績顯著なり。君は現に同會体育部々長として農村の青年に體育を奨勵し深甚の留意を致せり、けだし健全なる肉体に健全なる精神の宿るべきをもつてなり。補習學校長青年訓練所主事を勤め二男三女あり。



石井照雄 岡山市小橋町一七六

君は明治廿六年久米郡大井東村に生れ、大阪市大阪商業學校出身にして多くの友人達が會社銀行に入りて俸給生活を目的とするを外に見て獨力大いに成さんと直ちに自己の趣味とする「カメラ」パターベビーの販賣に従事し相當の成績を擧ぐるに及んで現位置に開店更にラジオ部を開設す、此の意氣と活動は現下青年に教ゆること多かるべし眞に將來囑望すべき人なり禪宗に歸依す、スキー登山庭球は君の好む所家庭に夫人二男二女あり。

石井 徹 顯 兒島郡宇野町田井

明治三十八年大阪府立高等醫學校卒業直ちに同校助手となり翌年十月同校助教教授に進み

全四十五年同校を辭して歸郷大正八年現地開業今日に及ぶ、全十年論文提出醫學博士の稱



得す病 理細菌 學の内 主とし て核結 菌に就 き研究 造詣深

く地方に於ける權威者なり。家は眞言宗にして歸依厚く研究又深し讀書を好み忙中閑あれば園基をよくす。

石原 經 太郎

君は明治二十五年上道郡芳野村に生れ、明治四十五年岡山縣津山中學を卒業、早稻田大學に學び、大正五年其本科政治經濟科を卒へて同大學研究科に在りて勉學すること一ヶ年歸省の後材木業に従事し、又公職として産業組合中央會岡山支會主事に擧げられ、一面村政に參與し、村會議員たること八ヶ年、選ばれて芳野村長に當選す。農政經濟には最も明



るく村 治に善 處し傍 ら上道 郡農會 副會長 産業組 合長、 保証責

任岡山縣信用組合理事、消防組頭等の要職に鞅掌し、又常に中堅青年の指導に努力して以て今日に至る。

組 合 長 石原 奎 三郎

君は明治十四年上道郡神村大字福治に孤々の聲をあげ、本縣下に果樹園藝の稍々認められんとするや卒先斯界に精進し後進を誘發する處あり、明治四十二年神村信用組合の創立さるゝや推されて組合長となり爾來今日に至るまで繼續重任し、只管地方産業開發のため努力し、組合の業績は隆々縣下有數の好成果を擧げつゝあり、一方雄神村果物販賣組合を創立して組合長たり、果樹栽培を主とする雄神村の生産品販賣に大いに貢献する所ありその信望高し。昭和五年 天皇陛下本縣下

へ行幸の際其の産梨晚三吉は天覽の榮を得尙御買上の光榮に浴したり。

石原 多 喜 治 邑久郡牛窓町

君は明治十八年邑久郡國府村に生る。明治三十八年岡山縣師範學校を卒業、邑久郡明德尋常小學校長として花々しく教育界へのスタートを切り、明治四十三年邑久郡邑久高等小學校訓導となり、四十五年邑久尋常小學校長大正九年邑久郡鹿忍小學校長、昭和六年三月三十一日邑久郡牛窓尋常高等小學校長となり現在に及ぶ。昭和六年勳八等瑞寶章を賜はり



昭 和 七 年 二 月 奉 任 官 を 以 つ て 待 遇 同 年 四 月 從 七 位 に 敘 せ ら れ

邑久郡校長會長等の名譽職となる。二男二女あり。

石原 義 武

君は明治二十九年六月岡山縣上道郡浮田村北方に生る、大正五年岡山縣師範學校を卒業し同年四月都窪郡中島小學校訓導となり、大正七年上道郡西大寺小學校訓導に任じ、大正九年中文部省の中等教員檢定試験に合格し、十年津山中學校教諭に任命され、同十四年母校岡山縣師範學校附屬に轉じ、昭和五年同校



教諭に 任せら れて 本日 至る、 君が 才は 天的 才に して 帝

展へ出品して入選既に四回に及ぶ君趣味に富み柔道二段の達人なり。

板野 友 造

大坂市西區江戶堀南通一ノ四八 吉備郡足守町出身明治七年板野金次郎長男として生る。夙に備中の儒者犬飼松窓の漢學塾に入りて之を修め明治法律學校を卒へ明治

舎と練習所を設け廣く縣の内外よりの青年に短期教育を施し多くの連轉手を出す。

茨城縣常南電氣株式會社支配人

石 井 源 吉 岡山市東山中町

三十四年判檢事試験に合格、司法官試補に任せられて高松裁判所に在ること半歳明治三十五年官界を去り大阪に轉じ辯護士を開業す。資性廉潔豪落にして俠氣にとみ早くより政界に志あり。先輩犬養木堂に私淑し且信賴さるゝこと最も深く、常に翁と終始を共にせり。始め革新俱樂部に籍を置きて其の中堅となり俱樂部の政友會と合体するや犬養翁と共に全

石原 幸三郎

君は明治十四年上道郡維神村大字福治に孤々の聲をあげ、本縣下に果樹園藝の稍々認められんとするや、卒先斯界に精進し後進を誘發する處あり、明治四十二年雄神村信用組合の創立さるゝや、推されて組合長となり爾來今日に至るまで、經營重任し、只管地方産業開發のため努力し、組合の業績は隆々縣下有數の好成果を擧げつゝあり、一方雄神村果物販賣組合を創立して組合長たり、果樹栽培を主とする雄神村の生産品販賣に大いに貢獻する所ありその信望高し。昭和五年 天皇陛下本縣下

君が畫才は天才的に富み柔道二段の達人なり。

板野 友造

大阪市西區江戶堀南通一ノ四八

吉備郡足守町出身明治七年板野金次郎長男として生る。夙に備中の儒者犬飼松窓の漢學塾に入りて之を修め明治法律學校を卒へ明治

舎と練習所を設け廣く縣の内外よりの青年に短期教育を施し多くの連轉手を出す。

茨城縣常南電氣株式會社支配人

石井 源吉 岡山市東山中町



岡山尋常中學卒業、攻玉舎土木科を卒へ岡山市役所土木課技手、大阪市、佐世保、長崎市土木技師等を歴任して後或は吳軍港内、或は鴻島精練等の工事に關與し爾後東上現在に至る。夫人伊勢、長女松枝嬢共に初等教育に従事し養嗣一氏は岡山縣工業學校出身、岡山地方專賣局技手たり。

石原 富次郎 岡山市天瀬



君は先代富次郎氏の長男明治二十八年生れ、舊信成とて呼び昭和二年家督を相續して襲名す。

岡山豊を出で東京中央大學商科本科を大正九年卒業後、三幡輕便鐵道運輸部長たり。その他天瀬南町戸主會、自警團、町壯年會等の首腦部にありて貢獻し、昭和四年七月選ばれて岡山市會議員となる。

その政治、經濟に對する抱負、都市經營に對する理解商工實業に關する識見等蓋し將來に囑望さるゝところ大なり。

公認東山自動車學校長 石原 正信 岡山市西川



岡山 市天瀬 石原富次郎氏の次男 現在富次郎氏 吉備商

業學校を卒業し、性來機械工學に興味を有し遂に自動車の研究を遂げ巨資を投じて自動車學校の經營を企圖し、昭和五年獨立の經營に着手し縣の公認を得て東山公園玉井宮下に校

石田 禎作

大阪市此花區上福島中三丁目

君は明治十一年上道郡可知村目黒、石田太郎三氏長男に生る。生家は代々農業小學校を終へ父を輔けて家業に就きしが、農業の經營



自己の適性に於ける 明治三十八年 大阪に於ける 牛乳搾

取業を有望視して上阪企業に従ふこと數年。尙その活眼は將來莫大小足袋の需用益々激増の傾向あるを看取し搾取業を弊履の如く打捨て、單獨メリヤス足袋カパーの製造販賣に着手せり。時に大正元年の秋にして君の發案にかゝる製品は体裁並堅牢卓越忽ち名をなす君愈々規模の擴張を圖り殊に大正七年ベツチンを以て莫大小に代へ益々内外の需要と註文殺到し全九年にはメリヤス足袋を併せて製造全種類似品の最高位に上る。今日にては丸石印毛足袋の專業に代へ工場を大阪府北河内郡門真村並市内上福島中三丁目の二ヶ所に建設福助足袋の次位に上り企業界に於ける大成功を收むるに至れり。

石原 專一

大阪市西區江之子島 大阪府官舎



岡山縣吉備郡福谷村康二氏の長男明治卅三年生。岡山一中六高を経て大正十三年東大法律部政治科卒業。北海道廳警務課長、長野縣高等課長に歴任、昭和五年大阪府警察部調停課長に榮轉せり。昭和五年湯淺伸銅株式會社爭議に當り全國第一回勞働爭議調停法調停委員となり次で昭和六年日本エナメル株式會社勞働爭議等に關係して手腕を認められ新進調停官として名聲を擧げ前途を囑目せらる。

石原 辨造

神戸市西柳原八九

岡山市下西川黒崎富造氏三男明治七年生。幼少の頃石原家を繼承明治二十六年中學を卒へて神戸鐵道局に奉職。全三十一年獨立藥種商を開業して斬然全業者間の信望を鐘め數年を経ずして神戸市藥種賣藥全業組合副長に擧げられ重任三期に及び現在その相談役たり。大正十年神戸市湊西區會議員に、全十四年神戸商工會議所議員に當選され、市商工業界に重きを爲す。



庫縣方面委員、神戸地方裁判所商事調停委員、神戸市湊西區明親教育會會長等の公職を兼ね又社會事業家として徳望最も高し家庭には夫と三男四女あり。

池澤 原次郎

君は明治十六年苦田郡久田村黒木に生れ天性文才に富み若冠郷黨の小學校に奉職せるも明治三十年丸龜市に於ける讀岐日日新聞社に就職新聞記者と爲る。當時年餘僅に十六才。三十七年高松市讀岐實業新聞に入る。同紙は

池田 遙村

京都市左京區下鴨茂中川原七

岡山縣淺口郡玉島町大字乙島に明治二十八年生る。池田文四郎氏長男十七歳にして畫道に志し當時大阪にありし松原三五郎氏の天彩畫塾に入り大正九年二十四才にして上洛竹内栖鳳畫伯の門に就き愈々刻苦研鑽を積む。傍

當時讀岐鐵道の機關紙にして社長大塚惟明氏に認められ大にその知遇をうけ中途徴兵に合格騎兵隊入隊、日露役に從軍戰功により金鵄勳章功七級を得て凱旋偶々大阪時事新聞社の創刊に際し全社に入社し再び天賦の筆力を以て操觚界に驥足をのびし再び大塚惟明氏に招かれてその社長たる南海鐵道株式會社乗客課長の椅子に就く。時に明治三十九年。爾來君は南海電鐵社長の寶刀として縦横の劃策を献策し就中夏季海水浴客の吸收策のため機關紙南海新聞を傍ら發刊して阪堺電軌兩會社と競争勝利を博しぬ大正九年三度大阪日日新聞の副社長となりたるも大正十一年南海電鐵に復歸し庶務課長の重衝に任せり。性豪放而かも敏腕電鐵業界切々の利き者として歌はる日本新開派の俳句をよくす。

辯護士 石黒 行平

君は岡山縣に在る由自黨以來の名士にして政友會の元老辯護士石黒涵一郎氏の實弟、夙に軍人を志望し教導團に入り日清戰役に從軍せり、彼の有名なる軍歌『道は六百八十里；』は實に君の出征における尊き體驗より出でたる詩藻の發現なり。後事業を畫して台灣に渡り間もなく東京に出でて獨學明治法律學校を卒へ明治三十四年初めて辯護士試験に及第大阪に開業せり。氣概と膽力の人として俠氣にとみ國士肌の風格を以て浪華法曹界に畏敬さる、丈千と號し俳偕をよくす。

石田 藤一

兵庫縣御影町師範學校東入

君は吉備郡足守町の人。明治二年十月石田儀平氏長男に生る。幼少松浦塾に入りて漢字を學び十八才の時上阪。山内宇之助商店に入り仲買業見習として大に努めたり、偶々父の死に會して飯郷。眞田帽子の將來あるを思ひ母堂と共に之に従ひ意匠考案より販路の擴張に勵み、自ら中國九州路を行脚して阪神製品を凌駕するの好評を博し、明治廿七年再び大阪に出で店を江戸堀に設け帽子卸商として一段の活動をなす。其の後毛織帽子の製造に變り店舗を瓦町三丁目に移すと共に、雜貨輸入部を併置し兩業共に發展して帽子製造業有數の商店として知らるゝに至れり。後年之を他に經營せしめて餘世を育英事業に投じ隠れたる後援者として萬金の學資を有爲の青年學徒に給し以てその大成を樂しむ。近代稀に見る人格者と謂ふべし。

互生品保險會社を創立するや入りて醫務に鞅掌數年ならずして獨逸エナ大學に留學しドクトルメヂチネの學位を得保險醫學專攻の目的を以て留學せしものは本邦に於ては全氏を以て先鞭とす。歸朝後は全社の發展に任じ世界の大保險會社を醸成せしめたり。岡山市野田屋町の産慶應三年生れ。

庫縣方面委員、神戸地方裁判所商事調停委員、神戸市湊西區明親教育會會長等の公職を兼ね、又社會事業家として徳望最も高し家庭には夫一人と三男四女あり。

池澤原次郎

君は明治十六年苦田郡久田村黒木に生れ天性文才に富み若冠郷黨の小學校に奉職せるも明治三十年九龜市に於ける讀岐日日新聞社に就職新聞記者と爲る。當時年齡僅に十六才。三十七年高松市讀岐實業新聞に入る。同紙は

死に會して飯郷。眞田帽子の將來あるを思ひ母堂と共に之に従ひ意匠考案より販路の擴張に勵み、自ら中國九州路を行脚して阪神製品を凌駕するの好評を博し、明治廿七年再び大阪に出で店を江戸堀に設け帽子卸商として一段の活動をなす。其の後毛織帽子の製造に變り店舗を瓦町三丁目に移すと共に、雜貨輸入部を併置し兩業共に發展して帽子製造業有数の商店として知らるゝに至れり。後年之を他に經營せしめて餘世を育英事業に投じ隠れたる後援者として萬金の學資を有爲の青年學徒に給し以てその大成を樂しむ。近代稀に見る人格者と謂ふべし。

池田遙村

京都市左京區下鴨茂中川原七

岡山縣淺口郡玉島町大字乙島に明治二十八年生る。池田文四郎氏長男十七歳にして畫道に志し當時大阪にありし松原三五郎氏の天彩畫塾に入り大正九年二十四才にして上洛竹内栖鳳畫伯の門に就き愈々刻苦研鑽を積む。傍ら京都市立繪畫專門學校に學び昭和元年業を卒へ四條派による寫生畫に特殊獨歩の境地を開拓して彩筆益々冴へ大正九年帝展に『南郷の八月』次で『雪の大阪』第十一回帝展には『鳥城』等を出品して入選就中雪の大阪及鳥城は特選の譽を獲得せり。曩には畏くも久邇宮家より御下命を蒙つて花鳥の大作を揮毫献上の光榮に浴す。昭和六年小野竹橋氏と共に擧げられ帝展日本畫推薦委員たり。旅行に趣味を有し先年來多大の犠牲を拂つて日本全國寫生風景畫の完成に着手して負笈東西に旅行其の過半を完成するに至る。家庭にはレイ子夫人一男一女あり。

岩崎義人

大阪市南區鯨谷西ノ町六ノ甲

君は安政五年六月兒島郡味野町に生る、岩崎虎平氏長男、君は夙くに家業眼科醫たらんとして東都に苦學し醫師の免許狀を獲得、錦衣飯郷して開業せり。後更に大成を期し一家を纏めて大阪に移り心齋橋南詰に岩崎眼科醫院を開設今日に至る。理財の道に長じ現に大阪府多額納稅者の一人たり。公私各種の社會事業に盡瘁し大阪市會議員に當選すること數次斯界に重きをなす。

池田長康

明治十六年舊藩米澤に生る。

令兄千坂高雅氏は英國に學び内務省權少書記官より知事に榮達した人で石川縣知事として善政を敷き、岡山縣知事としては明治十七年より二十七年に及ぶ、在任十年間治水土木教育に盡力し非常に効績があつた。男の池田家に入つたのも令兄の在官に由來す。明治四十四年京都帝大法科の出身にして大正二年襲爵し貴族院議員に互選せらるゝ事二回貴族院の闘將たり。嘗て岡山市に山陽商業銀行を起し其の頭取となり地方産業界に貢献せられたる効枚舉に遠なく郷土の爲奮闘せらる。

石岡繁太郎

(第一生命醫長)

神奈川縣鎌倉町大町一一六〇
保險界の元老矢野氏と第三高等醫學部の同窓、明治二十二年同校卒業後矢野氏の第一相

石田直吉

東京大森區入新井六ノ四六二

明治十六年十二月上道郡光政村政津出生正八位陸軍砲兵少尉
大倉商事株式會社取締役
君は俊造氏の長男、少壯にして志を立て出でて大阪高等工業學校機械科に入り明治四十年三月卒業するや直に大倉商事會社に入社し、大阪支店勤務、紐育支店勤務を経て本社機械課長に進み、尋いで紐育支店長となり、昭和四年更に本社第三機械課長となり同七年二月取締役に擧げらる。尙君は大阪俱樂部會員たり。家には嚴父俊造氏安政四年生れ母堂天津女史元治元年生れ加免子夫人との間に二男一女あり。

飯田九州男

東京淀橋區下落合一ノ二九

君は福岡縣久保田嘉吉氏の三男、明治二十年二月に生る、明治三十五年岡山縣飯田せつの養子となり、大正三年東京帝國大學法政科を卒業し、直に大藏省に勤務して理財局にあり。尋いで九龜稅務署に轉じ、大正七年には大阪南稅務署長に、翌八年橫濱稅關總務課長に轉任し、同九年歐米巡察拜命十年歸朝し、更に昭和二年七月大藏書記官に任じ、現に其の主稅局關稅課長たり。尙同八年五月には倫敦國際經濟會議帝國全權隨員仰付られたり。養母せつ女史(文久三年生れ)つや子夫人との間に一女あり。

井上與三郎

東京品川區山中町四三二六

明治元年六月生れ
株式會社守屋商會取締役
井上眞佐衛氏の長男、幼より育英に志し郷土の初等教育界に身を投じ、遂に東上して明治四十年には東京市赤阪小學校長に累進せり。後之れを辭して株式會社守谷商會に入り、其の九州支店長を経て大正三年取締役に選ばれる尋いで前記取締役に就任して、今日尙其の取締役たり。しな夫人(明治三年生れ)妹さだ女史(明治四年生れ)は海軍大佐栗田伸樹に嫁す

從四位勳三等 井上綾太郎 東京市瀧野川區中里町三二四

會計検査院第三部長 明治九年三月生れ 君は岡山縣士族井上寛の長男に生れ、明治三十八年法制大學を卒へ、同年高等文官試験に合格し、稅務監督局事務官となり、會計検査官補、同副検査官、同検査官に進み第二部第二課長となり更に昭和八年二月前記部長とならる。シツ夫人との間に一男六女あり。



石原香 明治二十年 岡山 市小橋 今に生れ 今に朝 鮮釜山

府草梁にあり、釜山食糧品會社重役帝國在郷軍人會釜山分會會長等の要職に就く、資性穎敏、岡山縣天城中學をへて早大に學ぶも中途退學し大正六年渡鮮す。父君は道評議員、府協議員たり、尙商業會議所議員副會頭なり、在鮮三十有七年昭和五年長逝せらる。家には母堂、夫人との間に三男二女あり。

朝鮮總督府政務總監 中樞院議長 從三位勳二等 今井田清徳

京城府大和町二ノ八官邸

明治十七年赤磐郡高陽村國塩與三郎氏の三男に生れ、現在高陽村長國塩達太氏の令弟なり。前代善十郎氏の養子となりその家を繼ぐ。明治四十二年東京帝國大學法科政治科を卒業、高等文官試験に合格し四十三年通信事務官に任せられ、大阪中央郵便局長、神戸逓信管理局總務部長、東京逓信局規格課長、逓信書記官、通信局電話課長、同庶務課長、熊本逓信局長、簡易保險局長、貯金局長、大阪市電氣局長兼市參與、逓信次官等に歴任し現時前記の要職にあり。曾て大正三年歐米に出張して斯の方面の研究を遂げらる。夫人は爲子明治二十二年生れ、(岡山縣大村直太郎氏二女)、養女和子嬢(大正六年生れ)大村八太郎氏二女なり。

從二位勳一等 石原健三

東京品川區五反田五ノ五七

君は元治元年一月岡山縣石原庫平氏の三男に生る。大正五年分れて一家をなす。明治二十二年東大法科を卒業し、判事試補に任じ、

尋いで司法省參事官試補となり、裁判所書記長を経て判事に任せらる、時に明治二十四年。翌年茨城縣參事官に轉任、爾後大阪、香川、岐阜等の縣參事官、内務省參事官、山梨、千葉、高知、静岡等の知事、北海道長官、神奈川縣知事に歴任す。大正四年宮内次官に任じ、同十一年貴族院議員に勅選せられ、同十五年宮内省御用掛禮子女王御保育掛仰付けられ、昭和二年樞密顧問官に親任せらる。更に同五年三月別當仰付けられ竹田宮附を拜命して今日に至る。

池田政銀

東京市赤坂區青山南町二ノ四

君は侯爵池田宣政の實兄明治三十二年生れ、養父池田政保子爵は、舊の鴨方藩主たり、大正十三年慶應義塾大學法學部政治科卒業法學士、卒業後直ちに宮内省臨時帝室編修官補となり、大正十五年七月辭し全年十月より昭和二年四月まで政治社會學研究の爲渡歐。昭和四年八月拓務局を拜命、拓務次官侯爵小村欣一氏の秘書となり、全氏病歿後前拓務次官堀切善次郎氏の秘書を経て本年四月一日より現職拓務省管理局第一課(第二課兼任)に拓務屬として勤務中。趣味は旅行と寫眞撮影。愛子夫人との間に篤子嬢等あり。

飯田周太郎

東京市本郷區駒込林町三

君は明治二十年生れ眞庭郡落合町飯田丈治郎氏の長男、英氣風發笈を負ふて郷關を出で長崎高商に學ぶ明治四十三年三月その第三回卒業生たり。姫路第十師團經理部壹年志願兵として軍務を了へ富士瓦斯紡績株式會社販賣主任となり、大阪メリヤス紡績株式會社東京出張所主任となる。又株式會社吉重商店専務取締役を兼ね今は問屋業株式會社山本登次郎商店東京支店長の職にその材腕を發揮されつゝあり。禪を奉じ達摩の研究家たり。家には千世子夫人津山高女卒業との間に一男二女あり。

井上賢太郎

東京市芝區二本榎一丁目七〇



明治十七年四月生れ岡山縣士族君天性氣宇濶達進取の氣象に富む。早稲田大學法

科卒業の後直ちに一年志願兵として近歩二聯

隊に入營、陸軍三等主計となる。後退營慶尙南道囑託、平壤電氣會社營業主任、鎮南浦電氣會社支配人、久原鑛業株式會社京城出張所員、朝鮮京南鐵道株式會社資本金壹千萬圓經理課長となり、今は朝鮮京南鐵道株式會社支

統計院幹事なる矢野文雄氏、報知新聞社聯關係の故を以て大隈侯に紹介し、且つ先輩牛場卓造氏の拔擢するところとなり、同氏の周旋にて官海に入り尾崎氏と共に統計院權少書記官に任せらる。是即ち大隈侯と離るべからざるの關係を結ぶの始なり。十四年大隈伯の桂

逓信局長、備後保險局長、時令局長、大阪市電氣局長兼市參事、逓信次官等に歴任し現時前記の要職にあり。曾て大正三年歐米に出張して斯の方面の研究を遂げらる。夫人は爲子明治二十二年生れ、(岡山縣大村直太郎氏二女)、養女和子嬢(大正六年生れ)大村八太郎氏二女なり。

從二位勳一等 石原健三

東京品川區五反田五ノ五七
君は元治元年一月岡山縣石原庫平氏の三男に生る。大正五年分れて一家をなす。明治二十二年東大法科を卒業し、判事試補に任じ、



井上賢太郎 東京市芝區二本榎二丁目七〇
明治十七年四月生れ岡山縣士族君天性氣宇潤達進取の氣象に富む。早稲田大學法科卒業の後直ちに一年志願兵として近歩二聯

隊に入營、陸軍三等主計となる。後退營慶尚南道囑託、平壤電氣會社營業主任、鎮南浦電氣會社支配人、久原礦業株式會社京城出張所員、朝鮮京南鐵道株式會社資本壹千萬圓經理課長となり、今は朝鮮京南鐵道株式會社支配人たり。京城岡崎町七に在住。傍ら溫陽電氣株式會社、大川電氣株式會社各代表取締役、朝鮮中央礦業株式會社監査役、在郷軍人分會長、天安學校組合議員等の要職にあり。禪を信仰し、庭球の趣味あり、淨瑠璃を愛好せらる。家にはヨネ夫人との間に二男三女を有す。

磯部愉一郎 東京澁谷區泉町三三二

磯部大裕氏の長男明治十四年淺口郡富田村に生る明治四十年早稻田大學商科の業を卒へ、天瀧川水力電氣會社に入り支配人となる。尋いで東邦電力會社庶務課長、古河礦業會社、日光變電事務所長等を経て大正十五年十二月旭電化工業會社支配人となり取締役に擢んでられ傍ら晒粉販賣株式會社、日本農藥株式會社、硬化脂販賣株式會社等の取締役となり、又化學鹽業株式會社の監査役たり。母堂は登羅女史文久元年生夫人よね明治十八年養女幸子嬢あり。

池田光四郎 東京麴町區元園町

君は明治二十三年岡山縣猪原友太郎氏の四男に生る、幼にして池田寅次郎氏の養嗣子となり、大正六年分家す。第三高等學校卒業東大法科に入り大正五年三月卒業。松岡商店、神宮乘合自動車會社、日本特殊塗料會社等の監査役たりしが、大正十二年辯護士を開業して今日に及ぶ。東京辯護士會、日本辯護士協會々員たり。君は圍碁、旅行、讀書、尺八等其の趣味豊かなり、家に秀子夫人(明治二十六年生)との間に二男一女あり。

衆議院議員 犬養 健 東京四谷南町

君の名の下に父君故木堂翁に及ぶ。翁は安政二年郡窪郡庭瀨町の生れ。木堂又は古劍堂と號す。稍々長じて犬養松窓に漢學を學ぶ。明治七年東京に出て湯島共憤義塾に入りて學びしが幾もなく學資盡き藤田茂吉氏に寄食して更に君慶應義塾に入る、卒業後尾崎氏と共に報知新聞社に入り、西南戰爭には通信員として従軍し、名聲あり。時に君は東海雜誌を發刊して當時の論壇を賑はせり。

統計院幹事なる矢野文雄氏、報知新聞社編輯の故を以て大隈侯に紹介し、且つ先輩牛場卓造氏の抜擢するところとなり、同氏の周旋にて官海に入り尾崎氏と共に統計院權少書記官に任せらる。是即ち大隈侯と離るべからざるの關係を結ぶの始なり。十四年大隈侯の桂冠と共に君も亦辭して報知新聞に入社す。かくの如く筆陣を張ると共に一方にては改進黨を組織して薩長政府に反抗す。後矢野氏の屯田策に關し議合はず、尾崎氏と共に報知を辭して朝野新聞社に入る。時に朝野新聞は鐘腸末廣重恭氏等當代名士の據城にして激烈なる論鋒を以て一世を叱咤す。
明治二十三年憲法發布せられ初めて國會開かる、や、郷里より選ばれて代議士となり爾來毎回當選す。日比谷原頭政論譚々の巷上に炯々たる眼光、沈痛なる語氣論調は以て對人の腸を抉る。改進黨の革新黨と合併して進歩黨となるや事實に於て之れを改進黨化せしめ、尙又舊自由黨を合せて憲政黨を組織するや、其實權を改進黨系統に收め、大隈伯を總理に戴き、多年の宿望たる政黨内閣を樹立せしめたり。やがて尾崎氏辭するに至り君立つて内閣大臣となる。然れども十數餘日にして内閣瓦解君が畫策も萬全の功を奏せざりき。四十二年國民黨を解散して革新俱樂部を組織し、翌十二年第二次山本權兵衛内閣に入りて遞信大臣となり、十二月二十七日虎の門事件の責を以て桂冠下野す。同十三年加藤高明内閣に再び遞信大臣、同十四年同大臣を辭すると同時に衆議院議員をも辭せしが郷黨の推舉黙し難く再び衆議院議員となり、革新俱樂部を率ひて政友會に投じ、同會顧問となりしが昭和四年田中義一男の後を承けて同會の總裁となり昭和六年十二月若槻内閣瓦解するや總理大臣の印授を受く郷黨の欣喜頗る大なり、時内治に外交に財政に經濟に重大時局たり、君之れを擔當して大いにその治政を伸張せんとするに際し可惜昭和七年五月十五日官邸に遭難して遂に薨去さる。されど息健氏文壇より立つて既に代議士に當選二回、其の將來するところ翁の遺圖大成にありと縣民待望す。

故 内閣總理大臣 犬養毅ニ賜フ誅
文章身ヲ起シ言議志ヲ行フ國交ニ顧念シ善隣ノ長計ヲ懷キ世論ヲ誘導シ立憲ノ本義ヲ扶ク既ニ政界ノ重寄ヲ負ヒ屢輔弼ニ任ジ遂ニ内閣ノ首班ニ列シ益變理ニ當ル凶聞遽ニ至ル軫悼曷ゾ勝ヘン茲ニ侍臣ヲ遣ハシ賻ヲ賜ヒ以テ弔セシム

從二位勳一等功四級陸軍大將朝鮮總督

宇垣一成

京城倭城臺町官邸
自宅東京四谷區内藤町一ノ一
明治元年六月赤磐郡瀨瀬村生

宇垣十七八氏の令弟、明治四十一年分家す。
明治二十四年陸軍歩兵少尉に任じ、累進して
大正十四年陸軍大將となる。

陸軍大學卒業の後參謀本部員、獨逸駐在武
官、陸軍省軍事課長、歩兵第六聯隊長、參謀
本部第一部長及總務部長、陸軍大學校長、東
宮御學問所評議員、第十師團長、教育總監本
部長、陸軍次官等に歴任し、歐米、支那に差
遣せられ、大正十三年清浦内閣の陸軍大臣に
親任せられ、爾後加藤、若槻内閣に歴任せら
る。昭和二年軍事參議官に補し、同四年濱口
内閣成立するや四度入りて陸軍大臣となり、
同六年四月辭す。特に前官の禮遇を賜ひ軍事
參議官に親補せられ、同年六月豫備役編入仰
付けられ、直に朝鮮總督に親任せらる。
曾て暹羅皇帝陛下よりグラン、クロア、レ
レアンブラン勳章を賜る。

貞子夫人(明治二十一年生れ、愛媛縣小原芳
次郎氏長女)長男一雄君(大正四年生れ)、長女
美子夫人(大正元年生れ、帝國生命保險取締役
矢野義弓氏長男朝鮮總督秘書官矢野義男氏に
嫁す)二女秀子夫人(大正三年生れ)三女光子
嬢(大正六年生れ)四女芳子嬢(大正九年生れ)
五女信子嬢(大正十三年生れ)あり。

宇都宮常松

廣島縣御調郡三原町



君は弘化
四年廣島
縣御調郡
三原町に
生る。三
原藩覺明
善堂に於
て宇都宮
龍山に從

ひ漢學を修め。明治六年小學教員と成り次いで廣島縣御調郡立花村岩子島村戸長兼學區取締補助となり、又は同郡尾道久保町十四日町土堂町尾崎町戸長兼學區取締補助人となり大いに活躍せり。其外各村戸長ともなり、御調郡學校担任書記、各町戸長、學務取締補助となり今やその敏腕を認められ、中庄村村長に當選する事四回。辭職後専ら自治發達を圖り道路の改修、橋梁の更造、溜池の修築等公共事業に専心努力し功榮顯著なるを以て藍綬褒章を賜へり。大正四年及び昭和三年の兩回大饗の饗を賜ひ昭和五年特別大演習賜餐の光

榮に浴せり。

上原 敬

津山市上之町

君は明治二十二年生れ、津山中學卒業の後陸軍經理學校に入り明治四十三年卒業、現に陸軍三等主計正六位勳五等、帝國在郷軍人會津山市聯合分會長として、信望厚し。

昭和二年津山市信用組合を創立、入りて常務理事となり。同組合は君の經營宜しきを得て、業績大いに上り、津山に於ける庶民階級唯一の金融機關として充分に其の機能を發揮す。君は思慮周密にして膽力あり、津山市人物中の傑物なり。

魚谷 忠

岡山市門田町一三七

君は明治卅年大阪市西區新町通に生れ、市岡中學を経て大正十年神戸關西學院高商部を卒業せり。大正十五年大阪放送局に入所、鳴尾球場に於ける大朝主催の全國中等學校野球大會の放送を擔任してより、俄然名聲を全國に馳せ、東に松内、西に魚谷と稱せらるゝに至れり。今次行幸を前にして岡山放送局開設せらるゝや、君は選ばれて岡山放送局アナウンサーとして來任し、放送局に、演習地に、御野立所に、マイクホンと共に活躍し、その敏腕を斯界に輝かせり。
君はかゝる激職の中にも研究を忘れず、古典の蒐集を趣味として珍籍を藏す。

内田彌太郎

君は明治元年都窪郡庄村に泰造氏長男として生誕、明治三十一年嚴父の後を繼いで庄村長に就職爾來改選毎に満場一致當選して現在に及び、大正三年犬飼源太郎氏の後をうけて全郡選出岡山縣議員當選爾來選出さるること茲に五回、各種委員を兼ねて衆望を負ひ、岡山縣會議長に推されて岡山縣政功勞者の第一人たるのみか夙に先輩犬養毅氏に私淑して絶体的支持者となり木堂遂に名を成し晩年を飾れるに至れるもの君の力にあづかるもの多し。
君性快濶、人に接するや愛憎なく、一見舊知の如く、壯々たる氣骨は名利に走らず、權門に阿附せず、正道を踏んで懼れざる高潔の士なりき。

浮田 芳

君は明治四十四年生れ津山市伏見町の人。
明治四十三年津山中學卒業、その翌年合名會

社浮田商店創立せらるゝや入社し、伯父浮田佐平氏を助けて今日に至る。

君は資性濃厚謙讓の人にして伯父浮田氏の甥たるの色を少しも表はさず、常に辭を低うして對談

活動常設館衆樂館を經營し繁榮を極めつゝあり、家庭圓滿にして前途輝かしきものあり。

君は津山市田町の人津山藩の儒者にして詩

宇多弘道

大阪市港區大正町五丁目

ひ漢學を修め。明治六年小學教員となり、龍山に從
 で廣島縣御調郡立花村岩子島村戸長兼學區取
 締補助となり、又は同郡尾道久保町十四日町
 土堂町尾崎町戸長兼學區取締補助人となり大
 いに活躍せり。其外各村戸長ともなり、御調
 郡學校担任書記、各町戸長、學務取締補助
 となり今やその敏腕を認められ、中庄村村長
 に當選する事四回。辭職後専ら自治發達を圖
 り道路の改修、橋梁の更造、溜池の修築等公
 共事業に専心努力し功榮顯著なるを以て藍綬
 褒章を賜へり。大正四年及び昭和三年の兩回
 大饗の饌を賜ひ昭和五年特別大演習賜餐の光

社浮田商店創立せらるゝや入社し、伯父浮田
 佐平氏を助けて今日に至る。

君は資性濃厚謙讓の人にして伯父浮田氏の
 甥たるの色を少しも表はさず、常に辭を低う



して對談
 するを以
 て何人よ
 りも好感
 を持たれ
 商人とし
 ての修練
 たりて圓
 満の士た

り。浮田商店の繁榮はもとより同君の將來も
 君自身の優れた材幹と伯父の背景とにより
 て津山市に於ける最も將來さる實業家として
 囑望あり、現に津山商工會議所議員たり。純
 理に立脚し、公正の念強く諄々として語り、
 自己の不利と見て決して策をなさず世人の信
 望自ら一身に集まる。

岡山第一專修學校長

内田輝太郎

君は明治十年岡山市平井に生れ、岡山師範
 卒業縣下各小學校訓導校長を経て郡視學の榮
 位に昇り、現に公立實業學校長の職にあり、
 外に濟世會々長に推され自治功勞者の一人な
 り、資性濃厚篤實にして人に接するに情味を
 以てす、地方人より敬慕さるゝも宜なるかな
 一竿を提げて大公望を氣取り、時に威儀を正
 して謠曲に親しむ床しき趣味の持主と謂ひつ
 べし、縣下教育會の長老の謂たり。

植月重一

津山市二階町五二一



君は久米郡佐良山村の人。家は勝田郡植月
 村に砦を構へたる三ツ星城主後藤氏を援けた
 る罪により追はれて久米郡佐良山に居を構へ
 たる郷士の門、幼にして和歌を好み僅かに小
 學校に學ぶ頃より尾上柴舟と共に數里の道を
 厭はず、直頼高、大田原良當、梶村篤敬の門
 を叩いて教を乞ふこと數年、十六才にして道
 家大門翁に就て萬葉集を研究す。家業として

に五回、各種委員を兼ねて衆望を負ひ、岡山
 縣會議長に推されて岡山縣政功勞者の第一人
 たるのみか夙に先輩犬養毅氏に私淑して絶体
 的支持者となり本堂遂に名を成し晩年を飾れ
 るに至れるもの君の力にあづかるもの多し。
 君性快濶、人に接するや愛憎なく、一見舊
 知の如く、壯々たる氣骨は名利に走らず、權
 門に阿附せず、正道を踏んで懼れざる高潔の
 士なりき。

浮田芳

君は明治四十四年生れ津山市伏見町の人。
 明治四十三年津山中學卒業、その翌年合名會

活動常設館衆樂館を經營し繁榮を極めつゝあ
 り、家庭圓滿にして前途輝かしきものあり。

字多弘道

大阪市港區大正町五丁目

君は津山市田町の人津山藩の儒者にして詩
 人馬場不知岐齋の孫、父は宇多富士雄、桑原
 博士は君の從弟なり。明治三十二年京大醫科
 に學を卒へて大阪紡績株式會社附屬病院の醫
 長となり、傍ら自宅に於て開業したるが最近
 は醫長を辭し私立宇多病院長とし斯界に貢獻
 す。府醫師會の創立に奔走盡力せる効多く現
 に重要幹部たり。

著書「工場衛生學」は、日本に未だ工場衛
 生に關する好著述のあるざるを慨き、君が多
 年大阪紡績會社社長として研究したる一端を
 世に著したるものにして裨益する處多大にし
 て斯界に好評高し。

右遠光太

大阪市東區北久太郎町一ノ二三



氏は明治
 十七年赤
 盤郡高陽
 村立川故
 右遠民三
 氏長男と
 して生れ
 明治三十
 七年神戸
 稅務監督局に入り三年にして退職、上阪大阪
 赤十字病院に奉職して全病院設立に従事して
 功あり後再び官界を志して大阪稅務監督局に
 勤めたるも中途之を退きて、大阪市北區南森
 町に於て計理士業に従ふ、是れ今日在るの端
 緒にして昭和二年法律改正に依り計理士と爲
 り現位の地に移轉右遠計理士事務所を開き繼
 續今日に及べり人と爲り着實温健而かも氣慨
 に富み現在大阪全業者五百餘名計理士協會事
 務理事として内外の信望最もあつし和歌をよ
 くし光風と號す。



上田礦太郎
 阿者郡新見町
 明治二十
 四年に生
 る。高梁

中學卒業後、大阪高工醸造科卒業、地方稀に見る篤學の士にして酒、醬油等の醸造販賣業として隆盛を極めてゐる。

津山瓦斯常務取締役兼技師
植月俊雄 津山市林田町



明治十五年津山町椿高下に生れ、津山中學を経て全三十六年東京高工電氣科卒業

信濃電氣株式會社技手となり、技術主任に昇進、大正二年電氣事業第一級技術者檢定に合格し、全三年福岡縣藏内鑛業株式會社技師に聘せられ、十年之れを辭して歸津、瓦斯會社創設常務取締役及び主任技師となり今日に及ぶ。尙津山牛乳會社取締役、津山水泳教師、所得稅調査委員、相愛信用組合長等を務め、市一流の人材として信望厚し。津山神傳流水泳につきては追録に收む。

上田計吉

津山市田町

家は津山藩の舊家にして代々生花を以て知らる、君又精進其の奥義を極め開傳を許さる、津山高女を始めとして美作各女學校の教師に聘せられて巡廻指南をなす。又家においても門弟の爲めに教へて怠るなく、已に數千人の門下を有す。今次の行幸に際しても奉仕の光榮を有す。國粹保存の上より見ても斯道の進歩發達は大いに必須の事たるべく師の如きあるは實に心強き事なり。

上田省三郎

阿哲郡新見町

新見町に於ける南條氏、林氏と共に三元老と稱せらるる人である。眞に町の生引として君の一言一句は町政の上にも參考とせられ衆望一身にあるの感がある。清酒醸造、販賣を本業とせらる。地方醸造業者中の一人者たり。

内田新聞舗店主

内田利太郎 都窪郡茶屋町

新聞の日常生活に關與すること多きに及び各地に取次販賣店の起るも都窪、兒島一帯には未だ文化の聲をきくこと遠かりき、この時

蹶起して、この有意義なる使命を果さんと明治四十五年内田新聞舗を創立全國新聞の取次販賣をはじめ、爾來不慮の障害相ついで起り、困難はこの先覺者をめぐつてさうさうの聲をあぐといへども君は瞬時もひるまずよく煩鎖なる事務を處理して今日の基をなす、現在は世にあらす、夫人獨力その後を主宰し店員をばげまして専心經營。好評さくさくたるものあり、もし地下に聞くを得ば君の靈又もつて瞑すべきなり。

内田剛

大阪府廳内大阪府會事務局



君は明治元年勝田郡新野村内田速水四男として生れ、君在郷時代郡役所

又は小學校准訓導等に奉職したる事あるも向學心に富み後岡山市に出でて環翠義塾に入り本城靜男氏につきて漢學を學べり。明治廿二年の秋上阪直に大阪府會に奉職して終始一貫當時の府尹西村拾三時の府會議議長東尾平太郎氏に仕へて以來歴代長官を迎ふること十六代、議長實に二十三代に奉仕し烏兎亦四拾有餘年、現在書記長として大阪府會の活字引と稱さる。事に當り熱心人に接して温容今や圓熟の社交振を以て府行政の缺くべからざる重要人物として尊重せらる。府會誌の編纂、日本産業協會の設立等に參劃して功あり。

裏川寅藏

岡山市門田四九三
明治十一年生



舊姓岡本氏和歌山縣日高郡、裏川家に入りて裏川姓を稱せり。明治三十八年東京

高師本科、數物化學部卒業。愛知縣第三中學校を振り出しに廣島縣師範學校、福岡縣福岡師範學校教諭を経て、大分縣中津中學校長に任せられ、大分中學校長、宮崎中學校長を歴任、現在岡山縣第一中學校長となる。温厚なる典型的教育家趣味は植物の蒐集なり。

魚森一太郎

大阪市此花區上福島北一丁目

君は和氣郡日生町の出身、夙に警察界にありて敏腕を振ひ明治四十四年大阪府警部に任

然に阻まれ民業依然不振なるを慨嘆し、富郷利民は一つに風土に適する養蠶製糸その他の副業の振興にありとなし企劃の案を練る。偶々明治十年岡山縣勸業試驗所の設置せらるゝや、母堂柳子女史と共に入りて養蠶飼育、蠶

上田省三郎 阿哲郡新見町

新見町に於ける南條氏、林氏と共に三元老と稱せらる人である。眞に町の生字引として君の一言一句は町政の上にも参考とせられ衆望一身にあるの感がある。清酒醸造、販賣を本業とせらる。地方醸造業者中の一人者たり。

内田新聞舗店主

内田 利太郎 都窪郡茶屋町

新聞の日常生活に關與すること多きに及び各地に取次販賣店の起るも都窪、兒島一帯には未だ文化の聲をきくこと遠かりき、この時

魚森一太郎

大阪市此花區上福島北一丁目

君は和氣郡日生町の出身、夙に警察界にありて敏腕を振ひ明治四十四年大阪府警部に任ぜられ全七年刑事課長となり縦横の奇才を振つて犯罪の捜査檢舉に拔群の功績あり全八年警視に陞任して中津警察署長に補せらる。其後戎、堺、福島各署長に轉補何れも錚々として著名せり、大正十三年依願退職閑地につきたりしが昭和二年大阪府會改選にあたりて出馬して當選。識量卓絶蘊蓄の經倫を傾蓋して現に大阪府政の圖將たり、資性剛快、公共囑負の事業多く誠意一貫して信望甚だあつし。令嗣英一氏大阪藥學士にして藥局を營む。

植木彌久太



君は明治十年兒島郡粒江村に生る、商業學校豫科卒業後在郷大に郷黨の

信望をあつめ又人格識見非凡遂に粒江村長として推舉さる、こと前後二期村治に貢献する所尠からず、粒江村信用購買販賣組合長、岡山縣花菴同業組合副組合長等の榮職を兼務せり。輓近實業に志し野草菴製造販賣業を營み、岡山縣野草菴工業組合長に擧げられて斯業開發に専念する傍ら中國線條株式會社專務取締役として軼掌何れもその内容の充實せる全く君の功績による所甚大なり。

生糸共同販賣岡山社々長

浮田 佐平 津山市伏見町

慶應三年十月その地に誕生、天性仁慈にして創造の材智に長じ、意志強固公共の念厚し。少壯より蠶絲報國を企て終始一門一統を率ひ郷黨を誘掖し、事業の蹉跌、財界の變動等幾多の困難に際會するも不撓不屈、遂に作州製糸の浮田の名を斯界に高む。君幼少にして津山成器小學校に入り、漢學を藩儒後藤竹軒、齊藤同、中村靜次郎等に學ぶ。明治維新の後世運隆昌各地共各其の面目を一新せるに、ひざり作北の地にありては自



高師本科、數物化學部卒業。愛知縣第三中學校を振り出しに廣島縣師範學校、福岡縣福岡師範學校教諭を経て、大分縣中津中學校長に任ぜられ、大分中學校長、宮崎中學校長を歴任、現在岡山縣第一中學校長となる。濃厚なる典型的教育家趣味は植物の蒐集なり。

氏和歌山縣日高郡、裏川家に入りて、裏川姓を稱せり。明治三十八年東京

然に阻まれ民業依然不振なるを慨嘆し、富郷利民は一つに風土に適する養蠶製糸その他の副業の振興にありとなし企劃の案を練る。偶々明治十年岡山縣勸業試驗所の設置せらる、や、母堂柳子女史と共に入りて養蠶飼育、蠶糸製業の學理と實際とを研究し、自邸に蠶室、製糸所を設け近隣の婦女を集めて指導養成に努む。後十八年之れを擴張したるもの現在の浮田製糸場にして、その起源實に六十餘年前斯歴史を有するなり。四十年の頃より更に蠶種の改良に専念し、佐平種を出して共同販賣に無償配布により繭質の改良統一をなし地方養蠶家を利したる事大なり。大正の初年玉繭製糸を創案し、その節絹織を産出し賞讃を博し以て地方を潤はす。かくて大正七年には共同販賣共同出荷により同業者の福利を増進せん爲岡山社を設立し、君其の社長たり。昭和三年御大典記念事業として苦田、勝田二郡町村に農家副業指導婦を派出し、或はこれより先明治二十八年頃より植林に、或は三十二年頃より製紙原料三極の栽培に、雜木製材に、或は治病の目的にて奥津、大釣ラヂウム温泉無料浴場を設くる等副業獎勵、社會事業の基礎を確立し、或は巨萬の資を投じて陶磁器の試作傳習に餘念なし。今や佐平焼の名聲又愈々高く、津山特産たるの日も遠からざるべし。宜なり其の蠶繭、生糸、織物は内外の博覽會共進會に出品して褒賞さる、こと枚舉に遑なく、大日本蠶糸會總裁宮殿下の表彰をも拜受す。



も破格の天恩單獨拜調を賜る。君の生産する製糸年額壹百萬圓を越え、絹織亦拾

數萬圓、三極の成績も可良地方移出年額貳拾數萬圓、雜木製材拾數萬圓にて各其の成果益々見る可きなり。美作蠶業組合、大日本蠶糸岡山支會、岡山縣製糸組合等の要職に擧げられ、又津山町會議員たりし事ありて、實に在郷大成の人たるなり。

江田一雄

岡山市紙屋町

浪華堂は岡山名物として、吉備團子と共に古來並び稱せらるゝ調布の製造元なり、其の起原は遠く、徳川の初代にありといふ。岡山藩主代々茶道に用ゐられたるに始まり、今に茶の席に愛用せらるゝ君は其の現主、茶道に深く、常に研究、不斷新味を加へて、愈々名聲あり、昨年新築三階建として、階上は開放喫茶室として、人の利用に委す、和洋兩式の設備完全敷奇を凝らす。今回の行幸に際し御紋菓調進の重任に當り、調布は天覽、献上の光榮を有す。

江見豊治

君は明治十六年津山市南新座に生れ明治四十四年東京高師數物科の出身。下關商業、京都府立三中を歴任し、岡山師範に至り舎監長より教頭に任せらる。昭和四年津山商業校長梶原峰治氏退職するや、招かれて同校長に就任す。君校長に就任するや校風を一新し一意専心に努め就任以來二階建教室一棟、會議室、圖書室、歩器庫等續々増築竣工し、外觀に於てもまつたく偉容を整ふに至れり。父兄の信望を一身に集めつゝあり。

江原正利

淺口郡金光町

金光中學卒業後岡山師範第二部に入り明治四十三年終へて、川上郡高倉小學校、淺口郡沙美小學校に教鞭を執る。大正六年青島守備軍民政部の招聘に依り赴任、支那山東省博山小學校長、同博山日語學校長、同支那語學校長として活躍す。大正十二年青島還付の爲め自然廢職となり歸國す。現在は岡山新聞社金光支局長として、操觚界にあり。

江見泰

津山市新開地

津山中學卒業後専ら寫真教師の研究に力め大いに其を練りて現地に開業す。寫真は藝術なりとは君の平素主張するところ、されば其の寫真人物風物を問はず趣を異にして人として賞嘆せしむ、地方都市に於ては決して見る能はざるの技術を有す。君又津山水泳會の役員にして教師なり。

江川熊夫

君は明治二十一年苦田郡高倉村下高倉の生れ、明治三十九年岡山縣立農業學校を卒業す、一時郷里に於て家業に従

事したりしが、大正元年朝鮮に渡りて農業に従事す、同八年歸りて同村助役となり、大いに人望收攬、遂に同十三年村長に推されて今日に及ぶ。村宰としての治績大に見るべきものあるは固より村農會長としては君の蓋蓄を傾注、新智識を實地に應用して農事の改良進歩見るべきもの多し。

遠藤壽一

兵庫縣武庫郡住吉村古寺

君は明治十九年久米郡南村遠藤健太郎氏三男として生れ津山中學卒業海軍經理學校を経て明治四十一年主計少尉に任官昭和二年累進して海軍主計大佐に昇進服役中昭和四年神戸製鋼所取締役に招聘されて退官就任事務及電氣部長を兼務し昭和五年常務取締役に就任す。本工場は神戸市脇濱町に分工場を門司伸銅工場及鳥羽電機工場に分ち従業員三千六百有餘専ら海軍兵器及附屬品を製作其他鐵道用車輛車軸自動連結機砂糖及セメント機械製氷機鑛山用機電氣シヨベル混凝土パー、ワイヤロープ等年産參拾數百萬圓に達する大工場にして現社長は豫備海軍中將永安晋次郎氏なり。

榎昌

岡山市上之町

君は眞庭郡勝山町影山家に生る、大正二年京大獨法科卒業直ちに朝鮮に渡り司法官勤務全三年歸郷辯護士開業信望厚かりしが選ばれて縣會議員に當選するや副議長の椅子を占め令名益々加はる。偶々本縣財界巨頭大原孫三郎氏の知遇を受け、請のまゝに入りて第一合同銀行參事となる、時に大正九年同行をして一段と堅實ならしむ、更に進んで縣下群立の各銀行を合併し遂に今日の中國銀行を見るに至る其の間幾度か財界の變動波瀾に遭遇し或は銀行の合併に整理に氏一流の畫策と敏腕を振ひ今や單に同行の柱石としてのみならず大原の智恵袋となり片腕となり縣下財界の利者として人之を許すに至る。性豪膽にして一面又細心なり、義侠心に富む。

惠藤熊太郎

大正七年織布業を起業

經營す仕向先大阪横濱帆布株式會社。尙氏は倉敷運輸株式會社取締役、大日本織布株式會社取締役研究所相談役等の要職にあり、その他社會的要務にあつて公共に盡すこと多年にして尙岡山縣工場協會評議員、岡山縣協和

滿の好紳士として同業者間に好評がある。目下岡山書籍組合幹部の職にあり。

江見盛政

君は明治三十五年津山市元

魚町に生る、幼時はやく郷土を出で京都市今出川大宮玉壽軒高田氏の家に寄食し、就きて製菓の業を研究し、刻苦五年の後歸省し、製

會代議員等としては特に勞資間のあつせんにつくし市會議員、商工會議所議員として直接倉敷市の樞機に貢献す、更に大日本消防協會岡山縣支部評議員、倉敷北消防組頭。岡山縣第七區家屋稅調査委員、倉敷家屋稅調査委員なり。もつてその全貌を推すべし。

津山中學卒業後専ら寫真教師の研究に力め大いに其を練りて現地に開業す。寫真は藝術なりとは君の平素主張するところ、されば其の寫真人物風物を問はず趣を異にして人として賞嘆せしむ、地方都市に於ては決して見る能はざるの技術を有す。君又津山水泳會の役員にして教師なり。

江川熊夫 君は明治二十一年若田郡高倉村下高倉の生れ、明治三十九年岡山縣立農業學校を卒業す、一時郷里に於て家業に従

會代議員等として特に勞資間のおつせんにつくし市會議員、商工會議所議員として直接倉敷市の樞機に貢献す、更に大日本消防協會岡山縣支部評議員、倉敷北消防組頭。岡山縣第七區家屋稅調查委員、倉敷家屋稅調查委員なり。もつてその全貌を推すべし。

江見宏正 岡山市門田屋敷二一六

君は明治二十年御津郡宇垣村河内江見家に



生る、家は代々日置藩の奉行職にして父江見多見治氏は岡山縣下に警察署長を歴

任し當時その令名を博したるは世人の記憶尙明らかなるところなり、君は幼にして實業に志し杉山岩三郎氏經營の日比製鍊所分折課に入り後其の主任となる明治四十四年杉山本店鑛山部に轉じたり、同店に新に保險部新設するに當り敏腕を認められ其の主任となる、大正二年獨立東京火災保險株式會社岡山代理店を引受今及に及ぶ、その契約高の如き隣府縣は因よりおそらく日本全國に於て右に出するなしと云ふ尙トモエ自動車株式會社を創立し常務取締役となる、昭和二年商工會議所議員に選ばれ現に常議員たり。日本書を好み喜多村松齊に師事し松汀と號す。

江原形四郎

岡山市中之町二五

君は英田郡巨勢村大谷尾字の人にして、明治十三年に生る。明治四十年東中山下二十一



番地に於て文江堂書店を興し、新古籍店を開業して爾來二十有餘年、一意専心業

務の擴張を圖りその經營よろしきを得て、今や市内屈指の販賣店として名聲高く中でも古本に至つては實に同業者間に廣く其存在を知られ、又岡山醫大の御用書肆として信用を博してゐる。昭和三年現在の地に瀟洒な店舗を設け移轉した。資性極めて溫和にして福徳圓

振ひ今や電に同行の柱石としてのみならず大原の智慧袋となり片腕となり縣下財界の利者として人之を許すに至る。性豪膽にして一面又細心なり、義侠心に富む。

惠藤熊太郎

大正七年織布業を起業經營す仕向先大阪横濱帆布株式會社。尙氏は倉敷運輸株式會社取締役、大日本織布株式會社取締役研究所相談役等の要職にあり、その他社會的要務にあつて公共に盡すこと多年にして尙岡山縣工場協會評議員、岡山縣協和

滿の好紳士として同業者間に好評がある。日下岡山書籍組合幹部の職にあり。

江見盛政

君は明治三十五年津山市元魚町に生る、幼時はやく郷土を出で京都市今出川大宮玉壽軒高田氏の家で寄食し、就きて製菓の業を研究し、刻苦五年の後歸省し、製菓業を創業し、くらや本舗を經營す、津山名産初雪に對抗し君の苦心になる名産松の露は味覺と嗜好を啖り愛用家日増の盛運を見しのみならず、近時販域擴大に伴れ遠來華客の土産進物用として推重さるゝに至れり、君は更に高徳羊羹を案出し一躍にして津山製菓界の霸王となり、縣内外各地博覽會、共進會に出品し褒状を受けしこと一再ならず又畏き邊りに献上して御嘉納御買上げの榮を蒙りしことも數次に及ぶ。

江原猪知郎

津山市戸川町

君は明治三十三年津山市中之町に生る。岡山縣津山中學をへて、岡山醫專を大正十二年



卒へ全年陸軍三等軍醫に任せられ、除隊後岡山醫大附屬病院に勤務、昭和四年迄引續き研究に精進す。昭和四年醫學博士の學位を受く、全年現津山市戸川町に江原病院を起し、診療科目は外科、皮膚科、泌尿器科、レントゲン科にして卓越せるその技術は日と共に一般の知る所となりつゝあり。

江口

質

明治十九年生 本籍 倉敷市濱六五九 現住 津山市南新座一三一



明治四十年岡山縣産業組合主事補に就任今日に久米郡農林主事補に轉任大正十五年退職岡山縣産業組合美作中央部會理事に就任今日に

至る。性快活なれば人に接して氣受よし、さすがに苦勞人の悌を見る。大正五年以來専ら産業組合の監督と指導に衝り其の成績見るべきものあり今や縣下業界に於て重きを成すに至る前途に囑望するところ大なり。

江田節男

君は明治拾九年御津郡横井村大字富原に孤々の聲を揚げ森田弘覺、磯山天香の門に漢籍を學び年齡二十三才にして神戸市郵便局に奉職刻苦勉勵進んで吳局長、鎮守府構内局長、門司局長、名古屋郵便局長、神戸郵便局長を歴任し從五位勳五等を授けらる。大正十四年職を辭し郷里に歸り悠々自適の折柄村民の懇望止み難く横井村長、横井信用組合長、御津郡農會長、大阪計量株式會社取締役を勤む、謠曲を好み俳句をよくす、雅號木樺庵半遊と稱す。

岡野清豪

日本銀行文書局調査役 澁谷區氷川町

君は岡山縣立笠岡商業學校教諭岡野文治氏の長男なり。岡山中學校を卒へて第六高等學校に入り、更に東大法科政治科に入り、大正四年卒へて直に日本銀行本店に勤務し、函館支店勤務、更に本店營業局を経て米國代理店監督附となり、歸朝神戸支店創立準備委員、大阪支店調査役等に歴任して今日に及ぶ。趣味にゴルフ、將棋、撞球あり。

大森鑛一郎

君は明治二十四年岡山市下内田町に生る。大正六年東大工學部探鑛科を卒業直ちに金澤市横山鑛業部に聘せられて技師に就職、山形縣大藏鑛山に勤務せし



が在職三ヶ年の後大正九年辭して職を育英に獻げ、大正十年岡山一中教諭に任じ同十四年岡山、勝山中學教諭に轉補、昭和五年飯河三角君の後を襲ひて岡山縣工業學校長に補せらる。少壯校長として眞に將來あり。園基は其唯一の趣味たり。

荻野范平

岡山市富田町

君は明治十二年兒島郡下津井町に生る、中學校を卒へて早大英語政治科に學び、明治三十七年卒業、大阪市において紡績事業に従事すること多年、大正八年歸省後地方にありて専ら農政運動に奮馳し、關係事業又多方面に

折井愚哉

岡山市一番町六

君は明治四年高梁町御前町に生れ、本名を太一郎と呼び、別號無筆堂と稱す、明治二十二年小山正太郎及び橋本雅邦に就いて西洋畫及日本畫を學び、大いにその技を磨く、同三十二年全三十四年迄和歌山二中に奉職全年四月大阪朝日新聞社文藝課に入りて畫筆を執る全三十六年第六回内國勸業博覽會に禪房對圖を出品し皇太子殿下御覽の砌り稱讚の榮を給ふ、又同會閉會後同畫を大阪博物館に寄附し賞勳局より銀盃を下賜せらる。全三十七年繪畫研究の爲め米國に渡り聖路易萬國博覽會を視察し、又デトロイト市私立マイルスカレヂに通學し後紐育美術館にて古畫を研究す。全四十年歸朝以來専ら育英事業に従ひ、岡山實科高等女學校玫瑰高女、天城中學、金川中學、精思高女等に勤務せり。高等官七等待遇從七位に叙せらる。著書に『中學畫帖』『武士道より見たる神代事蹟と武士道要義』等あり。

長船克己

神戸市下山手通四丁目縣官舎

君は明治三十六年邑久郡行幸村長船に生る、岡山中學より六高を経て、東大政治科に學び、大正十一年同科を卒業、此間大正九年高等文官試験に合格し、大正十一年北海道廳に奉職、商工課長兼工場課長となり、産業視察の任を帯びて西比利亞タチ方面に出張、視察を遂げて歸朝の後、大正十二年地方理事官に陞み昭和元年石川縣庶務課長に轉じ、昭和四年兵庫縣農務課長に轉補されて現在に至る。

從四位勳三等

衆議院議員

岡田忠彦

東京市麴町區永田町二ノ三一

君は明治十一年岡山縣士族の名門岡田唵平氏の長男に生る。笈を背負ふて東都に出で、東大法政科に入り明治三十六年三月卒業、高等文官試験に合格し、同三十八年靜岡縣事務官を拜命し爾來大分、奈良、山口、熊本縣各事務官、内務省警保局警務課長、長崎縣事務官、同縣内務部長、東京府内務部長、埼玉縣、長野縣、熊本縣各知事を歴任し、遂に内務省警保局長に任ぜらる。後東京府高級助役として大東京市政の爲に盡瘁せられ其の治績見る可きもの多し、當時資源審議會委員たり。大正十三年岡山縣より衆議院議員に選出さる當選四回、曩に立憲政友會常議員會長たり。昭和七年三月更に同政友會顧問に推され、同年四月選舉法改正委員長に擧げらる。

村中堅婦人の養成に努め、同十五年其組織を變更し、邑久高女となすやその校長となり、邑久土曜學校長を兼ね、更に邑久郡教育會長、聯合青年團長として、その指導に任ず、功勞に依り大日本農會總裁梨本宮殿下より綬白尚今回の陸軍特別大演習に際し、邑久土曜學校は特に侍從御差遣の榮に浴せり。



が在職三ヶ年の後大正九年辭して職を育英に
 献げ、大正十年岡山一中教諭に任じ同十四年
 岡山、勝山中學教諭に轉補、昭和五年飯河三
 角君の後を襲ひて岡山縣工業學校長に補せら
 る、少壯校長として眞に將來あり。園基は其
 唯一の趣味たり。

等文官試験に合格し、同三十八年警務局長
 官を拜命し爾來大分、奈良、山口、熊本縣各
 事務官、内務省警保局警務課長、長崎縣事務
 官、同縣内務部長、東京府内務部長、埼玉縣
 、長野縣、熊本縣各知事を歴任し、遂に内務
 省警保局長に任ぜらる。後東京府高級助役と
 して大東京市政の爲に盡瘁せられ其の治績見
 る可きもの多し、當時資源審議會委員たり。
 大正十三年岡山縣より衆議院議員に選出さる
 當選四回、曩に立憲政友會常議員會長たり。
 昭和七年三月更に同政友會顧問に推され、同
 年四月選舉法改正委員長に擧げらる。

荻野 范平 岡山市富田町

君は明治十二年兒島郡下津井町に生る、中
 學校を卒へて早大英語政治科に學び、明治三
 十七年卒業、大阪市において紡績事業に従事
 すること多年、大正八年歸省後地方にありて
 専ら農政運動に奔馳し、關係事業又多方面に
 して岡山



縣農事協
 會專務理
 事、大日
 本地主協
 會幹事、
 帝國農政
 協會評議
 員、備南

土地株式會社常務取締役、足守農事株式會社
 取締役、早稻田大學校友會岡山支部幹事等の
 要職にあり、公私共に不斷の活動を續けつゝ
 あり。

奥田 竹松 明治七年生

明治二十八年慶應義塾文學科出身山陽鐵道
 株式會社の招聘により入社後退社して上京大
 成に志し明治三十三年高文に及第し直ちに外
 務省出仕となり一時農省務省商務局に勤務せ
 し再び外交官試験に及第して外務省に入り
 領事官補となり仁川在勤を命ぜらる、明治三
 十一年天津全四十年大使官三等書記官に任ぜ
 られ埃國大使官在勤、四十一年二等書記官と
 なり、四十二年より翌四十三年に至る間臨時
 大使として全事務を執行したりしが明治四十
 三年歸朝本省に入りて條約改正掛となり之に
 參割して大に功ありき。

奥田 眞須二 君は明治十五年邑久郡邑久
 村に生る、関谷齋に學び、明治三十二年業を



卒へ、邑
 久高等小
 學校に奉
 職、大正
 四年同校
 々長に任
 せり。
 君は農村
 文化の開
 拓を目指し率先して邑久土曜學校を創設し、
 全國に名聲を馳せ文部省に選奨さるに至る。
 大正十年更に邑久實科高等女學校を設立し農

村中堅婦人の養成に努め、同十五年其組織を
 變更し、邑久高女となすやその校長となり、
 邑久土曜學校長を兼ね、更に邑久郡教育會長
 、聯合青年團長として、その指導に任ず、功
 勞に依り大日本農會總裁梨本宮殿下より綬白
 有効章を賜はり、又文部大臣より表彰され、
 尙今回の陸軍特別大演習に際し、邑久土曜學
 校は特に侍從御差遣の榮に浴せり。

奥 松 藏

君は明治八年苦田郡久田村大字下ノ原に生
 れ、明治三十三年久田村收入役に就職し全三
 十七年歩兵第四十聯隊に入營、全三十八年十
 月歩兵軍曹として勳七等に叙せられ解隊とな
 り、全四十五年久田村長に就職す。明治四十
 年以來現在まで、久田村會議員として引續き
 就任郡會議員、郡參事會員、郡農會議員、郡
 農會評議員、苦田郡木炭同業組合評議員の榮
 職を経て大正十五年苦田郡木炭同業組合組
 長として就任今や苦田郡産の木炭が各市場に
 於てその聲價を高めつゝあるは全く君の熱心
 なる指導に依るものにして現に久田村耕地整
 理組合組長、岡山縣木炭同業組合聯合會評議
 員の榮職にあり。

大島 三枝松

君は明治十五年上道郡御
 休村に生る。頭腦明敏態度公正。岡山縣立高
 松農學校獸醫科を卒へ日露戰役に從軍して一
 等獸醫官となり、退營後現任に於て開業其の
 手腕近郷に轟き門前市を成すの盛況を呈す、
 夫人は藝術に興味を持ち殊に音楽を嗜み、筑
 前琵琶に湛能にして大島旭豊女史として令名
 天下に聞ゆ。

小 川 潔 岡山市巖井小松ヶ丘



君は明治
 二十三年
 阿哲郡石
 蟹郷村に
 生れ、明
 治四十四
 年岡山師
 範卒業阿
 哲郡含翠
 、全神代小學校長を拜命大正十二年岡山師範
 訓導に榮轉、大正十四年抜かれて兒島郡視學
 に榮進翌十五年更に岡山縣視學に任ぜられ、

督學指導の重任にあること數年にして再び昭和四年岡山市伊島小學校長の椅子につき以て今日に及べり。將來最も囑望するところ多し。

小川芳太郎 久米郡加美村

君は明治二年生れにして、十五歳にして父を失ひ母一人子一人の中を農業に従事し、専ら二宮金次郎式の勉學を重ぬる事拾有余年、



明治參拾貳年稻岡北村長に當選し、三十七年村合併に依り加美村となる

長に當選し、村治は素より産牛改良に大いに努め、四十二年村合併の條件たりし學校建築を了し、御眞影を下賜せらるゝや、氣概ある君は君が名譽の地に久しく留まるべからずの格言を重じ其翌日辭表を提出し、米穀検査理事を拜命し、大正三年株式會社久米銀行常務取締役として入社し、大正十三年全行が津山銀行と合併するに當り、常務取締役に當選、爾來山陽銀行取締役、丸龜銀行專務取締役、山陽銀行常任監査役等の重職にありしも、年六十歳に達したるを理由として昭和三年七月退職、政治的にも改進黨以來の黨士として知られ號を皿山と呼ぶ。

勳六等 衆議院議員 日本大學理事

大山斐差磨

東京下谷區上野櫻木町三三

大山達聞氏の二男、雄圖を抱きて東都に上り、日本大學に入り明治三十六年卒業、高等文官試験に合格し、同三十七年大藏省專賣局事務官となり、數年にして官を辭し煙草輸入商を創め元賣捌業を營む。昭和六年制度の改正に基き之れを廢したり。當時君は全國煙草元賣捌人協會副會長に推され、又東京商工會議所副會頭たり。昭和七年の總選舉に際り突如立ちて當選、立憲政友會に屬す。尙實業界にありては長門起業炭礦株式會社取締役、中央新聞社監査役たり。

小川 貴

君は兒島郡粒江村の人、犬養木堂翁の從弟にして、明治八年の出生なり、同家先代十万太翁は曾て縣會議員として公事に功勞あり、



野小 君は 明治 三十三年 兒島郡 藤戸町

君は明治三十三年東京高商を卒業、三井物産株式會社に入りて同社の支店、朝鮮、仁川、釜山等に勤務し、在勤十七年間を過し、本社の業務を助けて些の過失なく、大正六年勇退獨營にて神戸市に商肆を經營せしも二三年にして廢店郷里に歸る、偶々郷民君を村長に推し昭和五年其職に就き現在に至る、性沈着にして品性高し。

從五位 内務書記官内務省地方局財務課長

大村 清

東京澁谷區神山四二

君は吉五郎氏の長男たり。京大法科獨法科に入り、大正六年卒業の後内務屬となり、鹿兒島縣指宿郡長に任じ、東京市主事同庶務課長に轉じ爾來同財務課長、文書課長、調査課長等に歴任し、更に京都府事務官、復興局事務官を経昭和三年内務事務官に轉任し、都市計畫課長心得を経て同七年地方局地方債課長となり現在前記に任せらる。

小野善太郎

君は明治二十六年吉備郡穗井田村に生れ明治四十五年金光中學卒業大正二年岡山師範第二部卒業、たゞちに吉備郡吳妹小學校訓導となる。其後二萬、茵、穗井田小學校を経て大正十二年吉備郡山田小學校長に進み、續いて川邊小學校に移り昭和五年二萬小學校に校長となり現在に及ぶ。嚴父は村會議員として四十年の長きに亘り村治につくせし人で現在は隱居して豊かなる余生を送る。君なほ他に實業補習學校長及青年訓練所主事の要職あり。



小野 善太郎 君は 明治 十五年 倉敷市 沖に生れ 明治三十三年 岡山

師範第一部卒業後兒島郡第一東興除小學校、都窪郡倉敷小學校訓導に歴任し、昭和六年勳八等授瑞寶章を賜へり。現に岡山縣都窪郡妹尾小學校訓導兼校長、同實業補習學校長、妹尾青年訓練所主事を勤務せり。君は模範的教育家として大正五年、昭和五年二回に亘り岡山縣知事より表彰されたり。妹尾青年團總裁、女子青年團長其他の要職を兼務す。

正四位勳三等法學博士 衆議院議員 拓殖大學教授

小川郷太郎

東京中野區櫻山町三二

君は明治九年村山菊藏氏の長男として淺口郡に生れ。長じて岡山縣士族小川知章氏の養子となり、明治三十九年分家す。同三十六年三月東大法科政治科を卒業し、恩賜の銀時計

商を創め元賣捌業を營む。昭和六年制度の改正に基き之れを廢したり。當時君は全國煙草元賣捌人協會副會長に推され、又東京商工會議所副會頭たり。昭和七年の總選舉に際り突如立ちて當選、立憲政友會に屬す。尙實業界にありては長門起業炭礦株式會社取締役、中央新聞社監査役たり。

小川 貴

君は兒島郡粒江村の人、犬養木堂翁の從弟にして、明治八年の出生なり、同家先代十萬太翁は曾て縣會議員として公事に功勞あり、



小野忠 君は明治三十三年兒島郡藤戸町の士族に生る

、長じて天城中學校に入り京都齒科醫專を大正七年卒業の後京都に在り稻葉齒科醫院において實習すること三箇年、更に小野博士に就きて實習すること二箇年業大に進み大正十二年歸省藤戸町に齒科醫院を開業す、大正十三年より藤戸町子供會を創設し郷黨の子供を集めて愛育す、現に岡山縣童話聯盟評議員たり。

大井 哲 岡山市上石井大正町



明治二十二年香川縣仲多度郡本島村に孤々の聲を揚げ、一孤島に朽ち果つるは人の

生の意義なきを痛感し、遂に香川縣立工業學校教諭となり、子弟の訓陶に精進せしも職を辭し岡山市に來り土木建築請負業を開始し、第十師團經理部水害復舊工事を手甫めに兵器廠、格納庫改築工事を完成し昭和五年陸軍特別大演習に際して岡山市都市計畫線の岡山驛前鹿田線の内大供舊鹿田驛間道路改良工事を完成し、名聲大いに揚がる。

小野 萬年堂 岡山市上之町

岡山市に於て萬年筆を商ふ店舖は多きも之れを製造するもの少し。店主小野君は上阪多年技を練り歸りて開業専ら之れが製作を開始し市内は固より近郊都市に卸賣をなす。今回の行幸に際し畏くも、今上陛下に献上御嘉納を賜り尙閑院宮殿下、香陽宮殿下、其他各宮殿下献上御嘉納の榮を蒙りたるは同店の名譽たるに止まらず實に我縣民の光榮とするところなり。
○ スター萬年筆の聲價愈々加はる。



小川郷太郎 沖に生れ明治三十七年岡山

師範第一部卒業後兒島郡第一東興除小學校、都窪郡倉敷小學校訓導に歴任し、昭和六年勳八等授瑞寶章を賜へり。現に岡山縣都窪郡妹尾小學校訓導兼校長、同實業補習學校長、妹尾青年訓練所主事を勤務せり。君は模範的教育家として大正五年、昭和五年二回に亘り岡山縣知事より表彰されたり。妹尾青年團總裁、女子青年團長其他の要職を兼務す。

小川郷太郎

東京中野區櫻山町三二

君は明治九年村山菊藏氏の長男として淺口郡に生れ。長じて岡山縣士族小川知章氏の養子となり、明治三十九年分家す。同三十六年三月東大法科政治科を卒業し、恩賜の銀時計を受く。直に京大講師として招聘せられ、更に助教授となり、同三十九年獨逸に留學し、奧伊、佛、白の諸國にと遊し、具さに其の政治經濟の實情を視察し、財政經濟の研鑽を積み在外六年四十五年歸朝して、直に京大教授を拜命せり。大正二年法學博士の學位を授けられ、翌三年瑞西に於て開催せられたる、カーネギー平和財團主催の平和會議に參列す。歸朝の後數年にして職を辭し、大正六年以來衆議院議員に當選する事五回立憲民政黨に屬す。昭和四年大藏政務次官に就任し、同六年四月之を辭す。

大山喜三郎

上道郡西大寺町

但諺子曰く『十で神童、十五で才子、二十過ぐれば只の人』と蓋し是れ一面を道破したる眞理の言として多少の首肯を拂ふを禁する能はざる所である。君の如きは然らず、幼にして神童を以て稱せられ、少壯亦群を抜いて頭角を社會に現はし、而して今や才學老成して俊名を馳せてゐる。熊本醫專卒日露戰役に從軍効あり、退營後現在に於て醫業を開業學理と實際との蘊奥を極めて名聲近郷にあまねし。

岡崎眞一郎

岡山市古京町

君は岡山縣財界の巨頭故岡崎増太郎氏の長男なり。先代増太郎氏は慧眼商機に富み、一代にして數千萬の富を積み天下に其の名を知らる、君亦血を稟けて機を見る頗る敏、事を處する亦明、父の遺業を繼いで之を守るに堅實なり。先代増太郎氏は蓄財之れ事としたるに反し君は克く之が運用に妙を得、愈々事業進展して益々家運の隆昌を見る。殊に社會を理解して寄附勸進には喜んで淨財を投じて吝しむなし。

岡本一太郎

岡山市小橋町

君は頭腦明晰調和性に富み社會の動嚮を先見すること確實、邑久郡の名門に生れ東京慶應義塾理財科を卒へ鐘淵紡績株式會社に入り

工場長として各地の工場を経て前途大に嚆望されたるも考ふるあり退社岡山市上西川町に岡山モータース株式會社を起しこれが取締役社長たり、同社は出納課に健實其のもの、稱ある豫備陸軍中佐の時實氏あり、營業部に阿部氏あり時代の要求と共に其の經營宜しきを得て社運大に揚る。

岡崎政恵

岡山市門田

岡山市役所主事として兵事課長、戸籍課長の要職にあり。最も機敏と正確を要する兵事課、取扱極めて繁雜なる戸籍事務に執掌、山なす書類を逐一詳細に目を通して決裁流るゝが如し、蓋し熱誠と明敏推して知るべきなり。性温厚寡言、誠直謹嚴の人にして、人に接して親切丁寧、功を誇らず、勞を語らず、宛然君子の風あり。

岡常次郎

君は明治十五年岡山縣淺口郡玉島町大字阿賀崎に出生現に大連東公園六五に居住せらる。日露戰役に從軍滿期後土木請負業に従事し今日に至る。佐賀縣嬉野電鐵及び長崎鐵道布設、京釜線、安奉線の改築、滿鐵本線の改良工事朝鮮鐵道會社新線布設等は其の主たる工事經歷たり。現在本店を大連市



に置き瓦房店、鞍山、奉天、鐵嶺、安東縣、平壤、兼二甫に支店出張所を設け君が事業倍々其の大發展をなす事火を見るよりも明なり。

小野實雄

明治三十年倉敷市富久に生れ現在大連但馬十二に住まふ。大正七年中央大學法科卒業直後辯護士試験に合格し東京に於て辯護士開業の傍ら法律新聞社(故高木益太郎氏主宰)の編輯担当。大正十一年大連に移住同様辯護士の業に従ひ、法律新聞大連支社開設之れが支社長となる、全年陸海軍大臣より陸海軍々法會議法に依る辯護士に指定され更に全年滿州法政學院教授となる。大正十三年大連市會議員に當選、大連市社會事業委員、關東廳國勢調査參事となり大連青年團を創立し之れが初代

幹事長たり、進んでは滿州青年聯盟を創設し



之れが理事及滿州社會事業研究會評議員、滿蒙研究會政治部委員長等に就任す。

昭和三年大連市會議員に再選し關東廳國勢調査參與員囑託さる、其他大連株式商品取引所常任監査役、滿洲法政學院理事及講師、岡山人會々長、大連市會議員、大連市特別事業委員、大連技藝女學校理事等々其の活躍實に目覺しきものなり。

岡野義三郎

岡山市國富

君は明治七年大阪市東區南農人町に生れ、明治二十四年大阪府尋常中學校卒業、第三高等學校をへて明治三十年東大文科卒業直ちに高知縣尋常中學校教諭となり、次で岐阜中學校教諭に轉じ、明治三十三年第六高等學校教授に任せられ、大正七年第八高等學校長、大正十年第二高等學校長に、昭和三年第六高等學校長に歷任現在に至る。

岡村萬吉

君は明治十五年兒島郡下津井町に生る。幼時父に死別爾來遺業を繼ぎ努力の結果家運頓に革まり遂に今日の味萬商店として基礎を築くに至り漁獲物處理運搬業は今や瀬戸内海一帯は勿論九州、東國東郡富來町を本據とせる東九州沿岸及朝鮮各漁場に至る。尙下津井町會議員、岡山縣水産會議員、大日本製水株式會社協議員其他多數の榮職にあり、金光教信者、書畫骨董等趣味又廣し。



岡崎松吉

君は岡山市下之町に慶應元年生る、家は累代茶花道具商を營み松聲堂の名は古くより知

らる、業態益々盛、又君の孝心のあつきかつて母堂米壽の齒を



迎ふるや、其祝意を寓せんため手向なく泉下に汚つる

り、後岡山縣農會技師を拜命して兒島郡農會技師を兼攝す。

君は指導農場を設け一般農業者を實地指導し農業の促進を計り又特産物獎勵として極力盡瘁せしが最近米葉煙草試作の許可を得て四十町歩の試作を行ふの外速成栽培を獎勵し漸次好成绩を得つゝあり。『農村を振興せしむる方策多々あるも宜しく系統農會をして其機能を發揮せしむるより他なし』趣味は花卉園

明治三十年倉敷市富久に生れ現在大連但馬十二に住まふ。大正七年中央大學法科卒業直後辯護士試験に合格し東京に於て辯護士開業の傍ら法律新聞社(故高木益太郎氏主宰)の編輯担当。大正十一年大連に移住同業辯護士の業に従ひ、法律新聞大連支社開設之れが社長となる、全年陸海軍大臣より陸海軍々法會議法に依る辯護士に指定され更に全年滿州法政學院教授となる。大正十三年大連市會議員に當選、大連市社會事業委員、關東廳國勢調査參事となり大連青年團を創立し之れが初代



らる、業益々盛、又君の孝心のあつきかつて母堂米壽の齒を

迎ふるや、其祝意を寓せんため手向なく泉下に汚つる無縁佛供養の發念より旦那寺なる網濱上生院へ鐘樓を建て梵鐘を造りて奉納し、又壇老を招きて稿へり、世人聞き傳へて君が美德を敬仰す其後獨力もて堂を建て尊像を安置せり、以て君が人と爲りを窺ひ知るべし。家に與謝蕪村筆の六曲屏風あり、先年畏くも賀陽宮殿下の御台覽を賜りたる逸品たり。

岡フ勝二

上道郡九幡村

元上道郡九幡村長中村幸三郎氏の次男矢掛中學出身地方屈指の地主たる岡崎幸八家に養嗣子となる。君頭腦明晰、温厚着實現に衆望を擔ひ九幡村長に選ばれよく地方自治の爲に盡す。年齢三十有余才前途洋々期してまつべきもの多し。

岡部謙平

君は明治二十二年久米郡加美村に生れ中國線龜驛前〇力運送店々主なり。氣宇瀟灑よく人を容れ清濁併せ呑む、居常寡言好々爺然たり。腦明晰又事に臨んで畫策可、されば運送店の經營に當りても幾多財界の變動に遭遇し時に店運の消長にありしと雖も常によくこれを切抜けて今日に及び全地方唯一の業者として確實迅速その使命を果せり。政治に趣味深く久山知之氏をして今日あらしめたるもの素より全氏の人格により又君の盡力や無視するべからざるなり。

岡部勝一



田郡福山農業補習學校長に就任したることあり

君は明治十七年兒島郡福田村に生る、明治三十八年岡山縣高松農學校卒業、英

業は今や瀬戸内海一帯は勿論九州、東國東郡富來町を本據とせる東九州沿岸及朝鮮各漁場に至る。尙下津井町會議員、岡山縣水産會議員、大日本製氷株式會社協議員其他多數の榮職にあり、金光教信者、書畫骨董等趣味又廣し。

岡崎松吉

君は岡山市下之町に慶應元年生る、家は累代茶花道具商を營み松聲堂の名は古くより知

り、後岡山縣農會技師を拜命して兒島郡農會技師を兼攝す。君は指導農場を設け一般農業者を實地指導し農業の促進を計り又特産物獎勵として極力盡瘁せしが最近米葉煙草試作の許可を得て四十町歩の試作を行ふの外速成栽培を獎勵し漸次好成绩を得つゝあり。『農村を振興せしむる方策多々あるも宜しく系統農會をして其機能を發揮せしむるより他なし』趣味は花卉園藝なり。

岡本吡男



君は明治二十七年上道郡雄神村に生れ、大正五年岡山師範卒業業西大寺小學校訓

導岡山縣師範學校訓導となり再び西大寺小學校に奉職昭和四年上道郡古郡小學校長となり昭和六年財田小學校長に榮轉して今日に至る、趣味は讀書、書をよくし家庭には兩親の外夫人との間に二男一女あり。

岡本信太郎

明治二十五年生 赤磐郡小野田村

落合町の川岸近くに最近モダン宏壯を誇る建物を見るに至り、これ昭和三年縣下中等學校縣管移管の際作西に設けられたる唯一の女子教育機關たる落合高等女學校なり校長岡本信次氏は嘗つて農村女子教育の實際化を以てしられし西大寺高等女學校校長藤井盧逸を輔けたる人その經驗と蓋蓄とを今や本校に於て表すに又獨特の經營を見せ稍もせば輕薄華美に惰せんとせる時専ら農村中堅婦人の養成を以て主眼とせるあたり氏の人物を窺ふに足るものあり、君の前途手腕を信賴囑望するもの豈た父兄のみならんや。

君は明治四十五年岡山師範の出獨學地理歴史科中等教員免許狀を獲得せる努力家なり。曩に和氣高女校長に榮轉今日に至る。

岡本正輝

兵庫縣西宮市川東町

君は明治十九年上房郡水田村に生れ、都窪

郡中淵村岡本親顯の養子となる、同四十三年岡山師範を卒業附屬小學校をへて北方小學校長に榮轉勤務せるも、大正六年職を辭して神戸市に出



で、養父親顯の經營する家相方位學鑑定所においてその直傳をうく大正

十一年養父の物故後業を繼いで現在に至る。養父親顯は大和三郷の吉里田與道に師事して斯道の蘊奥を極め方位家相學威權者として斯界に知られたりき京阪神、東京、名古屋、金澤、松江、廣島、四國路に出張所を設置す。

小野 哲 二 岡山市下石井

君は淺口郡長尾村の人、夙に醫を志し岡山醫專に入り研究をおへて大正十二年現在の地に開業外科を專問とす、性質淡泊にして患者に接して親切、技術最も熟達、君の聲價侵々として上り、倍々隆盛を加へ斯界の明星と謳はる。

尙氏は彫刻に長じ岡山に於て稀に見る技として定評あり。

太田 友 七 岡山市上之町

君は明治二十二年上道郡津田村大字君津に生る、明治四十三年岡山師範第一部卒業、同校附屬小學校訓導奉職數年の後、岡本米藏氏の招聘に應じ紐育土地株式會社に入り、續いて同氏經營の岡本洋行に轉じ、西洋樂器、蓄音器販賣の衝に當る、偶々同店岡山出張所廢止に當り、君獨立現位置に開業す、今日の太田洋行之れなりバイオリン、蓄音器、ピアノ、オルガン、寫真機、ラデオ等を販賣す。君資性濃厚實直、頭腦明晰慮亦周密、天才商機に富む、著實穩なる經營と、格勤精勵の努力とに店運漸次隆昌に趣き、信望愈加はりて今や同業者を壓倒して頭角を抜く。尙氏は岡山商工會議所議員として活動す。

長 田 安 太 上道郡西大寺町

複雑なる現代社會に處して人並な活動では要するに水平線以上に頭角を現すことはいはむがましい。眞摯なる生活態度、不斷の努力、

人一倍の活動を以て終始した長田安太君が、現住に土木請負業として堂々の陣を張つたのも決して偶然ではない。氏は全く努力の人と云ふ可きである。

山陽新聞社長 岡本 佐 市 岡山市之町

君は岡山市政に法曹界に元老として名實共に餘りに著名。明治二十七年辯護士開業、義侠心に富み、居常黙々、而も一度法廷辯護に臨むや恰も別人の如くその説き來り辯じ去る所理路整然、微細洩らさず聲淚共に下る。或は辛辣或は輕快洒脫、よく責を果さずんば止まざる氣概あり。君市會議員並に縣會議員として多年一方の重鎮となり縣市政に盡せし功勞尠からず。

又實業界の巨頭として現に岡山電氣軌道株式會社監査役、其他數會社の重役たり。

太田 伊 八

明治二十二年九月上道郡幡多村清水生る。君は四十四年岡山師範卒業。宇野及可知小學校訓導として兒童の教育に腐心すること多年、昭和五年四月和氣郡塩田小學校長に榮轉す。君は濃厚寡言の人格者にして陰徳多く和氣郡教育會幹事を兼ねたり。夫人は山陽高女出身にして上道郡芳野小學校に奉職す、昭和八年三月職を退き閑につく。君の趣味は旅行にして本土到る所に足跡を残し實地研究する所深し。一男二女あり。

合資會社誠忍社 岡 圓 吉

神戸市大塚町九丁目 岡山縣邑久郡鹿忍町 明治六年生れ 營業所 神戸磯上通五丁目 君は明治二十九年郷里にて麥稈製造業を開始。これ邑久郡方面に於ける草分にして、今日斯業の發展實に君の賜なり。大正年間麥稈



業の最も盛なりし當時此地の麥稈は一時其の量質共に優秀取引の標準とさる。當

時麥稈製造の功勞者として郡長より表彰され引續き各方面より表彰褒状を受く。其功績顯

著なる推して知るべし。大正元年神戸市三宮に支店を設置、之が賣捌に従事す。其後益々産出量増加し遂に現位置に本店を設け大正八年合資會社誠忍社とし資本三十萬圓を以てし、麥稈、麥稈眞田、帽体を英、米、佛、獨、マニラ其の他歐米各國に輸出、其の額優に百

て奮闘よく今日の業績を見る一に氏の敏腕努力に依る。日蓮に歸依し信仰厚く性は淡泊、人に接して城壁なく一見十年の知己の如し其の徳望亦察すべきなり宜なり現に市會議員に選ばれる。飛左子夫人との間に二男あり。趣味は書畫、骨董、圍碁。

君資性濃厚質直、頭腦明晰思慮亦周密、天才商機に富む、著實穩なる經營と、格勩精勵の努力とに店運漸次隆昌に趣き、信望愈加はりて今や同業者を壓倒して頭角を抜く。尙氏は岡山商工會議所議員として活動す。

長田安太

上道郡西大寺町
復雜なる現代社會に處して人並な活動では要するに水平線以上に頭角を現すことはむづかしい。眞摯なる生活態度、不斷の努力、



業の最も盛なりし當時此地の麥稈は一時其の量質共に優秀取引の標準とさる。當

時麥稈製造の功勞者として郡長より表彰され引續き各方面より表彰褒狀を受く。其功績顯

て奮闘よく今日の業績を見る一に氏の敏腕努力に依る。日蓮に歸依し信仰厚く性は淡泊、人に接して城壁なく一見十年の知己の如し其の德望亦察すべきなり宜なり現に市會議員に選ばる。飛左子夫人との間に二男あり。趣味は書畫、骨董、園藝。

岡本憲次

岡山市森下町
君は明治二十八年岡山市森下町に生る。岡山縣商卒業、家業罐詰製造業に従事父業の意を体して業務に精勵今や氏の罐詰製造業は全國の斯業中目覺ましきものあり、否全國食料品中優秀なるの稱あり。明治四十三年 明治大帝岡山縣行幸の砌り特別を以て天覽を賜る四十四年東宮殿下、大正十四年攝政殿下、昭和五年 大元帥陛下夫々御行幸啓の際何れも御買上げの榮に浴す。各地博覽會、共進會に出品して金銀賞を受領せしこと枚舉に遑あらず。

著なる推して知るべし。大正元年神戸市三宮に支店を設置、之が賣捌に従事す。其後益々産出量増加し遂に現位置に本店を設け大正八年合資會社誠忍社とし資本三十萬圓を以てし、麥稈、麥稈眞田、帽体を英、米、佛、獨、マニラ其の他歐米各國に輸出、其の額優に百萬圓を突破す。尙一面支那眞田を輸入し各業者へ卸し加工品として天津、上海、青島方面へ輸出す、現に神戸市眞田同業組合の役員たり。松野夫人は牛窓町大倉家の出、長男篤太氏は關西學院高等科卒業後歐米各國を三ヶ年巡遊斯業の視察を終へ現に輸出部を擔當し店舗の基礎愈強固を加ふ。

牛窓郵便局長 多田治



君は明治二年名門岡家に誕生資性謹嚴德望家なり。現在牛窓郵便局長たり。嘗て備前三等郵便局長會々長をつとめ、邑久郡會の郡會議長たりしことあり。高等官待遇從六位勳六等にして岡山縣衛生委員、牛窓信用組合の監事をも兼攝せり。

岡田五三郎

明治十七年生 岡山市天瀬町
賈佛の號あり。漢學の造詣深く嘗て桃山中學に學び、明治四十二年中國民報社に入り、翌年山陽新報へ轉じ、大正二年岡山新聞社客員となる。全紙上に連載し全紙の人氣を高めし『鼠泣き』の執筆者こそ君なり、又『商工往來』編輯長たり。大正十二年岡山市會議員となる。岡山市東自警團副團長、岡山工業組合顧問、岡山興業組合顧問等干與せるもの多し。政野夫人は大阪此花區上福島山口家の出一男あり。天台宗を信仰す。

岡田誠一

岡山市上石井
明治二十年生 本籍 兒島郡銚立村北方
君は大阪時事新報社岡山支局長兼岡山販賣店主なり。大阪朝日新聞大阪毎日新聞の二大勢力と在岡四新聞の根強き根據との間に在り

大野兵八

君は明治十二年兒島郡灘崎村迫川に生る。實父紋三氏は日清戰役當時より備前羽二重織主として襟地、着尺地を製織し、歐洲戰亂後巾廣小倉地を專業とす廣く小學中等學校學生兒童服地として需用最も多く販路又京阪神、中國地方各縣を始め各地方及台灣に及ぶ。君は大正十年以降之に代り、一切の事業を繼承し全業者の信望厚く備前織物全業組合評議員現灘崎村々會議員等に擧げられ常に斯界の革新に斡旋努力し今日に及ぶ。

大江實太郎

眞庭郡川上村下徳山七一二
君は寛氏の長男として明治八年土地屈指の名門大江家に生る。青年時代既に中堅人物として重きをなせり。村農會設立當時より村農會長として今日に及び、その間煙草栽培の功顯著なるを以て專賣局より表彰せられ、村會議員を経て村長たること多年、更に大正四年縣會議員に當選、縣政界の宿將として重きをなせり。亦大正六年以來郡會議員に當選すること二回、郡會議長、同議長の榮職に推され、郡政界にも活動し、當地方公共の事業は凡て君を原動力として進歩し、發達しつゝあり。資性豪放磊落、内に高邁の識見を藏し、外に侃諤の辯を備え。眞に岡山縣代表的人物として貫録を有す。

太田庄太

明治九年生 和氣郡三石町三石
 君人となり磊落にして細事に拘泥せず、風格高し。夙に耐火煉瓦の有望なるを見て此の地に創業す。商機を見るに敏なる君が精勵、倦まざるの努力は大いに報いられて、製品の聲價頓に擧り遠く東京、京阪神の市場に歡迎せられて、註文殺到、一躍三石耐火煉瓦の名を壓倒するに至る。大正五年會社組織に變更、太田耐火煉瓦合資會社として其の代表社員となり今日に及ぶ、地方に於ける信望厚く町會議員たること己に二期。

荻野廣文堂主
 荻野廣太

岡山市兵團一番地



岡山縣立商業第六回の卒業、成績優秀の故を以て、直ちに岡山市立商業學校教

諭となる、後大原孫三郎の拔擢を受けて、倉敷紡績株式會社に入り用度掛勤務、大正六年辭し先代よりの家業諸紙文具商を繼承して自家營業に従事す。最近は、邦文タイプライター岡山縣代理店、宛名印刷器並に最新事務用品の特約販賣を加へて新進の營業振り、大いに業績上る。

大正十年岡山市會議員となり市政の爲盡瘁する處多し、同十三年事情ありて、岡山を去り諸國を遍歴修業すること八ヶ年諸靈場行場に於て自ら修業体験、遂に皇國皇室中心主義無上道最善妙法を開顯して、傍ら宣傳布教中なり。

岡野敏彰

兒島郡兒島町小川



君は岡野易太氏の三男、明治二十年陸軍士官學校卒業陸軍歩兵少尉として大阪第二師團に在勤す、同二十五年中尉に進み同二

十八年征清第三軍に編入されて從軍、同年八月大尉に任ぜらる、翌二十九年一月混成第七旅團付臺灣征討に従軍、同三十五年五月少佐となり、東京第一師團に轉じ同三十七年四月歩兵第三聯隊大隊長として征露軍に従ひ旅團方面の戰役に參加、旅團要塞政團中敵彈の爲め負傷し東京赤十字病院に入院す、治癒退院後第三師團に轉じ同四十二年十一月大佐となり、同時に第三十三聯隊長に補せられ後少將となる、從四位勳三等功四級、日露戰役後第三十三聯隊長當時、獨乙將校の大尉ハウゼン、ハウゼン教育功勞者としてカイゼル陛下より獨逸勳二等を受けたり。

大野直行

君は明治十七年兒島郡灘崎村迫川に生る。明治四十年關西中學卒業、大正十四年同村助役に就任以來村長代



理たること二回、遂に昭和七年村長に擧げられ現在に及ぶ、灘崎村農會長、全消防組頭たり、信仰は黒住教、趣味は骨董。

乙倉鶴松

明治三十二年操陽村大字倉益藤本家に生れ、上道郡津田村長乙倉傳松氏の養子となる。大正七年岡山師範第一部卒業、上道郡財田校に奉職、大正九年上道郡開成校、全十年芳野校全十三年富山校の各校に轉じ、その間岡山師範研究科に於て研鑽を積み、大正十四年その業を終へ、昭和六年久米郡神目小學校長に榮任したる人温厚にして手腕ある良校長たり。

大饗梅三郎

岡山市柿屋町

眞庭郡久世町久世の名門菱川家に生る。岡山師範に學び、教育界にあつて重きをなすこと數年、退いて實業界に入る。資性快にして豪膽活動的人物なり。備前燒株式會社は大正七年御津郡の富豪高原愿治、元縣會議員秋山陟等と創立本店を柿屋町に工場を和氣郡伊部町に設け君は其の専務取締役たり。伊部燒細工物、日用品、土管等を製作し別に邑久郡虫明に、虫明燒工場を設け、後樂園外苑に販賣店を開き、相當の業績を揚げ本縣の特産品と

して大いに重きを占むるに到る。伊部燒は和氣郡伊部町に産し古備前と稱して有名なり。

尾谷半三郎

岡山市中之町に宏



營よろしきを得鋭意校務の刷新に盡力して今日に至る



君は岡野易太氏の三男、明治二十年陸軍士官學校卒業、陸軍歩兵少尉として大阪第四師團に在勤す、同二十五年中尉に進み同二

眞庭郡久世町久世の名門菱川家に生る。岡山師範に學び、教育界にあつて重きをなすこと數年、退いて實業界に入る。資性快にして豪膽活動的人物なり。備前燒株式會社は大正七年御津郡の富豪高原恩治、元縣會議員秋山陟等と創立本店を榊屋町に工場を和氣郡伊部町に設け君は其の専務取締役たり。伊部燒細工物、日用品、土管等を製作し別に邑久郡虫明に、虫明燒工場を設け、後樂園外苑に販賣店を開き、相當の業績を揚げ本縣の特産品と

して大いに重きを占むるに到る。伊部燒は和氣郡伊部町に産し古備前と稱して有名なり。

尾谷半三郎

岡山市中之町に宏

大なる店舗を張る金物老舗あり、元尾谷商店と呼ばしか、大正九年株式組織に變更、眞島屋商店と稱す、岡山市に於ける最古の金物商として知らる、君は其の社長たり。曾つては、岡山市會議員として、又商業會議所副頭取として活動し、岡山市中心人物たり。幾多會社の取締役又は監査役として、岡山市實業界の重鎮なり。學識あり、才智あり、常識に富み、社交に長け、然も謙遜にして謹嚴、威ありて驕らず、實に好個の紳商なり。現に商工會議所議員、消防組頭たり。

岡本五市

岡山市小橋町一〇三

君は本縣阿耆郡千屋村、竹本仙太郎氏の四男として生れ姫路市岡本家に入りて現姓を冒す。大正七年岡山師範卒業、直ちに東京高師文科第一部に入り、同十一年同校卒業



、同十二年東北帝大法文學部法科に入學同十五年卒業、大學在學中大正十四年高等試驗司法官試驗合格、昭和二年司法官補東京地方裁判所勤務、同三年檢事として山口地方裁判所檢事局勤務、同六年岡山地方裁判所檢事局へ轉じ現在に至る。君は初め師範教育を受け後轉じて司法官となる、されば論告常に峻烈なる裡自ら人情味あり、法理一片に依りて固めたる頭腦と其趣を異にして人を濟度せんとする氣魄窺ふに足る。

岡野章太

香川縣高松市壹番町二四

君は明治十年赤磐郡高陽村熊崎に生れ、明治三十二年岡山師範を経て三十六年東京高師英語科を卒業直ちに、岡山縣矢掛中學、埼玉師範各教諭を拜命後埼玉縣浦和中學校長に榮轉更に長崎縣佐世保中學校長、全縣瓊保中學校長に歴任し、昭和三年香川縣高松市立第一中學校長として赴任、創業初代校長として經



して内外の信望厚し。

玉島尋常高等小學校長 小野年彦

淺口郡玉島町



君は明治四十年岡山師範を卒業後、淺口郡船穂小學校、柳井原小學校長、大正六年長尾町允中小學校長、岡山縣女子師範同導八年、玉島併置校、十三年船穂小學校長を歴任し、昭和四年淺口郡連島町西浦小學校長となり、今日に及ぶ。君の教育家的手腕と人格識見は夙に内外の信望を得、今や奏任待遇の名校長として喧傳さる。公務の外に、君は淺口郡教育會副會長として、郡教育界のために大いに努力され、その実績をあげつゝあり。

尾崎忠一



君は明治三十四年兒島郡琴浦町に生れ山口高商を卒業後、郷里にありて田ノ口郵便局長の要職にあり。快活、公正大の性を有し郷黨に評判頗るよろしく、家には母堂、夫人及び一男あり、謠曲を趣味として家内至つて圓滿なり。

大賀一郎

明治十六年岡山縣吉備郡庭瀨町川入、義海氏の長男として生れ現在奉天市葵町十二に居住さる。幼より博物學をよくし深抵小學校、

岡山高等、岡山中學を経て第一高等學校に進み東京帝國大學に入り植物學科卒業明治四十二年一ヶ年間大學院在學出で、第八高等學校教授たり。此間南洋諸島を巡遊す。大正六年以來滿州地方部に勤務され主として教育事業に精進され殊に滿州植物の研究に従



事研鑽を續け大正十二年より十五年迄歐米に行き事三年、昭和二年理學博士たり。現に奉天教育專門學校教授滿州博物館々々長として活躍せらる、數百年前の古蓮實の發芽については君が學位主論文にして今後滿州國の發展に伴ひその植物分布、植生状態等に關し學究的實際的貢獻を囑望するもの切なり。弟潔氏は醫師、大連醫院小兒科に勤めて名有り。

兒島元三郎 岡山市南方三九七

君は明治十年津山市川崎町に生れ。岡山師範を経て、東京美術學校に學び、後香川縣九龜中學、韓國官立漢城師範兼漢城高校教授、韓國學部教科書編纂委員、京城高等普通學校教諭、朝鮮總督府教科書編纂、朝鮮公立高等普通學校教諭、廣島縣增川高女教諭の要職を歴任し、正七位に敘せられ、功成りて岡山に歸り、岡山高等女子職業學校長として益々活躍し、和洋裁縫科の外女子商業部、教員養成科、本科等を設置し、約二千五百名の卒業生を出し、社會の進運に貢獻すること尠からず、殊に同校に於て苦學生のため種々の便宜を圖り、世の信頼を高めつゝあるは、君のため喜ぶべき事なり。

大山秀雄

香川縣高松市西ノ丸鐵道官舎
君は明治二十九年後月郡西江原町に生れ、興讓館中學、六高を経て大正十年東大獨法科卒業直ちに鐵道省監督局に入り、昭和三年海外へ留學、昭和五年歸朝、昭和七年現大鐵、高松出張所長となる。君は讀書、ゴルフに興味あり。曹洞宗にして夫人との間に一男あり。

小野勇雄

吉備郡神在村に明治二十六年孤々の聲を擧げ、岡山師範第一部に業を卒へ

大野幸太郎

君の父轉造氏は判頭を奉じ君は長男として慶應元年兒島郡莊内村に生る。青年時代は村の書記として收入役をつとめ後織物問屋を開業今の備前織物同業組合を創設す。尙兒島織染研究所長、染織學校長としての職責を果し、後兒富士紡績株式會社專務取締役となり、同會役員としては義長の

、吉備郡日美小學、池田、鯉山、二万、箭田、菌、岡田の吉備郡内各校に轉任し、昭和四年眞庭郡落合小學校に轉勤、昭和五年全郡美川小學校に轉じ、昭和六年十二月英田郡福山小學校長を拜命。九年三月浮田校長に轉任す。

小野仙四郎 岡山市西大寺町



君は明治十六年岡山市西大寺町に生れ、門學校を出で、大正元年以來、綿布、醸造資料商を營み、其販路を岡山縣下並に廣島、山口、鳥根、鳥取、兵庫の中國諸縣下並に南海方面に敷き、主力を各地に點在する酒類醬油の袋地の註文を一手に引受け巨利を博し業務の發展と共に貨殖に成功す、岡山縣濟世委員、青年團顧問、内山下小學校聯合父兄團幹事等に擧げられ、精勵格勤なる努力家にして品性高潔の人物たり、家族は令夫人華子さんとの間に二男三女の子福者にして團樂の中にあリ。

大野稔

君は明治二十一年郷内村大字木見に生れ、天資濃厚實直なるを以て部民の信用厚く郷内村收入役となり務むる事約七ヶ年後第一合同銀行茶屋町支店に轉じ、今日に至れり。其間青年團長、或は團支部長として青年團の開發に力めし所尠からず。君は未だ春秋に富み前途益々洋々たり。

大水林造

君の養父を大水兼造と稱す。君幼にして、學を好み、彦崎村村會議員、收入役助役、産業組合理事、耕地整理組合理事、兒島郡産業組合聯合會專務理事等の重職に擧げられ、或は村政の刷新に、或は産業の發展に裨補せし事大なり。町村合併して郷内村となりし後は米穀輸出検査員、衛生組合理事を経て現に村會議員たり。君獨り地方公共の爲に心を致すのみならず、植松製織會社長として實業界にも亦重きをなす。君は尙日清、日露の兩役に參加し功によりて歩兵軍曹に榮進し、勳七等青色桐葉章を賜はる。

實に請負業者間の一權威者たるなり。

帝國証券社長

岡本實雄

東京市京橋通二丁目

氏は明治十九年英田郡大原町に生る關西中學及開谷中學に學び明治大學政治經濟科を卒業す。

香川縣高松市西ノ丸鐵道官舎
君は明治二十九年後月郡西江原町に生れ、興讓館中學、六高を経て大正十年東大獨法科卒業直ちに鐵道省監督局に入り、昭和三年海外へ留學、昭和五年歸朝、昭和七年現大鐵、高松出張所長となる。君は讀書、ゴルフに趣味あり。曹洞宗にして夫人との間に一男あり。

小野勇雄 吉備郡神在村に明治二十六年孤々の聲を擧げ、岡山師範第一部に業を卒へ

大野幸太郎 君の父轉造氏は判頭を奉じ君は長男として慶應元年兒島郡莊内村に生る。青年時代は村の書記として收入役をつとめ後織物問屋を開業今の備前織物同業組合を創設す。尙兒島織染研究所長、染織學校長としての職責を果し、後兒富士紡績株式會社專務取締役推され、郡會議員として議長の椅子を占めたる事あり。村の衛生組合長に擧げられ、又常山城趾の公開を企て其史蹟を世に紹介すべく大々的の計畫を樹立する等近時稀れに見る進取的理想の持主にして郷土開發のために盡力すること甚だ大なり。

尾崎虎雄

君は明治二十二年琴浦町田ノ口岩井秀太郎の三男として生る。同家の先代は大庄屋、且郡内有數の門閥家なり。君幼にして穎悟商客に長じ、夙に實業に志し早くも石炭、薪炭、吳服、穀物の販賣に従事し、勉めて倦まず經營機宜に適し着々として發展の緒に就く。其の手腕は忽ち全町尾崎伊平氏に認められ、乞はれて其の養子となる。大正五年歐洲戰亂に際し硫化染料輸出織物製造に志し今や内外各地に支店を設くるに至れり。なほ君は郡會議員の外二三會の重役を兼ね前途に益々見る可きものあり。

大本百松 岡山市内山下



縣下の土木建築請負業者中斷然群を抜き順調なる進路を辿りつゝあり。君は岡

山縣淺口郡連島町の人當初より相當の資産を有し町内屈指の豪家にして又名望家なりき。其業績の点を擧げんか。卸ち本店を連島町に置き岡山縣に於ける唯一の請負業者たりしが氏は此に満足せず、遙に縣外に手を伸ばし、兵庫縣相生町に支店を置き阪神間の大工事に關係して兵庫縣下に於ても岡山の大本組と云へば相當其名聲を喧傳せらる。昭和五年岡山市内山下相生橋詰に宏大なる建築を爲し、大本組支店を設け大に活躍しつゝあり。昭和五年陸軍特別大演習に際し、大元帥陛下の行幸を仰ぐに先立ち後樂園に通ずる鶴見橋の基礎橋脚及橋梁架設工事は氏の請負完成せる所に於て猶ほ縣下の大橋は氏の關係せる所多く、

。君幼にして、學を好み、彦崎村村會議員、收入役助役、産業組合理事、耕地整理組合理長、兒島郡産業組合聯合會專務理事等の重職に擧げられ、或は村政の刷新に、或は産業の發展に裨補せし事大なり。町村合併して郷内村となりし後は米穀輸出検査員、衛生組合理長を経て現に村會議員たり。君獨り地方公共の爲に心を致すのみならず、植松製織會社社長として實業界にも亦重きをなす。君は尙日清、日露の兩役に參加し功によりて歩兵軍曹に榮進し、勳七等青色桐葉章を賜はる。

實に請負業者間の一權威者たるなり。

帝國証券社長

岡本實雄

東京市京橋通二丁目

氏は明治十九年英田郡大原町に生る關西中學及閑谷中學に學び明治大學政治經濟科を卒業す大正三年家督を相續し拱手待機の後上京し大島紳所支配人となり更に帝國證券社を起し自ら社長の重職に任じ傍ら大倉組、問組、西本組の顧問を兼ね政治家として一度は遂鹿進出せんと前同己に立候補を決意せしが次期に讓つて出馬せなかつた事は氏の面目躍如たる處たり。

第一銀行營業部次長

荻野正孝

東京中野區小瀧町五〇

君は荻野幸平氏の長男なり。幼より頭腦明晰東上して東大經濟學部經濟科に入り、大正八年其の業を卒ふるや、東京第一銀行に勤務し、本店預金係長、支配人代理、同神田支店、同日比谷支店長に累進して、遂に昭和八年五月現在の要職に就かる。又曾ては歐米各國を視察して銀行業界の事情を調査研究す。

大塚電氣工務所長

大塚金子

氏は明治三十一年川上郡手

莊村に生る資性俊秀穎悟明治三十八年上京して神田英語專修學校に學び卒業と共に東京電燈株式會社に入り昇進大いに前途を期待されしが自ら獨立の精神已み難く辭して後獨力工務所を開設し大正十一年麴町の工場に於て營業を開始し、震災後の好機に際會し大正十四年現在地へ轉じ、遂に今日巨萬の財を積む空拳より起りて今日の成功實に立志傳中の人と云ふべし。

大賀 紘

兒島郡莊内村



君は増三郎氏の嫡男として性穎悟慧敏夙に箕裘の業を繼いで太物商を營む、遇々姫路野砲兵隊に入り、日露戰役に從軍、拆

木城、遼陽、沙河、奉天、鐵嶺方面に轉戰、

軍功あり、旋凱曹長に進み勳七等に敘せられ功七級金鷄勳章を賜はる、明治四十年自村役場に入り、大正六年助役に進む、大正九年備前物産株式會社創立に當り取締役として會社經營の衝に當り現在に及ぶ。村會議員たること四期、寡言著實の人なり。

大橋信次郎

兒島郡莊内村

君は明治十二年宇野町に宮田貞一郎氏の次男として生れ、二十四才にして、大橋米吉氏の養嗣子となる、養家は代々農家なりしも、意氣潑潑たる君は、斯業に甘んずる能はず、早くも身を金融界に投じ、中備銀行支店長として、同地方金融の圓滑に貢献すること甚大なり。今は辭して家にあり、君大いに村治に努め、衆望を擔つて村會議員となり、克く言議の任を完うす。君嘗つて征露の軍に加はり功を以て勳八等を賜はる。現に備前物産株式會社監査役たり。

尾原音人

岡山市上西川町

岡山市西中島町に明治六年生る、幼にして音楽を好み、十五歳にして吉備樂の創始者故岸本芳秀氏に就きて學ぶ、後帝都に遊び斯道に研鑽する所深く、明治三十二年金光教本部樂事となり現今に及べり、今日の吉備樂は在來のもの趣きを異にし凡て新案によれるものにして君を以て創始者と云はざるを得ず。吉備樂は優雅高尚なり而して未だ嘗て他府縣に於て之を見ず本縣の特有なり、曾て畏れ多くも各宮殿下各宮妃殿下の御臺覽を辱ふし、無上の光榮に浴せし事一再に止らず斯る優美高尚なる舞樂は獨り君の榮譽ならずして本縣の榮譽なり、益々斯界の發達に努め、其光輝の發揚に精進せらる。

大田原泰輔

大阪市住吉區阿部野

君は明治十年英田郡土居村に生る明治三十二年岡山師範卒業、明治三十七年東京高師卒業、和歌山師範、埼玉師範、大阪府池田師範を経て清水谷高等女學校長となり、現に大阪府生野中學校長として令名たかし。性快活にして淡泊、果斷に富み、中學校長としては最も適任、趣味は謠曲と庭球。

岡惣平

小田郡笠岡町

君は明治九年徳島縣三好郡山城谷村の生れ、明治三十七年土木建築請負業を創め、明治

岡本信一

岡山市弓之町

君は岡山市の元老、岡本佐市氏の長男に生れ、岡山中學校卒業の後早稲田大學法科に學ぶ、現に衆望を荷ふて、岡山市會議員たり。新進機鋭以て議員中重きを成す、岡山新聞社取締役として、大なる力を有す。性淡泊にして謙讓市民の敬服する處なり。

四十五年現住に移り、大正五年鐵道省指定請負人となり、大に令名を博す、頭腦明敏思慮深く剛健の氣質を有し同情心厚く、一般より畏敬せらる。尙前途春秋に富む、切に自重自愛業界に雄飛を祈る。

岡崎勉

上道郡西大寺町

君は明治三十九年岡山縣邑久郡豊村射越に生る、岡山師範卒業、縣下初等教育に従事すること數年、郡視學縣屬となり、遂に拔擢せられて後月郡長に進み後西大寺町の



懇請により辭して、同町長となり現在に及ぶ縣町村長會長、又全國町村長副會長、會長として令名全日本の津々浦々に及ぶ。性剛健質實、頭腦明敏にして調和性に富み讀書を好み書に堪能なること一家を成す。

大饗熊吾

和氣郡伊里村伊里中

君は明治四十四年岡山師範第一部卒業小學校長として各地に令名を殘し現に和氣郡伊里小學校長として父兄兒童の尊信厚し、和氣郡教育會長、和氣郡小學校長會長として郡内教育界に重きを成す。性潤達豪快にして膽畧あり、明斷果快にして勇邁の氣に富み、稜々たる一片の氣骨を持ち教育界稀に見る人物なり。庭球に於ては其の技妙神域に入る。

恩藤肇

眞庭郡勝山町

君は赤磐郡布都美村に生れ大年四年岡山師範第一部卒業後廣島高師教育科にて教育學を專攻、總社高等女學校教諭を経て勝山高女校長となり、現在に至る。由來研究心強く常に新刊圖書に親しみ本縣教育家中稀に見る人物なり。

性溫雅、寡言謹直の人、女子教育の任に當るは最も適材所を得たりと謂ふべし。同校は元來町立經營にして一時廢校を唱へられたるも、君來りて校長となり、其の經營宜しきを得て、今やその聲を潜め寧ろ校舍改築の議さへ起るに至る。

て電燈電力工事の設計請負を目的として開業、大いに活躍す。性質直、謹嚴其の信用篤く今や縣下電氣會社方面の工事は固より、岡山縣廳、岡山建設事務所管内の電氣工事指定請負人となり、業務愈々發展隆昌の域に向ひつゝあり、夫人は家にありて生花の師匠なりと。

小野清一郎

君は明治九年小田郡矢掛

二年岡山師範卒業、明治三十七年東京高師卒業、和歌山師範、埼玉師範、大阪府池田師範を経て清水谷高等女學校長となり、現に大阪府生野中學校長として令名たかし。性快活にして淡泊、果斷に富み、中學校長としては最も適任、趣味は謠曲と庭球。

岡惣平 小田郡笠岡町

君は明治九年徳島縣三好郡山城谷村の生れ、明治三十七年土木建築請負業を創め、明治

岡本信一 岡山市弓之町

君は岡山市の元老、岡本佐市氏の長男に生れ、岡山中學校卒業の後早稲田大學法科に學ぶ、現に衆望を荷ふて、岡山市會議員たり。新進機鋭以て議員中重きを成す、岡山新聞社取締役として、大なる力を有す。性淡泊にして謙讓市民の敬服する處なり。

岡野桂太 岡山市森下

明治七年赤磐郡高陽村熊崎に生れ、二十九年岡山師範卒業、周匠尋常、赤阪高等小學校長、赤磐郡視學、縣視學、縣屬を経て川上郡長、上道郡長となる。大正九年辭して西大寺鐵道株式會社に入り、専務取締役となり、傍ら岡山乗合自動車會社専務取締役たり。會社經營の衝に當る業績著々として伸び、縣下交通界に貢献すること多大なり。

大藏公望 東京市澁谷區代々木富ヶ谷町

明治十六年岡山縣に生る先代平三氏は明治に於ける陸軍切つての語學者で總ゆる軍事外交家として令名があつた。陸軍中將で明治四十四年薨去と共に氏が襲爵した。これより先明治三十七年帝大工學部を卒業し渡米して鐵道につき造詣を深め、明治四十一年歸朝と共に鐵道省技師に大正八年滿鐵理事に更に昭和四年理事に再任せしが六年顧問となつて退社し、貴族院議員に當選し露西亞事情調査會長或は滿洲國の建國翼賛者として國家の爲め奮闘されつゝあり。

岡喜七郎 東京赤坂區青山南町五ノ壱

君は明治元年伊丹喜三郎氏の長男に生る。明治十九年舊幕臣旗本の名門岡敬孝氏の養子となり同三十一年家督を嗣ぐ。明治二十四年東大英法科を卒へ、内務省試補に任じ、鳥取縣參事官、青森縣、務省、大阪府各書記官。秋田、鳥取各縣知事、統監府警務總長、同參與官、内務省警保局長、警視總監等を歴任して、大正三年貴族院議員に勅選せらる。又當時より帝國通信社長たり。昭和二年六月政友本黨の憲政會と合して立憲民政黨成立するや其の相談役たりしが、同七年立憲政友會顧問に推戴せらる。同八年六月貴族院の南洋視察團に加はり、具さに其の風土人情を視察す。

大森幸政 岡山市岩田町

廣島遞信局岡山駐在官として久しく勤務、電信、電話等通信機の方面の事に當る。辭し

範第一部卒業後廣島高師教育科にて教育學を專攻、總社高等女學校教諭を経て勝山高女學校長となり、現在に至る。由來研究心強く常に新刊圖書に親しみ本縣教育家中稀に見る人物なり。
性溫雅、寡言謹直の人、女子教育の任に當るは最も適材所を得たりと謂ふべし。同校は元來町立經營にして一時廢校を唱へられたるも、君來りて校長となり、其の經營宜しきを得て、今やその聲を潜め寧ろ校舍改築の議さへ起るに至る。

小野清一郎 君は明治九年小田郡矢掛町矢掛に生る。地方に於ける名望家、人格高潔にして識見卓越、遂に岡山縣會議員に選ばれて名譽縣參事會となる。議員中の議員として名聲高し。

岡上爲右工門氏の長男、謄寫版販賣店として古くより名高し、君岡山商業學校卒業、直ちに業を繼いで、一般文房具の販賣を加へて、商況益盛に、業務大いに進む。現に岡山市會議員、少壯議員たるも、常に出所公明にして、新進の士として將來を期待せらる。

岡上偉佐衛 岡山市下出石町

君は邑久郡笠加村に生る。號は桂南、字子靜、通稱專次郎、董明。

大原專次郎 岡山市門田



人、保靜堂の別號あり、曩に岡山師範教諭として永年職を奉ず、始め書を難波香城、加納星南に學び後日下部鳴鶴翁の書風を慕ひ親しく翁を訪ふて書法を聴く、隸を近藤雪竹翁に學び和漢の碑版法帖を研究す而して隸、草は其最得意とする所なり。和歌及詩文を好む、又忙中閑を得て禪門に參す、資性溫雅圓滿恬淡時に諧謔を交へ人をして頤を解かしむることあり、鳴鶴翁の依囑により岡山に大同書會支部を設け會長となる、又黃薇書道會長として書道講習會、書道展覽會等を開催し後進を誘掖して書道の普及振興を圖れり、門弟にして習字科教員となれるもの七十餘名に及ぶ。先生の揮洒にかゝる金石文等枚舉に遑あらず、曩に明治四十三年及昭和五年陸軍特別大演習並に大正十五年皇太子殿下行啓の際に貴重なる書類拜書の光榮を荷ふ。日本書道作振會委員並に戊辰書道會相談役たり。

浩養軒主 奥山朝恭 岡山市中出石町

日本の三大公園後樂園内に宏壯優雅、昔ながらの様式に依る建物を見る、これ浩養軒なり。公園に遊ぶ人の爲めに特に設けられたる料理店にして、休憩所とし、喫茶、食膳、其の需めらるゝまゝに之れに應ず、又宴會場の設けあり其の設備の完備せること、料理の技に於て及ぶものなく今回の行幸に際しても特に宮内省よりの御下命に依り、大供宴の料理仕出の榮を受く。店主奥山朝泰氏は東京の人、田安藩士にして家柄の人なり、古き東京音楽學校の出身にして明治年間音楽家として令名あり、嘗つては兵庫、大阪、岡山師範に音楽教師たりしことあり、彼の『青葉茂れる櫻井の』楠公父子の唱歌は君の作歌作曲なり思想高潔、徳望あり。稀に見る人格者なり。

大谷直一

苦田郡高田村大篠

君は明治三十九年岡山師範卒業、久しく縣下初等教育に従事し現に加茂小學校長として令名あり、多年の功勞に依り奏任官を以て待遇せらる。性謹直寡言の人にして實踐躬行を以て人に範を示す、稀に見る人格者にして縣下小學校長中重きを成す。

岡田榮太郎

東京府保安村下保谷北原

明治二十年生れ現に滿洲蠶糸株式會社取締役、合同煙草株式會社取締役、日華蠶糸株式會社支配人にして岡田伊三郎氏の長男なり。大正六年中央大學法科を卒業して片倉組に入り片倉製糸株式會社に勤務せり。數年を経て日華蠶糸株式會社に轉じ今やその支配人たり。かく前記の職にありて期待さるゝこと大なり家には夫人との間に一男一女あり。

正六位 内務事務官神社局勤務

岡田包義

東京本郷區東片町一三九

君は衆議院議員岡田忠彦氏の令弟明治三十三年岡山縣士族陰平氏の七男に生る。大正十三年東大法科に入る、既に在學中に高等文官試験に合格し卒業後直ちに内務省神社局勤務を拜命、茨城縣内務部に轉じ地方事務官に任じ東京府地方課長たり。昭和七年一月更に現職に任じ今日に及ぶ。

岡本幾二

眞庭郡落合町

君は明治十七年眞庭郡津田村に生れ、日露

戰役に從軍軍功あり、歩兵曹長に進む、歸りて津田村在郷軍人分會長たり、後落合町に轉ずるに及んで、落合町在郷軍人會副會長、落合町消防組組頭、落合町會議員の要職にあり、同町に於ける有力家なり。殊に町政の樞機に參與して多大の信望あり。

岡 仁八

都窪郡福田村山田

君は和氣郡熊山村矢部金三郎氏の次男として、明治十二年五月に生る。明治三十六年岡丈太郎氏の養子となり、明治二十六年岡山師範卒業、初等教育に従事すること久しく、教育上の功勞顯著なるもの多し。大正十二年鶴田小學校長在職中村民一致を以て村長に推薦せられて教育界を勇退して其の職に就く、多事なる村政の難局に處して著々成果を收めて名村長の名あり、村民の絶對信賴を擔つて今日に及ぶ。

大森本衛

君は明治十年吉備郡高松町

平山に生る。門地資財と學識人格とを背景として、高松町長となる、町民の熱烈なる心服と支持とによつて町政料理の重責に當り手腕を揮ひつゝあり。君は大森喜惣太氏の男、地方開發に志し、自治行政に盡瘁貢獻し、雄偉の才幹を縦横に揮ひ、其の業績の如き、町民周知の事柄なり。君今や愈々多年の蓄蓄と経倫を傾けて、着々として理想の實現に邁進しつゝあり。

小野田千代次

君は明治二十年上道郡富山村に生る。金川中學に學び中途にして東都に上り大成中學を卒業す。尙進んで高等の學府に入る豫定の處嚴父の喪に遇ひ急遽郷里に歸り、家を繼ぎ地主として家政の任に當ると共に村治に參與し大正三年村會議員に當選爾來再選され大正十三年村長に推され今日に及ぶ。郡會議員たること數回、最少年議員として異彩あり、常に一方の鬪將として重きを成す。村長としては農村開發教育の普通發達に力を致すこと多大達見の士と謂ふべきなり。

太池太眞治

阿哲郡新見町八二七ノ一

明治二十年生。京都醫科大學卒業京大病院に勤務、大正五年以來郷里なる現在の地に於て引續き醫業に従事する傍らに、岡山縣醫師會代議員、阿哲郡醫師會々長たり。尙濟世



顧問とし て町政に 盡力しつゝ あり。君は魚釣 の趣味あり。家庭は夫人との間に一

明治十二年上道郡高島村段原に虎造氏の長男として生れ昭和二年家督を繼ぐ。幼より努力好學の士、東都に遊學し東大に入り明治四十三年工科の業を卒へ、直に上田蠶糸専門學校の助教授拜命紡績科を担任せらる。曾て明治四十四年歐米各國に歴遊して専門の學術と實際を研鑽せり。

君は衆議院議員岡田忠彦氏の令弟明治三十三年岡山縣士族陰平氏の七男に生る。大正十三年東大法科に入る、既に在學中に高等文官試験に合格し卒業後直ちに内務省神社局勤務を拜命、茨城縣内務部に轉じ地方事務官に任じ東京府地方課長たり。昭和七年一月更に現職に任じ今日に及ぶ。

岡本幾二 眞庭郡落合町

君は明治十七年眞庭郡津田村に生れ、日露



顧問として町政に盡力しつゝあり。君は魚釣の趣味あり。家庭は夫人との間に一

男四女の子福者である。

太田隆靜

醫師を業として阿哲郡上市村大字西方新見驛前に居を構ふ。人情味厚く、熱誠明確なる頭腦を持ち地方の名醫にして人格者として名望高し。

從四位勳三等陸軍少將

岡本春三

東京豊島區巢鴨五ノ一一五二 君は明治八年邑久郡福田村に岡山池田藩士岡本好誠氏の二男に生れ、後分家して一家を立つ。英氣あり幼より志を立て、勵精學に勉む。遂に出で、東大工科に入り、明治三十七年業を卒ふるや、陸軍造兵廠に職を奉じ累進して陸軍少將となり、官を辭して日本光學會社の招きに應じ、現に其の取締役、顧問たり。

荻野繁太郎

阿哲郡豊永村五五九 明治九年に生る。地方有数の名望家にして、縣下、君の高名を知らぬざるものなしと言はるる、徳望の人である。酒造業を營み、嘗つては御献上の榮に浴せしこともあり、稀に見る人格者である。

遠部逸太郎

事務所大阪府豊能郡豊中本通一丁目 大阪府豊能郡豊中本通一丁目 明治十七年遠部寛太郎氏長男として吉備郡菅谷村に生る。明治三十九年關西大學法律科卒業後東京に在りて研究に没頭すること五ヶ年の後大正元年大阪地方裁判所並全區裁判所判事に補せられ更に大正三年大分地方裁判所市審判事として任地在勤一ヶ年にして辭任すると共に居を大阪に寓し、大阪地方裁判所に屬辯護士として現事務所の地に於て開業今日に至る。大正十三年大阪辯護士會副會長に選ばれたることあり、現に關西大學協議員、各種事業會等或は大商店等の顧問として活躍す

大瀧照太郎

上田蠶糸學校教授 長野縣上田市鷹匠町五〇二

三年村長に推され今日に及ぶ。郡會議員たること數回、最少年議員として異彩あり、常に一方の闢將として重きを成す。村長としては農村開發教育の普通發達に力を致すこと多大達見の士と謂ふべきなり。

太池太真治

阿哲郡新見町八二七ノ一 明治二十年生。京都醫科大學卒業京大病院に勤務、大正五年以來郷里なる現在の地に於つて引續き醫業に従事する傍らに、岡山縣醫師會代議員、阿哲郡醫師會々長たり。尙濟世

明治十二年上道郡高島村段原に虎造氏の長男として生れ昭和二年家督を繼ぐ。幼より努力好學の士、東都に遊學し東大に入り明治四十三年工科の業を卒へ、直に上田蠶糸專門學校の助教授拜命紡績科を担当せらる。曾て明治四十四年歐米各國に歴遊して専門の學術と實際を研鑽せり。

尾藤芳藏

阿哲郡新見町 君は明治六年に生る。東京市本郷區の純粹の江戸ッ子である。江戸ッ子肌の君は現在新見町に於ても町内の信望と多數の尾藤ファンを持ち、同君經營の青柳商會製の栗羊羹は他品の追従を許さぬ特産品である。

沖善太郎

岡山市内山下三三八 岡山藩士沖作夫氏の長男として明治七年に生る、幼にして洋服業の將來あるを知り斯業に入り、新西大寺町に開店す、大正



五年和氣郡和氣町に岡崎善太郎氏外同町有力者と相謀り和氣銀行姉妹會社として東備無盡株式會社を創立今日に至る、資本金五萬圓契約額約二百萬圓に上れり、現に取締役社長たり、尙氏は勳八等に叙せられ、趣味は謠曲と圍碁。家庭に夫人との間に二女あり。

尾坂義博

岡山市弓之町 有名なる後藤猛夫氏の經營にかゝる帝國興信所岡山支所の大正五年設立さるや恰も株式會社八十四銀行、同行系統の興業貯蓄銀行中澤商事株式會社總務部長、自らの創立になる旭日生命保險株式會社中央生命保險相互會社を経て、入りて支所を督す。岡山支所が今日の隆盛を得加盟者より重用せられつゝあるは全く君の人格の賜なり。世事に明く趣味は書畫骨董就中刀劍鑑定にかけては岡山市における第一人者也。

尾谷恭二

岡山市東中山下一〇 君は明治二十九年岡山市中之町素封家尾谷家に出れ、大正九年東大獨法科を卒業。久原